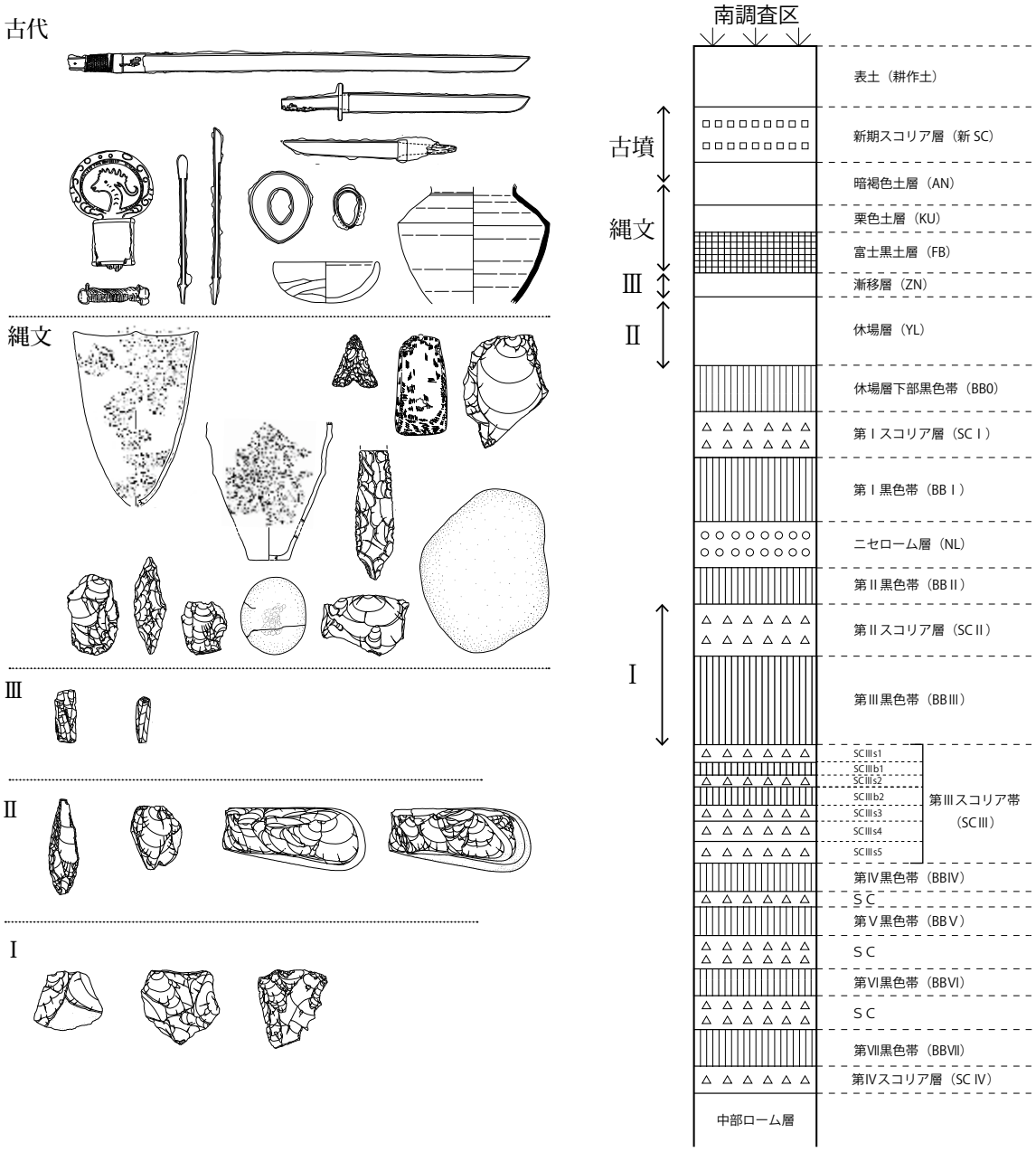
第Ⅳ章　芝荒遺跡・芝荒古墳群
南調査区の調査

第１節　南調査区の概要

南調査区は標高 103m ～ 109m 付近、東名高速道路愛鷹パーキングエリアの下り線南側に隣接し、調査区の大半には緩やかに下る馬の背状尾根が広がっている。全体は南方向へ傾斜しているが、すぐ西側には比高差 25m ほどの谷が隣接するため、調査区の西端部は西側へ急速に傾斜している。

南調査区では旧石器時代、縄文時代、古墳時代の遺構と遺物が確認され、なかでも縄文時代と古墳時代の遺構と遺物が主体的に検出された。縄文時代については、遺構はわずかであったが縄文時代早期の土器が集中して見つかり、石器も多量に出土した。古墳時代については、後期後半の築造と思われる古墳１基と終末期後半の築造と思われる小型の古墳２基、そして小石室を持つ古墳１基の計４基の古墳が検出され、副葬遺物として単鳳環頭大刀や装飾付大刀などが見つかっている。旧石器時代は石器・礫ともに出土点数は少なかった。

以下に、検出された遺構と遺物の詳細について、時代別に報告する。（北）



第 149 図　芝荒遺跡 南調査区の土層柱状図と文化層

第２節　旧石器時代の遺構と遺物

芝荒遺跡の南調査区は中尾川に面した尾根Ａに遺構や遺物が分布している。ここでは便宜的に尾根Ａと呼称した。

調査方法は、古墳の調査が終了した後、縄文時代の遺物が全面に分布していた栗色土層から休場層上面までを全面調査し、休場層以下の第Ⅲスコリア帯第２黒色土層まで試掘坑を入れて包含層の有無を確認した。試掘坑は 10m × 10m ＝ 100㎡の方眼ごとに 2m × 2m ＝ 4 ㎡の試掘坑を設定して人力掘削で石器群の有無を確かめ、遺構や遺物が検出された場合、範囲を拡張して調査した。なお、休場層は遺構と遺物が調査区全体に広がっていたため、全面調査した。その際、第Ⅰスコリア層上面まで掘削して旧地表の等高線を計測し、実測図の柱状図や等高線に用いた。第Ⅰ文化層から第Ⅱ文化層にかけては試掘坑の範囲を拡張して調査している。

・第Ⅰ文化層　層位：第Ⅲ黒色帯から第Ⅱスコリア層
・第Ⅱ文化層　層位：休場層
・第Ⅲ文化層　層位：漸移層

第Ⅰ文化層は、試掘坑 78 の第Ⅱスコリア層から安山岩製の礫を３点検出し、試掘坑 74 と試掘坑 77 の第Ⅲ黒色帯から黒曜石製の石器が出土したため、これらの検出地点と出土地点を中心に試掘坑の範囲を拡張して調査した。その結果、配石４基と石器ブロック５か所を検出している。

第 72 表　芝荒遺跡 南調査区　旧石器時代文化層概要

文化層	出土層位	配石	礫群	礫（合計）	石器ブロック	石器（合計）	炭化物	炉址	土坑	遺構
第Ⅰ文化層	BB Ⅲ・SC Ⅱ	4		12	5	36				配石 29 ～ 32、SBL11 ～ 15
第Ⅱ文化層	YL		1	21		22				PH47
第Ⅲ文化層	ZN					2				
計		4	1	33	5	60				

第 73 表　芝荒遺跡 南調査区　旧石器時代文化層別　配石・礫群・礫組成表

文化層	出土層位	配石（基）	礫群（基）	単独礫	赤化完形礫（A1）	非赤化完形礫（A2）	礫面赤変割面赤変破損礫（B11）	礫面赤変割面非赤変破損礫（B12）	礫面非赤変破損礫（B2）	割面赤変破損礫（C1）	割面非赤変破損礫（C2）	計
第Ⅰ文化層	BB Ⅲ・SC Ⅱ	4		8		5	1		4		2	12
第Ⅱ文化層	YL		1	14	1	9	1		10			21
第Ⅲ文化層	ZN											
計		4	1	22	1	14	2		14		2	33

第 74 表　芝荒遺跡 南調査区　旧石器時代文化層別　石器組成表

文化層	出土層位	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
第Ⅰ文化層	BB Ⅲ・SC Ⅱ			1							1					31	2	1			36
第Ⅱ文化層	YL	5					2	1		1						11	1	1			22
第Ⅲ文化層	ZN																		2		2
計		5		1			2	1		1	1					42	3	2	2		60

第Ⅱ文化層は、試掘坑 77 の休場層から安山岩の礫を複数検出したため、検出地点と出土地点を中心に試掘坑の範囲を拡張して調査した。その結果、安山岩製の礫群 1 基を検出し、単独出土の石器 22 点が出土した。

第Ⅲ文化層は、縄文時代の遺物包含層を調査中に細石刃が出土したことから、旧石器時代の遺物として抽出した。

（1）第Ⅰ文化層の遺構と遺物の分布状況（第 150 図）

第Ⅰ文化層の遺構・遺物は、中尾川に隣接する尾根Ａに石器が分布している。

本文化層では配石 4 基を第Ⅲ黒色帯で検出し、５か所の石器ブロックから出土した 28 点の石器と単独出土した８点の石器で構成されている。

配石 4 基と石器ブロック５か所は中尾川に面した尾根Ａで検出した。

①遺　構

ａ．配石

第 29 号配石～第 32 号配石

配石は 4 基検出した。検出層位は第Ⅲ黒色帯である。総重量は 9,790g、平均重量は 2,448g である。構成礫は、赤化していない完形の礫と礫面が赤変していない破損した礫が各２個である。石材はすべて安山岩である。接合関係は認められない。周辺部では遺物が出土している。

ｂ．石器ブロック

中尾川に面した尾根Ａでは、小規模な石器集中地点が点在していたことから、石器ブロックと認定して報告することとした。

第 11 号石器ブロック（第 151 図）

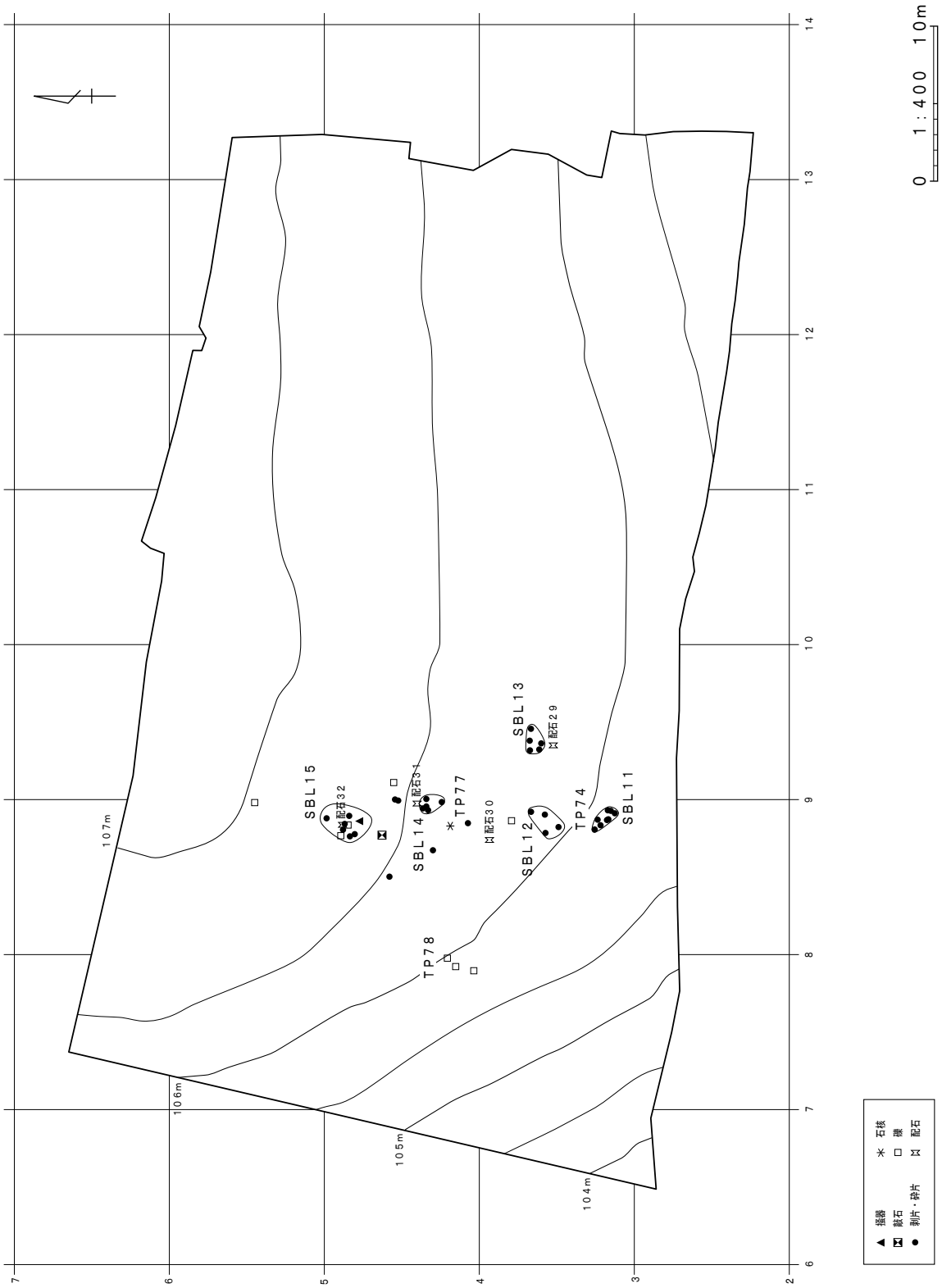
尾根Ａの 008 － 003 グリッドで確認した石器ブロックである。北側に第 12 号石器ブロックが分布している。規模は、長軸約 1.7m、短軸約 0.4m である。石器類は標高 105.92m ～ 105.83m にかけて約９㎝のレベル差が生じていた。確認された石器は剥片８点である。石材は、すべて黒曜石である。接合関係は第 11 号石器ブロック内で２例接合している。

第 12 号石器ブロック（第 151 図）

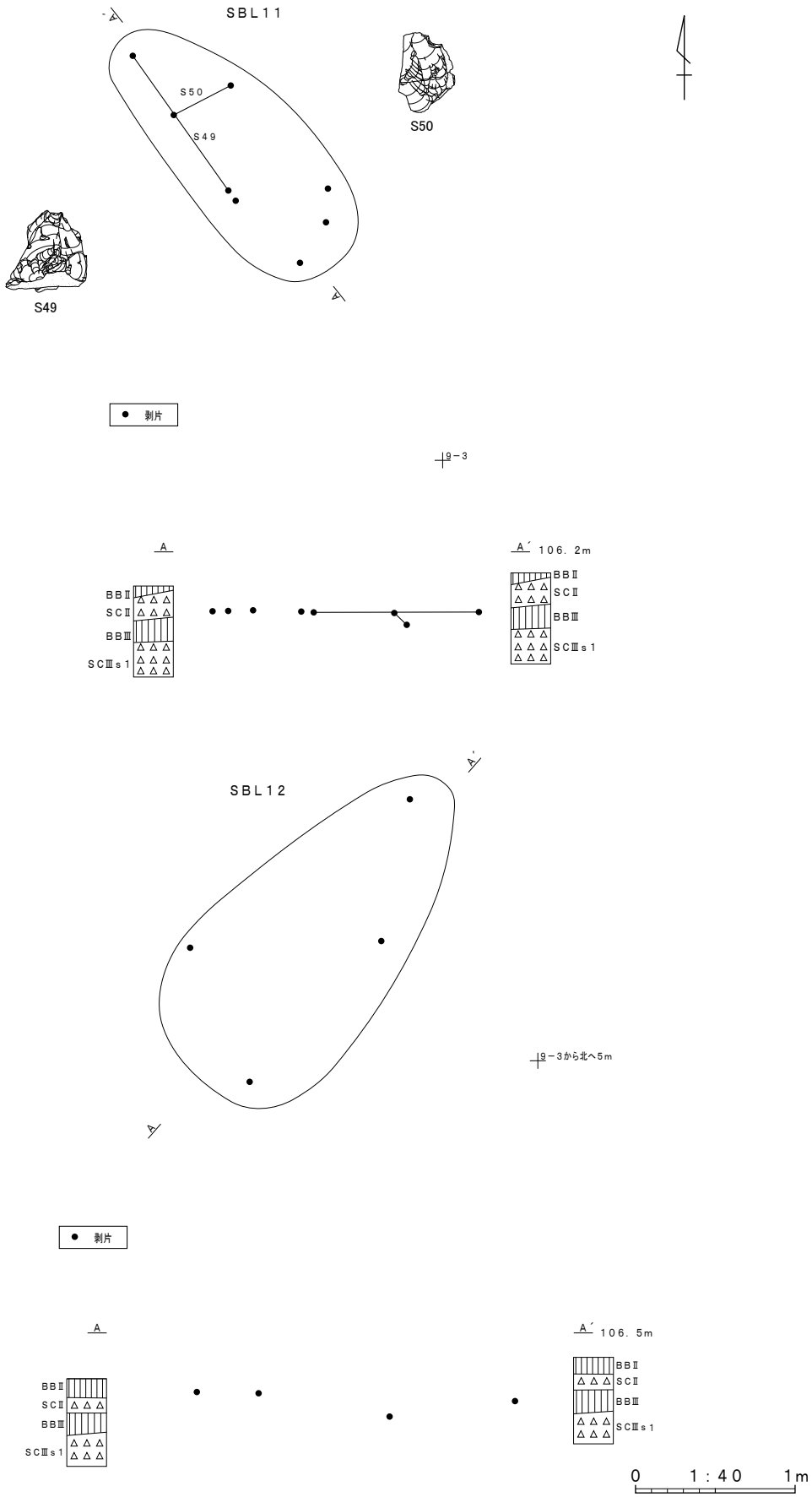
尾根Ａの 008 － 003 グリッドで確認した石器ブロックである。南側に第 11 号石器ブロック、東側に第 13 号石器ブロック、北側に第 14 号石器ブロックが分布する。規模は、長軸約 2.0m、短軸約 1.0m である。石器類は標高 106.13m ～ 105.98m にかけて約 15㎝のレベル差が生じていた。確認された石器は剥片４点である。石材は、Ｆ．ホルンフェルスが２点、黒曜石２点である。接合関係は認められない。

第 75 表　南調査区 第Ⅰ文化層　出土遺物一覧表

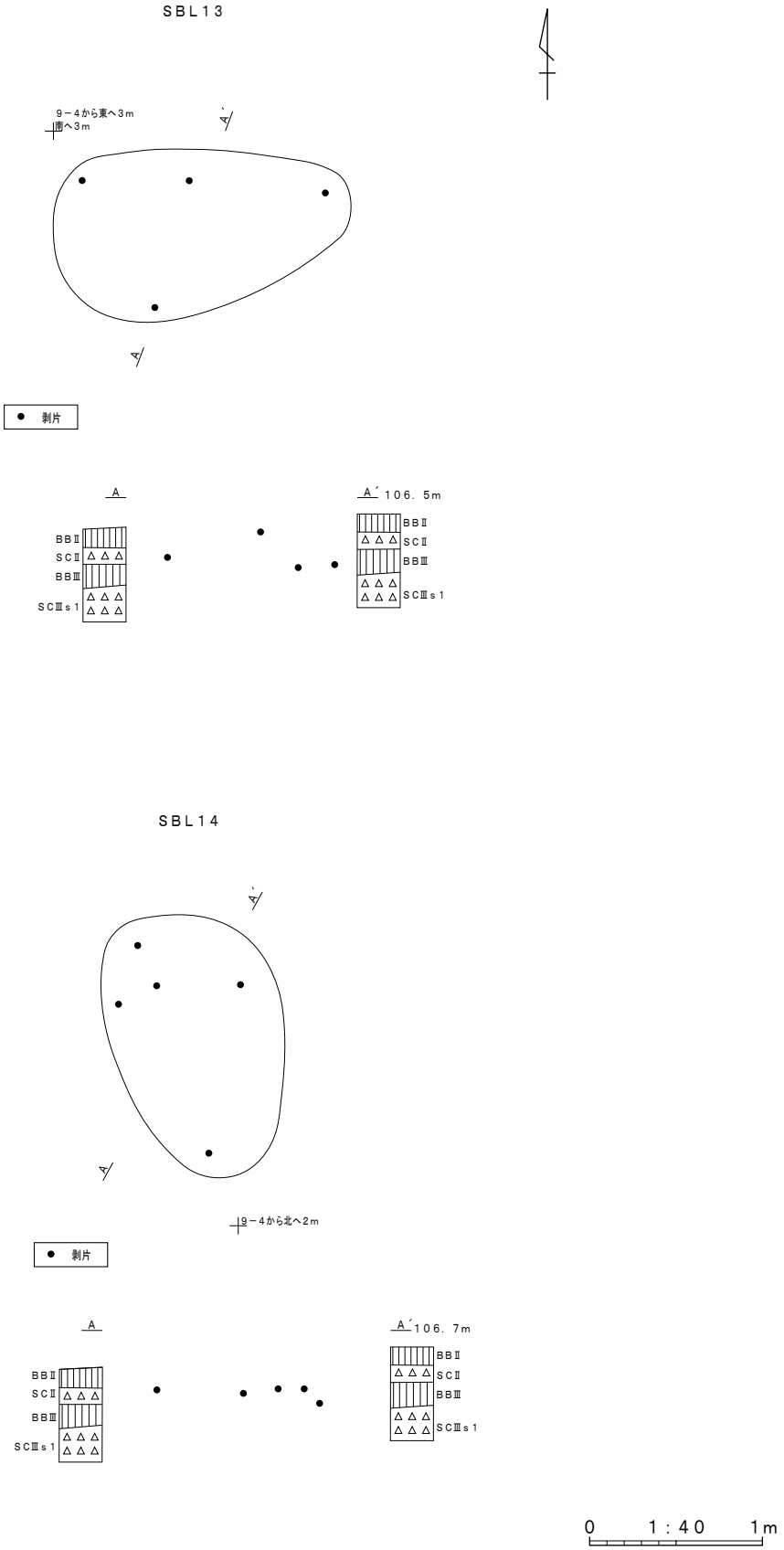
石材＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石			1												23	2	1			27
Ｆ．ホルンフェルス															6					6
珪質岩															2					2
安山岩										1										1
計			1							1					31	2	1			36
礫																			配石 4	



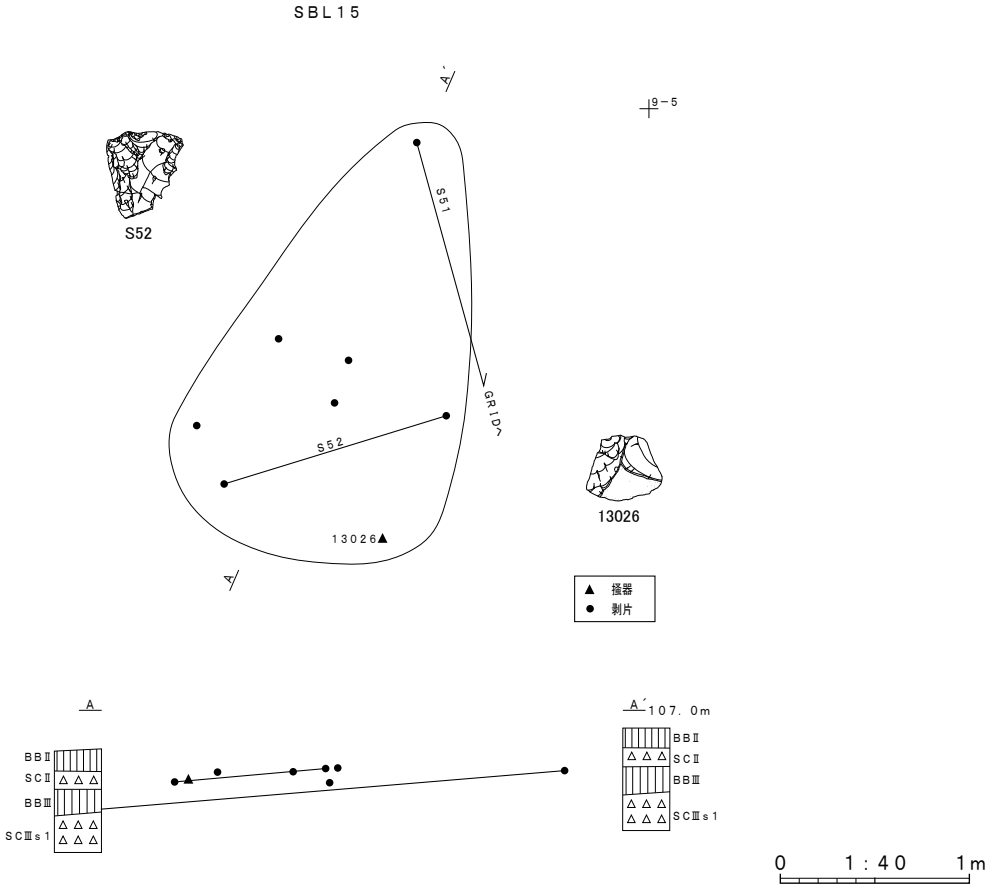
第150図　南調査区第Ⅰ文化層　礫・配石・石器分布図



第 151 図　南調査区 第Ⅰ文化層　第 11 号・第 12 号石器ブロック実測図



第 152 図　南調査区 第Ⅰ文化層　第 13 号・第 14 号石器ブロック実測図



第 153 図　南調査区 第Ⅰ文化層　第 15 号石器ブロック実測図

第 13 号石器ブロック（第 152 図）

尾根Ａの 009 － 003 グリッドで確認した石器ブロックである。西側に第 12 号石器ブロックが分布する。規模は、長軸約 1.4m、短軸約 0.7m である。石器類は標高 106.30m ～ 106.10m にかけて約 20㎝のレベル差が生じていた。確認された石器は剥片４点である。石材は、Ｆ．ホルンフェルス３点、珪質岩１点である。接合関係は認められない。

第 14 号石器ブロック（第 152 図）

尾根Ａの 008･009 － 004 グリッドで確認した石器ブロックである。北東側に第 15 号石器ブロック、南側に第 12 号石器ブロックが分布する。規模は、長軸約 1.3m、短軸約 0.7m である。石器類は標高 106.36m ～ 106.28m にかけて約８㎝のレベル差が生じていた。石器は剥片５点が出土している。石材は黒曜石４点、珪質岩１点である。

第 15 号石器ブロック（第 153 図）

尾根Ａの 008 － 004 グリッドで確認した石器ブロックである。南側に第 14 号石器ブロックが分布する。規模は、長軸約 2.1m、短軸約 1.1m である。石器類は標高 106.70m ～ 106.62m にかけて約８㎝のレベル差が生じていた。確認された石器は掻器１点、剥片４点、砕片２点の合計７点が出土している。石材はすべて黒曜石である。接合関係は第 15 号石器ブロック内で１例、単独出土の石器との間で１例の合計２例が認められた。

第 76 表　南調査区 第Ⅰ文化層 第 11 号石器ブロック出土状況

器種 / 石材	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石															8					8
計															8					8

第 77 表　南調査区 第Ⅰ文化層 第 12 号石器ブロック出土状況

器種 / 石材	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石															2					2
F . ホルンフェルス															2					2
計															4					4

第 78 表　南調査区 第Ⅰ文化層 第 13 号石器ブロック出土状況

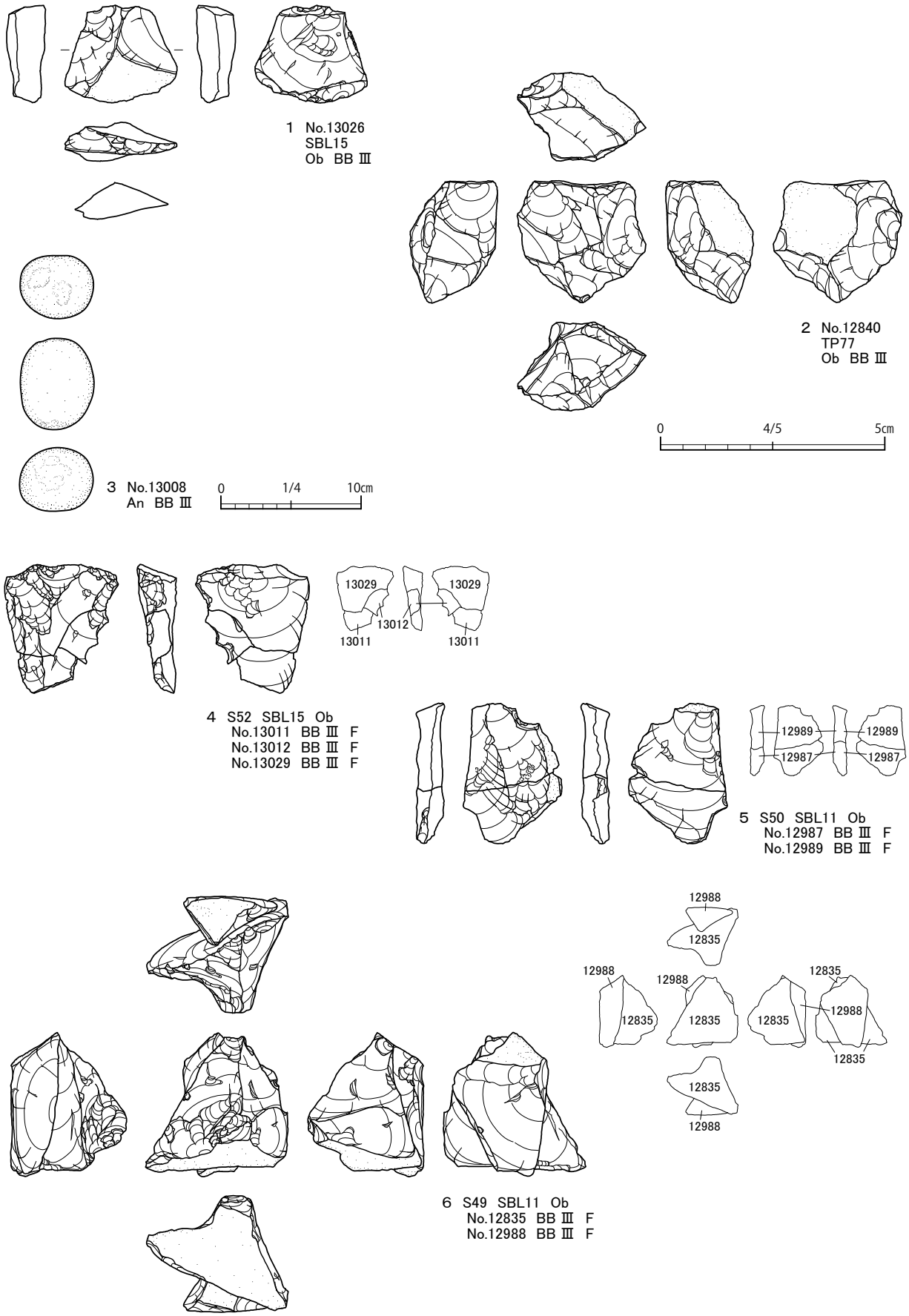
器種 / 石材	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
F . ホルンフェルス															3					3
珪質岩															1					1
計															4					4

第 79 表　南調査区 第Ⅰ文化層 第 14 号石器ブロック出土状況

器種 / 石材	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石															4					4
珪質岩															1					1
計															5					5

第 80 表　南調査区 第Ⅰ文化層 第 15 号石器ブロック出土状況

器種 / 石材	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石			1												4	2				7
計			1												4	2				7



第 154 図　南調査区 第Ⅰ文化層　石器実測図

②遺　物

第Ⅰ文化層出土の遺物は、石器ブロック５か所から出土した 28 点の石器と単独出土の石器８点を合計した 36 点の石器群によって構成されている。器種は掻器１点、敲石１点、剥片 31 点、砕片２点、石核１点が出土している。

掻器（第 154 図 1）

出土した１点を図示した。１は幅が広い剥片を素材とし、末端に剥離面側から調整加工を行い、急斜度の強靭な刃部が作出されている。石材は黒曜石である

石核（第 154 図 2）

出土した１点を図示した。２は求心的な剥片剥離作業を行う石核である。正面の剥片剥離作業面を打面として、上面、左側面、下面に石核調整を行っている。剥片剥離作業は、石核調整の剥離面を打面として、正面の剥片剥離作業面に対して求心的な剥片剥離作業を行っている。石材は黒曜石である。

敲石（第 154 図 3）

出土した１点を図示した。３は円礫を素材とする敲石で、上面と下面に敲打痕が観察できる。石材は安山岩である。

接合資料（第 154 図４～６）

４～６は接合資料である。剥片の接合など剥片剥離技術に関わるものを中心に３例を図示した。

４と５は剥片剥離作業時の衝撃で破損した剥片の接合資料で、これらの接合状態が４（S52）と５（S50）である。接合状態をみると、４は調整打面から剥離された剥片が、剥片剥離作業時の衝撃で破損し、接合している。５は自然面を打面とする石核から剥離された剥片が、剥片剥離作業時の衝撃で破損し、接合している。

６は板状の石核素材から連続的に剥離された剥片２点が接合している。これらの接合状態が６（S49）である。接合状態を見ると板状の石核素材の上面から連続的に 12835 → 12988 を剥離している。

（2）第Ⅱ文化層の遺構と遺物の分布状況（第 156 図）

第Ⅱ文化層の遺構・遺物は、中尾川に隣接する尾根Ａに礫・石器が分布しており、礫群１基、単独出土の礫 14 点からなる総計 21 点の礫と、単独出土の 22 点の石器群が検出された。検出層位は単独出土の礫が休場層で検出している。石器が休場層から栗色土層にかけて出土している。

①遺　構

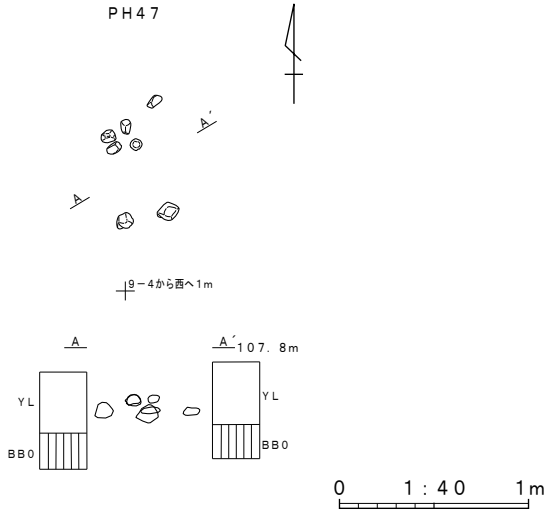
ａ．礫群

第 47 号礫群（第 155 図）

尾根Ａの 008 － 004 グリッドに位置する。構成礫は７点で、長軸約 0.7m、短軸約 0.5m の範囲に集中している。検出層位は休場層である。垂直分布は標高 107.50m ～ 107.40m にかけて約 10㎝の分布幅を形成しており、大部分の礫は標高 107.46m 付近に礫の底面を置いている。総重量は 2150g、平均重量は 307g である。構成礫は赤化していない完形の礫４点、礫面が赤変していない破損した礫２点、赤化した完形の礫１点であった。石材は、すべて安山岩である。接合関係は認められない。

②遺　物（第 157 図～第 158 図）

第Ⅱ文化層出土の石器は、単独で出土した 22 点で構成されている。石器群の内訳はナイフ形石器５点、楔形石器２点、削器１点、磨石１点、剥片 11 点、砕片１点、石核１点であった。



第 155 図　南調査区 第Ⅱ文化層　第 47 号礫群実測図

ナイフ形石器（第 157 図１～５）

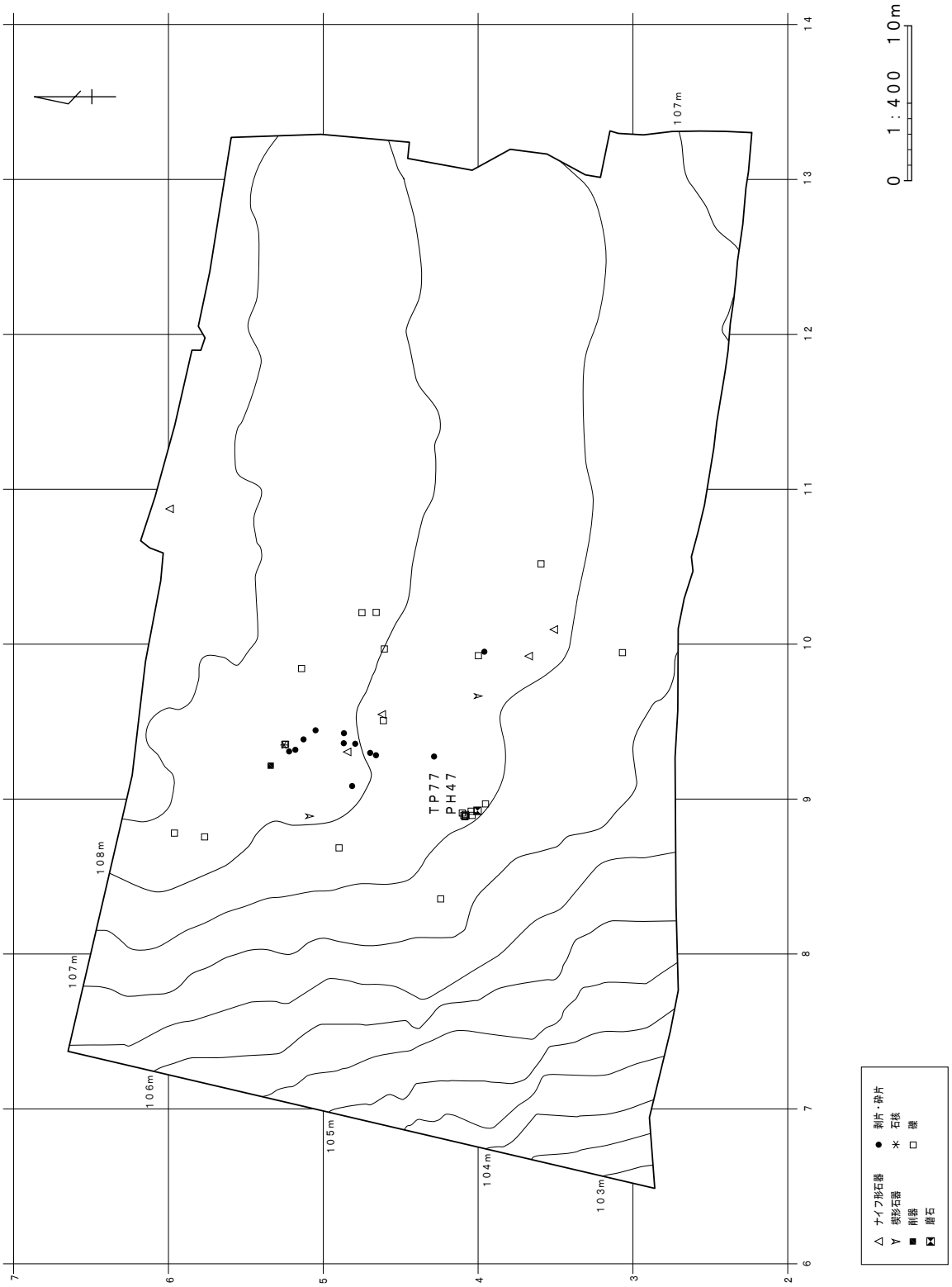
５点が出土し、すべて図示した。これらは加工の部位により第Ⅰ群：二側縁加工のもの、第Ⅱ群：一側縁加工のもの、第Ⅲ群：部分加工のもの、第Ⅳ群：欠損のため形態が不明のものに大別し、それぞれの中でａ類：最大長が５㎝以上の大形のもの、ｂ類：最大長が 5㎝未満、３㎝以上の中形のもの、ｃ類：最大長が３㎝未満の小形のものに細分して記述していく。

第Ⅰ群：二側縁加工のもの

ｂ類：5㎝未満、３㎝以上の中形のものである。

第 81 表　南調査区 第Ⅱ文化層　出土遺物一覧表

石材＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石	5					2									1	1				9
F. ホルンフェルス															1					1
ガラス質黒色安山岩							1								3					4
玄武岩									1											1
凝灰岩															6		1			7
計	5					2	1		1						11	1	1			22
礫	礫群１																			



第156図　南調査区 第Ⅱ文化層　礫群・石器分布図

１は最大長が 3.5㎝を測る。縦長剥片を素材として、右側縁と左側縁の基部側に入念なブランティングを施している。この調整加工は主要剥離面側から素材を斜めに横断するように行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整加工は裏面の基部側に平坦な調整剥離が行われている。素材を構成している剥離痕は、主要剥離面と剥離面が同じ方向の剥離面で構成されている。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。

２は最大長が 3.1㎝を測る。縦長剥片を素材として、右側縁の基部側と左側縁に入念なブランティングを施している。この調整加工は主要剥離面側から素材を斜めに横断するように行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整加工は裏面の基部側に平坦な剥離が施される。素材を構成している剥離痕は、主要剥離面と剥離面が同じ方向の剥離面で構成されている。刃部には微細な剥離痕が観察される。石材は黒曜石である。

３は最大長が 3.0㎝を測る。縦長剥片を素材として、右側縁の基部側と左側縁にブランティングを施している。この調整加工は主要剥離面側から行われる。ブランティング以外の調整加工は認められない。素材を構成している剥離痕は、主要剥離面と剥離面が同じ方向の剥離面で構成されている。石材は黒曜石である。

４は最大長が 2.9㎝を測る。縦長剥片を素材として、右側縁と左側縁の基部側に入念なブランティングを施している。この調整加工は主要剥離面側から素材を斜めに横断するように行われ、刃部と接する部分に鋭い先端部を形成している。ブランティング以外の調整加工は認められない。素材を構成している剥離痕は、主要剥離面と剥離面が 90 度異なる方向の剥離面で構成されている。石材は黒曜石である。

第Ⅳ群：欠損のため形態が不明のもの

５は最大長が 2.2㎝を測る。縦長剥片を素材として、右側縁にブランティングを施している。この調整加工は主要剥離面側から行われている。石材は黒曜石である。

削器（第 157 図６）

６は幅広い剥片を素材として、主要剥離面側の左側縁の一部に刃部を形成している。刃部の調整は剥離面側から施される。石材はガラス質黒色安山岩である。

楔形石器（第 157 図７・８）

２点が出土し、ともに図示した。剥片剥離が生じている縁辺が、器体の相対する両極で構成されるもので、打面部は両極打法により線状に潰れ、縁辺に小さな剥離が重複して存在し、その多くが階段状剥離となっている。

７は対向する方向の上面と下面の打面部が両極打法により線状に潰れ、縁辺に小さな剥離が重複し、階段状剥離となっている。

８は上面の打面部が両極打法により線状に潰れ、縁辺に小さな剥離が重複し、階段状剥離となっている。

磨石（第 157 図９）

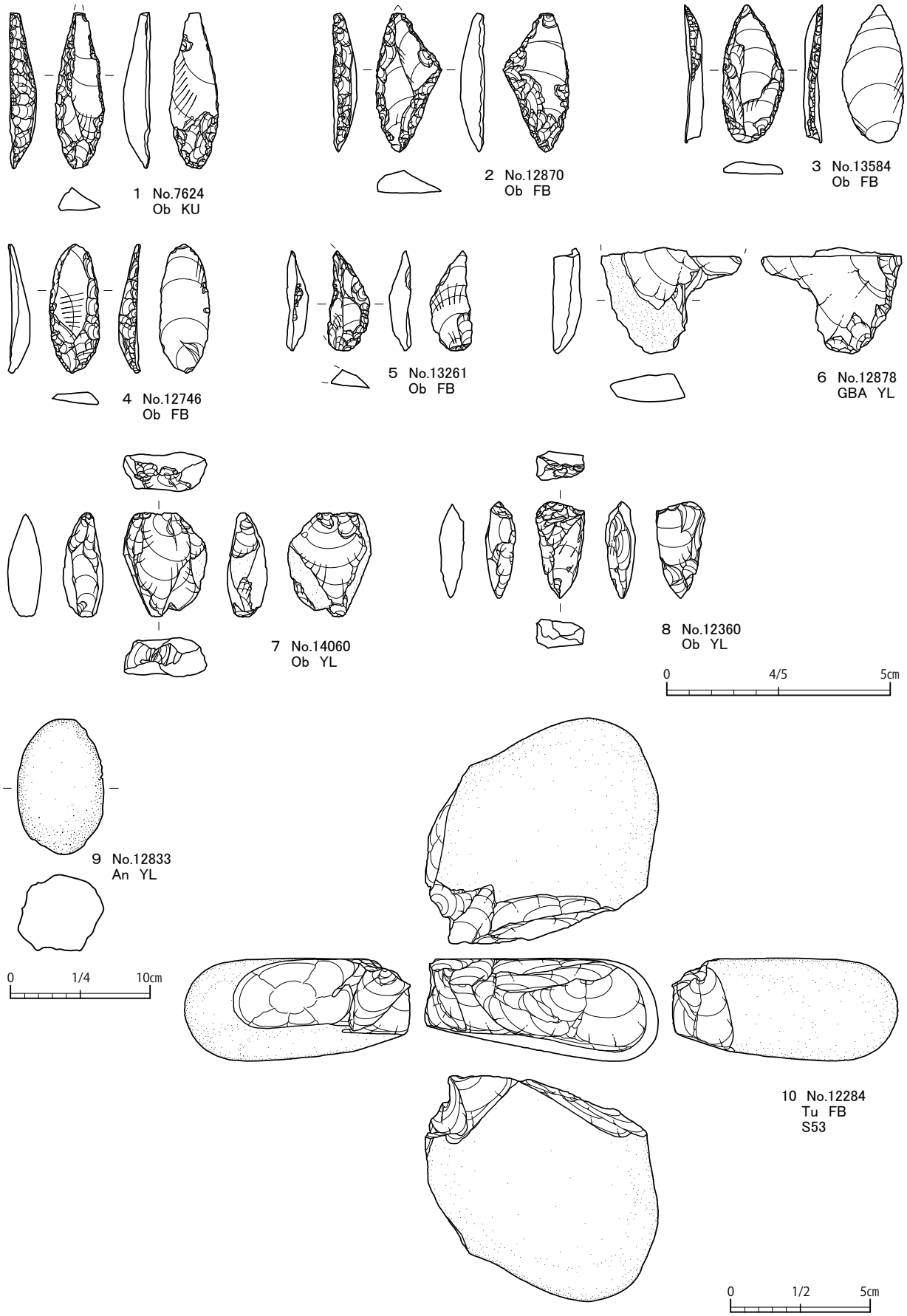
出土した１点を図示した。円礫を素材として器体に磨面が観察されるものである。

９は円礫を素材とした磨石で、正面を中心に磨面が認められる。石材は安山岩である。

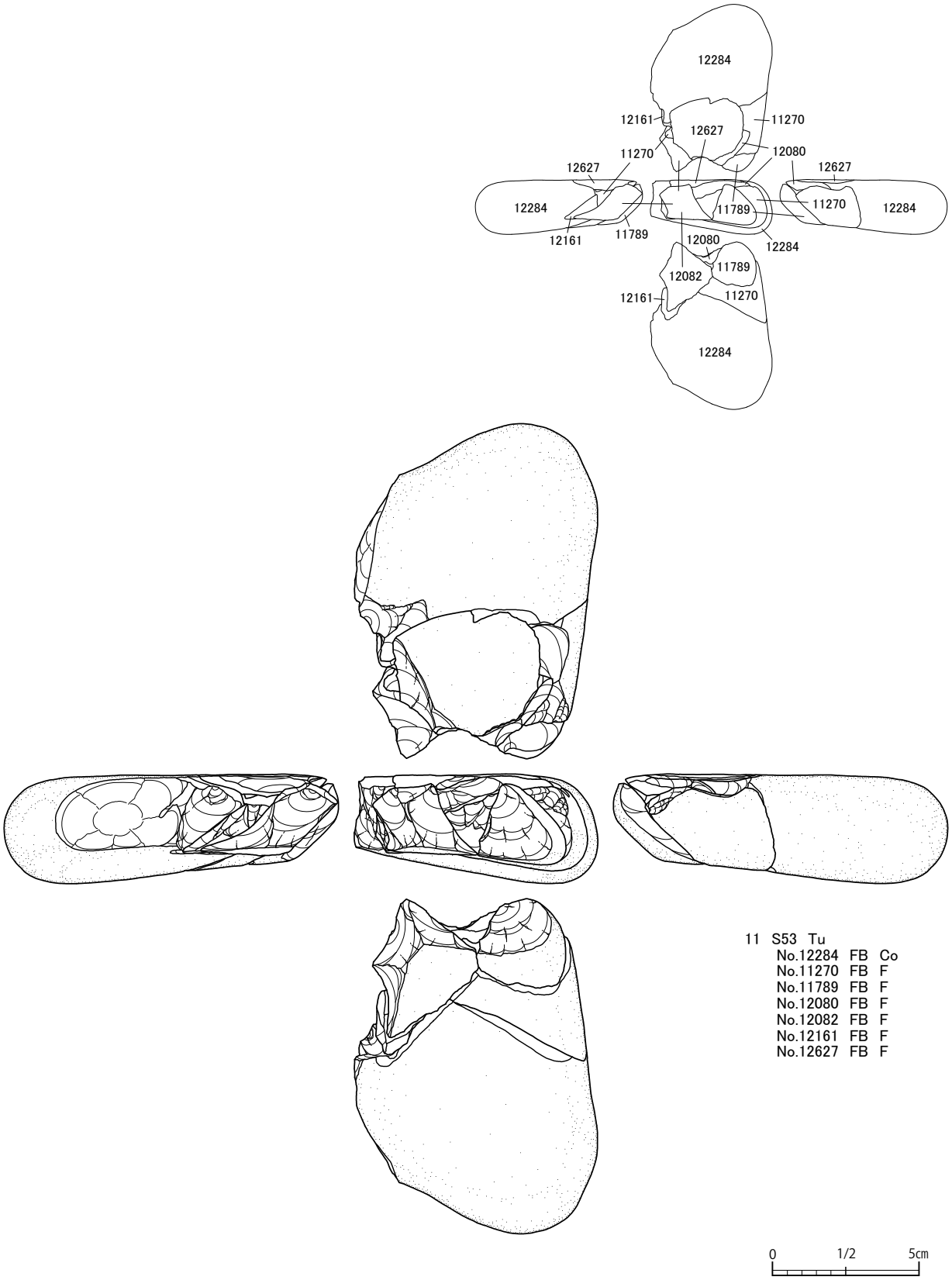
石核（第 157 図 10）

出土した１点を図示した。この石核は、剥片剥離方向が一定の方向に限られているものに分類される。

10 は扁平な円礫を素材とした石核である。石核の剥離痕を観察すると、剥片剥離作業面の位置は正面で、石核調整は認められない。打面調整は、正面の剥片剥離作業面を打面として複数回行っている。剥片剥離作業は、上面に設置された複剥離打面を打面として、正面を剥片剥離作業面として幅が広い縦長剥片を作出している。



第 157 図　南調査区 第Ⅱ文化層　石器実測図（1）



第 158 図　南調査区 第Ⅱ文化層　石器実測図（2）

接合資料（第 158 図 11）

11 は単設打面石核 1 点と打面調整剥片 2 点、縦長剥片 4 点の接合資料で、これらの接合状態が 10（S53）である。接合状態を見ると円礫を素材とする単設打面石核（12284）から打面調整（12627・12080）を行いながら、幅の広い縦長剥片を剥離している。まず、上面の打面から正面を剥片剥離作業面として 11789 → 12082 を剥離する。次に、打面調整（12627 → 12080）を行い、再生した打面から 11270 → 12161 を連続的に剥離している。

（3）第Ⅲ文化層の遺構と遺物の分布状況（第 160 図）

第Ⅲ文化層の石器は、中尾川に隣接する尾根Ａの南側斜面に散在しており、富士黒土層から出土した縄文時代の遺物の中から細石刃 2 点を抽出したものである。

①遺　物

第Ⅲ文化層の石器は、２点の細石刃によって構成される。

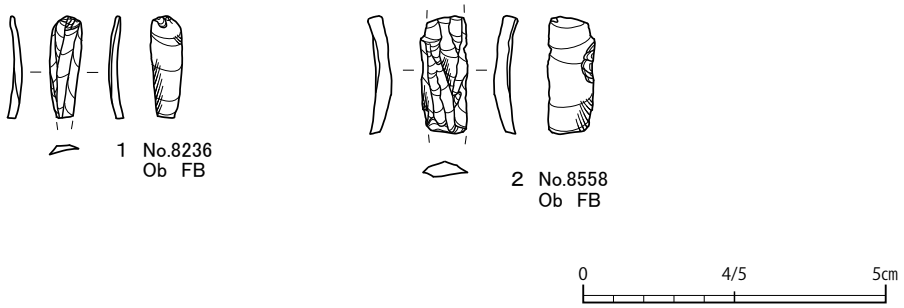
細石刃（第 159 図１・2）

２点が出土し、ともに図示した。これらの細石刃は、残存の状況により完形、打面部～中間部、中間部、中間部～末端部に分類される。

１は打面部～中間部である。これらは細石刃の末端側を切断面で形成している。細石刃を構成している剥離面と主要剥離面をみるとすべて上設打面からの剥離で構成されており、剥片剥離方向を一方向に限定した単設打面の細石刃石核から作出されたものと思われる。石材は黒曜石である。

２は中間部である。これは打面部と末端部の両端を欠くもので、双方の端が切断面で構成される。細石刃を構成している剥離面と主要剥離面を見ると、上設打面を形成した単設打面の細石刃石核から作出されたものと思われる。石材は黒曜石である。

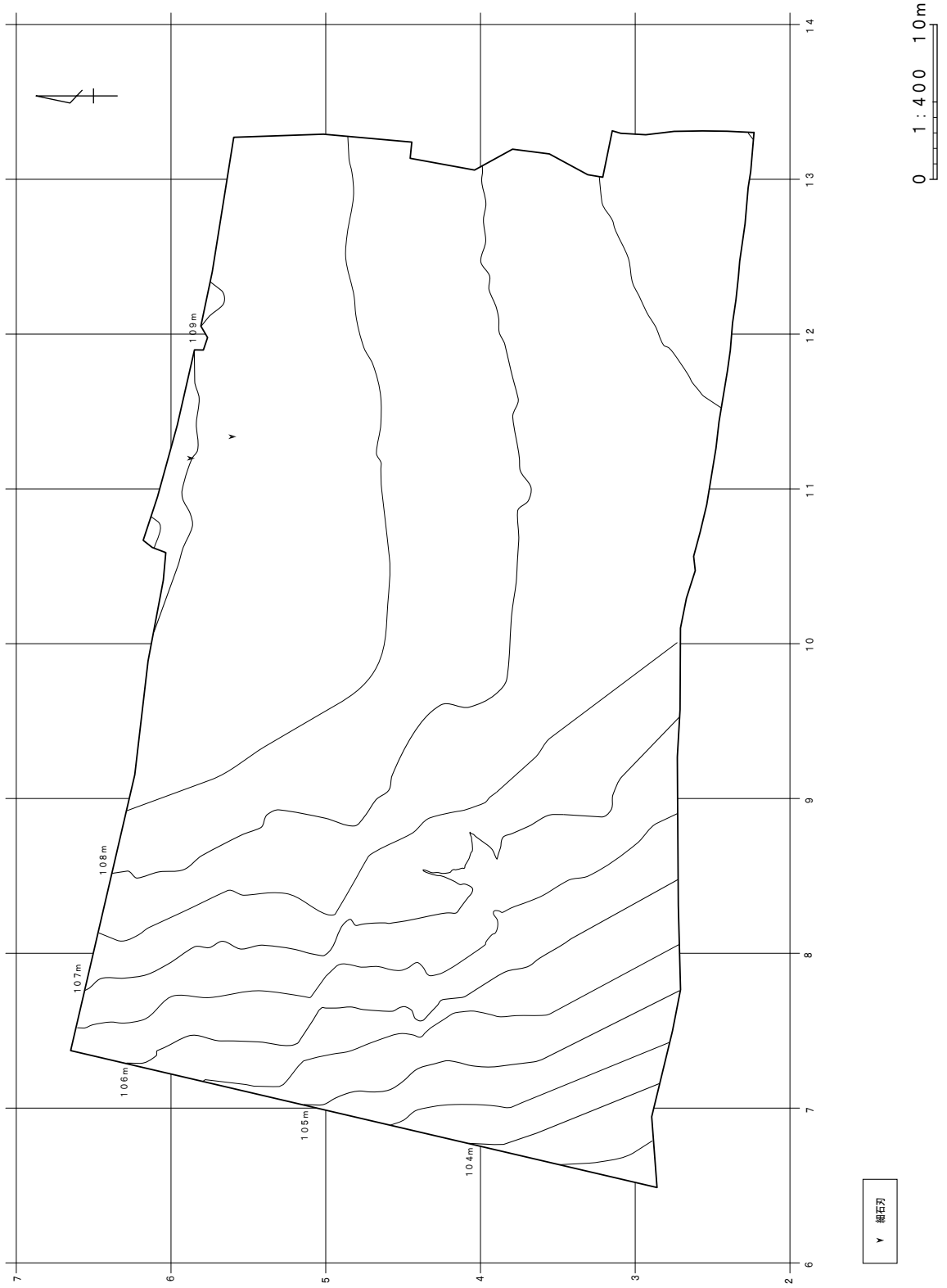
これらは剥離面と主要剥離面側の剥離痕の観察から、単設打面の細石刃石核から剥離された可能性が指摘できる。（前嶋）



第 159 図　南調査区 第Ⅲ文化層　石器実測図

第 82 表　南調査区 第Ⅲ文化層　出土遺物一覧表

石材＼器種	ナイフ形石器	尖頭器	掻器	抉入石器	彫器	楔形石器	削器	石錐	磨石	敲石	台石	加工痕のある剥片	使用痕のある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	細石刃	細石刃石核	計
黒曜石																		2		2
計																		2		2



第160図　南調査区第Ⅲ文化層　遺物分布図

第 83 表　南調査区 第Ⅰ文化層　石器観察表

図No.	調査区 遺構	遺物No.	器種	石材	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	接合No.	X座標	Y座標	Z座標
154-6	SBL11	12835	剥片	Ob	BB Ⅲ	30.9	34.2	17.7	10.2	S49	-95,158.310	30,658.657	105.909
	SBL11	12836	剥片	Ob	BB Ⅲ	7.0	20.9	5.8	1.0		-95,158.374	30,658.703	105.913
	SBL11	12837	剥片	Ob	BB Ⅲ	32.5	14.1	7.1	3.0		-95,158.763	30,659.106	105.916
	SBL11	12838	剥片	Ob	BB Ⅲ	10.7	9.8	4.7	0.4		-95,158.509	30,659.269	105.918
	SBL11	12839	剥片	Ob	BB Ⅲ	14.8	9.2	2.9	0.3		-95,158.298	30,659.281	105.922
154-5	SBL11	12987	剥片	Ob	BB Ⅲ	21.0	12.9	5.7	1.4	S50	-95,157.837	30,658.315	105.831
154-6	SBL11	12988	剥片	Ob	BB Ⅲ	20.7	32.1	10.3	5.2	S49	-95,157.466	30,658.058	105.911
144-5	SBL11	12989	剥片	Ob	BB Ⅲ	18.5	21.2	5.3	1.8	S50	-95,157.652	30,658.672	105.905
	SBL12	12990	剥片	Ob	BB Ⅲ	22.1	20.7	8.7	3.6		-95,155.132	30,658.194	106.130
	SBL12	12991	剥片	Ob	BB Ⅲ	39.2	22.7	8.7	7.3		-95,154.292	30,657.821	106.122
	SBL12	12992	剥片	F.H	BB Ⅲ	12.4	7.1	3.6	0.3		-95,154.250	30,659.019	105.976
	SBL12	12993	剥片	F.H	BB Ⅲ	8.2	21.2	4.9	0.4		-95,153.362	30,659.198	106.074
	SBL13	12994	剥片	F.H	BB Ⅲ	42.9	26.9	12.4	12.8		-95,154.021	30,663.587	106.154
	SBL13	12995	剥片	SR	BB Ⅲ	19.3	29.9	8.3	5.0		-95,153.286	30,663.166	106.301
	SBL13	12996	剥片	F.H	BB Ⅲ	15.0	11.9	4.9	0.7		-95,153.287	30,663.786	106.095
	SBL13	12997	剥片	F.H	BB Ⅲ	49.7	32.4	15.9	20.6		-95,153.358	30,664.574	106.112
	SBL14	13014	剥片	Ob	BB Ⅲ	18.8	19.3	7.9	2.7		-95,146.378	30,659.418	106.363
	SBL14	13015	剥片	Ob	BB Ⅲ	10.1	7.9	4.3	0.3		-95,146.718	30,659.307	106.336
	SBL14	13016	剥片	Ob	BB Ⅲ	20.2	33.2	13.2	6.0		-95,146.611	30,659.528	106.363
	SBL14	13017	剥片	SR	BB Ⅲ	8.7	13.5	4.3	0.5		-95,147.580	30,659.830	106.356
	SBL14	13018	剥片	Ob	BB Ⅲ	14.3	16.3	3.1	0.3		-95,146.605	30,660.013	106.278
	SBL15	13022	砕片	Ob	BB Ⅲ	11.0	12.1	0.9	0.1	S51	-95,141.985	30,657.753	106.622
	SBL15	13023	剥片	Ob	BB Ⅲ	15.4	13.1	3.5	0.6		-95,141.676	30,657.608	106.673
	SBL15	13024	剥片	Ob	BB Ⅲ	19.3	18.8	5.6	1.6		-95,141.217	30,658.041	106.617
154-1	SBL15	13026	掻器	Ob	BB Ⅲ	21.3	24.8	7.7	3.5		-95,142.270	30,658.591	106.638
	SBL15	13027	剥片	Ob	BB Ⅲ	31.1	21.7	14.1	6.0	S51	-95,141.624	30,658.928	106.692
	SBL15	13028	砕片	Ob	BB Ⅲ	5.7	6.6	1.7	0.0		-95,141.331	30,658.411	106.696
154-4	SBL15	13029	剥片	Ob	BB Ⅲ	18.8	25.2	8.6	3.6	S52	-95,140.179	30,658.772	106.681
154-2	TP77	12840	石核	Ob	BB Ⅲ	2.6	2.7	1.9	11.5		-95,148.150	30,658.278	106.338
	TP77	12841	剥片	Ob	BB Ⅲ	7.8	23.7	8.1	1.5		-95,149.280	30,658.465	106.226
154-3	GRID	13008	敲石	An	BB Ⅲ	6.5	5.2	4.5	222.3		-95,143.743	30,657.687	106.504
	GRID	13009	剥片	Ob	BB Ⅲ	32.1	14.6	7.3	2.3		-95,144.229	30,655.007	106.472
	GRID	13010	剥片	Ob	BB Ⅲ	25.0	33.9	13.6	8.0		-95,147.031	30,656.713	106.310
154-4	GRID	13011	剥片	Ob	BB Ⅲ	9.1	13.5	4.0	0.5	S52	-95,144.582	30,659.985	106.384
154-4	GRID	13012	剥片	Ob	BB Ⅲ	12.3	7.5	3.8	0.3	S52	-95,144.788	30,659.922	106.432
	GRID	13021	剥片	F.H	SC Ⅱ	25.0	25.9	13.1	10.0		-95,153.878	30,663.231	106.035

第 84 表　南調査区 第Ⅱ文化層　石器観察表（1）

図No.	調査区 遺構	遺物No.	器種	石材	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	接合No.	X座標	Y座標	Z座標
157-1	GRID	7624	ナイフ形石器	Ob	KU	3.5	1.1	0.7	1.7		-95,130.127	30,678.757	109.048
	GRID	8196	砕片	Ob	05Z	10.5	8.5	1.8	0.1		-95,147.212	30,662.791	107.994
158-10	GRID	11270	剥片	Tu	FB	2.8	7.6	3.6	216.7	S53	-95,137.831	30,663.111	108.385
158-10	GRID	11789	剥片	Tu	FB	3.6	3.1	0.7	9.9	S53	-95,138.750	30,663.886	108.310
158-10	GRID	12080	剥片	Tu	FB	2.8	4.5	0.8	11.8	S53	-95,142.095	30,663.611	108.117
158-10	GRID	12082	剥片	Tu	FB	4.3	3.9	1.5	14.0	S53	-95,141.369	30,663.638	108.165
158-10	GRID	12161	剥片	Tu	FB	2.7	2.5	0.4	1.8	S53	-95,138.234	30,663.225	108.246
157-9,158-10	GRID	12284	石核	Tu	FB	2.8	7.4	9.8	360.1	S53	-95,137.513	30,663.524	108.277
157-7	GRID	12360	楔形石器	Ob	YL	21.7	10.3	5.9	1.3		-95,139.149	30,658.929	108.016
158-10	GRID	12627	剥片	Tu	FB	4.9	5.1	0.9	16.3	S53	-95,141.382	30,664.292	108.070
157-4	GRID	12746	ナイフ形石器	Ob	FB	2.9	1.1	0.4	1.1		-95,143.830	30,665.486	107.818
157-8	GRID	12833	磨石	Ba	YL	9.8	6.1	5.7	179.1		-95,150.005	30,659.271	107.419
157-2	GRID	12870	ナイフ形石器	Ob	FB	3.1	1.4	0.5	1.9		-95,141.601	30,663.083	107.868
	GRID	12873	剥片	GBA	YL	15.0	23.8	4.8	2.1		-95,143.442	30,662.865	107.774
	GRID	12874	剥片	Ob	YL	12.5	11.3	5.4	0.4		-95,143.064	30,663.011	107.870
	GRID	12875	剥片	GBA	YL	18.5	7.8	4.4	0.6		-95,141.899	30,660.877	107.827

第 85 表　南調査区 第Ⅱ文化層　石器観察表（2）

図No.	調査区 遺構	遺物No.	器種	石材	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	接合No.	X座標	Y座標	Z座標
	GRID	12878	削器	GBA	YL	30.9	22.4	0.4	3.9		-95,136.634	30,662.179	108.037
	GRID	12908	剥片	F.H	YL	14.1	23.5	12.5	2.6		-95,139.535	30,664.478	107.756
157-5	GRID	13261	ナイフ形石器	Ob	FB	2.2	0.9	0.3	0.5		-95,154.945	30,670.965	107.684
157-3	GRID	13584	ナイフ形石器	Ob	FB	3.0	1.3	0.3	1.3		-95,153.316	30,669.276	107.741
157-6	GRID	14060	楔形石器	Ob	YL	23.3	17.6	8.8	3.9		-95,150.045	30,666.685	107.583
	GRID	14148	剥片	GBA	YL	19.0	20.4	9.9	3.6		-95,150.431	30,669.546	107.622

第 86 表　南調査区 第Ⅲ文化層　石器観察表

図No.	調査区 遺構	遺物No.	器種	石材	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	接合No.	X座標	Y座標	Z座標
159-1	GRID	8236	細石刃	Ob	FB	2.7	0.7	0.2	0.3		-95,133.969	30,683.367	108.857
159-2	GRID	8558	細石刃	Ob	FB	2.0	0.8	0.3	0.5		-95,131.270	30,681.971	108.855

第 87 表　南調査区 旧石器時代　礫観察表

文化層	調査区 遺構	遺物No.	層位	石材	礫状態	煤 タール	重量 (g)	接合No.	X 座標	Y 座標	Z 座標
I	配石 29	13002	BB III	An	B2		3,220.0		-95,154.801	30,663.489	105.994
I	配石 30	13004	BB III	An	A2		2,020.0		-95,150.677	30,657.375	106.154
I	配石 31	13019	BB III	An	A2		2,820.0		-95,146.050	30,659.726	106.340
I	配石 32	13031	BB III	An	B2		1,730.0		-95,141.190	30,658.378	106.619
I	GRID	13003	BB III	An	A2		622.0		-95,152.101	30,658.612	106.248
I	GRID	13005	BB III	An	B11		481.0		-95,147.956	30,649.756	105.779
I	TP78	13006	SC II	An	C2		29.0		-95,148.500	30,649.218	105.743
I	TP78	13007	SC II	An	C2		50.0		-95,149.665	30,648.943	105.701
I	GRID	13013	BB III	An	A2		178.0		-95,144.499	30,661.076	106.453
I	GRID	13025	BB III	An	B2		3.0		-95,141.556	30,658.337	106.675
I	GRID	13030	BB III	An	B2		45.0		-95,141.085	30,657.641	106.586
I	GRID	13032	BB III	An	A2		366.0		-95,135.511	30,659.790	106.917
II	PH47	12441	YL	An	B2		165.0		-95,149.015	30,659.137	107.437
II	PH47	12442	YL	An	A1	煤	127.0		-95,149.114	30,658.981	107.500
II	PH47	12443	YL	An	A2		204.0		-95,149.175	30,658.895	107.500
II	PH47	12444	YL	An	A2		197.0		-95,149.242	30,658.942	107.493
II	PH47	12445	YL	An	B2		82.0		-95,149.213	30,659.041	107.453
II	PH47	12446	YL	An	A2		546.0		-95,149.586	30,659.252	107.402
II	PH47	12447	YL	An	A2		829.0		-95,149.650	30,658.983	107.422
II	GRID	8864	YL	An	A2		855.0		-95,147.619	30,653.590	107.299
II	GRID	10586	YL	Da	B2		10.0		-95,154.097	30,675.221	107.619
II	GRID	12834	YL	An	A2		109.0		-95,150.513	30,659.724	107.402
II	GRID	12909	YL	An	B2		67.0		-95,137.551	30,663.569	107.902
II	GRID	12910	YL	An	A2		176.0		-95,137.600	30,663.572	107.856
II	GRID	12911	YL	An	A2		70.0		-95,141.054	30,656.884	107.781
II	GRID	12912	YL	An	B2		28.0		-95,143.919	30,665.100	107.640
II	GRID	12928	YL	An	B11		223.0		-95,130.421	30,657.839	108.208
II	TP86	13909	YL	An	B2		31.0		-95,159.359	30,669.489	107.296
II	GRID	14168	YL	An	A2		32.0		-95,142.534	30,672.069	108.122
II	GRID	14169	YL	An	B2		300.0		-95,143.450	30,672.084	107.970
II	GRID	14170	YL	An	B2		53.0		-95,143.979	30,669.727	107.940
II	GRID	14171	YL	Da	B2		99.0		-95,150.054	30,669.293	107.508
II	TP88	14721	YL	An	B2		265.0		-95,138.634	30,668.462	108.204

第３節　縄文時代の遺構と遺物

（１）遺構と遺物の分布状況

①遺　構（第 161 図）

縄文時代の遺構としては、土坑２基、集石４基、焼土址２基が検出された。これらの遺構は調査区西側急斜面より東側の緩斜面上に分布し、富士黒土層を中心に見つかっている。土坑は２基とも調査区中央付近に位置するが、特筆すべき点は見られなかった。各遺構の時期を断定することは難しいが、集石内では早期後半～末にかけての土器がわずかに出土している。

②土器の分布（第 163 図・第 164 図）

出土した土器は早期前半の撚糸文土器から末葉の土器までと、縄文時代早期のものに限られており、その大半が標高 108m 以上の中央から東側の傾斜が緩やかな範囲に分布しており、西側の傾斜地には少ない。

③石器の分布（第 162 図）

石器は調査区中央付近の緩斜面に北から南まで広く分布しており、特に標高 108m ～ 109m 付近にまとまる様子が認められた。西側の急斜面はわずかに剥片や砕片が散在する程度で、東側についても分布は希薄である。これらの石器は富士黒土層から栗色土層を中心に検出されたが、その大半は富士黒土層からの出土で、剥片と砕片の量が非常に多い。器種別の出土状況を見ると、剥片石器については 100 点を超える石鏃の出土が目立ち、楔形石器も一定量の出土が確認された。また、80 点を超える磨石も広く分布が認められる。

（２）遺　構

①土　坑

土坑は２基のみの検出に留まり、規模や形状、配置などに企画性は見い出せなかった。

第３号土坑（第 165 図）

調査区中央の緩斜面上に位置し、富士黒土層で検出された。平面形は楕円形に近い不整形で、長軸を南東－北西方向へ向ける。長径 124㎝、短径 100㎝、深さ 26㎝。底面付近の覆土内では焼土粒子が少量観察された。

第４号土坑（第 165 図）

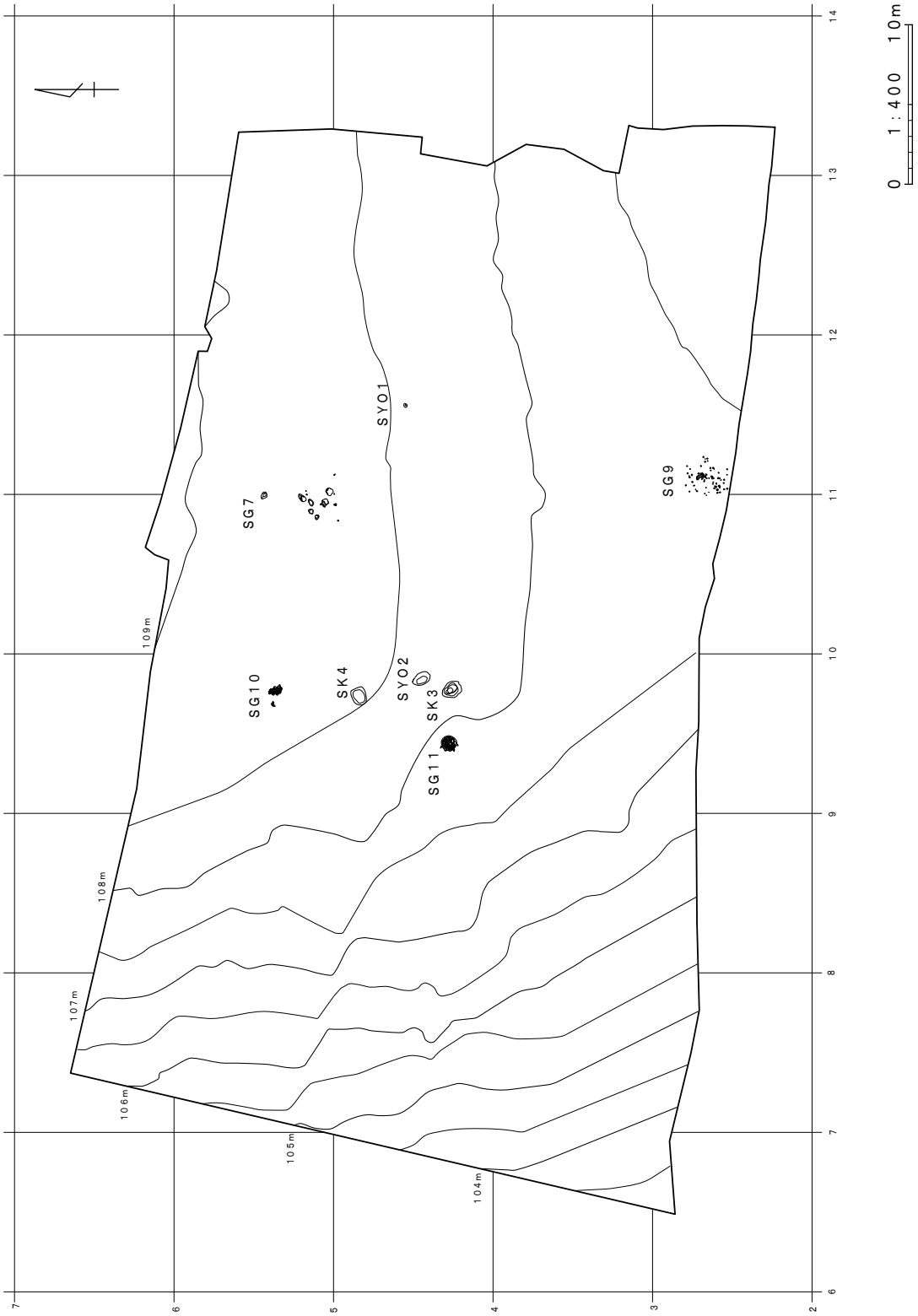
調査区中央の緩斜面上、第３号土坑より北側に位置し、富士黒土層で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸を南西－北東方向へ向ける。長径 110㎝、短径 90㎝、深さ 22㎝で、断面は浅い皿状を呈する。第３号土坑と同様に、底面付近の覆土内には焼土粒子が含まれている。

②集　石

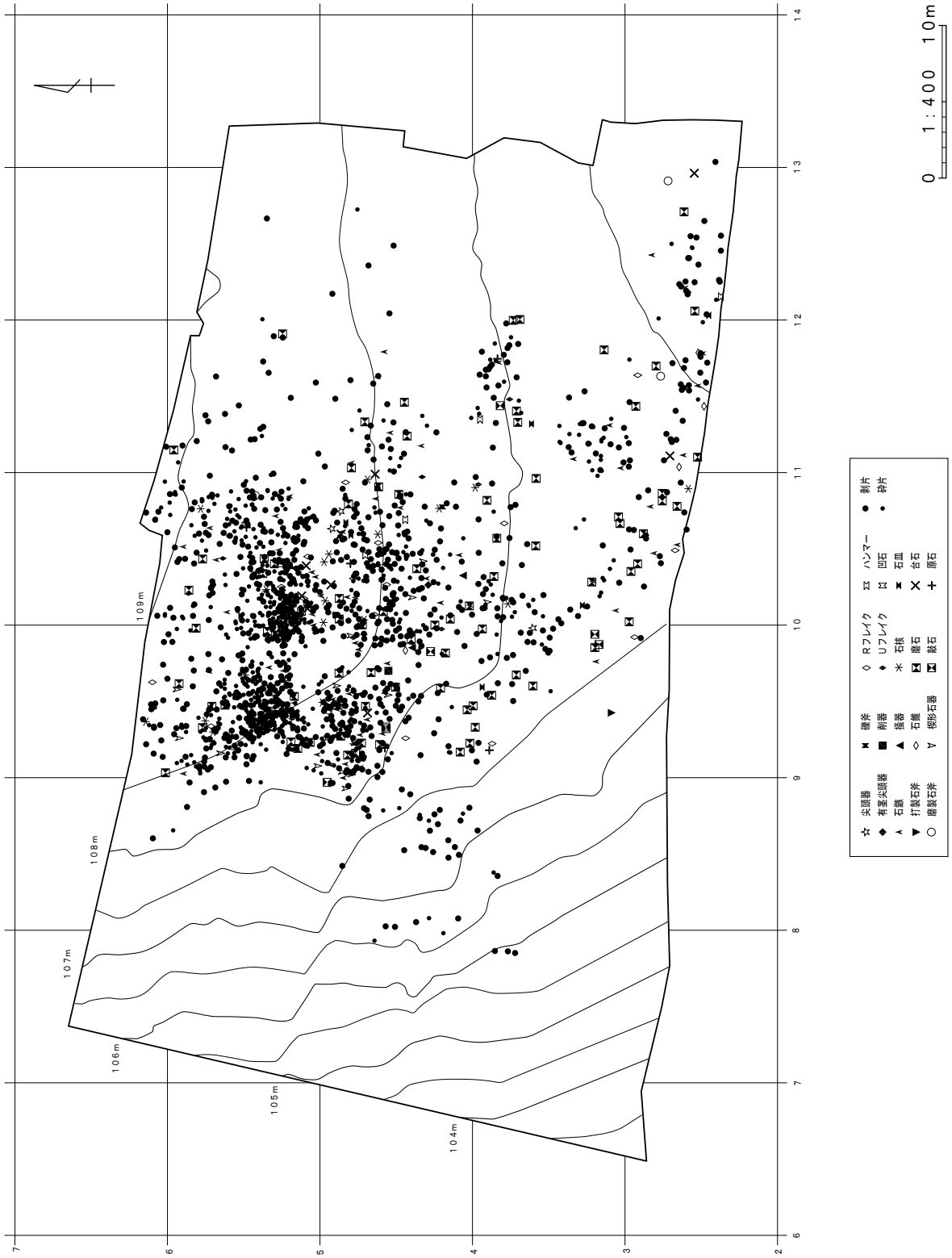
集石は４基が検出された。調査区中央付近を中心に分布し、下部に土坑を伴う１基は垂直方向への密な重なりが認められた。使用されている石材は、愛鷹山山体を構成し周辺の小河川で得られる安山岩を主体としており、板状に節理する性質のあるデイサイトがわずかに用いられている。

第７号集石（第 166 図）

調査区中央の北側緩斜面上に位置し、栗色土層で検出された。古墳石室材に用いられるような大型礫が南北方向へ散在する。礫の総数は 15 点で、径 30㎝以上の礫を主体に構成される。現地調査で測量が行われた後に破棄されたことから、石材や重量、赤化状態等の分析等の詳細は不明である。出土遺物としては、縄文土器片（早期末条痕文）１点が出土した。これは、遺構外から出土した多数の土器片と接合し、第 186 図 135 のように器形を復元することができた。

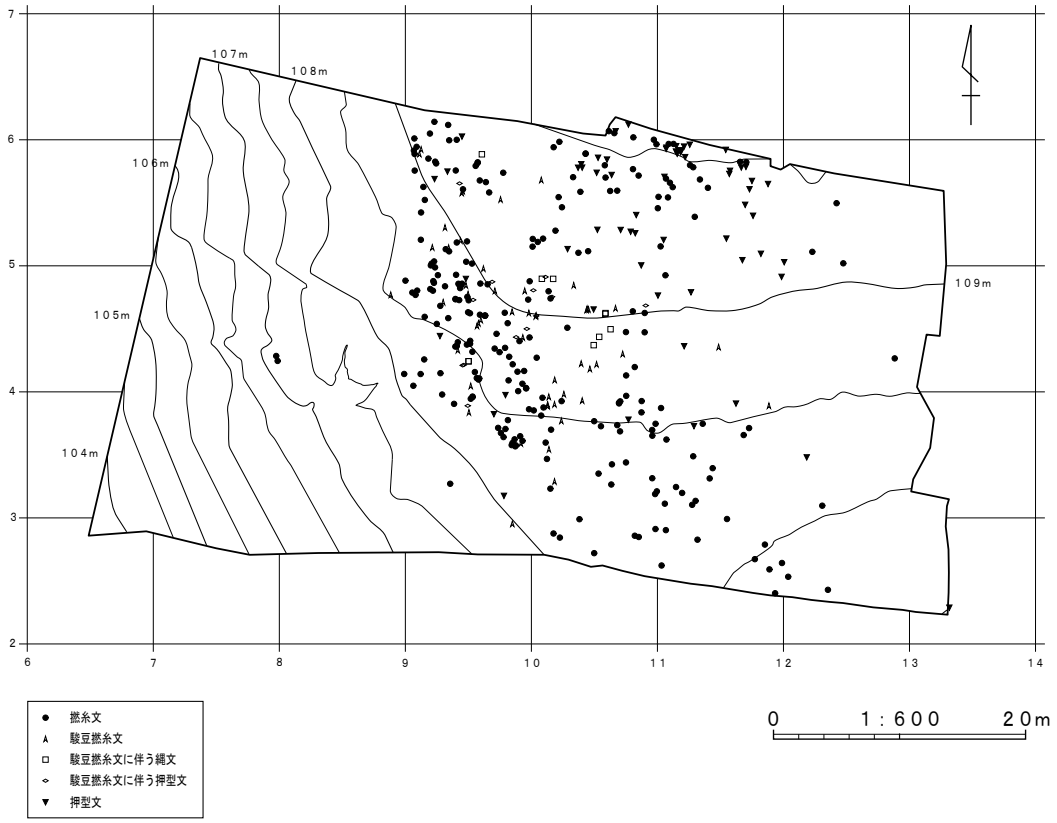


第161図　南調査区 縄文時代　遺構分布図

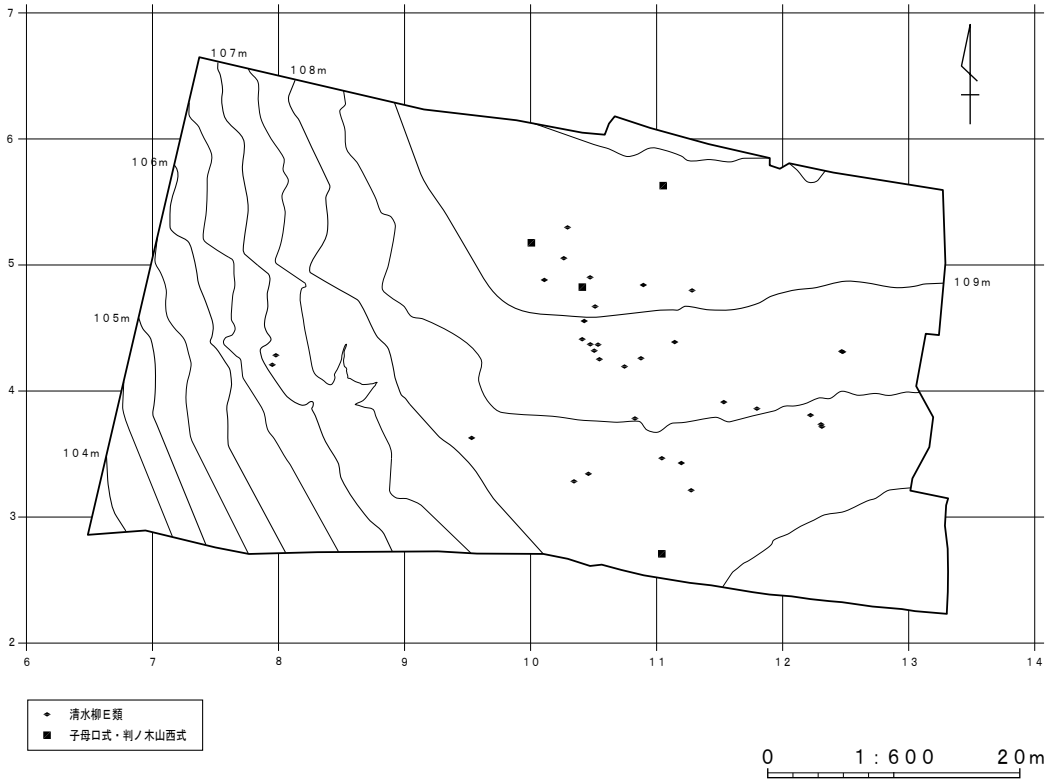


第162図　南調査区 縄文時代　石器分布図

南区　縄文土器出土分布図（1）

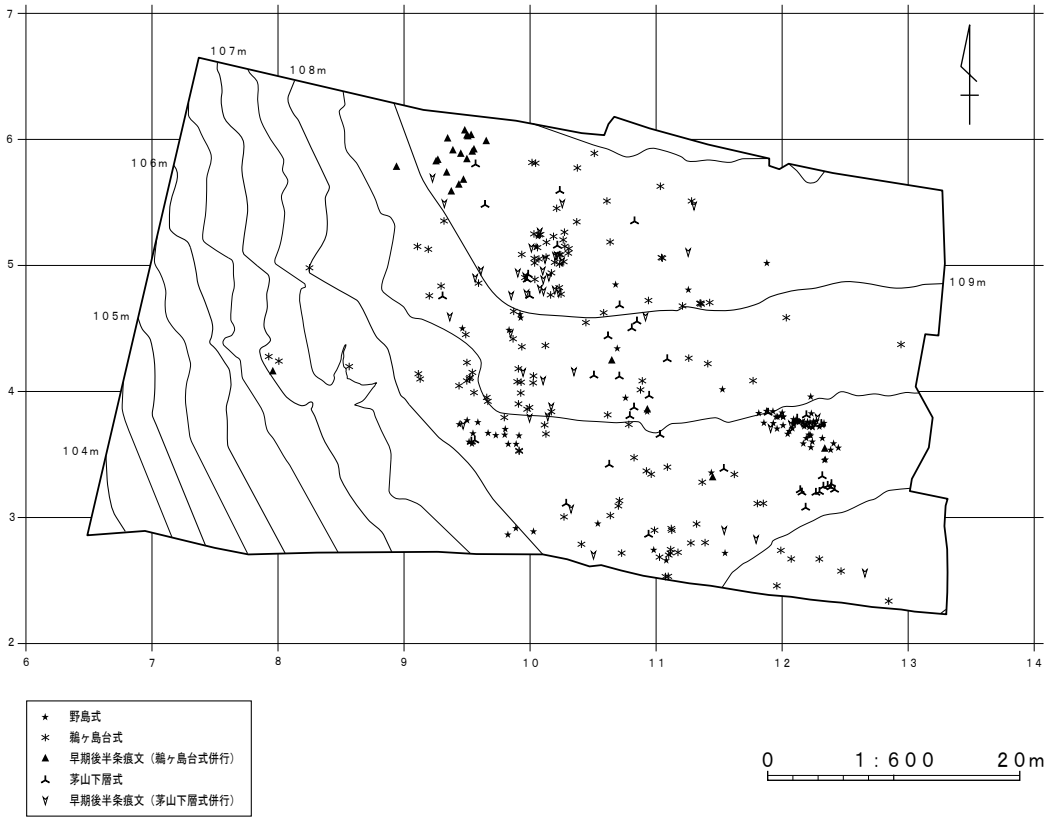


南区　縄文土器出土分布図（2）

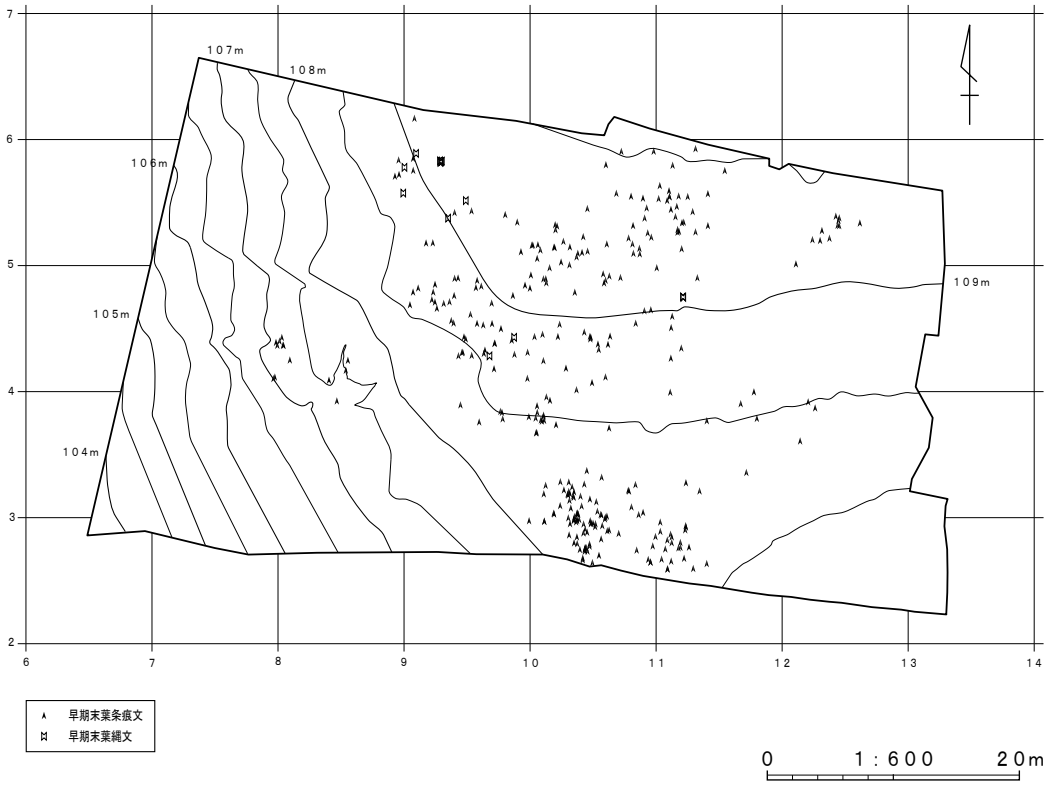


第 163 図　南調査区 縄文時代　土器分布図（1）

南区　縄文土器出土分布図（3）



南区　縄文土器出土分布図（4）



第 164 図　南調査区 縄文時代　土器分布図（2）

第９号集石（第 167 図・第 168 図）

中央よりやや東寄りの南端緩斜面上に位置し、富士黒土層で検出された。細かい破砕礫が平面的に散在し、中央にやや密集する。礫の総数は 74 点、総重量は 15,028g。拳大以下の破砕礫を主体とし、石材はすべて安山岩である。完形で赤化したものと、礫面のみが赤化した破損礫が多く認められる。

出土遺物としては、縄文土器片（子母口式・野島式・早期末条痕文）６点と、安山岩製の台石１点、黒曜石製の剥片１点が出土した。第 168 図１は子母口式の土器片で、条痕文土器の破片は遺構外から出土した多数の土器片と接合し、第 184 図 133 のように器形を復元することができた。第 168 図２は台石で、自然の凹凸に混じって、使用の痕跡と思われるわずかな敲打痕が認められる。

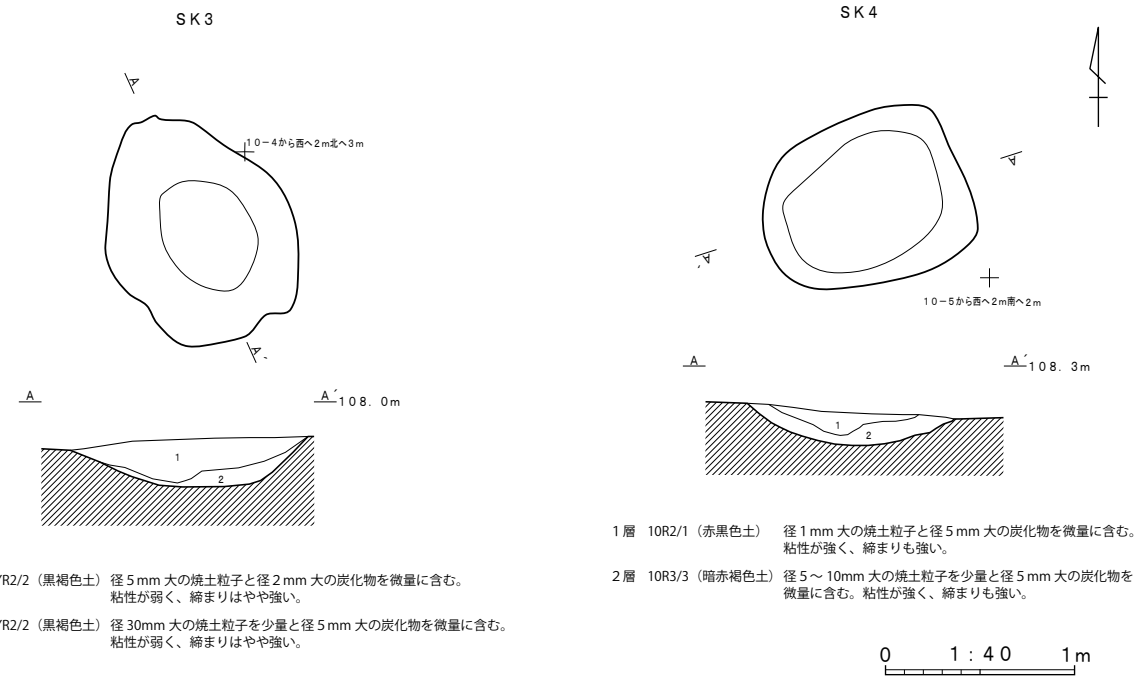
第 10 号集石（第 169 図）

調査区中央付近の北側緩斜面上に位置し、富士黒土層で検出された。90㎝程度の範囲で南東－北西方向を主軸に密集する礫と、西へ 40㎝ほど離れた地点に分布する少量の礫に分かれる。礫以外の遺物は出土していない。礫の総数は 59 点、総重量は 22,088g。径 15㎝前後の角礫と、拳大以下の破砕礫で構成され、石材はすべて安山岩である。赤化が認められたのは半分以下で、破損し赤化の見られない礫が大半を占める。

第 11 号集石（第 169 図）

調査区中央付近の緩斜面上に位置し、富士黒土層で検出された。下部に土坑を伴い、土坑は長径 100㎝、短径 96㎝、深さ 40㎝を測り、平面形は円形を呈する。礫の総数は 207 点、総重量は 140,025g。土坑底部に嵌め込まれた径 28㎝ほどの礫の上に、径 15㎝前後と拳大以下の礫が多量に重なり合い、垂直方向への密な分布が認められる。石材はすべて安山岩で、赤化が認められたのは全体の４割以下で、破損し赤化の見られない礫が大半を占める。

出土遺物としては、縄文土器片（駿豆撚糸文・早期末条痕文）２点と、デイサイト製および砂岩製の磨石２点が出土している。条痕文土器の破片は、遺構外から出土した複数の土器片との接合することができた（第 187 図 140）。



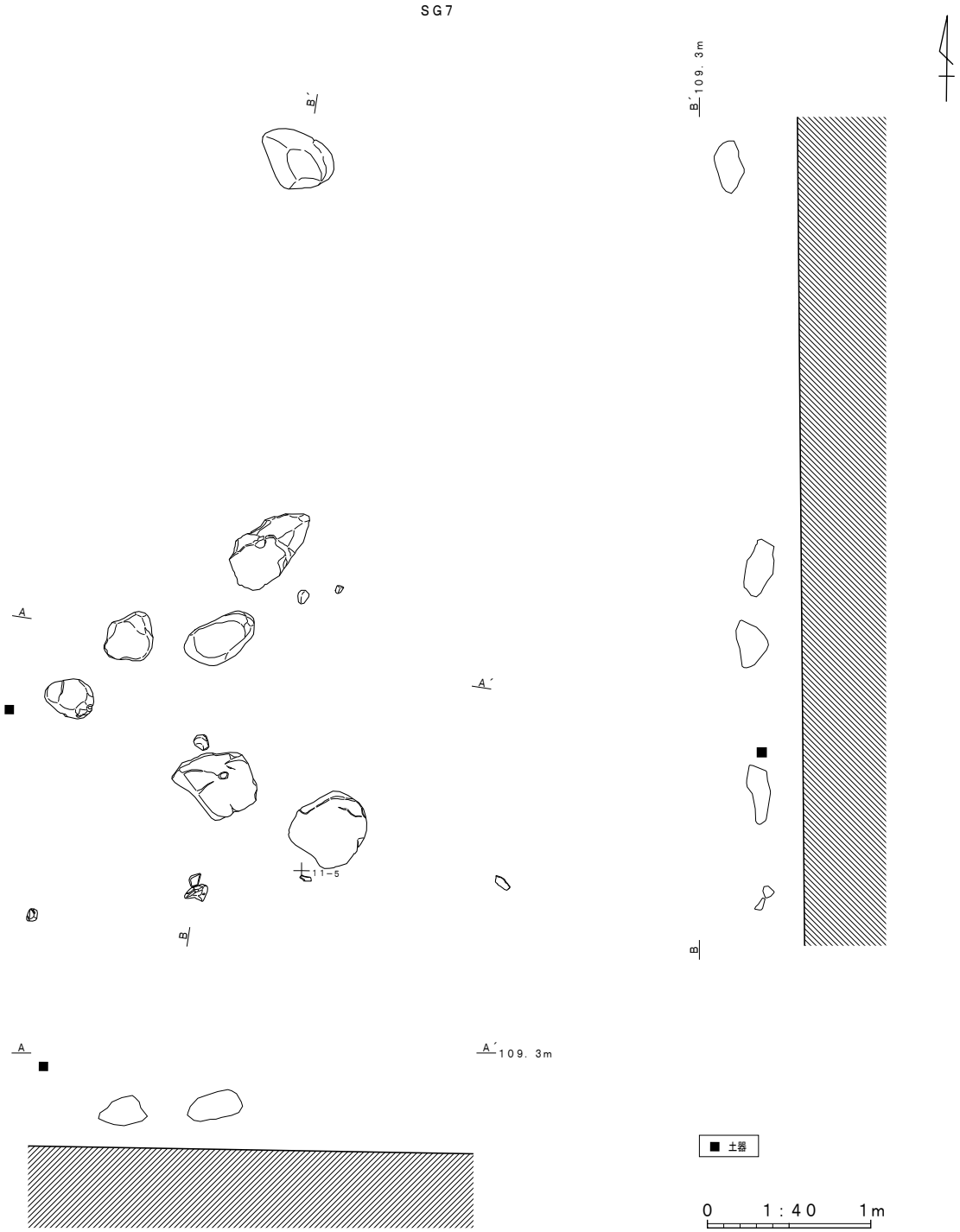
１層　5YR2/2（黒褐色土）　径５mm 大の焼土粒子と径２mm 大の炭化物を微量に含む。粘性が弱く、締まりはやや強い。

２層　5YR2/2（黒褐色土）　径 30mm 大の焼土粒子を少量と径５mm 大の炭化物を微量に含む。粘性が弱く、締まりはやや強い。

１層　10R2/1（赤黒色土）　径１mm 大の焼土粒子と径５mm 大の炭化物を微量に含む。粘性が強く、締まりも強い。

２層　10R3/3（暗赤褐色土）　径５～ 10mm 大の焼土粒子を少量と径５mm 大の炭化物を微量に含む。粘性が強く、締まりも強い。

第 165 図　南調査区 縄文時代　土坑実測図



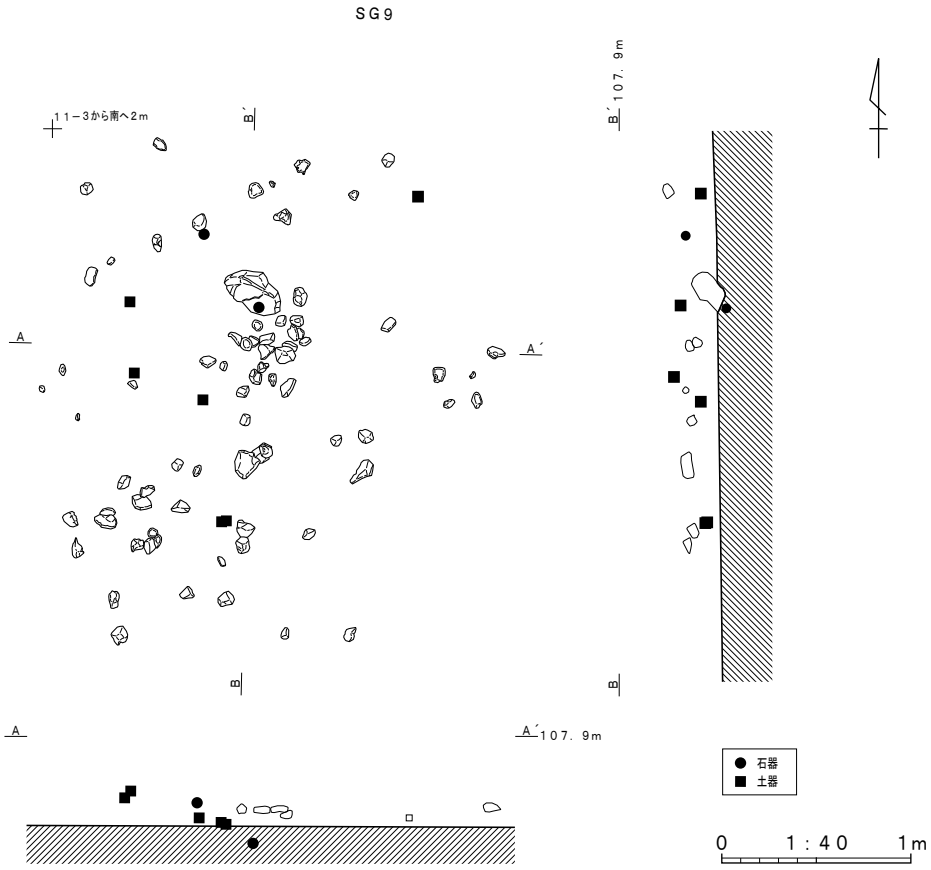
第 166 図　南調査区 縄文時代　集石実測図（1）

③焼土址

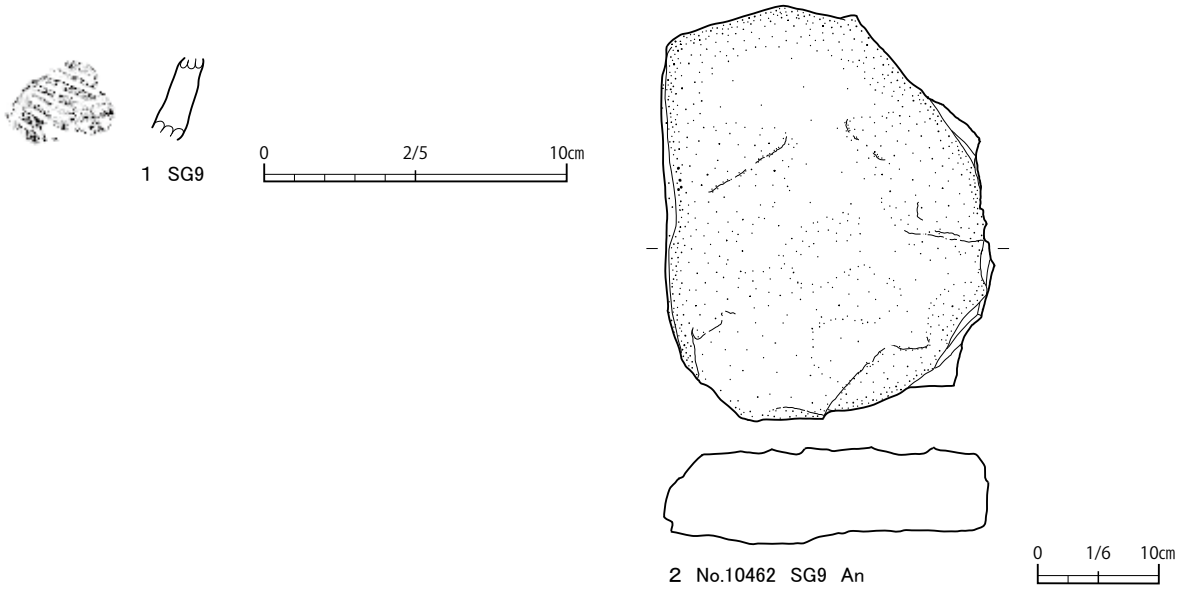
焼土址は２基が検出された。浅い掘り込みを伴うものの、明瞭な焼土層は認識できない。

第１号焼土址（第 170 図）

調査区東側中央付近に位置し、栗色土層で検出された。撹乱により残存状況が悪く、焼土範囲は不明確である。



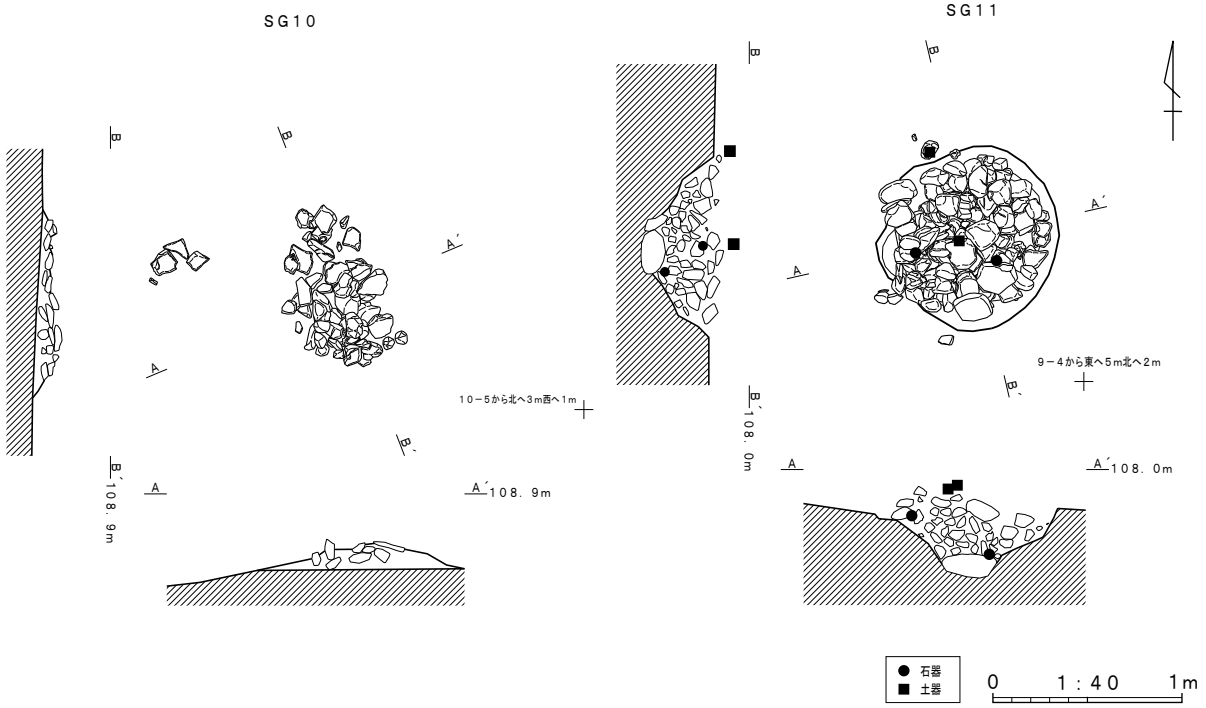
第 167 図　南調査区 縄文時代　集石実測図（2）



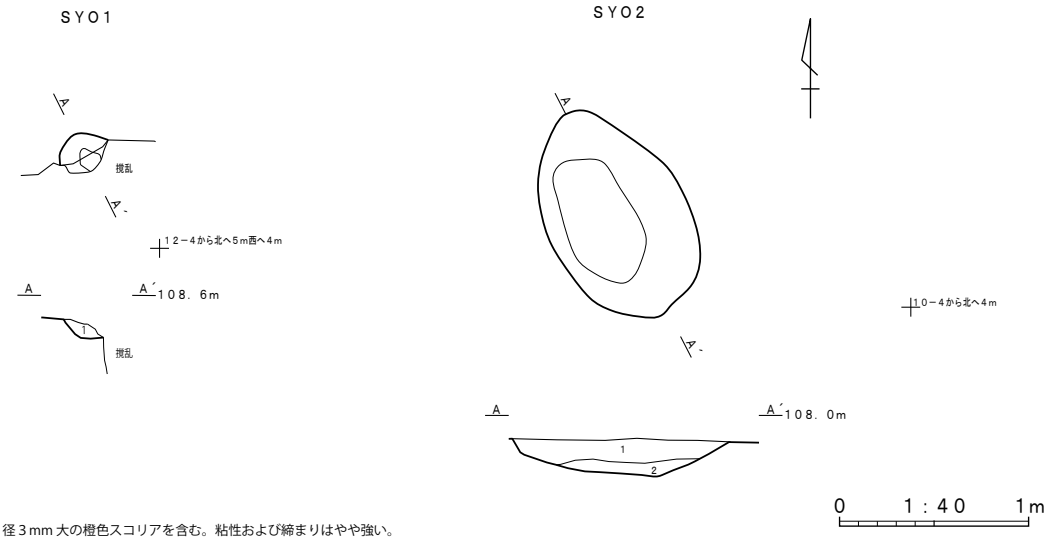
第 168 図　南調査区 縄文時代　遺構内出土遺物実測図

第２号焼土址（第 170 図）

調査区中央に位置し、栗色土層で検出された。下部に浅い掘り込みを伴うが、明瞭な焼土層は認められなかった。１層と２層からそれぞれ礫１点が出土している。



第 169 図　南調査区 縄文時代　集石実測図（3）



1 層　5YR2/1（褐色土）径 3 mm 大の橙色スコリアを含む。粘性および締まりはやや強い。

1 層　5YR2/2（黒褐色土）　径 1 ～ 5 mm 大の焼土粒子を少量と径 2 ～ 10mm 大の炭化物を微量に含む。粘性が弱く、締まりはやや強い。

2 層　5YR2/3（極暗褐色土）径 1 ～ 3 mm 大の焼土粒子と径 2 ～ 5 mm 大の炭化物を微量に含む。粘性がやや弱く、締まりはやや強い。

第 170 図　南調査区 縄文時代　焼土址実測図

（３）遺構外出土土器

本遺跡から出土した縄文時代の土器の時期は、草創期末から後期初頭までの多時期に及んでいる。このため、これらを以下のとおり時期ごとに第Ⅰ群からⅥ群に分類し、さらに型式や特徴で細分した。なお、各土器を報告するにあたり、同一個体ごとにまとめるように努めた。

第Ⅰ群　早期前半　１類　撚糸文系土器
２類　駿豆撚糸文系土器
３類　押型文土器
第Ⅱ群　早期後半　１類　清水柳Ｅ類土器
２類　判ノ木山西式
３類　野島式
４類　鵜ヶ島台式
５類　茅山下層式
６類　茅山系土器（条痕文土器）
８類　粕畑式
第Ⅲ群　早期末葉　２類　早期末葉の土器
第Ⅴ群　その他

第Ⅰ群１類　撚糸文系土器（第 171 図１～ 23・PL.56・PL.57）

早期前半の縄文施文土器および撚糸文系土器を本類とした。

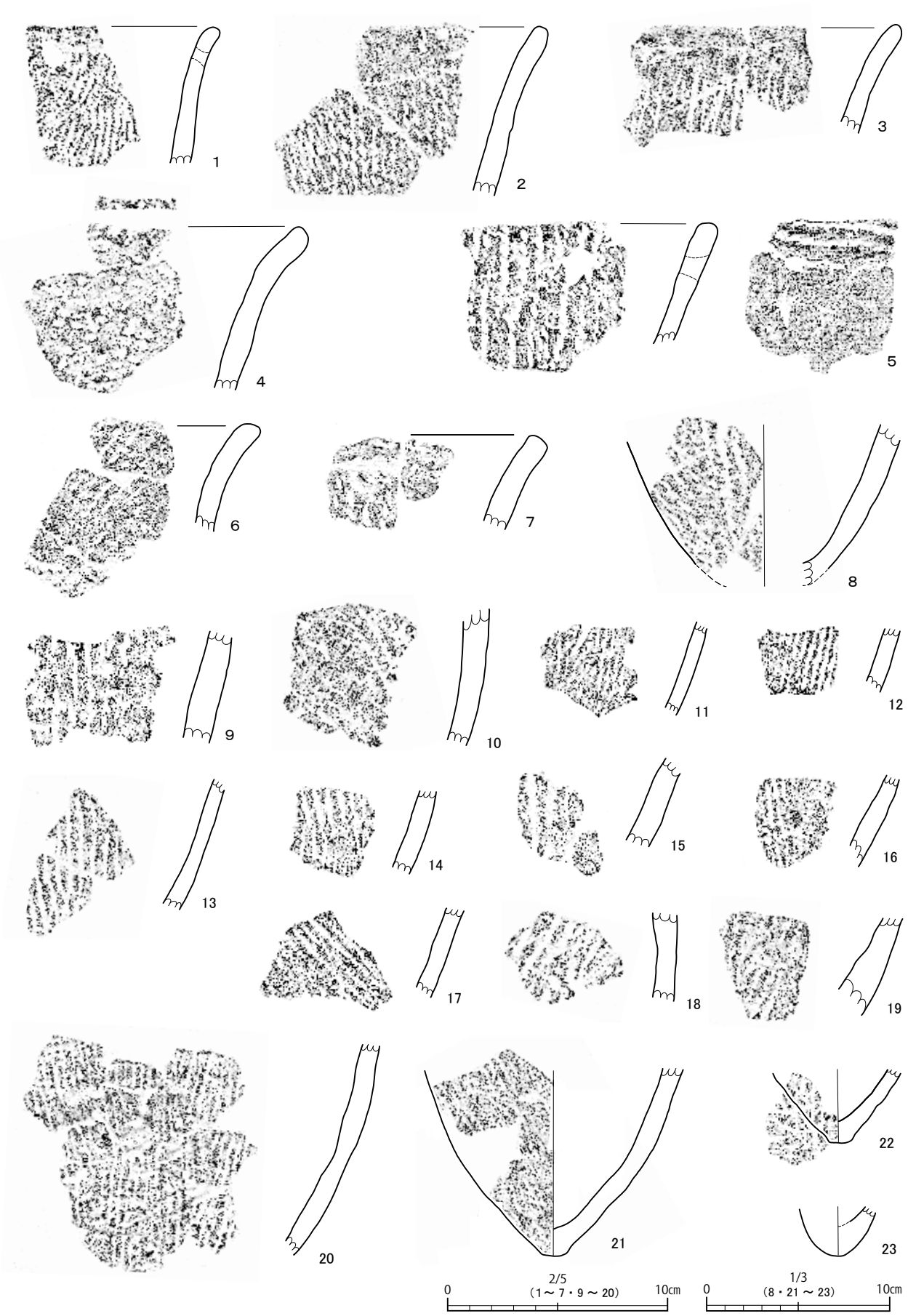
１はＲＬの縄文を器面の外面に施文する土器で、口端部が外反して立ち上がる。器面には補修孔が残る。

２～ 23 はいわゆる撚糸文土器である。２～６は口縁部である。２は軸に縄文を密な間隔に巻き付けた原体を斜位方向に施文した後に、縦位方向に施文している。３～６はやや間隔を空けて縄文を巻き付けた原体を縦位ないし斜位に強く押し当てて施文している。このため軸の痕が明瞭に残る。２～４・６は口端部が外反する断面形状となるが、５は直線的に立ち上がっている。また、５の口端部内面にも横位方向に撚糸文が施文されている。７～ 10 は同一個体のものであり、口縁部から底部にかけてのものが部分的に出土している。７は口縁部の一部であり、口端部や内面にも撚糸文が施文されている。８・９は胴部片である。10 は先端を欠損するものの、尖底の形状を呈した底部の一部である。11・12 および 13・14 は胴部片であるが、胎土等の特徴からそれぞれが同一個体と推測される。16 ～ 19 は、いずれも胴部の一部であり、施文される撚糸の特徴や胎土、器厚など特徴が異なることから、それぞれが別個体のものと推測される。20・21 は同一個体で、20 が胴部、21 は先端が小平底となる底部である。口縁部は確認できなかった。器面の外面には縦位ないし斜位方向の撚糸文が施文されている。22・23 は尖底の底部の一部である。

第Ⅰ群２類　駿豆撚糸文系土器（第 172 図 24 ～ 41・PL.57・PL.58）

早期前半の静岡県東部を中心に分布する駿豆撚糸文系土器（池谷 2003）を本類とした。デイサイト質の軽少な胎土が特徴的で、撚糸文、縄文、押型文土器から構成されるものである。

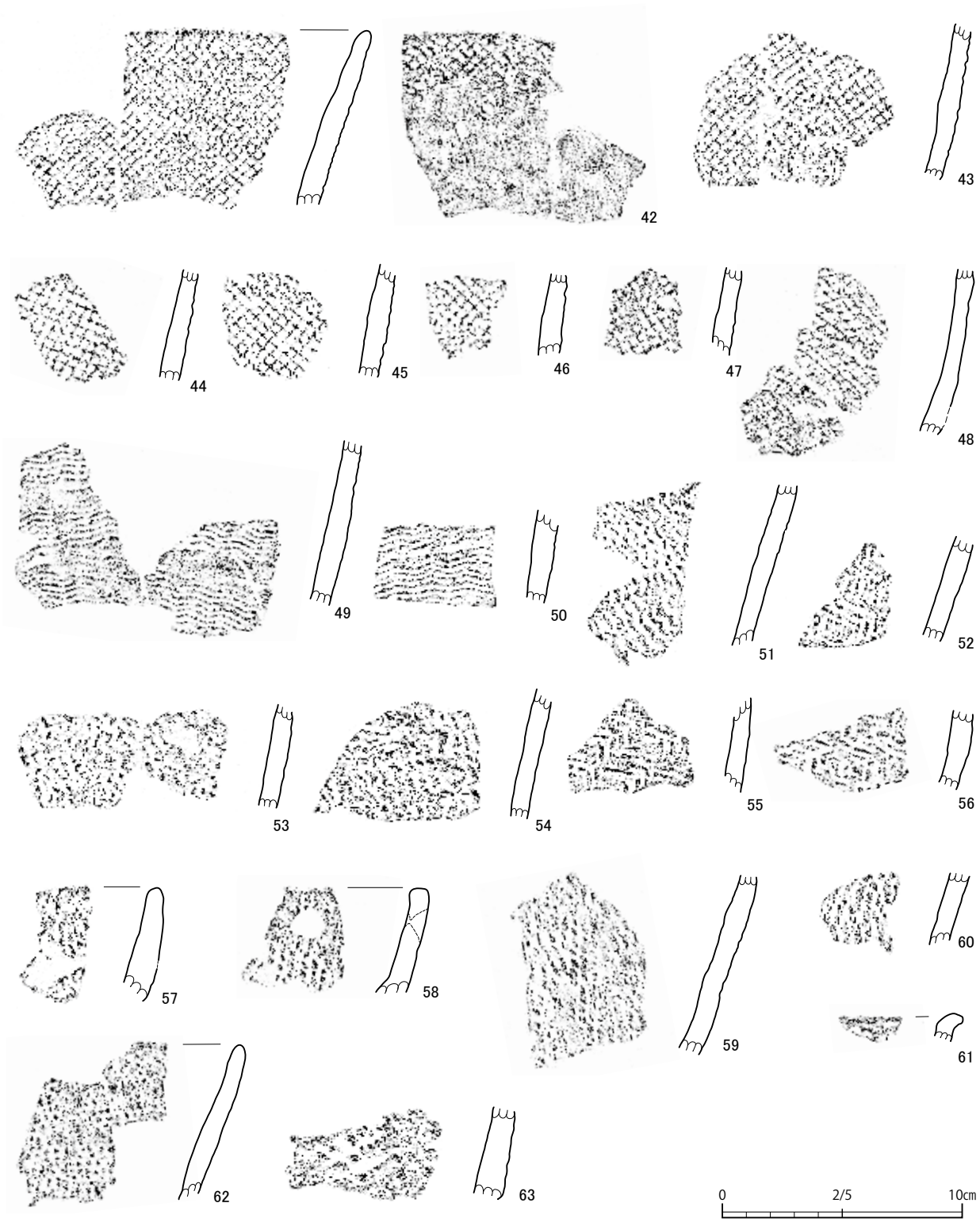
24 ～ 29 は撚糸文土器で、器面には斜位に撚糸文が施文されている。24・25、26・27、28・29 の３個体が確認できた。24･25 は薄手での土器で、24 は口縁端部付近で外反し、断面形状は内削ぎ状で、尖っている。25 はその胴部である。26・27 はやや厚手のものである。26 は口縁部で口端部はやや丸みを帯びている。27 は胴部の一部であるが内面が剝離している。28・29 は厚手のもので、やや節の細かい縄文を巻いた原体で撚糸文を施文している。いずれも胴部である。



第 171 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（1）　第Ⅰ群 1 類

第 172 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（2）　第Ⅰ群２類

30 ～ 36 は器面に羽状縄文を施文するもので、30 ～ 33、34、35・36 の 3 個体を確認した。30 ～ 33 はやや節の大きい縄文による羽状縄文を施文している。30 は口縁部で、緩やかに外反する器形となり、口端部はナデによって平坦となっている。31 ～ 33 はその胴部である。34 は口縁部で口端部が角状になっている。小片で判然としないが、羽状縄文になっていない可能性がある。35・36 は節の細かい縄文原体を使用して文様を施文しているものである。35 は口縁部で直線的に立ち上がっており、口端部はナデで平坦になっている。36 はこの底部であり、尖底である。37 ～ 41 は押型文土器である。口縁部は確認できなかった。いずれも胴部で、同一個体と推測される。山形の押型文が縦位に施文されている。

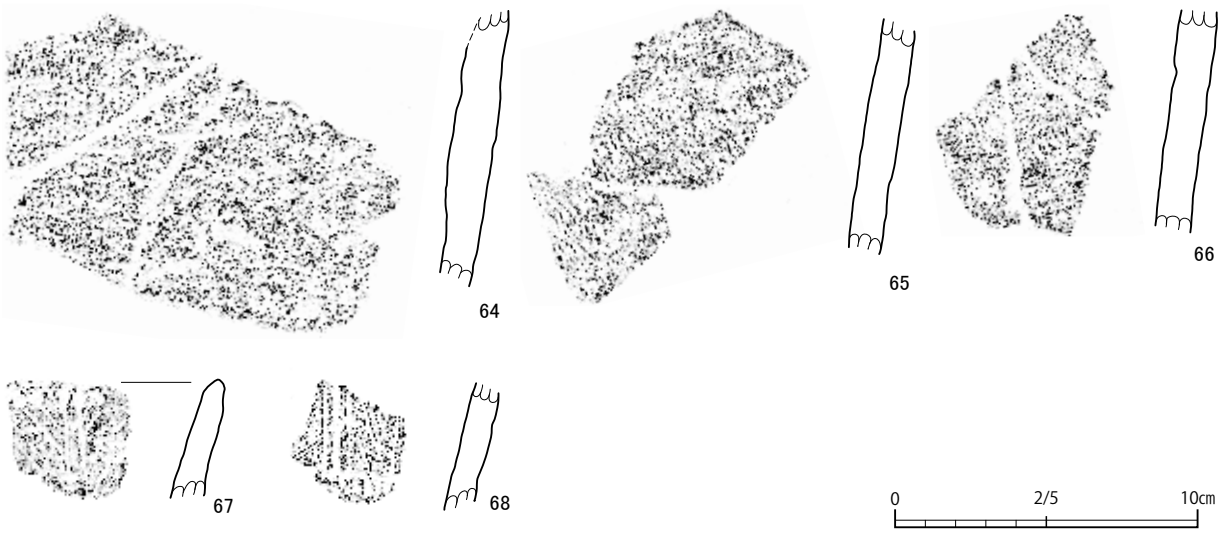


第 173 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（3）　第Ⅰ群３類

第Ⅰ群３類　押型文土器（第 173 図 42 ～ 63・PL.59・PL.60）

押型文土器を本類とした。格子目文、山形文、楕円文が出土している。

42 ～ 48 はネガティブの格子目押型文を施文するものである。2 個体分が確認された。42 ～ 47 は同一個体である。42 は直線的に立ち上がる口縁部で、端部は丸みを帯びている。口唇内面にも外面と同じ格子目押型文が施文されている。なお、当初３㎝程度の幅で施文した後に、下半の 1.5㎝程度をナ



第 174 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（4）　第Ⅱ群１類・第Ⅱ群２類

デによって消している様子が看取できる。43 ～ 47 は胴部の一部である。48 は、42 ～ 47 とは別個体で、胎土に繊維を含み器厚は７㎜以下と薄手である。器面にはやや崩れた格子目押型文が施文されている。

49 ～ 56 は山形押型文を施文するものである。少なくとも２個体は存在すると推測される。49・50 は同一個体で、横位の波状に近い山形押型文が施文されているものである。胎土には微細な雲母や砂粒をやや多く含んでいる。51 ～ 56 は同一個体で、斜位にやや大ぶりな山形押型文が施文されている。器厚は８㎜程度と薄手である。

57 ～ 63 は楕円押型文を施文するものである。57 ～ 60、61、62、63 と少なくとも４個体存在すると推測される。57 ～ 60 は同一個体と推測され、やや粗い楕円押型文が縦位に施文されている。胎土には砂粒の他、繊維を含んでいる。57・58 は口縁部であり、58 は破片中央に補修孔が残る。口縁は緩やかに内湾しながら立ち上がる形状を呈している。61 は口縁部で、口端部を肥厚させているものである。器厚は６㎜以下と薄手である。小片であるものの、破片下部に楕円押型文が確認できる。62 は小さい円形状の押型文が施文されているものである。口縁部で、口端は丸みを帯びており、直線的に立ち上がる形状となっている。63 は、やや粗大な楕円押型文が施文されているもので、高山寺式の範疇におさまるものと推測される。ただし、内面には高山寺式特有の沈線は確認できない。

第Ⅱ群１類　清水柳Ｅ類土器（第 174 図 64 ～ 66・PL.60）

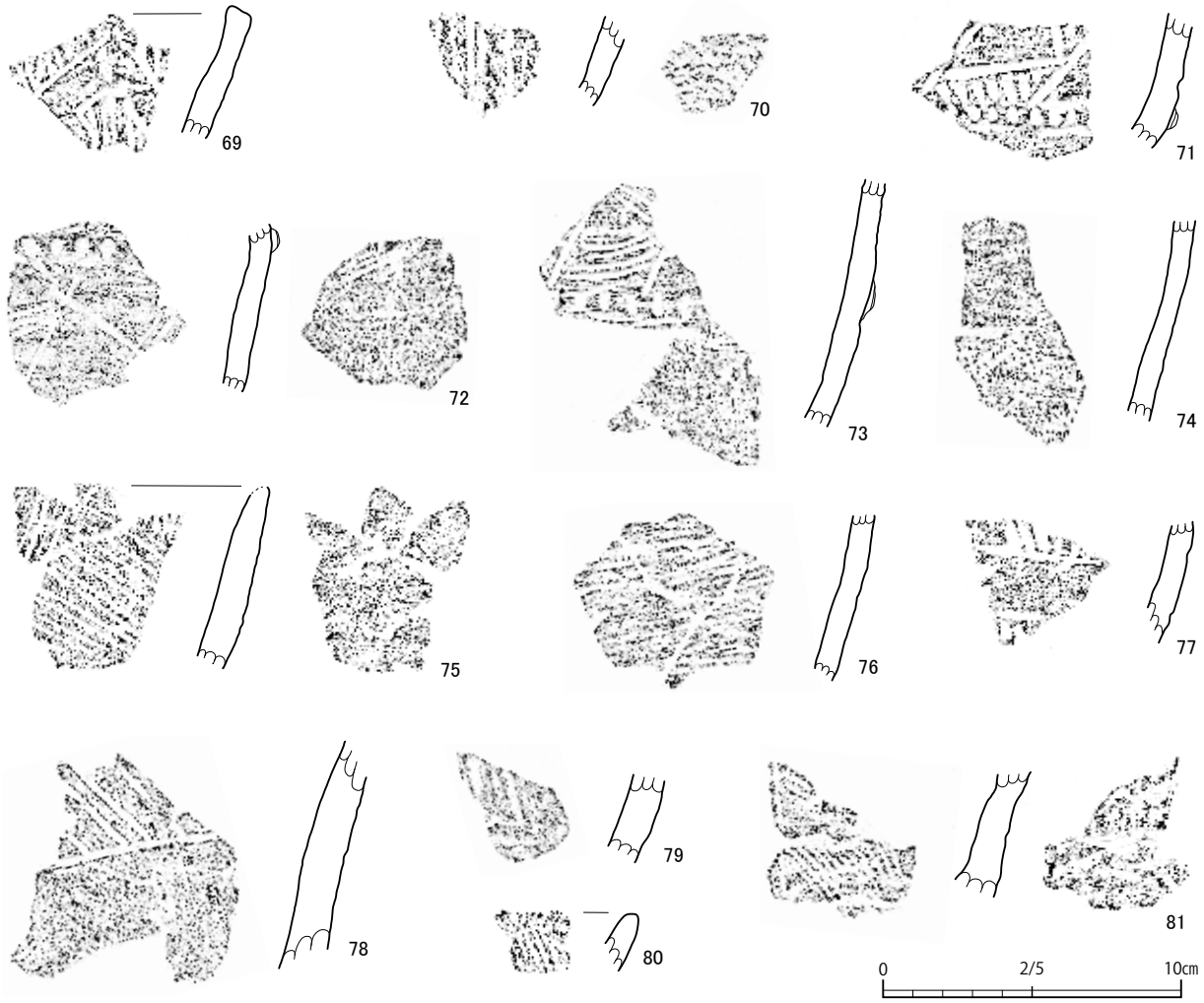
静岡県東部を中心に分布する清水柳Ｅ類土器を本類とした。

小片は多数出土しているが、大半が図示困難であった。64 ～ 66 は同一個体であり、いずれも胴部である。器面には横位ないし斜位の絡条体圧痕文のみが施文されている。器厚は 13㎜程度とやや厚手であり、胎土には雲母、白色や赤色の砂粒、繊維を含んでいる。

第Ⅱ群２類　判ノ木山西式（第 174 図 67・68・PL.60）

中部高地を中心に分布する判ノ木山西式を本類とした。

67 は口縁部の一部であり、口端直下に口縁の形状に沿って刺突列を施文し、その下に縦位の併行沈線を施文して区画を形成し、左右の区画に異なる斜位の集合沈線を充填して矢羽状の文様を形成している。68 は胴部の一部である。文様の特徴から 67 とは別個体のものと推測される。縦位３条の併行沈線によって区画を形成し、異なる方向の斜位の集合沈線を充填して矢羽状の文様を描いている。破片下部には横位３条の刺突列が互い違いになるように施文している。なお、破片の右側にも縦位の沈線が１条確認できることから、文様区画の幅は 1.5㎝程度と狭い。

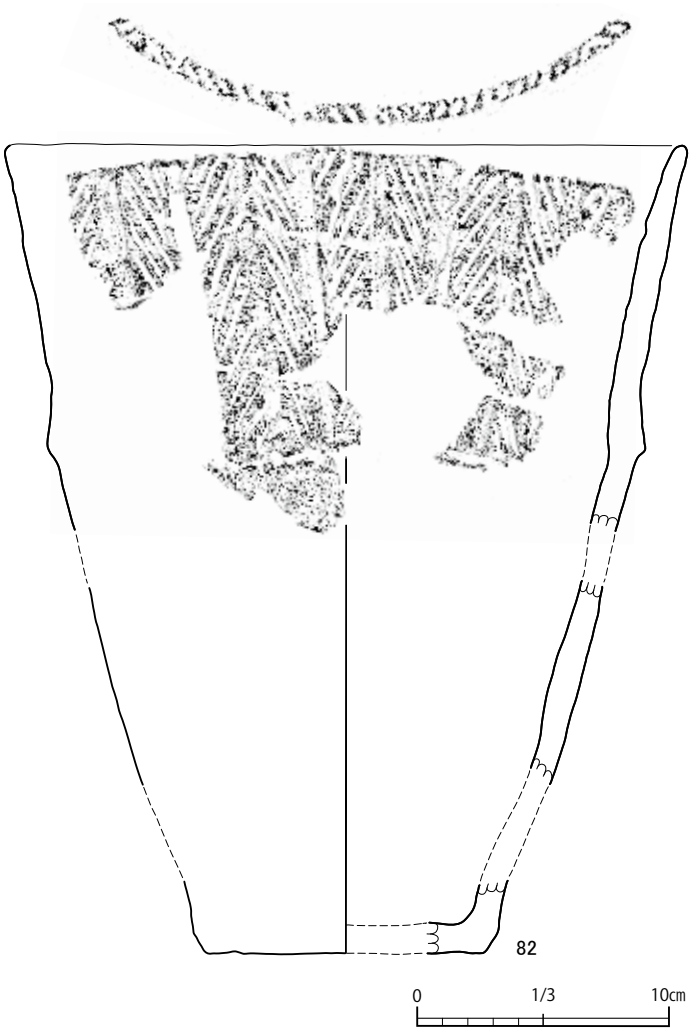


第 175 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（5）　第Ⅱ群３類①

第Ⅱ群３類　野島式（第 175 図 69 ～第 176 図 82・PL.61・PL.62）

早期後半の条痕文土器である野島式を本類とした。

69 ～ 74 は同一個体と考えられる。69 は変則的な波状となる口縁部で、波頂部から垂下する隆帯を貼付け、口縁部文様帯に大きな区画を形成する。そして併行沈線による幾何学的な文様を施文し、併行沈線によって小さな区画を作り、その区画の一部には集合沈線を充填する。70 ～ 72 は口縁部文様帯の一部である。70 は波頂部から垂下する隆帯の一部である。胎土に含まれる白色砂粒が多いことから別個体の可能性もあるが、文様等が類似していることから、同一個体と判断した。71 ～ 73 は口縁部文様帯下部と胴部の一部である。文様帯を胴部の境に、刻みを加えた横位の隆帯が添付されている。74 は胴部の一部である。75 は口縁部の一部である。集合沈線を組み合わせて文様を施文しているものである。口縁部の形状は部分的に欠損しているものの、ナデによって平坦となっている。76 は貝殻による器面調整が行われているものである。77 は併行沈線を施文し、それに伴ってできる区画内に集合沈線を充填するものである。胎土に多量の白色砂粒を含んでいる。78 は文様帯から胴部にかけてのもので、横位の沈線で区画し、それよりも上に斜位の連続した沈線で文様を施文している。79 は胴部の一部である。破片の上の部分に、条痕ないし集合沈線が確認できる。80・81 は同一個体と推測され、80 は口縁部の一部である。口端は丸みを帯びており、器面には条痕が確認できる。81 は口縁部文様帯の下端部である。破片左側に縦位の沈線が確認できることから、文様帯内に施文された併行沈線の一部



第 176 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（6）
第Ⅱ群３類②

と推測される。また器面に施文される条痕は 80 と同一である。

82 は、一段の文様帯を有するものである。復元される器形はバケツ型を呈し、復元値で口径 27.2㎝、器高 32㎝、底径 11㎝を測る。文様帯には 2.5㎝～ 3.0㎝の間隔で縦位の凹線を施文し、凹線間に異なる方向の斜位の集合沈線を充填して矢羽状の文様にしているものである。第Ⅱ群第２類とした判ノ木山西式と類似する文様構成となるため、判ノ木山西式とも想定されたが、口端直下および文様下端に横位の刺突列を施文しないことや、段を有する文様帯を形成すること、平底になることなどを踏まえ、野島式として扱った。

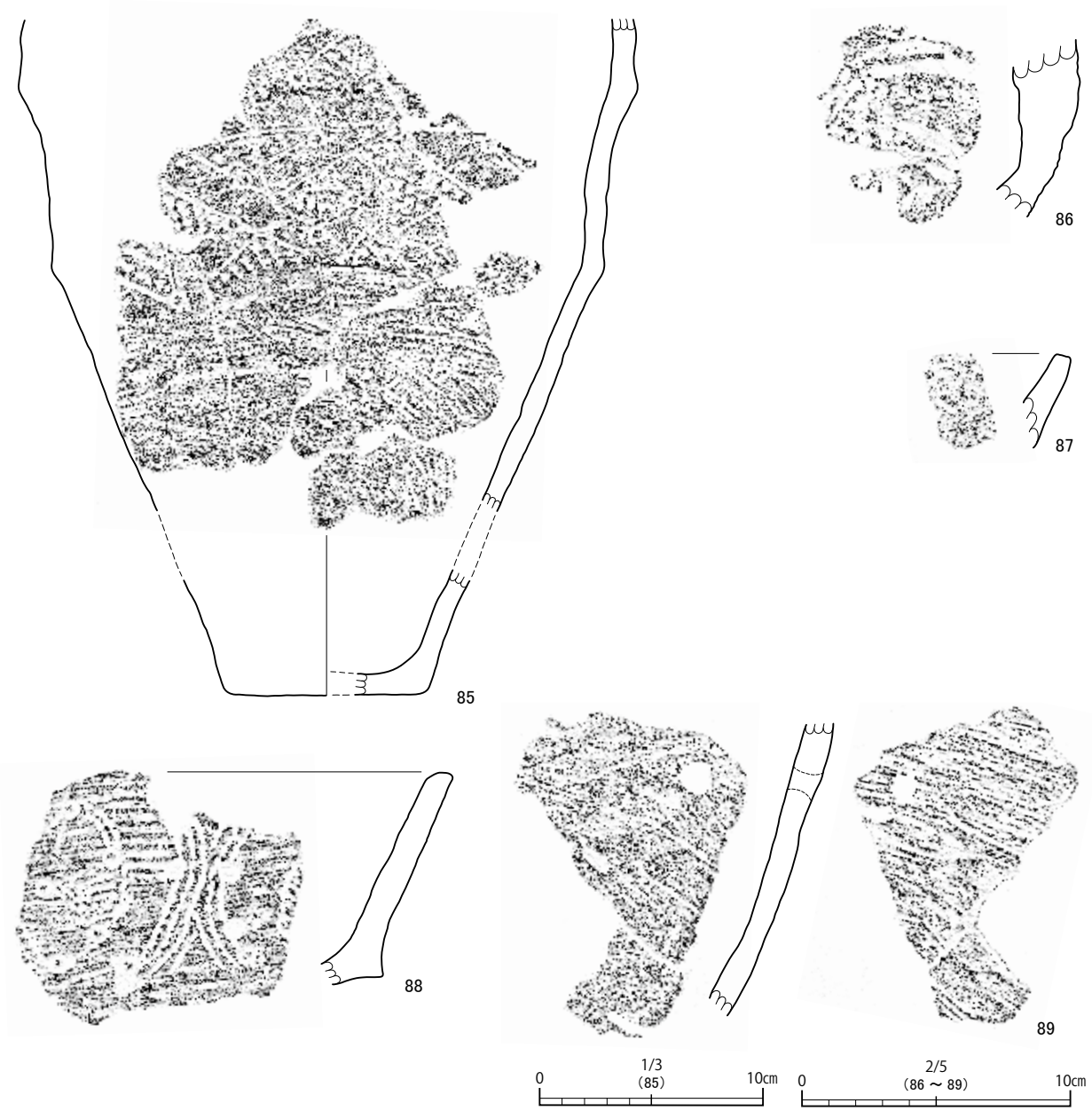
第Ⅱ群４類　鵜ヶ島台式（第 177 図 83 ～第 179 図 90・PL.62 ～ PL.64）

野島式の次型式である鵜ヶ島台式を本類とした。

83 は２段の文様帯を有し、口縁が緩やかな波状となるものである。文様帯には半裁竹管状の工具を用いた押引文を横位ないし縦位に施文することによる文様が描かれている。波頂部には下弦が曲線的な半円状の押引文が２条施文され、また口縁形状に沿って横位２条の押引文が施文される。それより下位には基本縦位方向の押引文が密接して施文されている。ただし、84 ～ 88 までの鵜ヶ島台式に見られるような明瞭な幾何学的な文様構成は確認できない。焼成はあまりよくなく、器面全体は摩滅している。84 は、屈曲が強い段部によって２段の文様帯を設け、器面に貝殻条痕による調整を施した後に、併行沈線を襷状に施文して、文様帯内に区画を形成しているものである。文様帯より下の胴部は大きく欠損しているが、全体の１/２程度は残存しており、復元しての図示が可能であった。口縁形状については、口縁部が部分的にしか残存していないため、全体の様相は判然としないものの、平口縁ないし緩やかな波状になるものと推測され、復元される口径は 28.2㎝である。文様帯内に施文される文様は、沈線による半円状のモチーフが段部直上に施文され、そこを起点にして併行沈線による襷状の文様が施文されている。また、併行沈線の交差箇所には刺突が施文され、また沈線の交差によってできる区画内に押し引きないし連続した刺突文を充填している。段部には、文様帯内の区画に刺突を充填する際の同じ工具によって、連続した刺突を加えている。

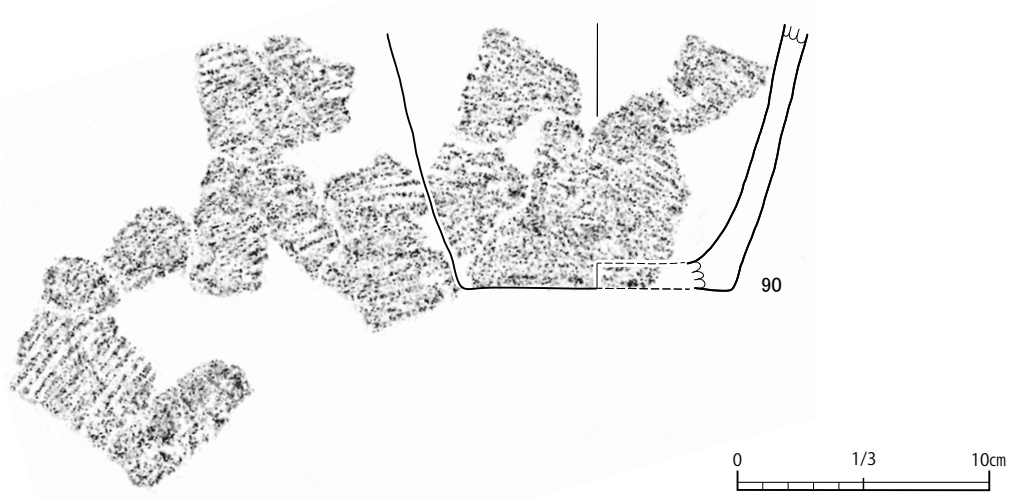
85 は、口縁部を欠損するものの、２段の文様帯を有し、83 と類似したモチーフの文様が施文されるものである。ただし、段部の屈曲が弱く、立ち上がりは直線的である。また、段部に連続した刺突は加えられていない。復元される最大径は第Ⅰ文様帯の段部で 28㎝程度である。86 は口縁部に貼付される

第 177 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（7）　第Ⅱ群４類①

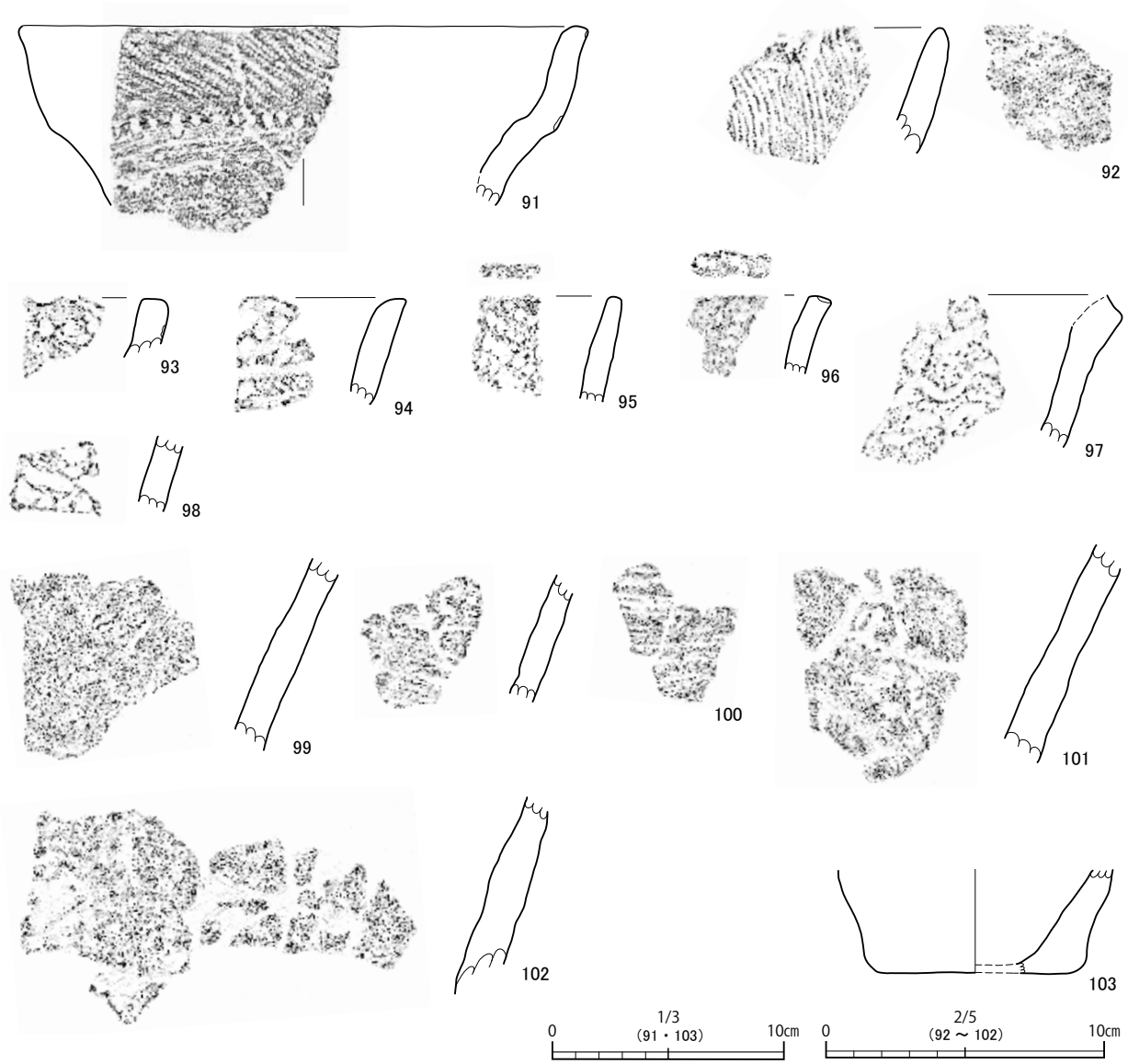


第 178 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（８）　第Ⅱ群４類②

筒状把手の一部である。器面には併行する凹線による、縦位および横位で区画文的な文様が施文されている。破片左側には凹線による区画内に刺突を充填している箇所が見られる。本破片以外で同様の凹線を用いた文様を描く鵜ヶ島台式は確認できなかった。87 は口縁部の一部で、半裁竹管状の工具の背を利用して斜位の凹線を施文し、区画を形成し、その中に連続した刺突列を充填している。小片のため、器形、文様帯の数は不明である。88 は、緩やかな波状となる口縁部文様帯の一部である。やや外反しながら直線的に立ち上がっており、口端部はナデによって平坦になっている。この下に第Ⅱ文様帯が存在するかどうかは不明である。内外面ともに横位方向の条痕による調整を実施した後に、口縁に沿って横位一条の押し引きによる沈線が施文され、その下位に、同一工具による併行した２～４条の押し引きによる併行沈線を渦巻き状に施文している。また､沈線の交点やモチーフの頂点には､竹管状工具によって円形刺突が施文される。比較的硬質で、焼成は良い。89 は、88 の同一個体で、文様帯下部の胴部の一部と推測される。器面の内外面に条痕調整が施される。補修孔が残る。



第 179 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（9）　第Ⅱ群４類③



第 180 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（10）　第Ⅱ群５類

第 181 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（11）　第Ⅱ群６類

90 は条痕文土器の平底の底部である。文様帯部分を欠損するため、型式等の判断は困難であるが、鵜ヶ島台式の土器底部の可能性がある。

第Ⅱ群５類　茅山下層式（第 180 図 91 ～ 103・PL.62・PL.65）

鵜ヶ島台式の次型式である茅山下層式と判断されるものを本類とした。

いずれも胎土に繊維を含んでおり、色調は 91 を除いた 92 ～ 103 は橙色ないしにぶい橙色を呈して

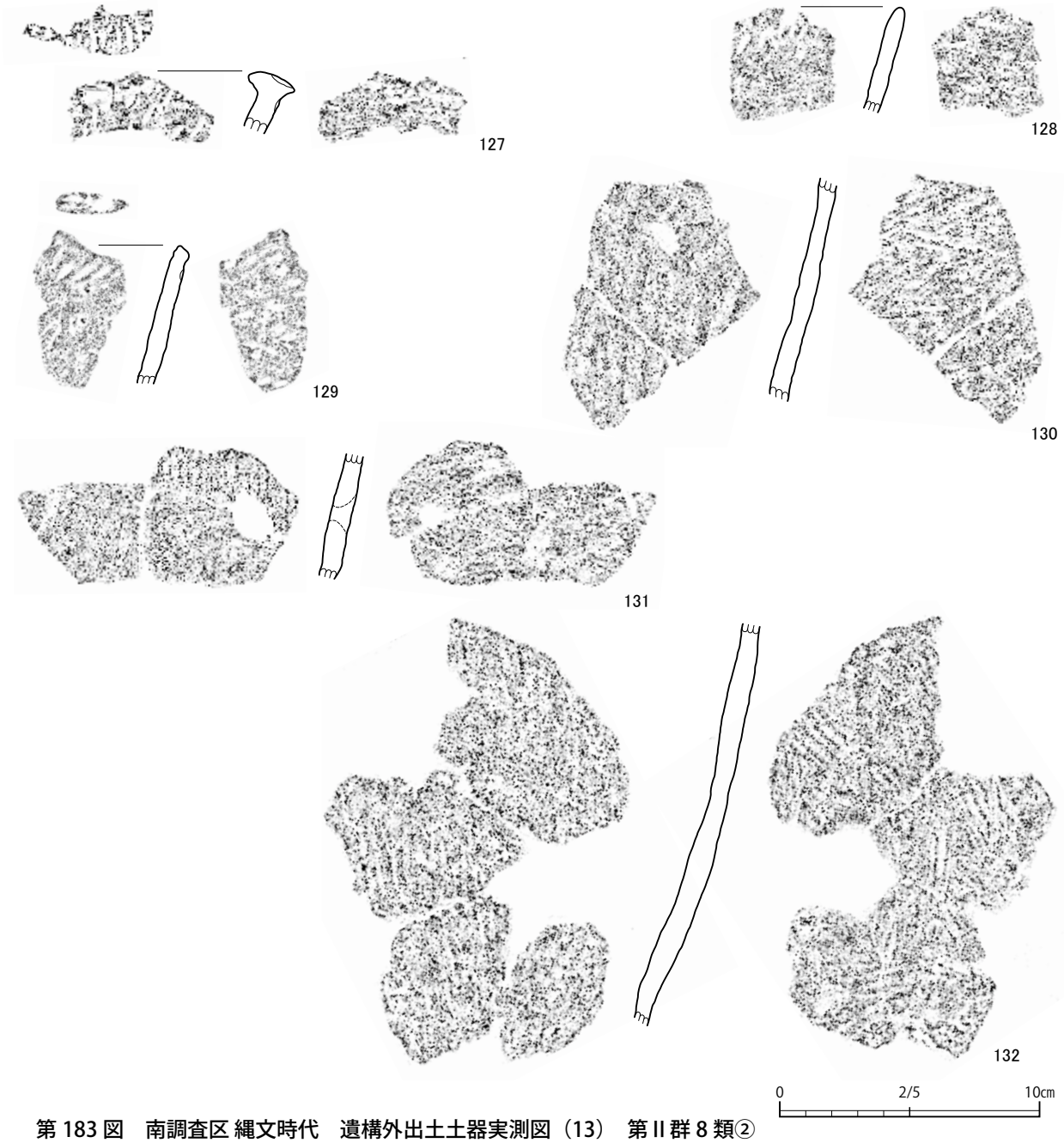
第 182 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（12）　第Ⅱ群８類①

いる。小片が大半を占めるため、器形復元は 91 と 103 のみ可能であった。91 は口縁部で第Ⅰ文様帯の箇所である。文様帯には縄文が施文され、段部には連続した刻みが加えられる。内面には横位の条痕調整が行われている。92 は口縁部で、口端は尖っている。器面には櫛状の工具を用いて曲線状に文様を描いている。93 は口縁部の一部で、口縁外面の端部には刻みを加え、器面には刺突と凹線による文様が施文されている。94 ～ 96 はやや薄手の口縁部の一部である。94 は刺突と凹線を組み合わせて文様を施文するもので、95・96 は縄文が施文されており、96 の左側には補修孔が穿かれている。97 は第Ⅱ文様帯の一部と推測され、縄文を地文として、その上に波状の凹線を施文している。98 は、文様帯の一部であるが、小片のため位置の特定は困難である。器面には縄文を地文として、その上に波状の凹線が施文されている。99・100 は胴部下半の無文部分である。101 ～ 103 は胴部下半から底部にかけてのもので、色調や胎土の特徴が類似することから、同一個体と考えられる。いずれも無文である。

第Ⅱ群６類　茅山系土器（第 181 図 104 ～ 124・PL.65・PL.66）

鵜ヶ島台式～茅山下層式にかけての茅山系土器と推測されるが、型式等の分類が困難なものを本類に一括した。

104 は口縁部の一部で、貝殻によると推測される複数の条線を縦位と斜位に施文している。器厚は 8 ㎜程度と薄手である。105 ～ 107 は器面内外面に貝殻条痕による調整のみが行われているもので、その他の文様は確認できない。いずれも段部の一部である。108 は器厚が 8㎜程度と薄手のもので、内面には条痕調整が行われている。109 は段部付近の破片と推測され、外面に条痕調整が行われている。



第 183 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（13）　第Ⅱ群 8 類②

110 は器厚が 6㎜程度と極めて薄手で、器面外面は縄文を地文として、その上から横位の併行する沈線が施文されている。別時期の土器である可能性がある。111 は先端が尖る形状の口縁部の一部である。器面の一部に縦位の条痕調整が行われている。112 は口縁形状が波状を呈するもので、器面内外面に条痕調整が行われている。113 は器厚が 15㎜程度と厚手のもので、口端の形状は内削ぎ状になるものと推測される。縦位ないし斜位の条痕調整が器面外面に行われている。114 ～ 124 は同一個体のものと推測され、116・118・121・119・124 におけるように段部を有するものである。明確な文様はなく、一部に条痕調整の痕跡が残る。

第Ⅱ群８類　粕畑式（第 182 図 125 ～第 183 図 132・PL.66・PL.67）

早期後半に東海地方を中心に分布する粕畑式を本類とした。125 と 126～132 の 2 個体分が出土した。

125 は酒杯状突起口を有する波状の口縁部から胴部にかけてのもので、器面には口縁形状に沿って

横位３条の連続刺突列(爪形文)が施文されている。器厚は 12㎜程度である。底部は確認できなかった。口縁部から胴部にかけての部分で器形復元が可能であり、いわゆる砲弾形の器形を呈し、最大径は口縁部で36㎝を測る。126～132は同一個体と推測され、器厚が６㎜～８㎜程度と125に比べて薄手である。127 ～ 129 は口縁の一部で、127 は酒杯状突起である。126・130 ～ 132 は胴部である。126 の上部には横位の連続刺突列が施文されている。

第Ⅲ群２類　早期末葉の土器（第 184 図 133 ～第 188 図 147・PL.67 ～ PL.70）

早期末葉の土器を本類とした。133 ～ 145 は条痕による調整のみが行われているもので、具体的な文様は施文されないものである。145 ～ 147 は縄文を施文する土器である。なお、133、134、135 については残存部位が多く器形の実測が可能であった。136・147 については復元実測が可能であった。

133 は、口縁部が６単位の小さい三角状の突起を有した緩やかな波状となっており、器形は砲弾形を呈する。底部は先端を欠損するものの尖底になるものと推測される。口端部に連続した刻みを加え、器面外面には口端直下に横位の条痕を施文し、その下位には縦位ないし斜位の条痕を施文している。内面にも条痕による調整が行われているが明瞭でない。最大径は口縁部で約 28㎝を測り、器高は約 39㎝である。134 は、口縁部は平口縁に小さい三角状の突起を有したもので、器形は砲弾形を呈し、底部は尖底である。口端部はナデられており、133 のような連続した刻みは施文されない。器面外面には右下に下がるように条痕による調整が行われている。内面には縦位ないし横位の条痕が残る。最大径は口縁部で約 26㎝、器高は約 34㎝である。135 は、口縁部が平口縁に近い極めて緩やかな波状口縁となるものである。最大径は口端部から１㎝ほど下位で約 28㎝、器高は底部を欠損するものの推定約 26㎝と、寸胴な深鉢状の形状を呈している。器面の内外面ともに条痕による調整が行われており、ともに口縁直下に横位、その下に縦位を基本とするものの、部分的に横位方法の条痕も残る。器厚は 15㎜程度とやや厚手である。第 187 図 136 は、口縁部が平口縁で、砲弾形を呈する土器である。胴部より下部は確認できなかった。口端部に連続した刻みを加え、口端より下には斜位ないし横位の条痕による調整を行っている。復元される最大径は口端部で約 26㎝であり、133 ～ 135 と大差はない。

137 ～ 140 は同一個体と推測される。全体的に焼成が悪い。137 は口縁部の一部で、先端が尖る形状となっており、器面外面には斜位の条痕による調整が行われている。138 は胴部の一部で、上部は口縁部のように見えるが、実際は土器が製作される際の粘土紐の接合部分である。139 は胴部下半の部位であり、右上に補修孔が穿かれている。140 は先端を欠損するものの、尖底の底部の一部である。141 ～ 144 は同一個体と推測され、器厚は 12㎜～ 15㎜程度とやや厚手のものである。143 の内面に条痕による調整が明瞭に残るが、それ以外は不明瞭である。

145 ～ 147 は器面に縄文を施文するものである。145・146 は同一個体と推測され、色調がにぶい黄橙色を呈する。胎土には多量の繊維を含んでいる。型式等の判断は困難である。147 は器面にＲＬの大粒の縄文を施文するもので、胴部下半～底部付近までが出土した。色調は橙色を呈する。

第Ⅴ群　不明土器（第 189 図 148 ～ 150・PL.67・PL.70）

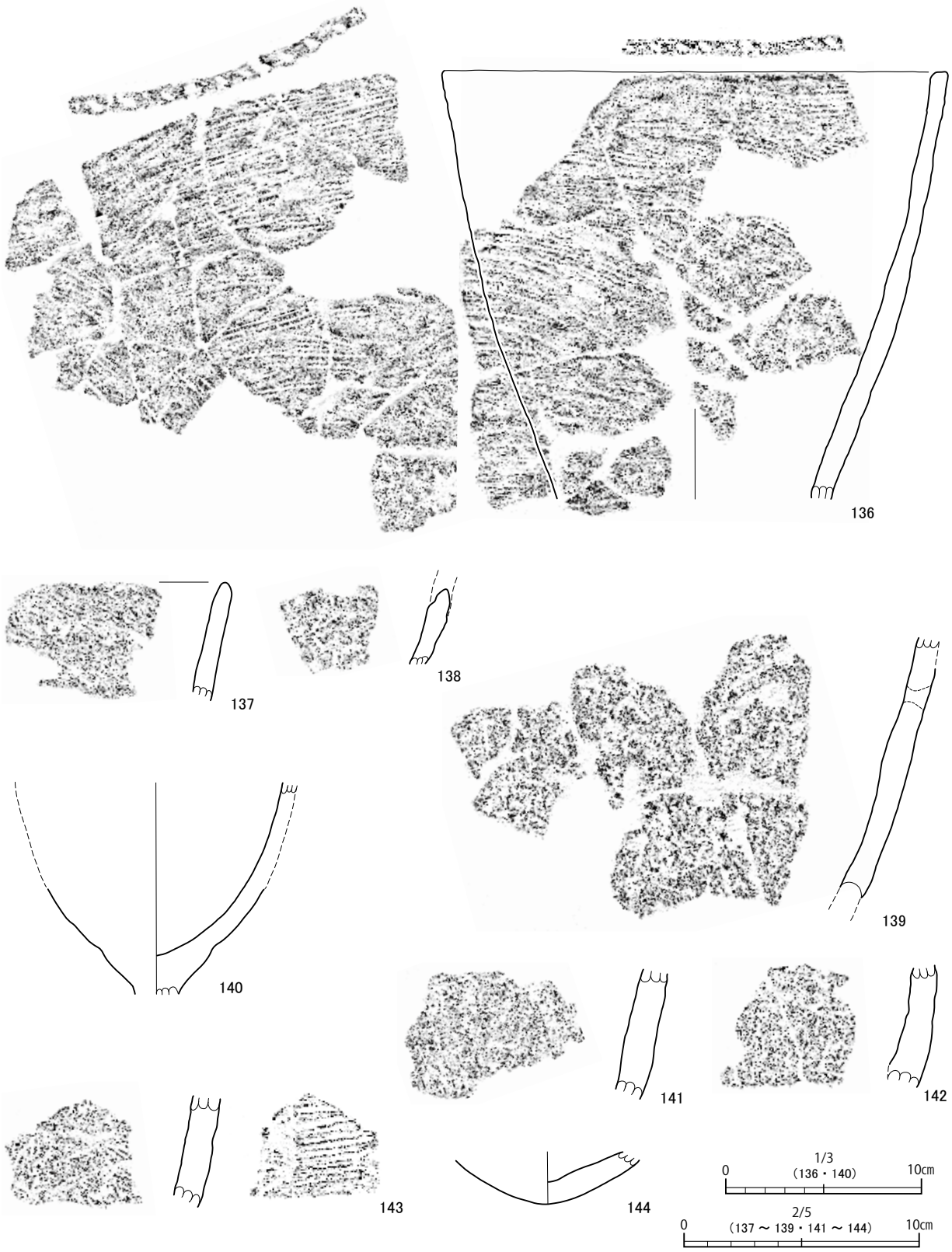
時期や型式等の判断が困難なものを本群に一括した。

148 は全体の１/２が残存しており、器形の実測が可能であった。口縁部は平口縁となっており、口端直下から胴部中央付近まで縦位ないし、斜位に削るような調整が行われている。最大径は口縁部で 24.8㎝を測り、器形は砲弾形である。胎土に繊維を多量に含んでおり、第Ⅲ群２類の条痕調整を行う土器の手法と類似することから、第Ⅲ群２類と同時期のものである可能性が高い。ただし、類例が確認できなかったため本群に含めた。149 は無文の土器で、底部に近い部位と推測される。時期等は不明である。150 は口縁部の一部で、口端部は丸みを帯びている。器面外面にはかすかに併行の微隆起線が格子目

第184図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（14）　第Ⅲ群２類①

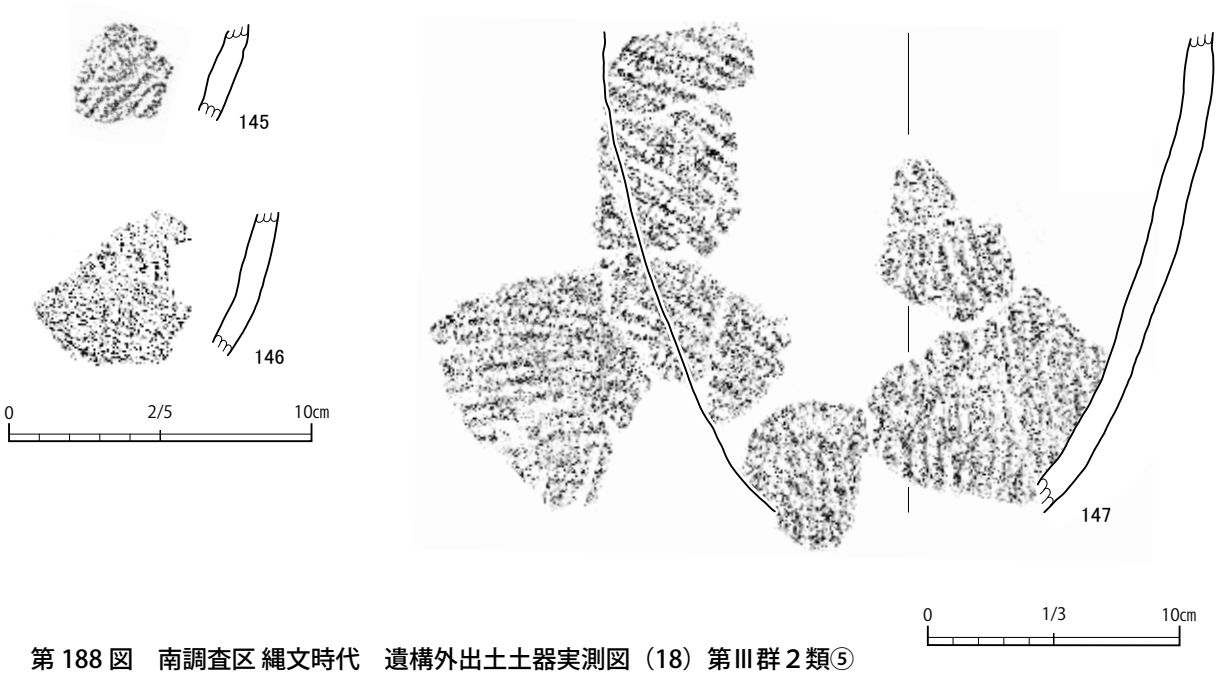
第185図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（15）　第Ⅲ群２類②

第186図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（16）　第Ⅲ群２類③



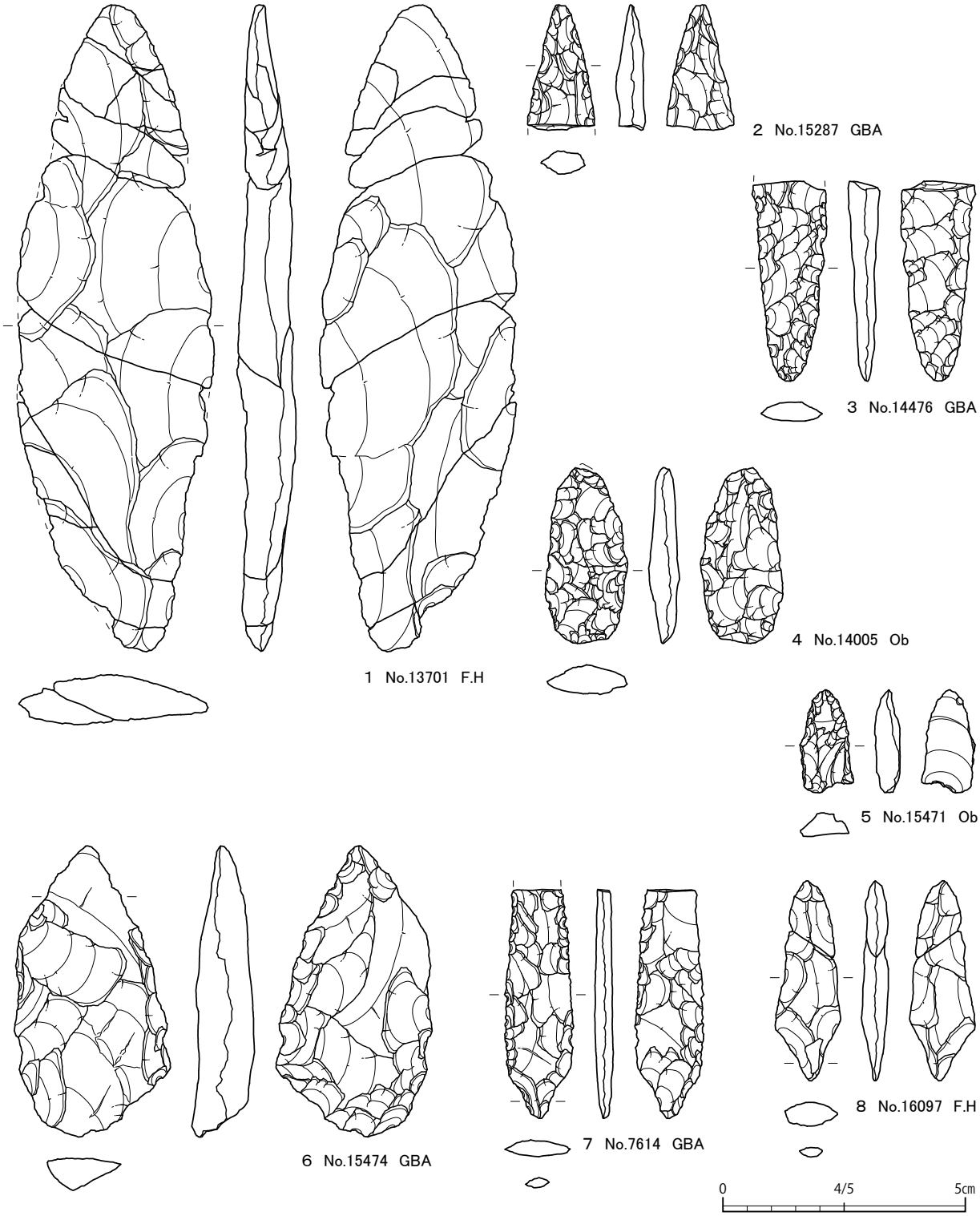
第 187 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（17）　第Ⅲ群２類④

状になっていることから、第Ⅱ群４類とした鵜ヶ島台式である可能性がある。ただし、全体的に摩滅が激しく、明確な判断は困難なため、本群に含めた。



第 188 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（18）第Ⅲ群２類⑤

第 189 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土土器実測図（19）　第Ⅴ群

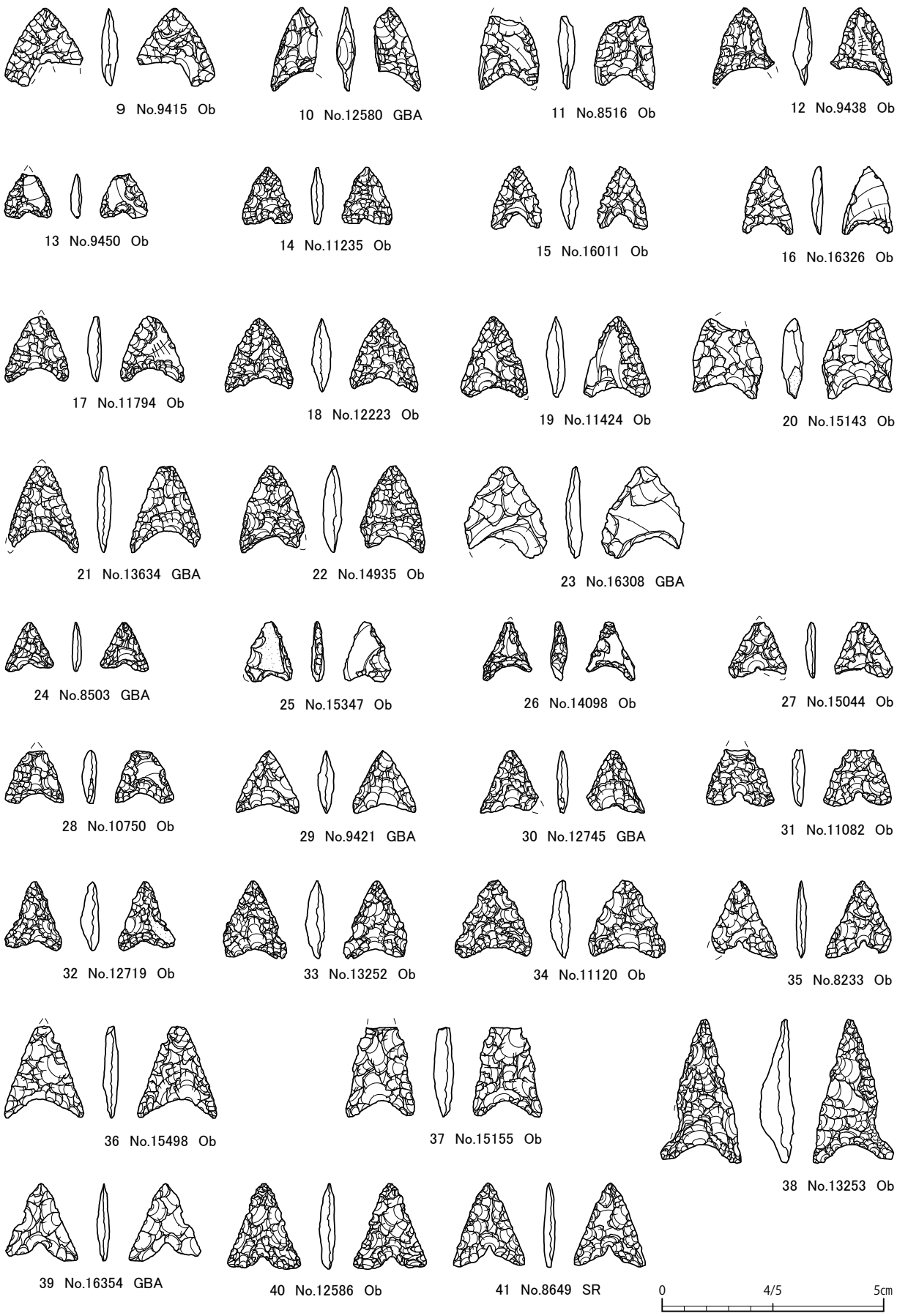


第 190 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（1）

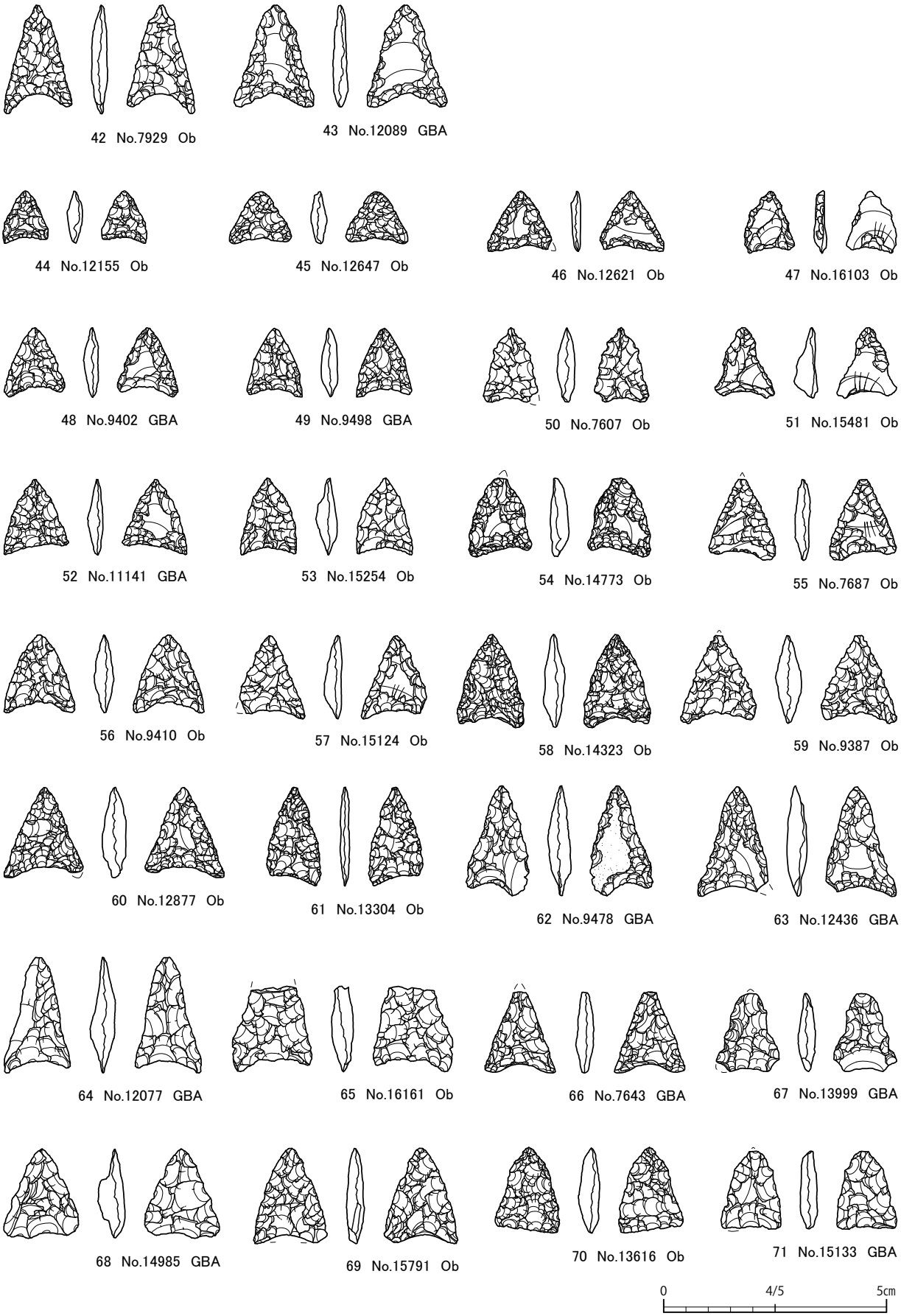
（4）遺構外出土石器

尖頭器（第 190 図 1 ～ 6）

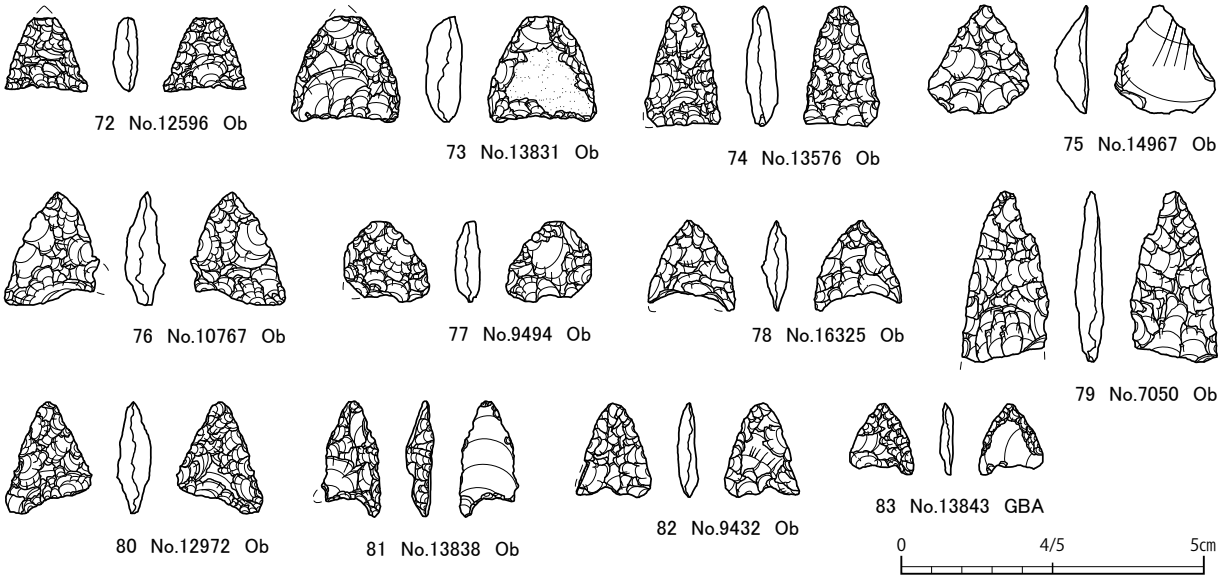
6 点が出土し、すべて図示した。これら尖頭器は、草創期に比定されるものと考えられる。1 は全体の形状が柳葉形を呈し、長さ 13.2㎝を測る大形の尖頭器である。F . ホルンフェルス製で風化が激しいことから側縁の剝落が進み、調整も不明瞭である。両面とも幅広の面的な剝離が施され、先端部には表



第 191 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（2）



第 192 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（3）



第 193 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（4）

面にわずかな調整剥離が行われている。２・３はガラス質黒色安山岩製で、半分近くを欠損するが１と同様に柳葉形を呈するものと思われる。２は粗い調整剥離により成形を行い、３は両面とも主に左側縁からの深い調整剥離で覆われている。４は全体の形状が木葉形を呈し、５・６は左右非対称である。５は裏面に一次剥離面を残し、片面に調整を行う。縦長剥片を縦位に用い、基部にあたる素材の打瘤を除去しているが、細かい調整を加えていない。６は身が厚く、右側縁は基部から直線的に立ち上がり、中央手前で屈曲して先端部に達する。粗い調整剥離のため鋸歯状となり、裏面には一次剥離面を広く残す。形状や調整の状態から未製品の可能性がある。石材は４・５が黒曜石、６がガラス質黒色安山岩である。

有舌尖頭器（第 190 図７・８）

２点が出土し、ともに図示した。上記の尖頭器と同様に、草創期に比定されるものと考えられる。

７・８は逆挿がそれほど明瞭ではないことから、茎部の造り出しは緩やかである。７はガラス質黒色安山岩製で、先端部を欠損するものの身が長く茎部は短い。両側縁は細かな調整剥離が施されて鋸歯状となり、薄手に仕上げられる。８はＦ．ホルンフェルス製で、全体的に風化していることから調整が不明瞭であるが、幅広の面的な剥離によって成形されているようである。

石鏃（第 191 図９～第 193 図 83）

110 点が出土し、75 点を図示した。南調査区で出土した石鏃はすべて無茎鏃で、基部の形状は凹基が多数を占める。基部の抉りが器長の 1/2 近くに及ぶようないわゆる長脚鏃は見られず、全体的に抉りは浅い。その他にも平基や円基などの形状が認められた。今回は、これら石鏃を基部の形状や抉りの深さに着目して、Ⅰ～Ⅴの５類に分類した。Ⅰ～Ⅲ類を凹基、Ⅳ類を平基、Ⅴ類を円基とし、これらに分類が不可能なものをⅥ類にまとめた。出土数の大半を占める凹基については側縁の形状による細分を行い、側縁が曲線的なものをａ類、直線的なものをｂ類とした。

Ⅰａ類（第 191 図９・10）基部の抉りが器長の 1/4 以上におよび、側縁が曲線的なもの。

第 181 図９は鍬形状を呈し、脚部の先端は平らに整えられている。側縁には細かな調整剥離が加えられる。10 は右脚部を欠損するものの、基部には逆Ｕ字状の大きな抉りが入り、先端部や脚部は鋭い形状となる。石材は９が黒曜石、10 がガラス質黒色安山岩である。

Ⅱａ類（第 191 図 11 ～ 23）基部の抉りが器長の 1/4 未満で、側縁が曲線的なもの。

抉りの形状は三角形状または逆Ｕ字状を呈する。第 191 図 12・20 は抉りの深さや側縁の形状から

本類に含めたが、側縁は整った曲線とならず、基部も左右非対称である。12・15・18・21 の側縁には特に細かな調整剥離が加えられ、15 は鋸歯状となっている。16・19・23 の裏面には広く一次剥離面が残る。石材は 11 ～ 20・22 が黒曜石、21・23 がガラス質黒色安山岩である。

Ⅱｂ類（第 191 図 24 ～第 192 図 43）基部の抉りが器長の 1/4 未満で、側縁が直線的なもの。

抉りの形状は三角形状または逆Ｕ字形を呈し、平面形状は正三角形状のものから縦長の二等辺三角形状を呈するものまで幅広い。脚部は尖った形状や丸味を帯びた形状が観察される。第 191 図 25 は表側に自然面、裏側に一次剥離面を広く残し、26 の裏面は一次剥離面に最低限の調整剥離を加えている。27・35・41 は非常に薄く、38 は大形で肉厚の石鏃である。34 は粗い調整剥離によって側縁が鋸歯状となり、42 は先端部の手前でわずかに括れた形状となる。石材は 24・29・30・39・43 がガラス質黒色安山岩、41 が珪質岩、その他が黒曜石である。

Ⅲ類（第 192 図 44 ～ 67）基部が浅い抉りにより緩やかな弧状となるもの。

抉りの深さが２㎜未満と非常に浅く、厚手の剥片を用いたものやガラス質黒色安山岩製の製品が目立つ。また、丁寧な調整加工を施しているものは比較的少なく、左右が非対称で全体の形状が整っていないものも多い。47・51 は裏面に残る一次剥離面を見ると、剥片の打点に近い部分を用いて製作されたことがわかる。61 は肉厚の石鏃が多いなか、細かい調整剥離により非常に薄手となっている。石材は 48・49・52・62 ～ 64・66・67 がガラス質黒色安山岩で、その他が黒曜石である。

Ⅳ類（第 192 図 68 ～第 193 図 74）基部が抉られておらず、ほぼ平坦となるもの。

側縁は曲線的なものと直線的なものが混じる。68 は全体の加工が粗く、表面の中央部に厚みを残している。70 の基部は左上がりとなり、73 は裏面に自然面を残した肉厚の石鏃である。石材は 68・71 がガラス質黒色安山岩、その他が黒曜石である。

Ⅴ類（第 193 図 75）基部が丸味を帯びて膨らむもの。

75 は裏面の一次剥離面にはほぼ加工を加えず、表面にのみ調整加工を施している。断面形は山形を呈し、表面中央部の高まりに向かって周縁から調整剥離が行われる。石材は黒曜石である。

Ⅵ類（第 193 図 76 ～ 83）欠損等により基部の形状が不明または、上記に分類できないもの。

76・77 は抉りの入り方が左右不均等で、81 は左脚部が外側へ開く。79 の右側縁上部は、深い剥離が入ることで段状となっている。石材は 83 がガラス質黒色安山岩、その他は黒曜石である。

打製石斧（第 194 図 84・85）

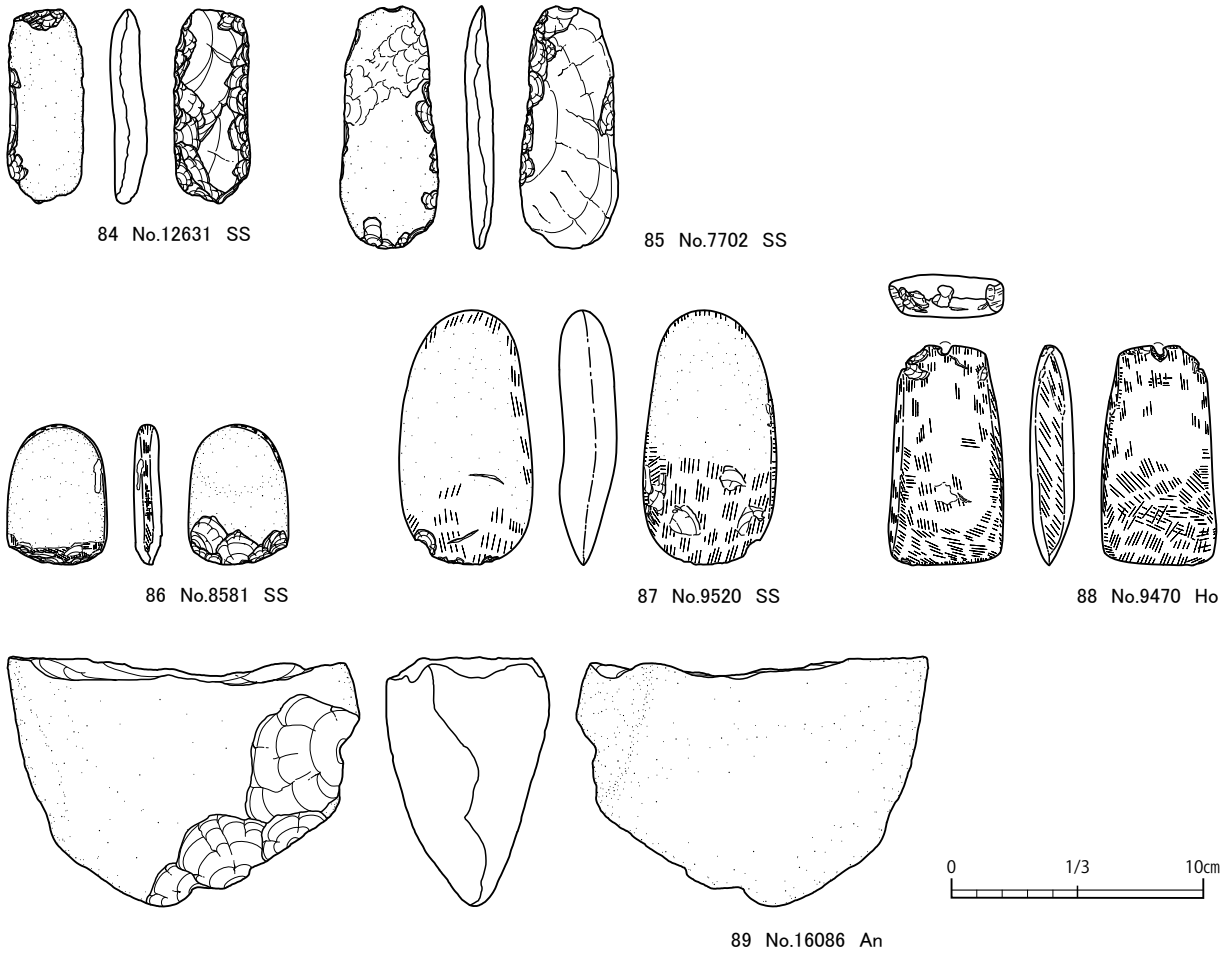
３点が出土し、２点を図示した。第 194 図 84・85 はともに砂岩製の円礫の表皮部分を素材として使用し、表面に広く自然面を残す。84 は小形で、裏面の縁辺に調整剥離を加えて器形を整えている。85 は刃部と右側縁にわずかな調整剥離を施している。

磨製石斧（第 194 図 86 ～ 88）

３点が出土し、すべて図示した。86・87 は、砂岩製の円礫の一部に研磨を加えて刃部を造り出したものである。86 は使用により刃部の破損が進んでいるが、表面の刃部に研磨の痕跡が残されており、片刃の局部磨製石斧であったと思われる。87 は裏面の刃部周辺を特に丁寧に磨いている。88 は角閃石岩を用いた、いわゆる定角式の磨製石斧である。基部先端を除く全面に研磨が行き届き、明瞭な稜線を造り出しているが、基部先端は潰れたような形状となっている。また基部先端の中央には、穿孔痕が認められた。

礫斧（第 194 図 89）

出土した 1 点を図示した。89 は、安山岩を石材とする大形の礫を割り、その一部に幅広の粗い剥離を施して刃部としている。



第 194 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（5）

削器（第 195 図 90・91）

２点が出土し、ともに図示した。90 は縦長剥片の両側縁に刃部が作成されており、上部には素材の打面と打瘤が残る。91 は幅の広い縦長剥片の右側面にやや急斜度の剥離を施して刃部を作成する。石材は、90 がガラス質黒色安山岩、91 が珪質頁岩である。

掻器（第 195 図 92・93）

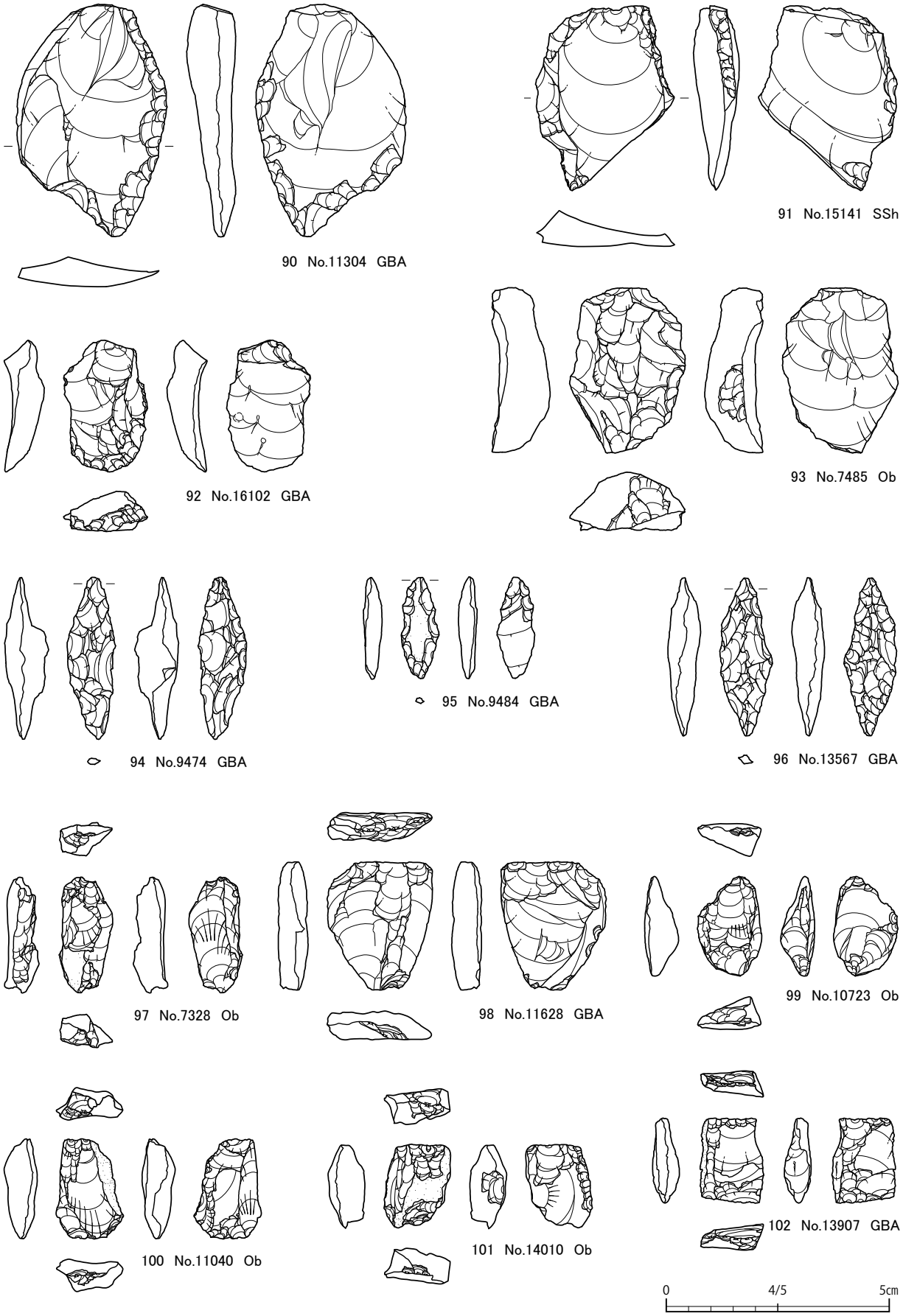
３点が出土し、２点を図示した。92 は急斜度の調整剥離によって素材の末端から側縁にかけて刃部を作出したもので、刃部は弧状を呈する。93 は素材の末端から側縁にかけて急斜度の細かい調整剥離を施し、刃部を作出する。石材は 92 がガラス質黒色安山岩、93 が黒曜石である。

石錐（第 195 図 94 ～ 96）

５点が出土し、３点を図示した。素材の一端に先端の尖った錐状の刃部を造り出したものであるが、３点とも調整は粗く、刃部の突出は明瞭ではない。断面形は 95 が三角形に近く、94・96 は四角形に近い。石材は、すべてガラス質黒色安山岩である。

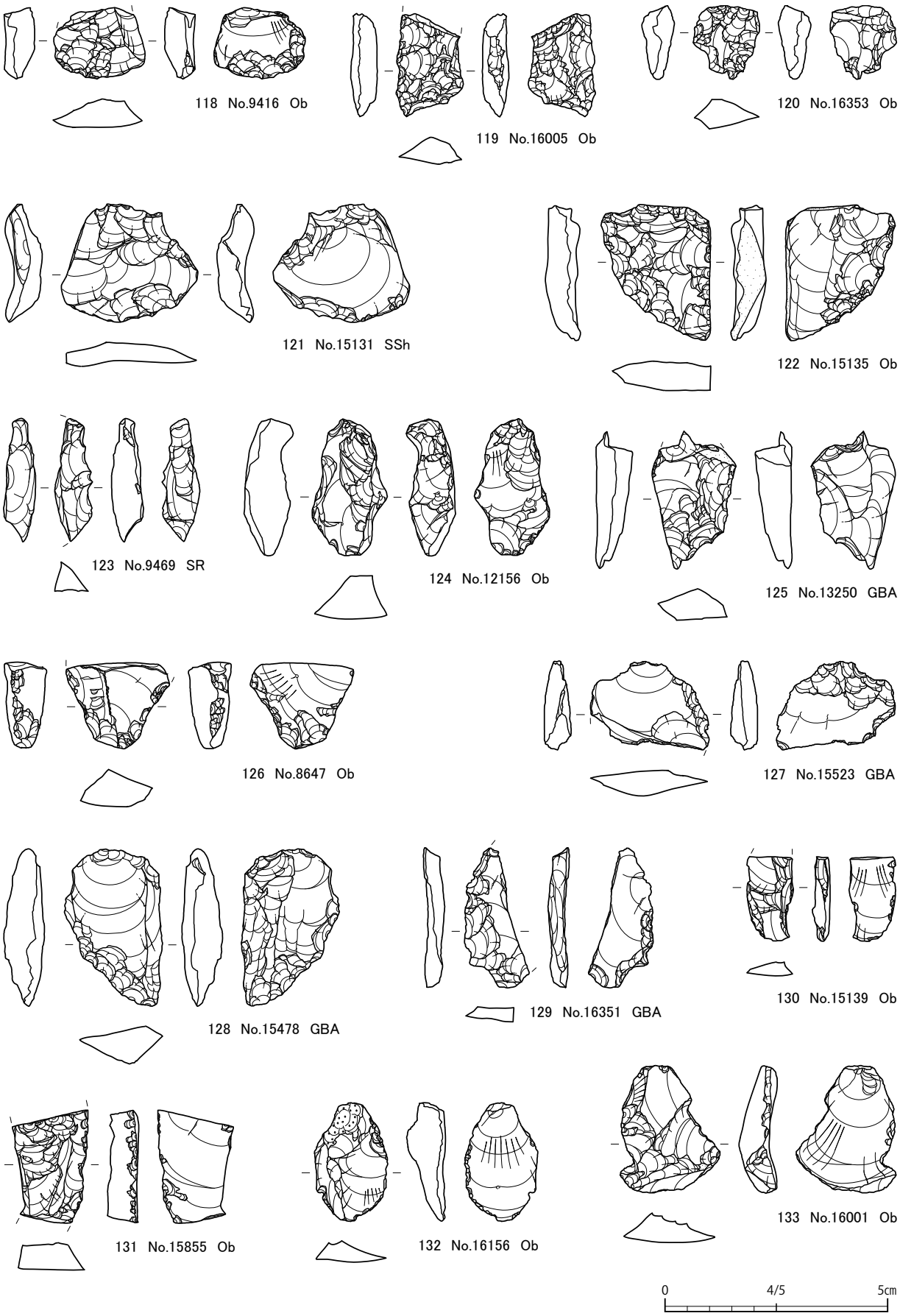
楔形石器（第 195 図 97 ～第 196 図 117）

22 点が出土し、21 点を図示した。上下端に打面状の平坦面を持たず、打面部は線状に潰れている。線状の打面は使用による剥離が目立つものの、半数以上で上下に対向する剥離が認められ、102・110・114 では階段状剥離が観察される。101 は横長剥片を横位に用い、素材の下端にも細かい調整剥離を加えている。石材は 111 が珪質岩、98・102・112・116 がガラス質黒色安山岩、その他が黒曜石である。

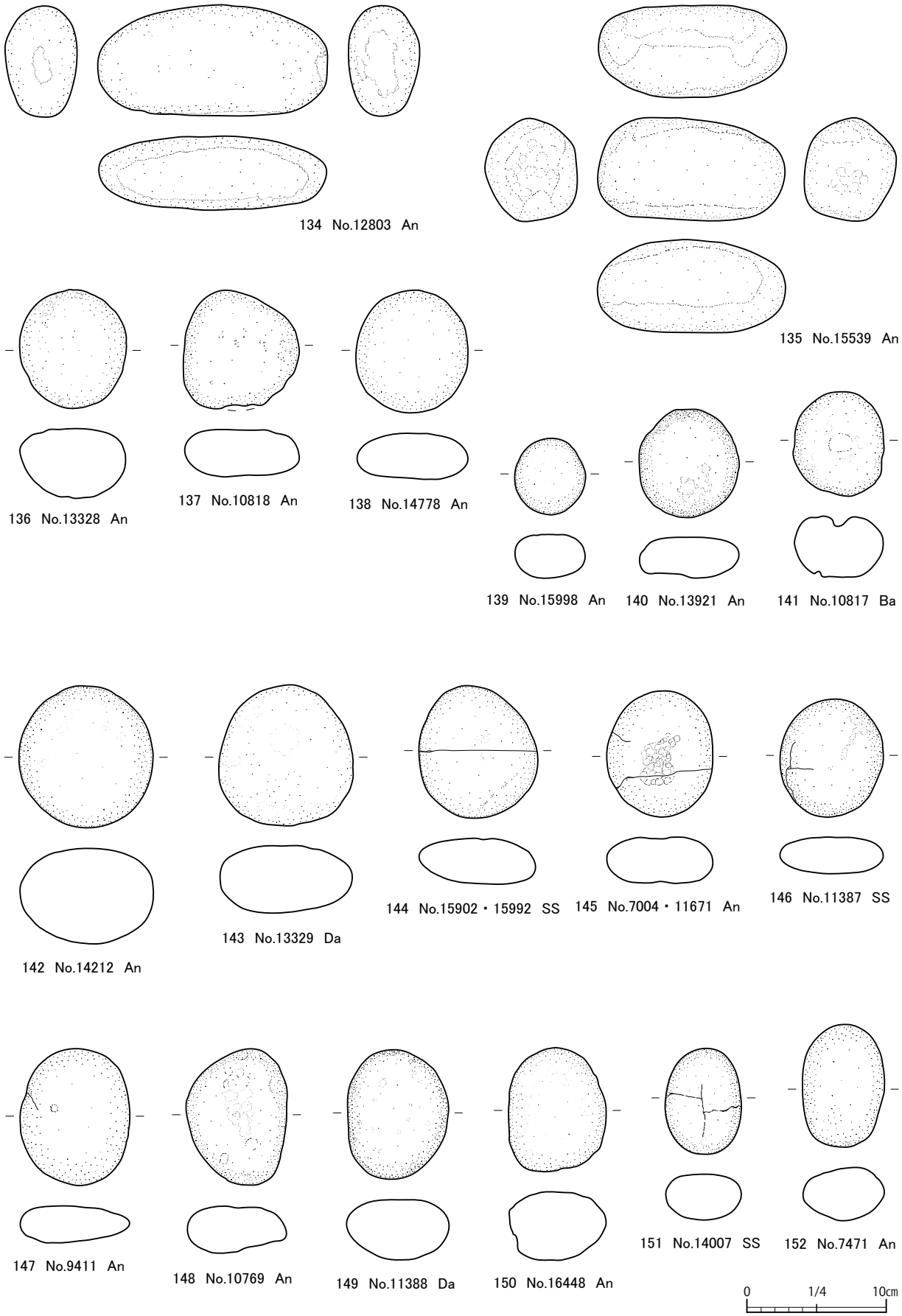


第 195 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（6）

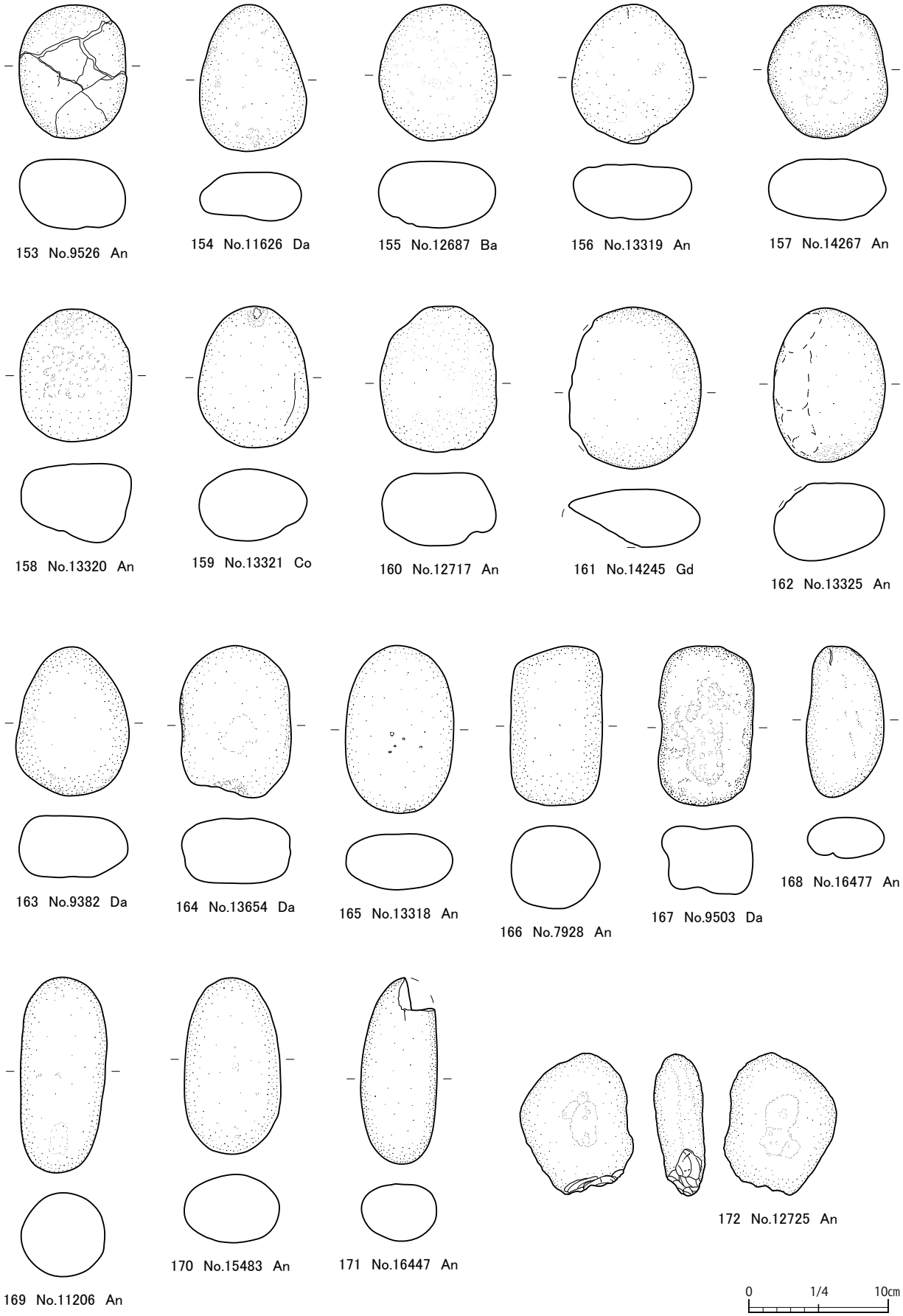
第 196 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（7）



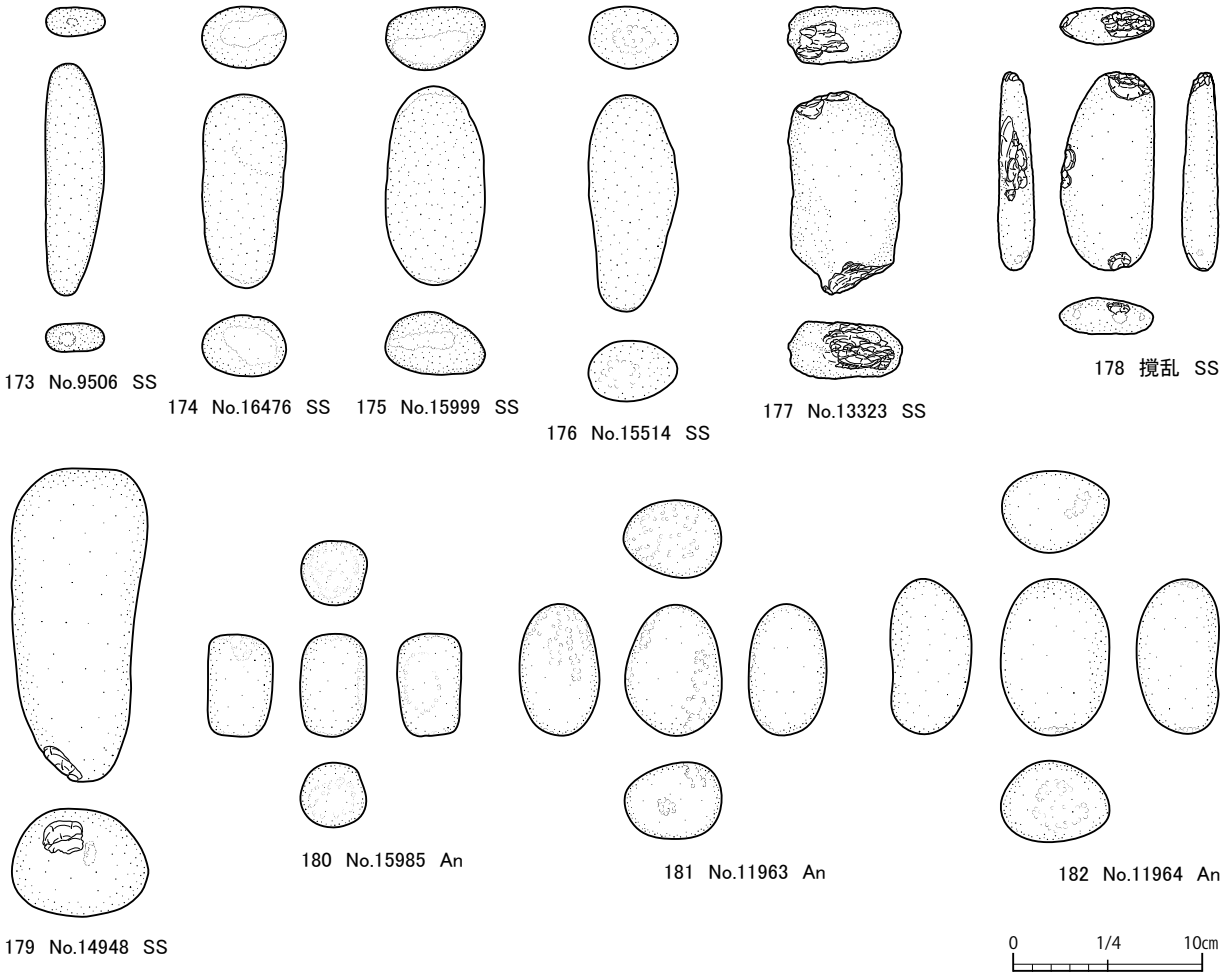
第 197 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（8）



第 198 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（9）



第 199 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（10）



第 200 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（11）

加工痕のある剥片（第 197 図 118 ～ 129）

21 点が出土し、12 点を図示した。素材の一部に加工痕が認められるが、目的が判断できないものを一括した。裏面に一次剥離面を広く残すものがほとんどであるが、119・120 は表裏全面に渡って調整が加えられている。118・119・120・122・124・126 は、上下端や側縁に細かい調整剥離が施されており、特に 126 では急斜度の剥離が両側縁に見られる。石材は、125・127 ～ 129 がガラス質黒色安山岩、121 が珪質頁岩、123 が珪質岩、その他が黒曜石である。

使用痕のある剥片（第 197 図 130 ～ 133）

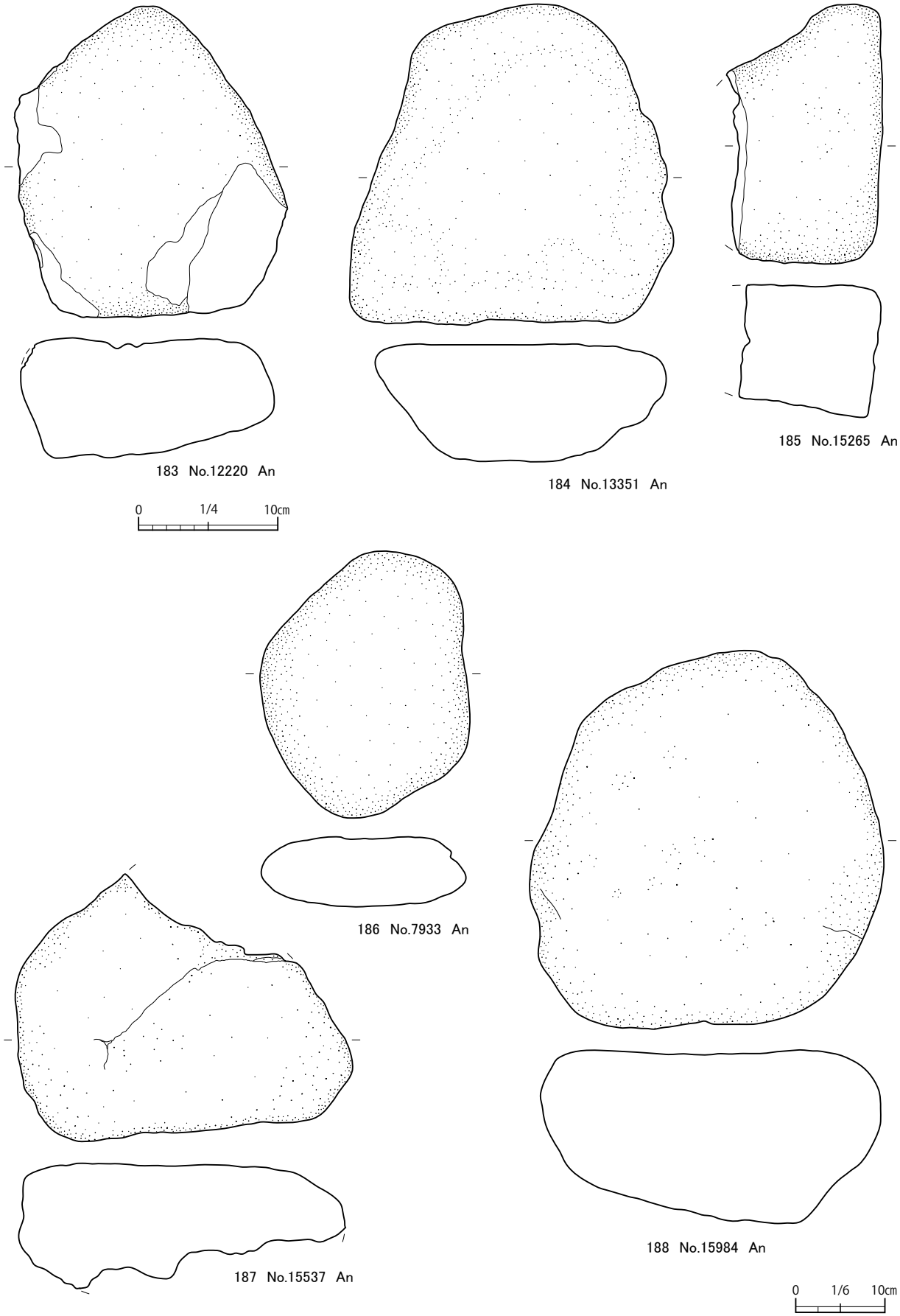
12 点が出土し、４点を図示した。剥片の縁辺に、調整剥離より微細な剥離が認められるものである。130 は両側縁、131 は右側縁、132 は下端から右側縁に使用痕と思われる微細な剥離が観察される。131 は上端と下端が欠損している。133 は左側縁を中心とした微細な剥離のほかに、階段状剥離が見られる。石材はすべて黒曜石である。

磨石（第 198 図 134 ～第 199 図 171）

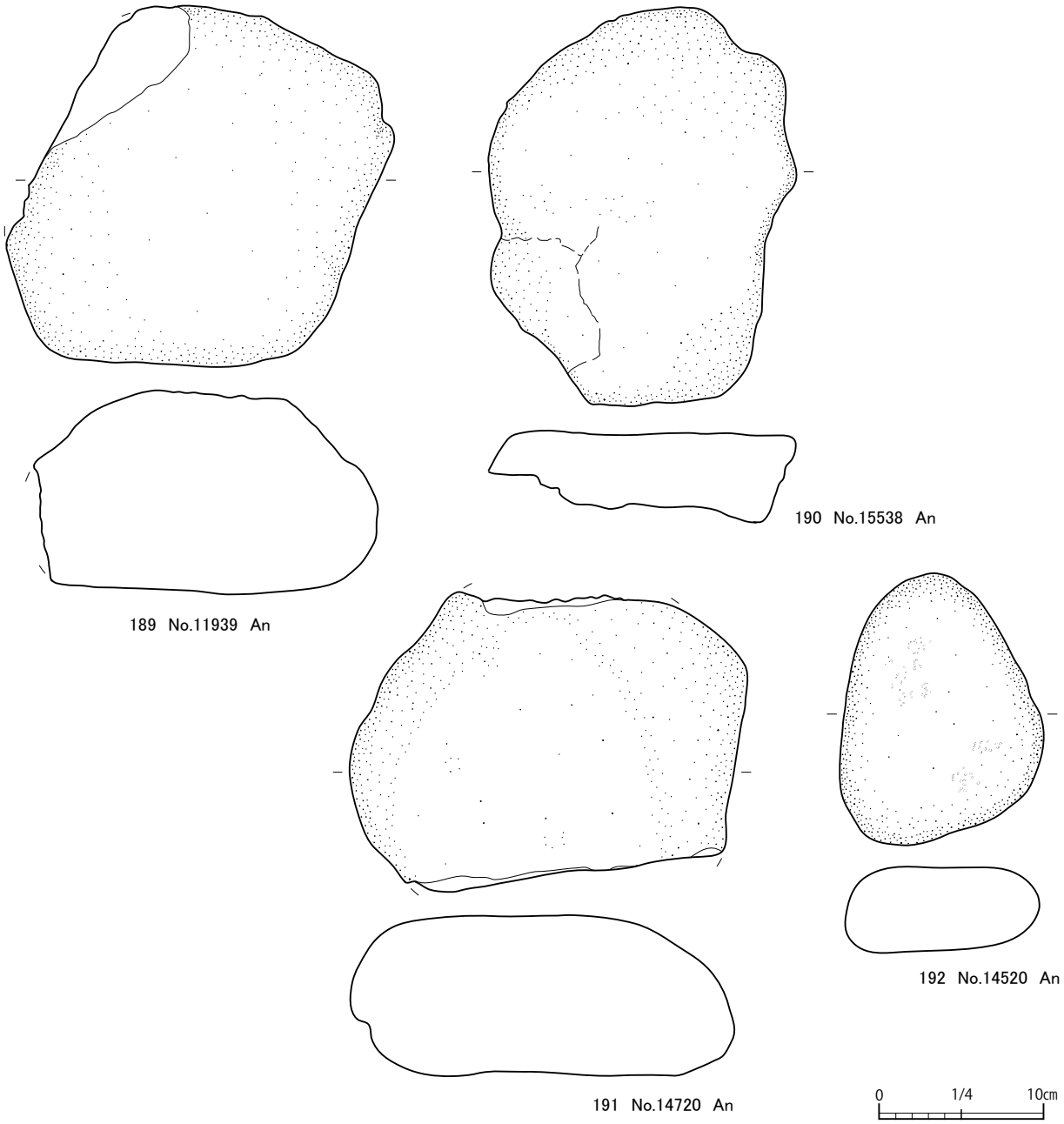
83 点が出土し、完形もしくは完形に近い 38 点を図示した。一般的な円形や楕円形を呈するものが大半を占めるが、長軸に平行する細長い帯状の磨面を持ったいわゆる「特殊磨石」も２点確認された。

Ⅰ類（第 198 図 134・135）いわゆる「特殊磨石」と呼ばれるもの。

磨面を１面とする 134 と、２面とする 135 の２点が出土した。ともに安山岩を石材とし、左右側面には敲打痕が認められる。



第 201 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（12）

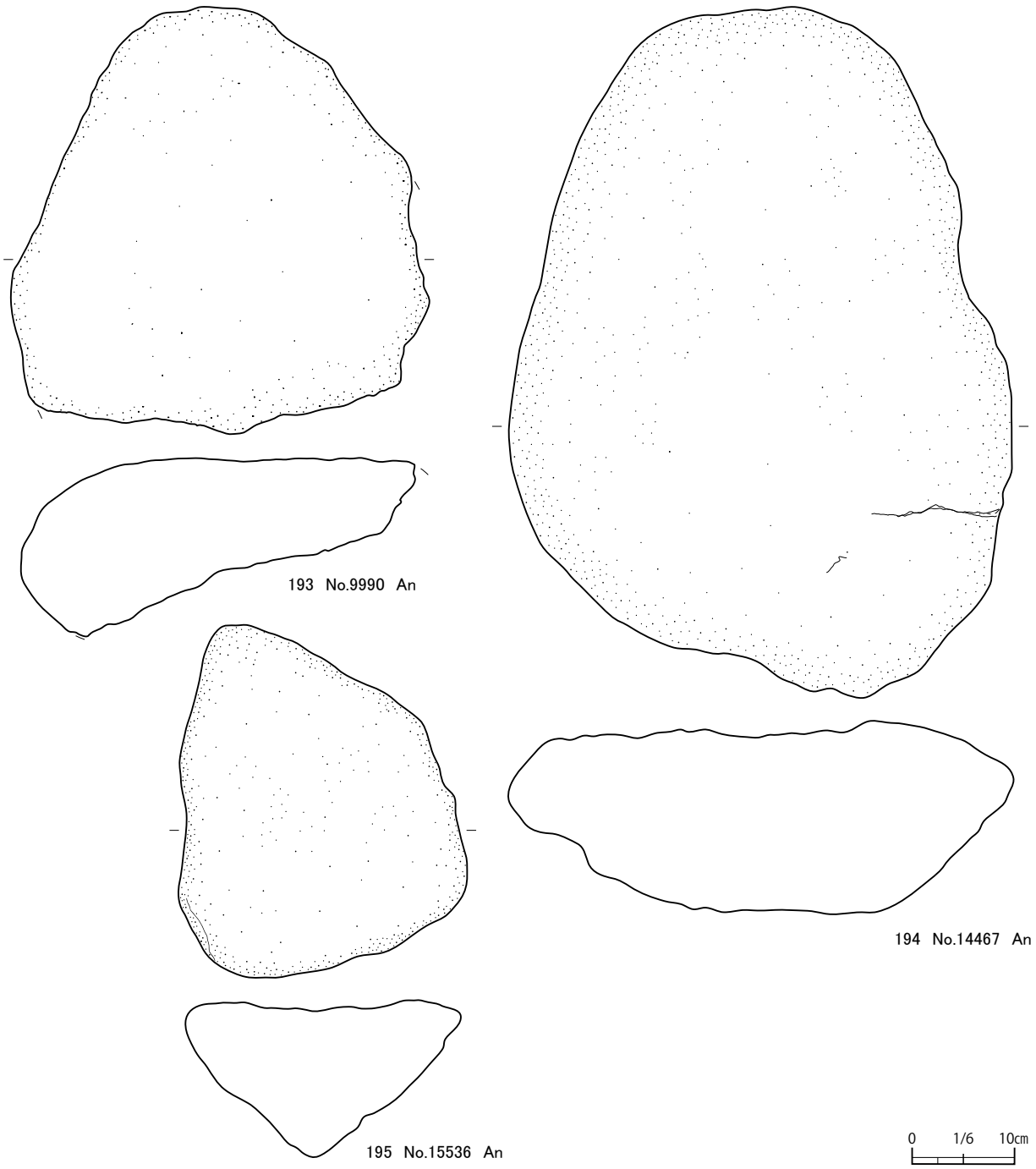


第 202 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（13）

Ⅱ類（第 198 図 136 ～第 199 図 171）平面形状が円形または楕円形を示すもの。

136 ～ 143 は平面形状が円形に近いもので、扁平なものと厚みのあるものが存在する。141 は表裏両面に明瞭な凹みが観察された。石材は 141 が玄武岩、143 がデイサイト、その他はすべて安山岩である。

144 ～ 171 は平面形状が楕円形に近いもので、比較的小形のものは偏平だが、それ以外は厚みのあるものが多い。145 は中央付近に明瞭な敲打痕が認められ、162 の左側には敲打時の衝撃によるものと思われる剝落が確認できる。166・167 は敲打もしくは磨り潰しの影響で平坦な面が造り出され、平面形が長方形に近い形状となっている。また 167 には、敲打による凹みが多数見られる。168 ～ 171 は細長い棒状を呈する。石材は安山岩が最も多く、その他に砂岩やデイサイト、玄武岩、礫岩、花崗閃緑岩が用いられている。



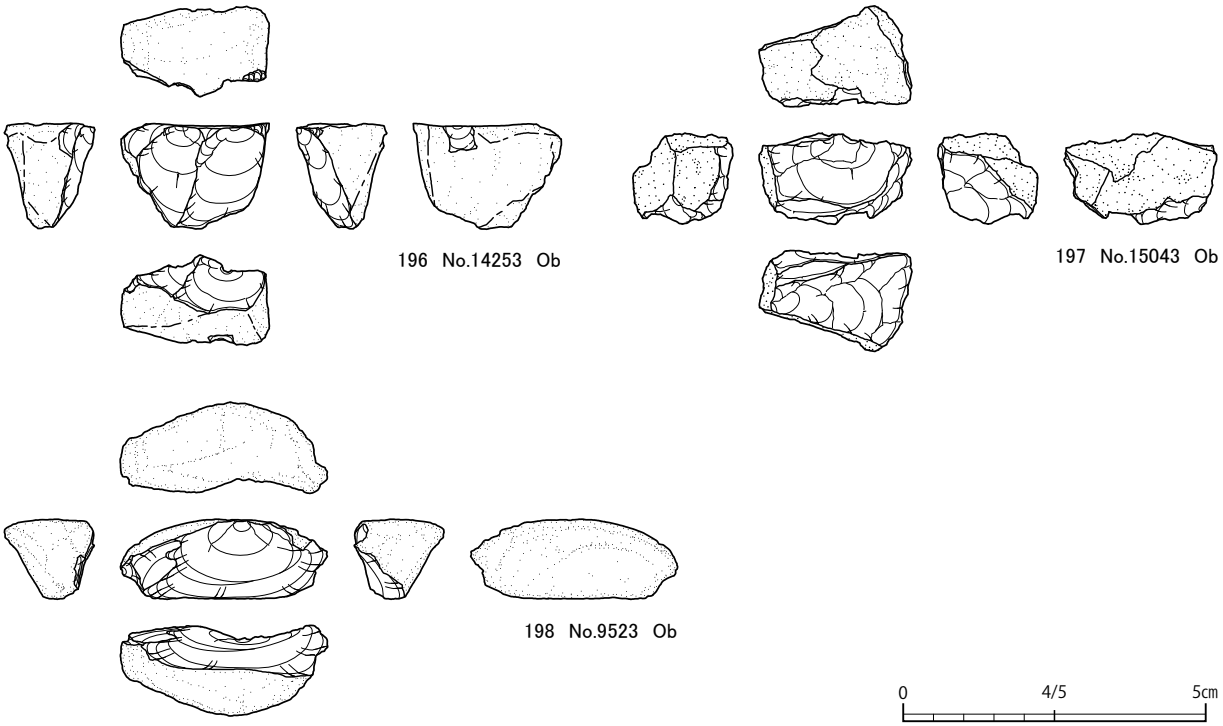
第 203 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（14）

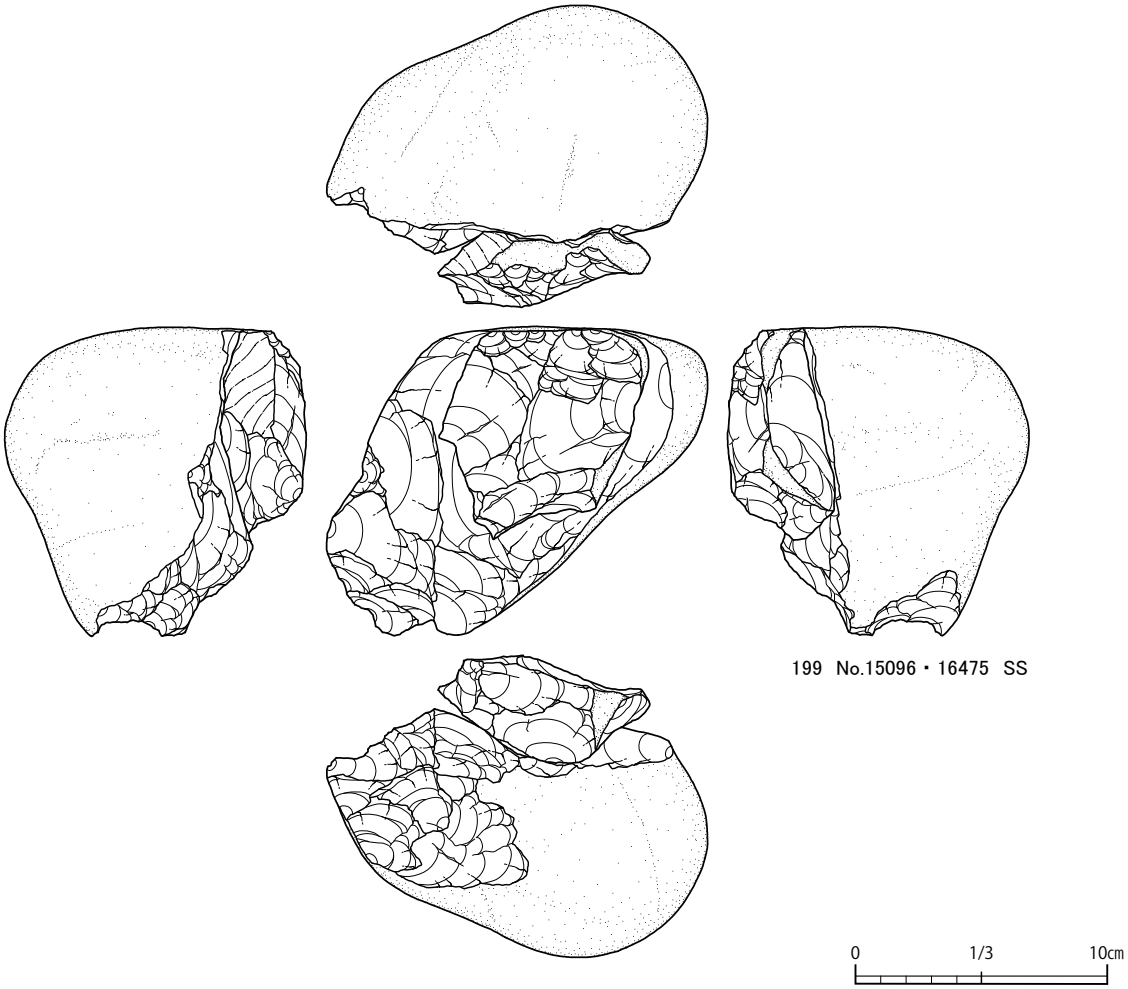
凹石（第 199 図 172）

出土した 1 点を図示した。172 は安山岩を石材とし、表裏両面の中央に凹みが認められることから凹石とした。ただし、磨痕や敲打により打ち欠いたと思われる部分が観察されることから、凹石としての用途だけでなく、様々な作業に使用されたものと思われる。

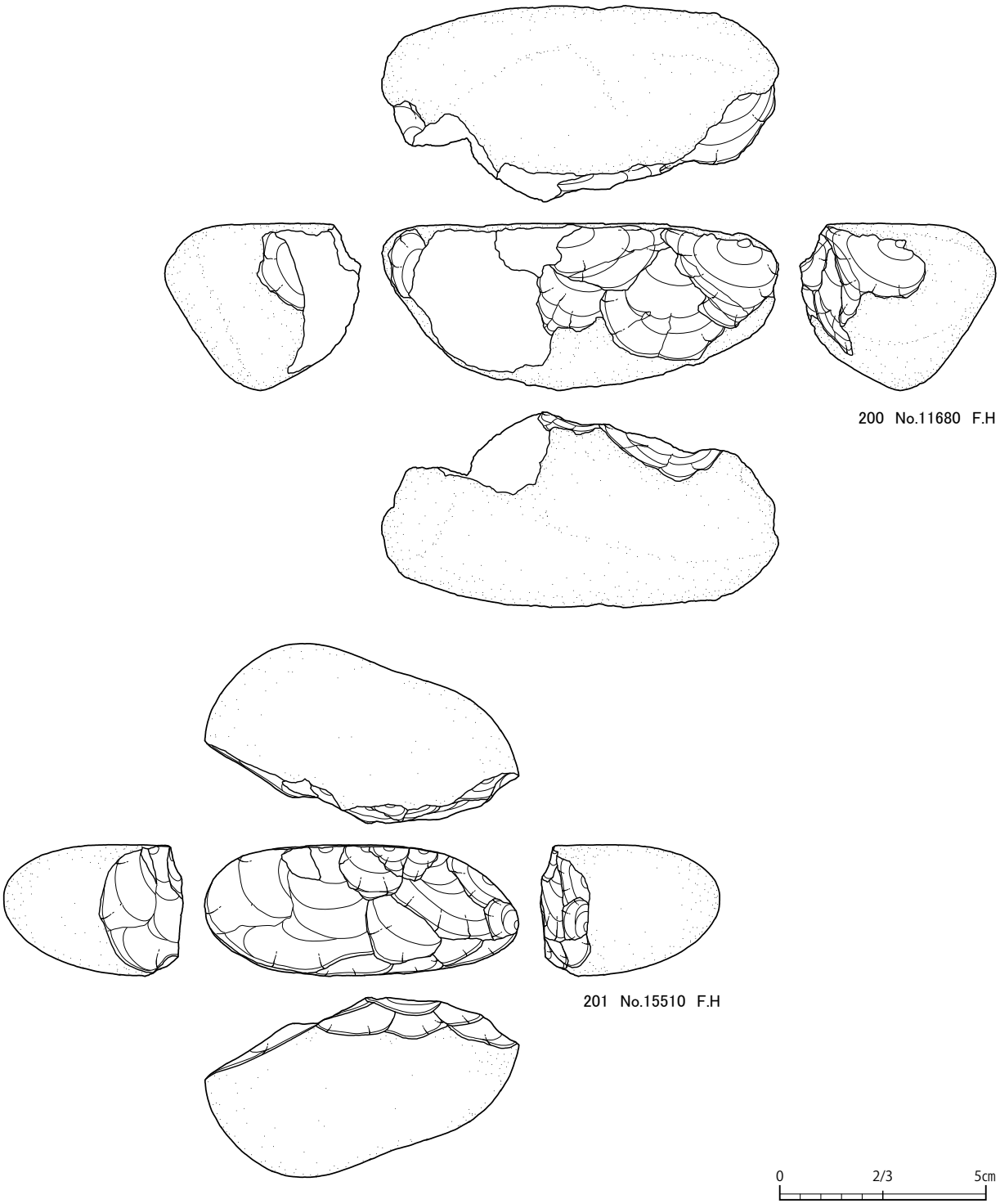
ハンマー（第 200 図 173 ～ 176）

４点が出土し、すべて図示した。すべて砂岩製で棒状を呈し、上下面に敲打痕と思われる潰れが確認できる。





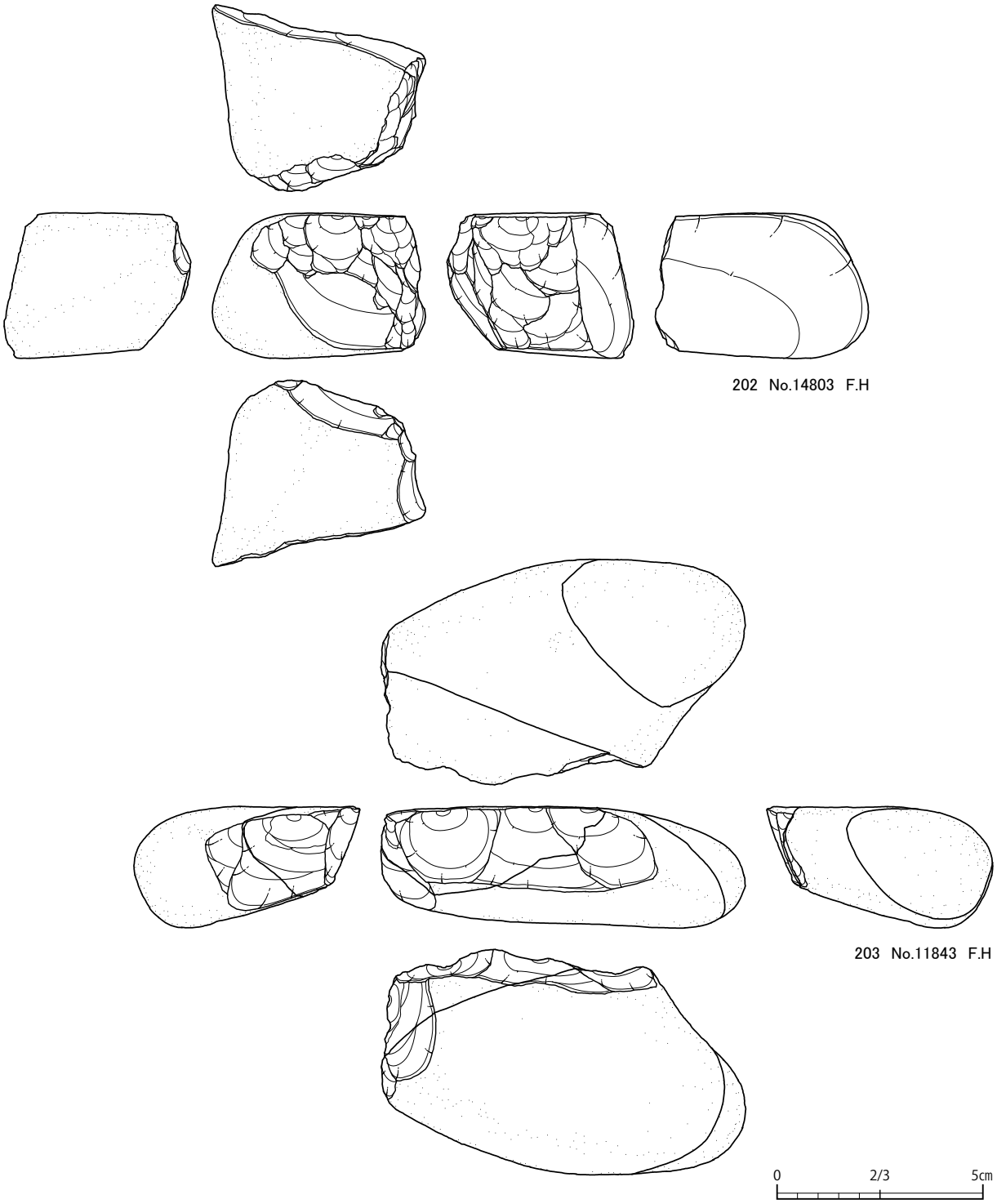
第 204 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（15）



第 205 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（16）

敲石（第 200 図 177 ～ 182）

９点が出土し、６点を図示した。砂岩製の 177 ～ 179 は、上下面または側面に敲打による剝落が認められ、特に 177 は繰り返し打撃が加えられた様子がうかがえる。180 ～ 182 は小形で楕円形状を呈する安山岩の上下左右面に、敲打による潰れが認められる。180 は上下に平坦な敲打面が形成された、いわゆる「トチタタキ石」である。



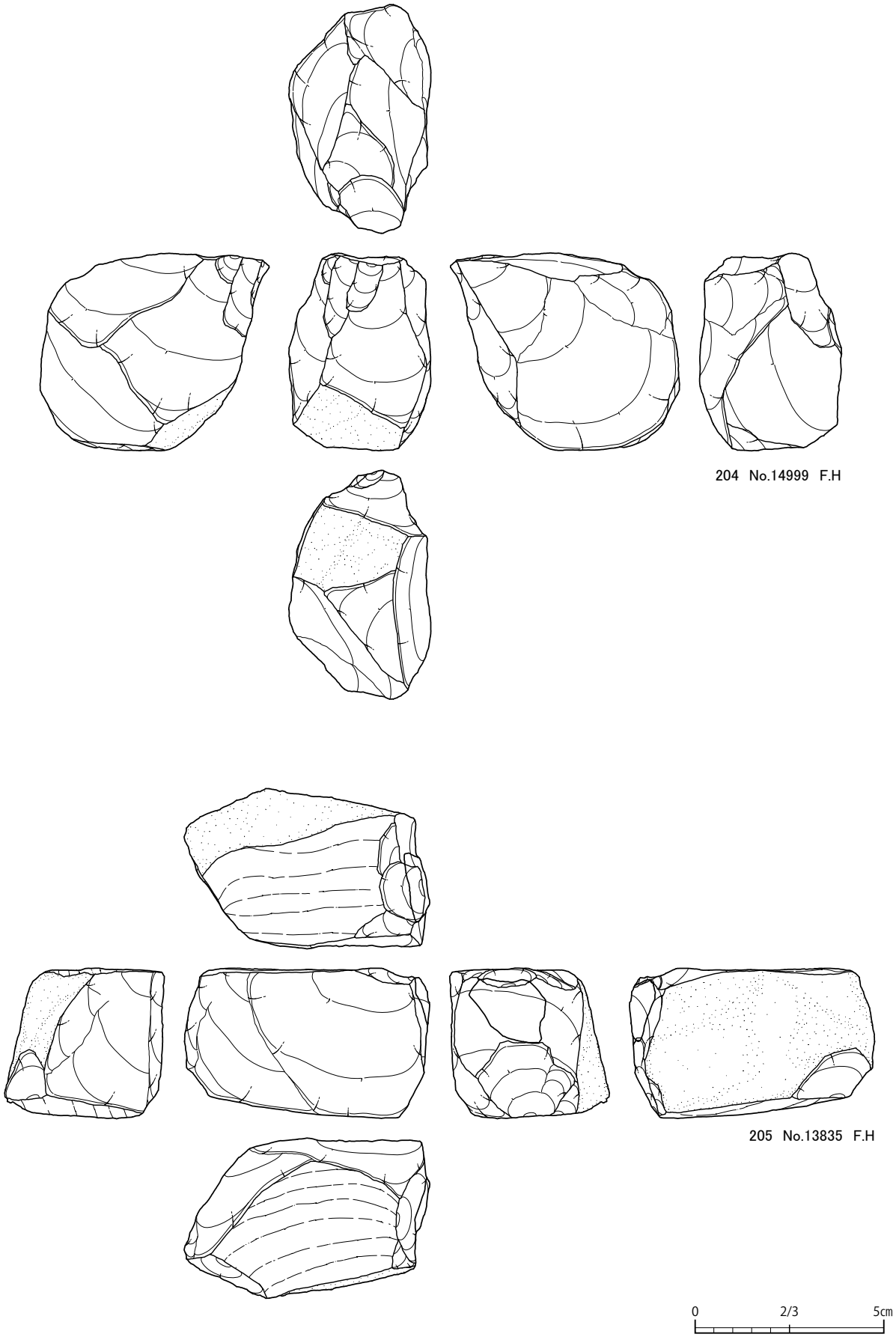
第 206 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（17）

石皿（第 201 図 183 ～ 188）

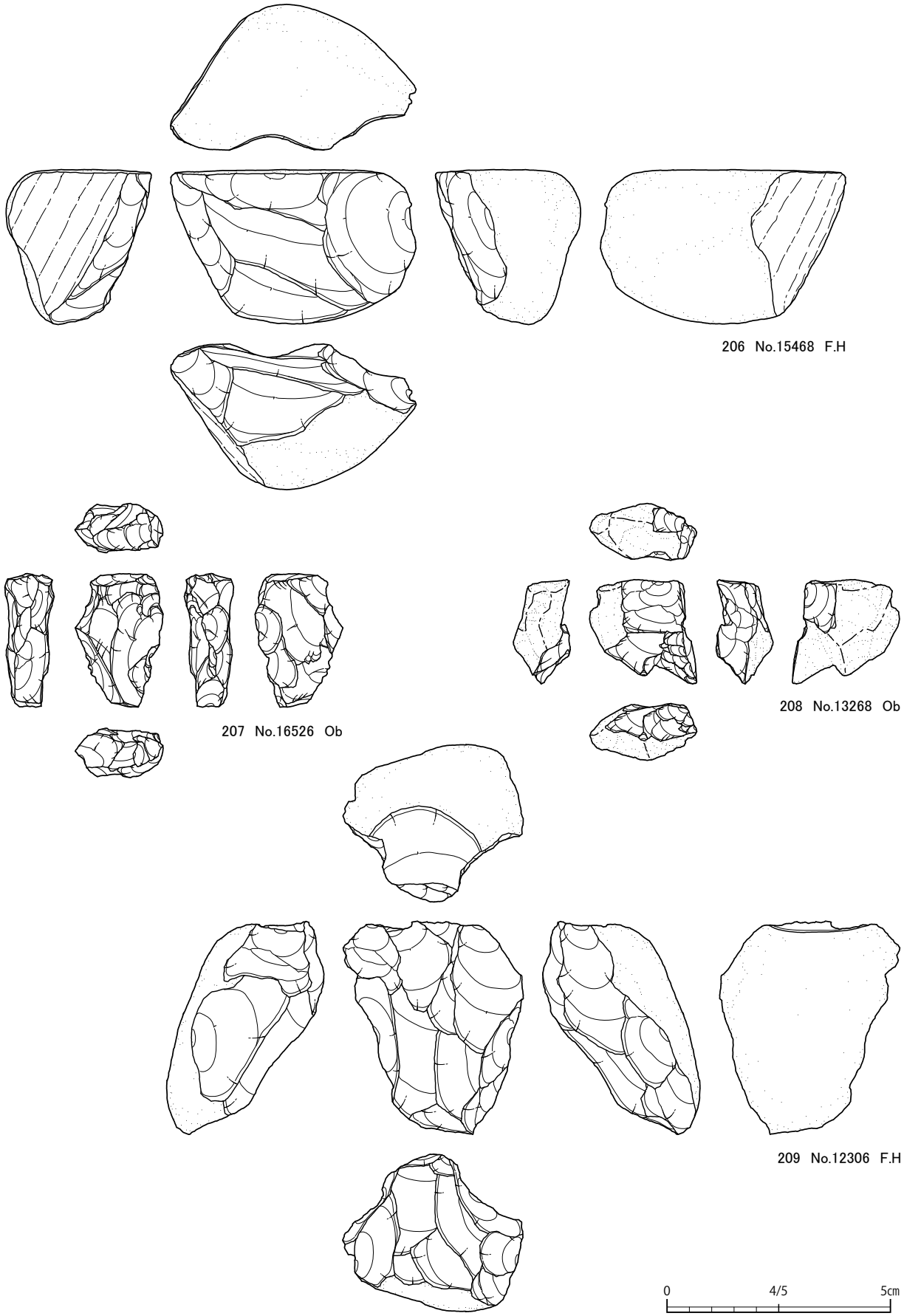
11 点が出土し、6 点を図示した。すべて安山岩を石材とし、扁平な礫を使用したものが多い。いずれも表面のほぼ全体に磨面が形成されているが、研磨が大きく進んでいるものは見られない。183 は表面に敲打痕が観察され、188 には被熱の痕跡が認められる。

台石（第 202 図 189 ～第 203 図 195）

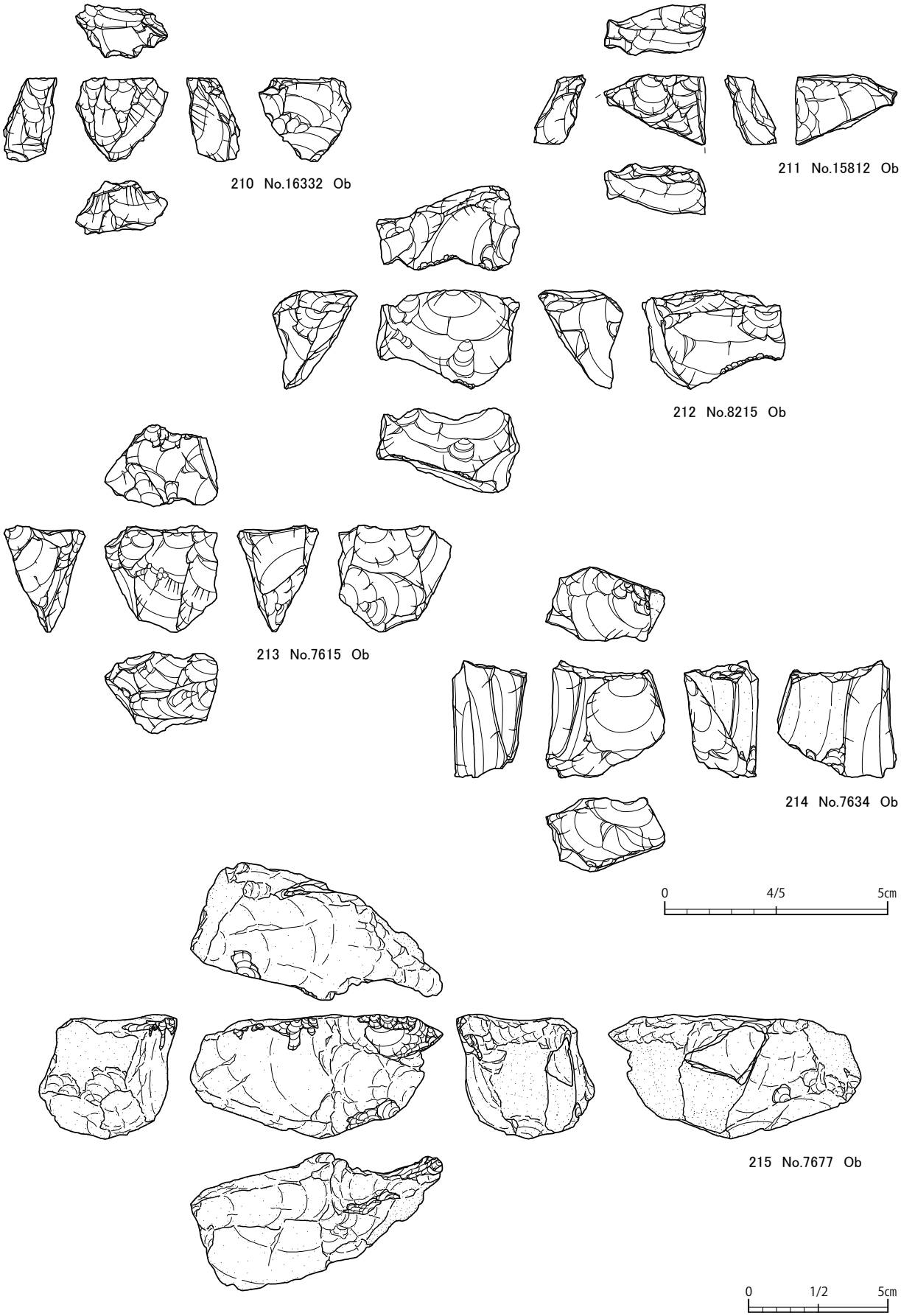
13 点が出土し、7 点を図示した。自然の凹凸に混じって、使用の痕跡と思われるわずかな敲打痕や



第 207 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（18）



第 208 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（19）



第 209 図　南調査区 縄文時代　遺構外出土石器実測図（20）

磨痕が認められ、すべて安山岩を石材とする。192 は被熱の痕跡が見られる円礫をそのまま利用しており、194 は長さ 63.6㎝の大形礫を使用している。

石核（第 204 図 196 ～第 209 図 214）

23 点が出土し、19 点を図示した。これらは、剥片剥離方向の違いや状態から 2 類に分類される。

Ⅰ類（第 204 図 196 ～第 207 図 205）単設の打面を有するもの。

本類には 10 点が含まれる。石核調整を除く剥片剥離方向が同一の方向に限られるもので、打面の種類により自然面を打面とするものと、複剥離面を打面とするもの、節理面を打面とするものに細分できる。割合としては、自然面を打面とするものが圧倒的に多く、これらは正面を主体に剥片剥離作業面を設定している。剥離作業面の剥離痕を観察すると、幅広の剥片が作出されていたものと推測される。

196 ～ 203 は上面の自然面を打面とし、そのほとんどは正面のみで剥片剥離作業を行っているが、202 は右側面、203 は左側面にも剥離作業面が認められる。196・197 は角礫、198 は板状の亜角礫、199 ～ 203 は円礫を素材とし、幅広の剥片が作出されたものと考えられる。第 207 図 204 は円礫を素材に用い、上面の複剥離面を打面として正面・裏面・左右側面で剥片剥離作業を行う。一部に自然面を残し、幅広の剥片を作出する。205 は円礫を素材に用い、上面の節理面を打面として正面のみで剥片剥離作業を行う。幅広の剥片が作出されており、下面も節理面となっている。石材は、196 ～ 198 が黒曜石、199 が砂岩、200 ～ 205 がＦ．ホルンフェルスである。

Ⅱ類（第 208 図 206 ～第 209 図 214）複数の打面を有し、打面転移が行われているもの。

本類には 9 点が含まれる。剥片剥離工程において、90 度の打面転移技術が用いられているもので、打面の種類は自然面を打面とするもの、単剥離面および剥片剥離作業面や自然面を打面とするもの、複剥離面を打面とするもの、剥片剥離作業面を打面とするものが認められた。剥片剥離作業面は正面に加え、裏面や左右側面にも設けられる。剥離作業面の剥離痕を観察すると、幅広の剥片が作出されていたものと推測される。

206 は上面と右側面の自然面を打面として、正面で剥片剥離作業を行い、左側面は節理面となっている。208 ～ 210 は上面の単剥離面を打面とし、さらに 209 は左右側面の自然面、210 は剥離作業面を打面とする。210 は正面と裏面、208 と 209 は正面のみに剥離作業面を設定している。211 は上面の複剥離面を打面とし、正面や裏面で剥離作業が行われる。212 ～ 214 は上面の剥片剥離作業面を打面とする。さらに、212・213 は別の作業面、214 は右側面の自然面を打面とし、212 は 90 度の打面転移を繰り返す様子が看取される。石材は、207・208・210 ～ 214 は黒曜石、206・209 はＦ．ホルンフェルスである。

原石（第 209 図 215）

７点が出土し、１点を図示した。215 は黒曜石製の搬入石材である。（北）

第 88 表　南調査区 縄文時代　土器観察表（1）

図版№	遺物№	出土地点	層位	分類			時期	土器型式	器種	残存部位	胎土	色調	備考
				群	類	種							
168-1	10037	SG9	FB	II	1		早期後半	子母口式・判ノ木山西式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（10YR3/3） 内面：黒褐色（10YR3/2）	
171-1	10757	009-006	表採	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明褐色（7.5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/6）	
171-2	8279・8598 9276	011-003 011-005	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
171-3	12094・12636	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗赤褐色（2.5YR3/3） 内面：暗赤褐色（5YR3/3）	
171-4	13913	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
171-5				I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（2.5YR5/6） 内面：赤褐色（5YR4/6）	注記 不明
171-6	12655・12656 12674	009-003	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（2.5YR5/8） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	
171-7	10010・11406	009-004 011-003	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	
171-8	12980・16368	009-004 010-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/4）	
171-9	11174・11343	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR4/4） 内面：褐色（7.5YR4/4）	
171-10				I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	底部付近	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗赤褐色（2.5YR3/6） 内面：赤褐色（2.5YR4/6）	注記 不明
171-11	12103	009-005	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
171-12	11162	009-005	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR5/4） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	
171-13	11179・11413	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	
171-14	12375	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	
171-15	11400	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗赤褐色（5YR3/4） 内面：暗褐色（7.5YR3/3）	
171-16	9375	010-002	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
171-17	15024	009-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	
171-18	9320	011-003	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（2.5YR4/6） 内面：黒褐色（7.5YR3/2）	
171-19	16112	010-003	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
171-20	9282・15874 16015・16022 16115～16117 16147・16450	011-003	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（2.5YR4/6） 内面：暗赤褐色（5YR3/3）	
171-21	9253・11337 12233～12235	009-003 009-004 010-003 010-004	FB	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：赤褐色（5YR4/6）	
171-22	7508	012-005	KU	I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/4） 内面：暗褐色（7.5YR3/3）	
171-23				I	1		早期前半	撚糸文土器	深鉢	底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（2.5YR4/6） 内面：にぶい赤褐色（5YR4/4）	注記 不明
172-24	11979	009-005	FB	I	1		早期前半	駿豆撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：黒褐色（7.5YR3/2）	
172-25	12685	009-005	FB	I	1		早期前半	駿豆撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（7.5YR4/2） 内面：灰褐色（5YR4/2）	
172-26	14002			I	1		早期前半	駿豆撚糸文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：黒褐色（7.5YR3/2）	
172-27	14042	009-004	FB	I	1		早期前半	駿豆撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面:にぶい黄褐色（10YR5/3）	
172-28	11856	009-005	FB	I	1		早期前半	駿豆撚糸文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（5YR4/2） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/3）	
172-29	7933			I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面:にぶい黄褐色（10YR5/3）	
172-30	16281・16374 16388	010-004	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（5YR4/2） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	
172-31	16389	010-004	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐灰色（10YR5/1） 内面：黒褐色（10YR3/1）	
172-32	16530	010-004	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
172-33				I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（7.5YR5/2） 内面：黒褐色（5YR3/1）	注記 不明
172-34	10927	009-005	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（7.5YR4/2） 内面：褐灰色（7.5YR4/1）	
172-35	12021・12296	009-004	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文系に伴う縄文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（7.5YR5/2） 内面：灰黄褐色（10YR5/2）	

第 89 表　南調査区 縄文時代　土器観察表（2）

図版No.	遺物No.	出土地点	層位	分類			時期	土器型式	器種	残存部位	胎土	色調	備考
				群	類	種							
172-36	14361・14992	010-004	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う縄文	深鉢	底部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄褐色（10YR5/3）内面：灰褐色（7.5YR5/2）	
172-37	16365	010-004	FB	I	2		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う押型文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄褐色（10YR5/3）内面：灰褐色（7.5YR4/2）	
172-38	10958・12098	009-004	FB	I	3		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う押型文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰黄褐色（10YR5/2）内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
172-39	13902	009-004	FB	I	3		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う押型文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰黄褐色（10YR4/2）内面：黒褐色（10YR3/2）	
172-40				I	3		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う押型文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰黄褐色（10YR5/2）内面：にぶい褐色（7.5YR5/3）	注記不明
172-41				I	3		早期前半	駿豆撚糸文土器に伴う押型文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：黒褐色（7.5YR3/1）内面：黒褐色（10YR3/1）	注記不明
173-42	8250・8251	011-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：黒褐色（7.5YR3/2）内面：褐色（7.5YR4/4）	
173-43	7532・8248	011-005	KU FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4）内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
173-44	15460	010-004	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4）内面：褐色（7.5YR4/4）	
173-45	8249	011-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6）内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
173-46	7546	010-005	KU	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR4/4）内面：褐色（7.5YR4/3）	
173-47	8565	011-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：黒褐色（7.5YR3/2）内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
173-48				I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/6）内面:にぶい赤褐色（5YR4/4）	注記不明
173-49	11848・12382 14408	009-004 009-006 010-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（7.5YR3/3）内面：暗褐色（7.5YR3/4）	
173-50	14910	010-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（7.5YR3/4）内面：褐色（7.5YR4/4）	
173-51	8519・8704	010-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗赤褐色（5YR5/6）内面：褐色（7.5YR4/4）	
173-52	7029	TP69	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/4）内面：褐色（7.5YR4/3）	
173-53	15711	011-004	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6）内面：黒褐色（7.5YR3/2）	
173-54	16364	011-004	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR5/4）内面：褐色（7.5YR4/4）	
173-55	8597	011-005	FB	I I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明褐色（7.5YR5/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
173-56	8265	011-005	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/3）内面：褐色（7.5YR4/4）	
173-57	7516	011-005	KU	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
173-58	7529	011-005	KU	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
173-59				I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4）内面：黒褐色（10YR3/2）	注記不明
173-60	7032	TP68	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
173-61	16480	010-003	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR4/4）内面：にぶい赤褐色（5YR4/4）	
173-62				I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6）内面：褐色（7.5YR4/3）	注記不明
173-63	13205	009-003	FB	I	4		早期前半	押型文土器	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
174-64	7371・7999	SM2	覆土	II	1		早期後半	清水柳Ｅ式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明褐色（7.5YR5/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
174-65	9284・10087	011-003	FB	II	1		早期後半	清水柳Ｅ式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6）内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	
174-66	9171・9174	010-003	FB	II	1		早期後半	清水柳Ｅ式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6）内面:にぶい黄褐色（10YR5/4）	
174-67	7560	011-005	KU	II	1		早期後半	子母口式・判ノ木山西式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/4）内面：褐色（7.5YR4/3）	
174-68	15435	010-004	FB	II	1		早期後半	子母口式・判ノ木山西式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/6）内面：灰褐色（7.5YR4/2）	
175-69				III	1		早期後半	野島式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4）内面：にぶい褐色（7.5YR5/3）	注記不明
175-70	9323	011-003	FB	III	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6）内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
175-71				III	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4）内面：にぶい褐色（7.5YR5/3）	注記不明

第 90 表　南調査区 縄文時代　土器観察表（3）

図版№	遺物№	出土地点	層位	分類 群	分類 類	分類 種	時期	土器型式	器種	残存部位	胎土	色調	備考
175-72	11866	009-003	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
175-73				Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	注記不明
175-74	11440・11953	009-003	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
175-75	13203・13204	009-002	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	
175-76	11867	009-003	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
175-77	13206	010-002	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR7/4）	
175-78	15870・16016 16021	010-003 011-004 012-003	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	
175-79	7498	SM2	覆土	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：暗褐色（10YR3/3）	
175-80				Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	注記不明
175-81	15764	012-003	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（5YR6/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
176-82	15486・15821 15831・15836 15839・15842 15857・15872 15914・15989	011-003 012-003	FB	Ⅲ	1		早期後半	野島式	深鉢	口縁～胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	同一個体
	15444	011-004								底部			
177-83	11599・11990 11991・13222 13709	009-004 010-004	FB	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	口縁～胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/4） 内面：褐色（7.5YR4/6）	同一個体
	11992・13873 13893・14415 15779・15794	009-003 009-004 010-004 010-005										外面：褐色（7.5YR4/6） 内面：褐色（7.5YR4/6）	
	9299・9304 9368	011-002								胴部		外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
										底部			
177-84	13225・14002 14374・14664 14972 15445～15447 15712・15805 16153	009-004 010-004 010-005 011-004	FB	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	口縁～胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	同一個体
	11994・13213 13215・13230	009-003 009-004											
	10948・11411	009-005								底部			
178-85	8193・13604 13607・14344 14358・14377 14399・14522 14673・14942	009-004 009-005 010-004 010-005	KU FB YL	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	同一個体
	14326	010-005	FB							底部			
178-86	11438・11605	009-004	FB	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：にぶい赤褐色（5YR4/4）	
178-87	9285	011-003	FB	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/4）	
178-88	9281・9298	010-003 011-002	FB	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面:にぶい黄褐色（10YR5/4）	
180-89	9270・10104	010-002	FB	Ⅲ	2		早期後半	鵜ヶ島台式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明褐色（7.5YR5/8） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
179-90	10759・10921 10924～10926 10928・10929 10936・10939 11154・11160 11161・11169 11346・11353 11847・12147 12388	008-005 009-005 009-006	FB	Ⅲ	2		早期後半	条痕文（鵜ヶ島台式併行）	深鉢	胴部～底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（2.5YR4/8） 内面：黒褐色（7.5YR3/1）	
180-91				Ⅲ	2		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（7.5YR3/3） 内面：褐色（7.5YR4/4）	注記不明
180-92	15912	012-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	

第 91 表　南調査区 縄文時代　土器観察表（4）

図版No.	遺物No.	出土地点	層位	分類			時期	土器型式	器種	残存部位	胎土	色調	備考
				群	類	種							
180-93	9280	010-003	FB	Ⅲ	2		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：灰褐色（7.5YR4/2） 内面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	
180-94				Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：橙色（7.5YR6/6）	注記不明
180-95	12686	009-004	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	
180-96	14656	010-005	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明褐色（7.5YR5/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
180-97	9330	011-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	
180-98				Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：橙色（5YR6/6）	注記不明
180-99	8257	010-005	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面:にぶい黄褐色（10YR5/3）	
180-100	15961	010-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
180-101	9363	012-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	
180-102	9355・9361	012-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	
180-103	9359	012-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	茅山下層式	深鉢	底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/4）	
181-104	9190	010-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（10YR3/3） 内面：暗褐色（10YR3/4）	
181-105	9350	012-002	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：黒褐色（7.5YR3/2） 内面：黒色（7.5YR2/1）	
181-106	9328	011-002	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR4/3） 内面：黒褐色（7.5YR3/1）	
181-107				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい赤褐色（5YR5/4） 内面：黒褐色（10YR3/1）	注記不明
181-108	13237	010-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（7.5YR6/6） 内面：黒褐色（10YR3/2）	
181-109				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：橙色（5YR6/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
181-110	14013	010-004	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄褐色（10YR5/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/3）	
181-111				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（10YR3/4） 内面：褐色（7.5YR4/4）	注記不明
181-112	11437・12151 14650	009-004 010-005	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：褐色（7.5YR4/4）	
181-113	15980	012-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
181-114	13605・13613	009-004 010-004	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/4） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
181-115				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：褐色（7.5YR4/3）	注記不明
181-116				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（10YR3/4） 内面：褐色（7.5YR4/4）	注記不明
181-117				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/4） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	注記不明
181-118	13664	010-004	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：灰褐色（7.5YR4/2）	
181-119	13841・14360 14376・14479 14755	010-004 010-005	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
181-120				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：暗褐色（7.5YR3/3）	注記不明
181-121	11987	009-004	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明褐色（7.5YR5/6） 内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	
181-122	11864	009-003	FB	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
181-123	7565	011-005	KU	Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：黒褐色（10YR3/2） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	
181-124				Ⅲ	3		早期後半	条痕文（茅山下層式併行）	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：暗褐色（10YR3/3） 内面：褐色（7.5YR4/4）	注記不明
182-125	11172・14142 14329・14331 14335・14337 14400・14402 14404	009-005 010-005	KU FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	口縁～胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/4）	
182-126	11445・11863 12118・12120 12121・13184 13229・13346 13558・13706 13925	009-003 009-004	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/3）	
183-127	11950	009-003	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR7/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/4）	

第 92 表　南調査区 縄文時代　土器観察表（5）

図版No.	遺物No.	出土地点	層位	分類 群	分類 類	分類 種	時期	土器型式	器種	残存部位	胎土	色調	備考
183-128	13178	009-003	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/4）	
183-129	13341	009-003	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐灰色（10YR5/1） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/4）	
183-130	11441・12145	009-003	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/3）	
183-131	11951 13337	009-003	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄橙色（10YR7/4） 内面:にぶい黄橙色（10YR6/3）	
183-132	11408・12020 13875	009-003 009-004	FB	Ⅲ	4		早期後半	粕畑式	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
184-133	7521・7525 7558 7562～7564 7566・7568 7569 7571～7573 7577・7578 7584・7586 8254・8255 8258・8260 8262・8263 8268・8280 8283・8288 8520・8703 9301・9333 10956・11984 13245・13888 13898・14334 15051・15116 15443・15455 15459・15713 15714・15770 15793・15815 15816・15904 15918・15935 16012・16121 16133・16152 16282～16284 16291・16359 16508・16516	009-004 009-005 010-003 010-004 010-005 011-002 011-003 011-004 011-005	KU FB	Ⅳ			早期末葉	条痕文	深鉢	口縁～ 底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：橙色（7.5YR6/6）	
	10038	SG9											
	7006～7008 7031	TP69											
185-134	9169・9170 9177・9179 9180～9183 9185～9187 9189・9192 9196・9198 9201・9202 9206・9214 9217・9221 9222・9224 9225 9227～9231 9234 9237～9241 9261・9262 9269・9275 9293・9308 9365・9366 9378・9379 9527・9538 9926・9928 10107・10563 13157・13251 13347・13543 13544	010-002 010-003 011-002	FB	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	口縁～ 底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	
186-135	7406・7407 8596・8788 10463・10951 11175・11177 11181・11340 11694・12123 12550・13221 13226・13339 13603・13615 13617・13872 14117・14339 14341・14345 14354・14355 14363・14364 14370・14373 14382 14396～14397 14398・14414 14663 14665～14667 14994・15101 15438・15439 15441・15454 7048	009-003 009-004 009-005 010-004 010-005 011-004	FB KU	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	口縁～ 胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/8） 内面：赤褐色（2.5YR4/6）	
		SG7	KU										

第 93 表　南調査区 縄文時代　土器観察表（6）

図版No.	遺物No.	出土地点	層位	分類			時期	土器型式	器種	残存部位	胎土	色調	備考
				群	類	種							
187-136	9173・9191 9193～9195 9200 9203～9205 9207～9251 9294・9297 9306・9315 10086	010-002 010-003 011-002	FB	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	口縁～ 胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：明赤褐色（5YR5/8）	同一 個体
	9208・9215 9216・9219 9220・9290 9295・9300 9374・9528 9529・9534 9922・9936 9941・10103	010-002 011-002										外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	
187-137				Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：褐色（7.5YR4/3） 内面：明褐色（10YR3/3）	注記 不明
187-138				Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：暗褐色（10YR3/3）	注記 不明
187-139	13231・13551 13583 13880～13882	010-003	FB	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：黒褐色（7.5YR3/2）	
187-140	11920・11982 12130・12229 12511・14039	009-004	FB	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部～ 底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/6） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/4）	
	12004	SG11	覆土										
187-141	7997	SM2	覆土	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：赤褐色（5YR4/8） 内面：明赤褐色（5YR5/6）	
187-142	7506	012-005	KU	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：褐色（7.5YR4/3）	
187-143	7512	012-005	KU	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：黒褐色（7.5YR3/2）	
187-144	7505	012-005	KU	Ⅳ	1		早期末葉	条痕文	深鉢	底部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：灰黄褐色（10YR4/2）	
188-145				Ⅴ	1		早期	縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面:にぶい黄橙色（10YR6/4） 内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	注記 不明
188-146				Ⅴ	1		早期	縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：黒褐色（10YR3/1）	注記 不明
188-147	10751 11156～11159 11163・11168 16362・16363	008-005 009-005 011-004	表土 FB	Ⅴ	1		早期	縄文	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面：明褐色（7.5YR5/6）	
189-148	13161・13164 13238～13240 13336 13348・15113 15114・15118 15119・15286 16013・16025 16123～16125 16127～16129 16132・16136 16141～16144 16149・16164 16165・16287 16288・16290	010-003 010-004	KU FB	Ⅴ	1		早期	不明	深鉢	口縁～ 胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面：にぶい褐色（7.5YR5/3）	
189-149				Ⅴ	1		早期	不明	深鉢	胴部	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/8） 内面：にぶい赤褐色（5YR4/3）	注記 不明
189-150	9212	010-002	FB	Ⅳ	1		早期	不明	深鉢	口縁	多量の繊維と砂粒を含む。 また、白色の岩片を僅かに含む。	外面：明赤褐色（5YR5/6） 内面:にぶい黄褐色（10YR4/3）	

第 94 表　南調査区 縄文時代　石器観察表（1）

図版No.	遺物No.	器　種	石材	層位	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	X座標	Y座標	Z座標	備　考
168-2	10462	台石	An	FB	33.0	26.6	8.9	10400.0	-95,162.946	30,681.090	107.334	SG9 出土
190-1	13701	尖頭器	F.H	YL	13.2	40.4	9.9	47.7	-95,159.533	30,667.993	107.167	
190-2	15287	尖頭器	GBA	KU	2.6	1.4	0.6	1.8	-95,155.082	30,698.332	108.007	
190-3	14476	尖頭器	GBA	FB	4.1	1.5	0.7	3.8	-95,137.497	30,672.153	108.720	
190-4	14005	尖頭器	Ob	FB	3.6	1.7	0.6	3.4	-95,153.940	30,669.811	107.564	
190-5	15471	尖頭器	Ob	FB	2.1	1.0	0.5	1.1	-95,140.740	30,676.318	108.537	
190-6	15474	尖頭器	GBA	FB	6.0	3.2	1.2	22.0	-95,141.342	30,677.458	108.583	
190-7	7614	有舌尖頭器	GBA	KU	4.7	1.4	0.4	3.0	-95,135.711	30,686.870	108.754	
190-8	16097	有舌尖頭器	F.H	FB	4.1	1.3	0.5	2.5	-95,147.099	30,672.632	108.199	
191-9	9415	石鏃	Ob	FB	1.7	1.7	0.4	0.7	-95,163.409	30,675.262	107.526	
191-10	12580	石鏃	GBA	FB	1.9	1.1	0.4	0.6	-95,132.904	30,662.356	108.412	
191-11	8516	石鏃	Ob	FB	0.6	1.3	0.3	0.7	-95,132.759	30,676.365	108.817	
191-12	9438	石鏃	Ob	FB	1.8	1.4	0.3	0.5	-95,158.964	30,683.100	107.729	
191-13	9450	石鏃	Ob	FB	1.0	1.0	0.2	0.2	-95,156.605	30,680.884	107.838	
191-14	11235	石鏃	Ob	FB	1.2	1.1	0.2	0.3	-95,137.003	30,665.371	108.539	
191-15	16011	石鏃	Ob	FB	1.1	1.1	0.4	0.4	-95,151.695	30,687.209	107.780	
191-16	16326	石鏃	Ob	FB	1.3	1.1	0.2	0.3	-95,144.579	30,682.607	108.258	
191-17	11794	石鏃	Ob	FB	1.4	1.4	0.3	0.3	-95,141.515	30,659.983	108.118	
191-18	12223	石鏃	Ob	FB	1.6	1.5	0.4	0.7	-95,144.239	30,665.534	107.997	
191-19	11424	石鏃	Ob	FB	1.8	1.5	0.4	0.8	-95,136.641	30,667.220	108.485	
191-20	15143	石鏃	Ob	KU	1.5	1.5	0.5	1.2	-95,145.165	30,672.204	108.396	
191-21	13634	石鏃	GBA	FB	2.0	1.6	0.3	0.6	-95,143.464	30,670.527	108.341	
191-22	14935	石鏃	Ob	KU	1.6	1.4	0.4	0.9	-95,139.510	30,670.196	108.576	
191-23	16308	石鏃	GBA	FB	1.7	1.8	0.3	1.0	-95,144.356	30,675.012	108.364	
191-24	8503	石鏃	GBA	覆土	1.2	1.1	0.2	0.2	-95,147.686	30,651.137	106.760	SM2 出土
191-25	15347	石鏃	Ob	KU	1.2	1.1	0.3	0.3	-95,141.344	30,672.898	108.604	
191-26	14098	石鏃	Ob	新 SC	1.3	1.0	0.3	0.3	-95,144.895	30,668.862	108.335	
191-27	15044	石鏃	Ob	FB	1.1	1.3	0.2	0.2	-95,136.413	30,672.224	108.517	
191-28	10750	石鏃	Ob	覆土	1.3	1.4	0.2	0.4	-95,142.294	30,653.314	107.159	SM2 周溝出土
191-29	9421	石鏃	GBA	FB	1.5	1.4	0.4	0.4	-95,163.807	30,681.139	107.510	
191-30	12745	石鏃	GBA	FB	1.4	1.3	0.2	0.3	-95,137.723	30,664.128	108.057	
191-31	11082	石鏃	Ob	FB	1.2	1.2	0.3	0.4	-95,137.589	30,667.004	108.582	
191-32	12719	石鏃	Ob	FB	1.5	1.2	0.4	0.4	-95,142.549	30,665.472	107.967	
191-33	13252	石鏃	Ob	FB	1.7	1.3	0.4	0.6	-95,159.376	30,670.956	107.507	
191-34	11120	石鏃	Ob	FB	1.7	1.7	0.4	0.9	-95,141.102	30,664.472	108.344	
191-35	8233	石鏃	Ob	FB	1.9	1.5	0.2	0.4	-95,137.997	30,678.437	108.681	
191-36	15498	石鏃	Ob	FB	1.7	1.8	0.3	0.8	-95,144.194	30,687.911	108.400	
191-37	15155	石鏃	Ob	KU	1.8	1.5	0.4	1.1	-95,152.929	30,682.842	108.091	
191-38	13253	石鏃	Ob	FB	3.2	1.8	0.7	2.1	-95,158.077	30,667.613	107.497	
191-39	16354	石鏃	GBA	FB	1.3	1.6	0.3	0.4	-95,143.641	30,678.283	108.269	
191-40	12586	石鏃	Ob	FB	1.9	1.6	0.3	0.6	-95,136.886	30,663.101	108.237	
191-41	8649	石鏃	SR	FB	1.9	1.6	0.2	0.5	-95,137.304	30,674.925	108.580	
192-42	7929	石鏃	Ob	KU	2.5	1.5	0.4	0.9	-95,139.331	30,684.296	108.647	
192-43	12089	石鏃	GBA	FB	2.2	1.8	0.3	1.0	-95,141.653	30,660.898	108.108	
192-44	12155	石鏃	Ob	FB	1.1	1.0	0.3	0.3	-95,140.810	30,665.117	108.144	
192-45	12647	石鏃	Ob	FB	1.1	1.4	0.3	0.4	-95,142.609	30,662.801	108.036	
192-46	12621	石鏃	Ob	FB	1.3	1.4	0.2	0.3	-95,142.632	30,660.683	108.009	
192-47	16103	石鏃	Ob	FB	1.3	1.1	0.3	0.3	-95,149.120	30,674.591	108.184	
192-48	9402	石鏃	GBA	FB	1.6	1.3	0.3	0.5	-95,161.879	30,674.711	107.573	
192-49	9498	石鏃	GBA	FB	1.5	1.3	0.3	0.6	-95,163.918	30,692.114	107.336	
192-50	7607	石鏃	Ob	KU	1.7	1.2	0.4	0.6	-95,132.886	30,692.068	108.916	
192-51	15481	石鏃	Ob	FB	1.4	1.3	0.5	0.6	-95,142.038	30,680.631	108.554	
192-52	11141	石鏃	GBA	FB	1.7	1.4	0.3	0.5	-95,142.151	30,662.217	108.234	
192-53	15254	石鏃	Ob	FB	1.5	1.3	0.5	0.6	-95,137.576	30,669.321	108.429	
192-54	14773	石鏃	Ob	FB	1.6	1.4	0.4	0.8	-95,137.429	30,670.096	108.620	
192-55	7687	石鏃	Ob	KU	1.9	1.5	0.3	0.7	-95,136.010	30,679.467	108.842	
192-56	9410	石鏃	Ob	FB	1.9	1.6	0.4	0.8	-95,161.640	30,677.770	107.573	
192-57	15124	石鏃	Ob	KU	1.7	1.3	0.4	0.7	-95,143.074	30,676.024	108.579	
192-58	14323	石鏃	Ob	FB	2.0	1.5	0.4	1.1	-95,133.177	30,674.279	108.915	
192-59	9387	石鏃	Ob	FB	2.1	1.7	0.5	1.2	-95,157.900	30,672.868	107.732	
192-60	12877	石鏃	Ob	YL	19.7	17.2	5.3	1.2	-95,136.778	30,662.321	108.009	
192-61	13304	石鏃	Ob	FB	2.2	1.2	1.2	0.3	-95,146.049	30,668.758	108.215	
192-62	9478	石鏃	GBA	FB	2.4	0.4	0.5	1.2	-95,164.756	30,685.685	107.428	
192-63	12436	石鏃	GBA	FB	2.5	1.5	0.4	1.3	-95,141.908	30,665.500	108.041	
192-64	12077	石鏃	GBA	FB	2.6	1.4	0.5	1.2	-95,142.053	30,664.280	108.155	

第 95 表　南調査区 縄文時代　石器観察表（2）

図版No.	遺物No.	器　種	石材	層位	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	X座標	Y座標	Z座標	備　考
192-65	16161	石鏃	Ob	FB	1.7	1.8	0.5	1.5	-95,141.460	30,676.117	108.485	
192-66	7643	石鏃	GBA	KU	1.9	1.5	0.3	0.8	-95,133.021	30,677.787	108.960	
192-67	13999	石鏃	GBA	FB	1.7	1.4	0.4	0.8	-95,144.420	30,671.582	108.255	
192-68	14985	石鏃	GBA	FB	1.9	1.7	0.6	1.2	-95,139.465	30,673.465	108.487	
192-69	15791	石鏃	Ob	FB	1.9	1.6	0.4	1.1	-95,143.841	30,673.869	108.394	
192-70	13616	石鏃	Ob	FB	1.8	1.4	0.4	1.0	-95,142.306	30,668.826	108.251	
192-71	15133	石鏃	GBA	KU	1.7	1.3	0.4	0.9	-95,145.716	30,680.368	108.501	
193-72	12596	石鏃	Ob	FB	1.2	1.3	0.4	0.5	-95,138.301	30,664.895	108.181	
193-73	13831	石鏃	Ob	FB	1.7	1.7	0.5	1.7	-95,142.526	30,668.399	108.330	
193-74	13576	石鏃	Ob	FB	2.0	1.2	0.5	1.0	-95,149.820	30,671.296	108.026	
193-75	14967	石鏃	Ob	FB	1.8	1.7	0.5	1.0	-95,138.198	30,673.746	108.544	
193-76	10767	石鏃	Ob	表土	1.9	1.6	0.6	1.1	-95,129.764	30,661.555	109.250	
193-77	9494	石鏃	Ob	FB	1.5	1.3	0.4	0.6	-95,161.740	30,694.257	107.452	
193-78	16325	石鏃	Ob	FB	1.2	1.4	0.4	0.5	-95,146.618	30,681.750	108.189	
193-79	7050	石鏃	Ob	新 SC	2.7	1.3	0.4	1.5	-95,134.112	30,693.749	108.980	
193-80	12972	石鏃	Ob	FB	17.4	14.4	5.2	0.9	-95,148.301	30,663.887	107.700	
193-81	13838	石鏃	Ob	FB	1.9	1.0	0.4	0.6	-95,142.315	30,671.819	108.408	
193-82	9432	石鏃	Ob	FB	1.6	1.3	0.3	0.5	-95,159.701	30,680.291	107.673	
193-83	13843	石鏃	GBA	FB	1.1	1.0	0.2	0.2	-95,141.768	30,671.838	108.378	
194-84	12631	打製石斧	SS	FB	7.6	3.0	1.3	43.1	-95,159.134	30,664.254	107.193	
194-85	7702	打製石斧	SS	KU	9.5	3.9	1.0	47.2	-95,137.165	30,675.968	109.007	
194-86	8581	磨製石斧	SS	FB	5.5	4.0	1.1	36.2	-95,135.759	30,678.495	108.699	
194-87	9520	磨製石斧	SS	FB	10.1	5.3	2.1	174.9	-95,162.823	30,699.120	107.324	
194-88	9470	磨製石斧	Ho	FB	8.7	4.5	1.7	112.9	-95,162.336	30,686.319	107.483	
194-89	16086	礫斧	An	FB	9.4	13.7	6.4	937.6	-95,148.028	30,677.746	108.109	
195-90	11304	削器	GBA	FB	5.2	3.4	0.7	14.6	-95,144.487	30,667.002	108.267	
195-91	15141	削器	SSh	KU	3.9	3.1	1.0	9.5	-95,144.644	30,672.834	108.377	
195-92	16102	掻器	GBA	FB	2.9	1.8	0.7	3.7	-95,149.368	30,673.253	108.140	
195-93	7485	掻器	Ob	覆土	3.7	2.6	1.1	10.2	-95,148.854	30,654.323	107.009	SM2 出土
195-94	9474	石錐	GBA	FB	3.6	1.1	1.0	2.5	-95,165.180	30,684.345	107.439	
195-95	9484	石錐	GBA	FB	2.3	0.8	0.4	0.8	-95,164.804	30,687.852	107.439	
195-96	13567	石錐	GBA	FB	3.5	1.1	0.7	2.6	-95,145.601	30,668.336	108.116	
195-97	7328	楔形石器	Ob	覆土	2.6	1.1	0.7	1.8	-95,148.430	30,648.224	106.333	SM2 出土
195-98	11628	楔形石器	GBA	FB	2.9	2.4	0.6	4.9	-95,142.305	30,662.257	108.176	
195-99	10723	楔形石器	Ob	覆土	2.2	1.4	0.7	1.7	-95,145.503	30,655.974	107.250	SM2 周溝出土
195-100	11040	楔形石器	Ob	FB	2.3	1.4	0.7	2.1	-95,133.492	30,661.603	108.582	
195-101	14010	楔形石器	Ob	FB	1.3	2.0	0.7	2.0	-95,146.063	30,671.814	108.239	
195-102	13907	楔形石器	GBA	FB	1.9	1.3	0.6	1.7	-95,150.986	30,671.511	107.885	
196-103	7480	楔形石器	Ob	覆土	2.9	1.3	0.8	3.0	-95,146.185	30,655.637	107.246	SM2 出土
196-104	10823	楔形石器	Ob	覆土	2.3	1.6	1.1	4.0	-95,145.796	30,656.076	107.285	SM2 周溝出土
196-105	11283	楔形石器	Ob	FB	2.8	1.3	0.9	3.3	-95,141.464	30,660.381	108.235	
196-106	11193	楔形石器	Ob	FB	1.9	1.7	0.8	2.9	-95,130.636	30,665.784	108.816	
196-107	11281	楔形石器	Ob	FB	2.3	1.2	0.7	2.1	-95,142.075	30,660.207	108.159	
196-108	12386	楔形石器	Ob	FB	2.3	1.2	0.9	2.7	-95,140.504	30,662.575	108.110	
196-109	7481	楔形石器	Ob	覆土	2.5	1.0	0.8	1.5	-95,144.700	30,657.600	107.683	SM2 出土
196-110	12794	楔形石器	Ob	FB	2.0	1.6	0.8	2.0	-95,141.707	30,659.292	107.972	
196-111	11968	楔形石器	SR	FB	2.4	2.4	0.6	3.1	-95,144.474	30,665.420	108.011	
196-112	13994	楔形石器	GBA	FB	2.4	0.9	0.7	2.5	-95,142.031	30,669.311	108.414	
196-113	11637	楔形石器	Ob	FB	2.3	2.5	1.1	4.5	-95,140.160	30,664.932	108.257	
196-114	11105	楔形石器	Ob	FB	1.9	0.8	0.5	0.7	-95,141.107	30,666.029	108.321	
196-115	12585	楔形石器	Ob	FB	2.1	1.1	0.7	1.5	-95,136.552	30,663.146	108.307	
196-116	15792	楔形石器	GBA	FB	3.2	0.8	0.9	2.8	-95,146.787	30,674.192	108.294	
196-117	11366	楔形石器	Ob	FB	2.0	2.0	1.2	4.7	-95,139.859	30,660.771	108.256	
197-118	9416	加工痕のある剥片	Ob	FB	1.5	2.0	0.6	2.2	-95,163.288	30,674.901	107.512	
197-119	16005	加工痕のある剥片	Ob	FB	2.3	1.5	0.6	1.9	-95,152.082	30,676.669	108.065	
197-120	16353	加工痕のある剥片	Ob	FB	1.6	1.4	0.7	1.3	-95,143.819	30,675.397	108.195	
197-121	15131	加工痕のある剥片	SSh	KU	2.6	3.0	0.7	5.5	-95,143.066	30,685.741	108.540	
197-122	15135	加工痕のある剥片	Ob	KU	2.4	2.9	0.8	5.2	-95,144.687	30,675.416	108.623	
197-123	9469	加工痕のある剥片	SR	FB	0.7	2.7	0.7	1.2	-95,160.834	30,686.380	107.686	
197-124	12156	加工痕のある剥片	Ob	FB	3.0	1.7	0.9	4.3	-95,140.547	30,664.305	108.206	
197-125	13250	加工痕のある剥片	GBA	FB	3.1	1.9	0.8	3.8	-95,160.629	30,669.213	107.317	
197-126	8647	加工痕のある剥片	Ob	FB	2.0	2.3	1.0	3.4	-95,138.315	30,675.680	108.540	
197-127	15523	加工痕のある剥片	GBA	FB	1.8	2.5	0.6	2.7	-95,144.372	30,672.650	108.280	
197-128	15478	加工痕のある剥片	GBA	FB	3.3	2.1	0.9	5.7	-95,141.682	30,679.358	108.550	
197-129	16351	加工痕のある剥片	GBA	FB	3.0	1.3	0.4	1.6	-95,142.199	30,673.053	108.352	

第 96 表　南調査区 縄文時代　石器観察表（3）

図版No.	遺物No.	器　種	石材	層位	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	X座標	Y座標	Z座標	備　考
197-130	15139	使用痕のある剥片	Ob	KU	1.9	1.0	0.4	0.7	-95,142.890	30,672.970	108.612	
197-131	15855	使用痕のある剥片	Ob	FB	2.4	1.7	0.7	3.3	-95,152.436	30,684.805	108.057	
197-132	16156	使用痕のある剥片	Ob	FB	2.6	1.6	0.9	2.5	-95,146.699	30,679.714	108.268	
197-133	16001	使用痕のある剥片	Ob	FB	2.8	2.0	0.7	3.8	-95,150.385	30,679.220	108.107	
198-134	12803	磨石	An	FB	16.5	8.0	5.2	1002.5	-95,149.829	30,662.255	107.438	
198-135	15539	磨石	An	FB	7.4	13.4	6.6	902.7	-95,141.869	30,677.941	108.500	
198-136	13328	磨石	An	FB	8.5	7.6	5.2	403.4	-95,160.277	30,670.217	107.440	
198-137	10818	磨石	An	表土	8.5	8.3	3.4	328.6	-95,135.853	30,663.553	109.004	
198-138	14778	磨石	An	FB	8.8	8.0	3.3	349.2	-95,137.522	30,670.998	108.602	
198-139	15998	磨石	An	FB	5.6	5.1	3.2	106.3	-95,152.882	30,684.037	108.002	
198-140	13921	磨石	An	FB	7.8	7.1	3.2	246.7	-95,147.532	30,670.000	108.004	
198-141	10817	磨石	Ba	表土	7.4	6.5	4.4	197.5	-95,133.092	30,661.962	109.179	
198-142	14212	磨石	An	FB	10.3	9.5	6.9	928.0	-95,131.408	30,672.291	108.896	
198-143	13329	磨石	Da	FB	10.2	9.6	5.0	474.1	-95,152.873	30,666.738	107.791	
198-144	15902 15992	磨石	SS	FB	9.5	8.5	3.3	178.5	-95,153.109 -95,152.673	30,690.036 30,689.976	107.887 107.784	
198-145	7004	磨石	An	KU	9.0	7.7	3.3	324.0	-95,137.624	30,680.614	108.640	TP69 出土
198-145	11671	磨石	An	FB					-95,133.775	30,664.751	108.561	
198-146	11387	磨石	SS	FB	8.5	7.3	2.6	218.7	-95,150.179	30,663.307	107.858	
198-147	9411	磨石	An	FB	9.8	7.8	2.7	289.1	-95,162.446	30,678.138	107.601	
198-148	10769	磨石	An	表土	9.8	7.2	3.4	296.8	-95,131.368	30,659.273	109.139	
198-149	11388	磨石	Da	FB	9.3	7.3	4.4	332.8	-95,147.910	30,665.862	107.963	
198-150	16448	磨石	An	FB	9.0	7.0	5.0	374.9	-95,143.852	30,679.066	108.213	
198-151	14007	磨石	SS	FB	7.5	5.5	3.3	182.8	-95,131.881	30,669.799	108.960	
198-152	7471	磨石	An	覆土	8.8	5.9	3.8	217.7	-95,146.807	30,656.241	107.460	SM2 周溝出土
199-153	9526	磨石	An	FB	9.6	7.6	5.0	503.8	-95,157.823	30,672.828	107.673	
199-154	11626	磨石	Da	FB	10.5	7.7	3.5	327.0	-95,141.812	30,661.477	108.165	
199-155	12687	磨石	Ba	FB	9.7	8.4	4.8	557.7	-95,142.986	30,664.680	107.886	
199-156	13319	磨石	An	FB	10.1	8.7	4.0	452.3	-95,150.646	30,669.749	107.972	
199-157	14267	磨石	An	FB	9.6	8.5	4.4	479.4	-95,136.552	30,669.588	108.671	
199-158	13320	磨石	An	FB	9.5	7.9	5.7	558.3	-95,149.797	30,671.259	108.025	
199-159	13321	磨石	Co	FB	10.3	7.9	5.2	556.0	-95,151.408	30,673.189	107.979	
199-160	12717	磨石	An	FB	10.5	8.2	5.3	500.2	-95,141.365	30,662.725	108.000	
199-161	14245	磨石	Gd	FB	11.6	9.3	4.2	598.0	-95,137.011	30,674.016	108.646	
199-162	13325	磨石	An	FB	11.1	8.0	5.6	663.4	-95,158.022	30,668.525	107.477	
199-163	9382	磨石	Da	FB	10.7	7.8	4.5	491.5	-95,154.148	30,675.193	107.827	
199-164	13654	磨石	Da	FB	10.9	9.0	4.7	542.2	-95,144.157	30,670.885	108.426	
199-165	13318	磨石	An	FB	12.0	7.8	4.0	485.4	-95,148.228	30,668.176	107.987	
199-166	7928	磨石	An	KU	11.4	6.4	6.0	709.8	-95,136.800	30,683.956	108.798	
199-167	9503	磨石	Da	FB	11.5	7.1	4.9	433.5	-95,164.575	30,690.590	107.500	
199-168	16477	磨石	An	FB	10.8	5.6	3.0	257.0	-95,150.951	30,678.179	107.936	
199-169	11206	磨石	An	FB	14.0	6.2	6.1	791.3	-95,132.295	30,663.281	108.643	
199-170	15483	磨石	An	FB	12.6	7.0	4.9	664.2	-95,142.939	30,683.322	108.465	
199-171	16447	磨石	An	FB	13.4	5.4	4.2	453.8	-95,151.595	30,675.692	107.910	
199-172	12725	凹石	An	FB	10.1	8.1	3.7	303.0	-95,141.173	30,664.910	107.988	
200-173	9506	ハンマー	SS	FB	12.2	3.1	1.5	92.3	-95,166.286	30,691.525	107.210	
200-174	16476	ハンマー	SS	FB	10.2	4.4	3.2	206.4	-95,145.589	30,676.911	108.208	
200-175	15999	ハンマー	SS	FB	10.5	5.3	3.3	231.4	-95,150.495	30,683.486	107.987	
200-176	15514	ハンマー	SS	FB	11.4	6.7	3.3	221.5	-95,142.969	30,674.601	108.418	
200-177	13323	敲石	SS	FB	10.7	6.0	3.0	281.4	-95,158.022	30,669.399	107.565	
200-178		敲石	SS	撹乱	10.9	4.9	1.9	145.6	―	―	―	SM6 出土
200-179	14948	敲石	SS	FB	16.5	7.1	5.7	987.3	-95,137.433	30,674.084	108.459	
200-180	15985	敲石	An	FB	5.4	3.5	3.4	88.8	-95,151.815	30,684.382	108.025	
200-181	11963	敲石	An	FB	6.9	5.1	4.1	187.7	-95,144.346	30,663.212	107.962	
200-182	11964	敲石	An	FB	8.2	5.7	4.3	285.1	-95,144.312	30,663.323	107.954	
201-183	12220	石皿	An	FB	22.4	19.5	8.6	4970.0	-95,150.633	30,665.932	107.596	
201-184	13351	石皿	An	FB	34.3	34.6	14.9	21880.0	-95,157.203	30,671.292	107.651	
201-185	15265	石皿	An	KU	28.1	16.8	15.4	9800.0	-95,143.588	30,682.451	108.458	
201-186	7933	石皿	An	KU	28.9	22.6	8.1	7500.0	-95,131.678	30,683.718	109.049	
201-187	15537	石皿	An	FB	28.7	36.3	14.2	13680.0	-95,141.699	30,676.713	108.511	
201-188	15984	石皿	An	FB	41.2	38.3	21.5	38800.0	-95,153.869	30,683.190	107.835	
202-189	11939	台石	An	FB	21.9	23.5	13.0	8750.0	-95,143.118	30,664.245	108.027	
202-190	15538	台石	An	FB	24.3	18.7	7.0	3240.0	-95,141.381	30,675.962	108.555	
202-191	14720	台石	An	FB	18.3	24.3	9.8	7030.0	-95,138.807	30,671.917	108.513	
202-192	14520	台石	An	FB	16.5	12.4	5.9	1139.0	-95,139.098	30,673.892	108.585	

第 97 表　南調査区 縄文時代　石器観察表（4）

図版No.	遺物No.	器　種	石材	層位	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	X座標	Y座標	Z座標	備　考
203-193	9990	台石	An	FB	39.9	38.9	16.6	26420.0	-95,164.545	30,699.621	107.321	
203-194	14467	台石	An	FB	63.6	46.9	18.0	62000.0	-95,139.184	30,671.082	108.584	
203-195	15536	台石	An	FB	33.1	27.2	17.5	14460.0	-95,143.617	30,679.893	108.470	
204-196	14253	石核	Ob	FB	1.8	2.4	1.4	5.4	-95,137.587	30,671.424	108.811	
204-197	15043	石核	Ob	FB	1.5	2.5	1.6	5.4	-95,136.478	30,672.328	108.529	
204-198	9523	石核	Ob	FB	1.4	3.4	1.4	5.2	-95,164.150	30,678.943	107.469	
204-199	15096 16475	石核	SS	FB	8.0	8.6	8.0	516.1	-95,137.584 -95,140.273	30,669.622 30,674.143	108.466 108.407	
205-200	11680	石核	F.H	FB	4.0	9.5	4.2	218.4	-95,135.091	30,666.738	108.561	
205-201	15510	石核	F.H	FB	3.2	7.6	4.4	135.0	-95,143.790	30,675.955	108.449	
206-202	14803	石核	F.H	FB	3.5	5.2	4.3	104.8	-95,140.338	30,671.584	108.458	
206-203	11843	石核	F.H	FB	2.7	8.9	5.2	189.3	-95,132.477	30,663.727	108.639	
207-204	14999	石核	F.H	FB	5.2	3.8	5.4	148.0	-95,140.234	30,670.170	108.446	
207-205	13835	石核	F.H	FB	3.9	6.5	3.8	165.7	-95,142.891	30,670.347	108.407	
208-206	15468	石核	F.H	FB	3.5	5.3	3.1	66.0	-95,140.588	30,674.650	108.581	
208-207	16526	石核	Ob	FB	3.0	1.9	1.1	5.3	-95,150.175	30,679.017	107.976	
208-208	13268	石核	Ob	FB	2.3	2.1	1.2	5.4	-95,152.325	30,671.398	107.816	
208-209	12306	石核	F.H	FB	2.8	5.4	2.6	54.1	-95,128.582	30,663.667	108.576	
209-210	16332	石核	Ob	FB	1.8	2.0	1.1	3.1	-95,143.122	30,679.549	108.364	
209-211	15812	石核	Ob	FB	1.5	2.3	0.8	2.3	-95,147.812	30,677.655	108.303	
209-212	8215	石核	Ob	FB	2.6	3.1	1.4	8.4	-95,132.174	30,677.623	108.919	
209-213	7615	石核	Ob	KU	2.3	2.5	1.8	8.1	-95,131.253	30,686.695	109.014	
209-214	7634	石核	Ob	KU	2.6	2.7	2.0	9.6	-95,131.064	30,675.967	109.011	
209-215	7677	原石	Ob	KU	3.4	9.0	4.6	155.2	-95,136.361	30,677.473	108.752	

第４節　古墳時代の遺構と遺物－芝荒古墳群－

（１）古墳の検出状況（第 210 図）

南調査区では調査区西側の谷近くで芝荒２号墳と芝荒３号墳、中央付近で芝荒６号墳、東端で芝荒７号墳が検出された。調査区内には森林や茶畑が広がっていたことから、木の根による撹乱や耕作による削平の影響が大きく、残存状況は決して良くない。ただし芝荒３号墳の石室は、天井石まで残存し、築造当初に最も近いかたちを残している。遺物としては、須恵器、土師器、金属製品が出土したが、盗掘や石室の破壊により元位置をとどめておらず、埋葬時の副葬品組成は不明なものが大半である。また、発見された遺物についても、当初の副葬位置から移動しているものが多いと思われる。

（２）古　墳

芝荒２号墳（第 211 図～第 215 図）

ａ．検出状況

南調査区西側、標高 107.0m 付近で検出された。その存在は以前から知られており、石室構成材と考えられる大型礫が露出している状況が確認調査でも認められた。そこで、南調査区西側の調査に向けて森林の伐採や抜根作業を行った後、露出した大型礫の周辺で石室の検出作業を開始した。墳丘盛土は全く残存していなかったが、ほぼ全周するかたちで検出された周溝により、墳丘規模の推定が可能である。西側の谷に向かって降る斜面上に築造された影響で、石室上部の構造は西方向への崩落が顕著であり、出土遺物の状況などから盗掘を受けている可能性も非常に高い。石室本来の構造や追葬状況は不明瞭な点が多いものの、残存状況は比較的良く、今回の調査で検出された他の古墳とは規模や形態に明確な差異が認められる。

出土遺物の量や質についても突出しており、単鳳環頭大刀以外にも多量の鉄鏃、刀子、小刀の破片や装具、飾り弓の両頭金具といった金属製品が豊富に出土しているが、土器は１点も検出されていない。

ｂ．墳丘および外部施設

【墳丘】

墳丘盛土は削平され、全く確認できなかった。周溝の残存状況から、墳丘長は最長で 10.5m 程度と推測される。

【周溝】

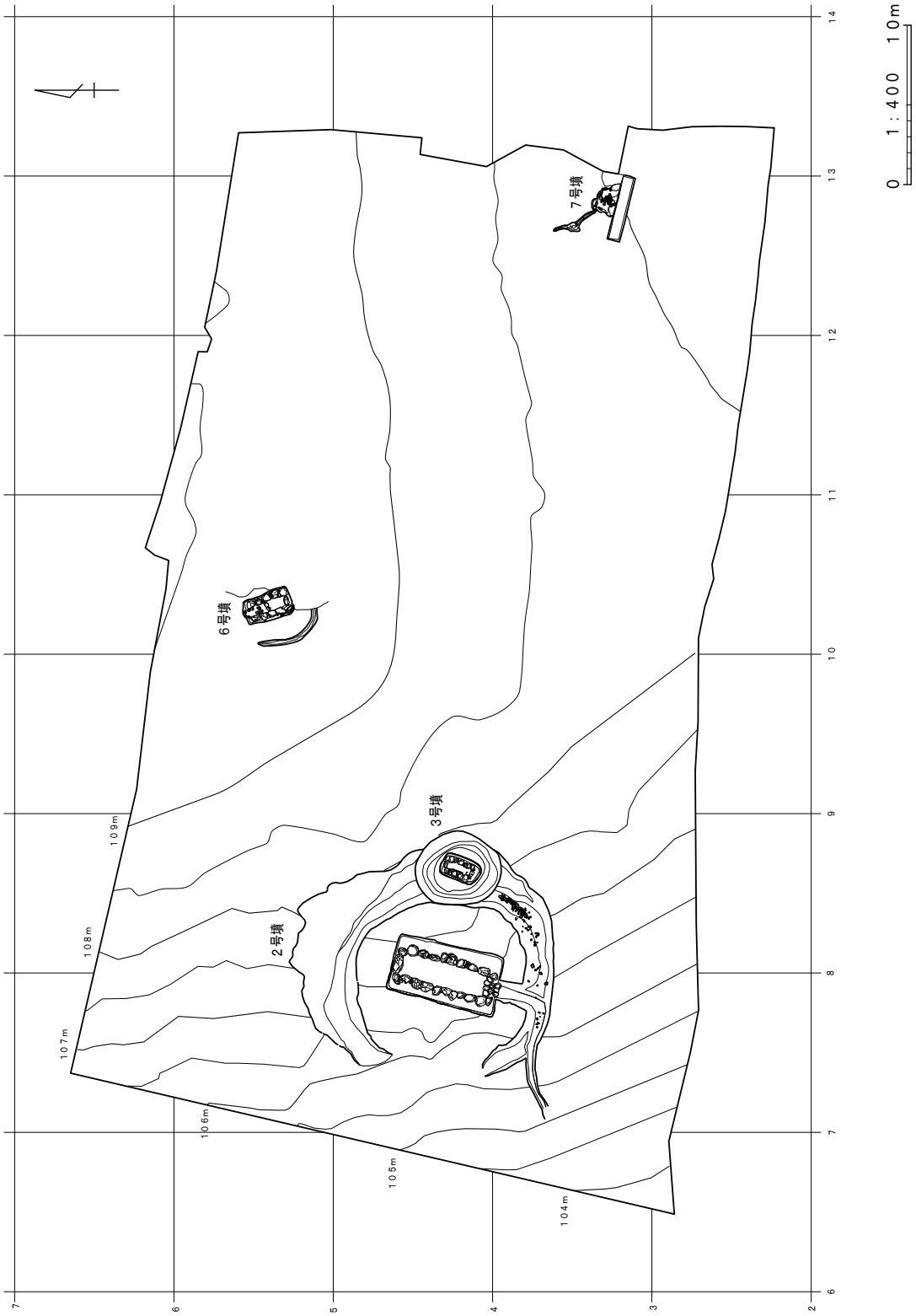
西側は削平されているものの、全周していたものと考えられる。撹乱や削平によりプランは不明瞭な部分も多いが、斜面上位にあたる石室奥壁側から右側壁側で幅 3.0m ～ 3.5m、斜面下位にあたる開口部側で幅 1.8m 程度を測る。雨水の流入による変形の可能性もあるが、斜面上位の方が幅が広くなっていた。深さは最も深いところで検出面から 0.48m を測り、断面は皿状を呈する。南東部分の覆土内では拳大～ 20㎝ほどの小礫が集中して見つかった。

ｃ．埋葬施設

【規模・石室構造】

石室は全長 8.2m、玄室長 5.2m、玄室幅は中央部で最大 1.5m、奥壁側と開口部側で 1.2m、平面形は長方形状を呈し、今回検出された古墳のなかで最大規模である。主軸はＮ－ 15°－Ｅで、開口部を南西方向へ向け、西方向へ降る斜面上に築造されている。石室形態は無袖式の横穴式石室で、深く掘り込んだ墓坑内に石室を構築するが石室入口に格別な造作は見られず、床面から開口部までが水平に推移する。石室を構成する石材は、近くの川で採取されたと考えられる安山岩を使用している。

本石室は袖部による玄室と羨道の区分が見られない無袖式であるが、開口部側から２石目に設置された大型の基底石や梱石状の石材から、玄室を区画する意図が感じられる。また間仕切石のような明確に



第210図　南調査区 古墳時代遺構分布図

空間を区分する存在は検出されていないものの、側壁や床面の造作などから、中央より奥壁側を遺骸安置空間として強く意識していたことが読み取れる。

【墓坑・墓道】

墓坑は長さ 6.9m、最大幅 3.9m を測る。開口部に向かってやや幅を広げた長方形状を呈し、開口部に墓道が接続する。斜面上位にあたる右側壁側は深いところで 1.1m 掘り込まれるが、斜面下位にあたる左側壁側の掘り込みは 0.6m 程度で、墓坑全体も開口部および斜面下位に向かって深さを減じており、丘陵斜面の勾配に応じた掘削が行われている。掘り込み式の墓坑に見られるような深い掘り込みが斜面上位側を中心に認められるが、このような丘陵斜面の立地条件に合わせた墓坑形態は、いわゆる山寄せ式に分類されるものであろう。ただし、丘陵斜面の傾斜に直交して造られてはいない。

開口部には墓道が接続する。広いところで幅 1.5m を測り、周溝を切りながら石室主軸と同一方向へ伸びた後、周溝のカーブに合わせて急激に屈曲し西側の谷方向へ伸びている。墓坑底面から水平に推移しており、先に行くに従って細く浅くなっていく。墓道内の土層堆積状況を見ると、スコリアが多量に混在する土層（９層）を含んだ３層が石室主軸上の周溝南壁まで認められた。なかでも最下層（10 層）は、初葬時に伴うと推測される閉塞石の手前まで認められ、閉塞石とほぼ同じ高さまで堆積している。また、その上に追葬時の閉塞石が積まれていること、奥壁の後ろにも同様の土が充填されていることから、初葬時に施されたものと考えられる。

【天井石】

石室の内外に 100㎝を超える大型の石材が崩落しており、天井石であったものと考えられる。大きいもので 170㎝ほどを測り、検出された石材の大きさから６～７石程度で構成されていた可能性が高い。

【奥壁】

長さ 135㎝、幅 130㎝、厚さ 60㎝ほどの鏡石１石を設置する。正方形に近い板状の石材で、加工の痕跡は見られない。内側に向けた平坦面が垂直になるよう、背後の墓坑壁に接しながら軽く地山にねじ込んでいる。さらに、最も奥側に設置された側壁１段目と２段目の石材で挟み込み、墓坑底面との隙間に小礫を充填することで固定している。

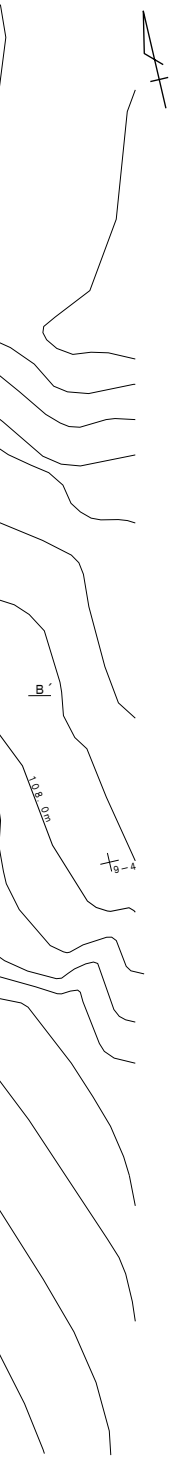
【側壁】

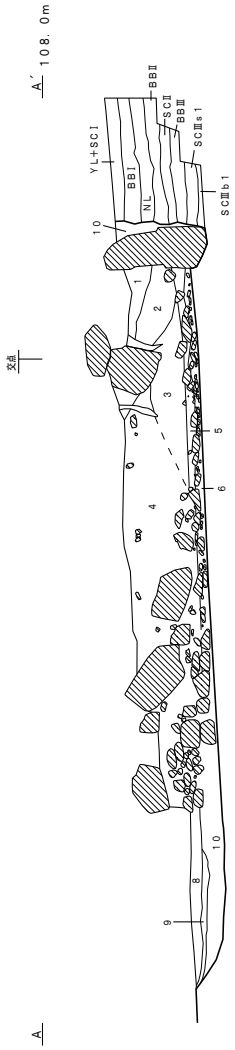
天井石と考えられる石材や側壁の残存状況、鏡石や墓坑の高さから３段積みを基本とし、石室高は 1.3m 前後に達するものと思われる。左右とも３段目は崩落している部分が目立ち、特に右側壁は石室内部へ大きく崩れていた。一部には、小型の石材を用いて高さを調整することで４段積みとなる部分が認められる。石材は角が取れてやや丸味を帯びている。

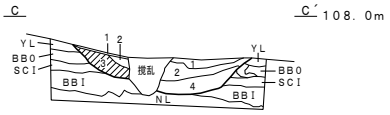
基底石は 60㎝～ 80㎝程度の石材を用いて、右側に 10 石、左側に 11 石が設置されている。基本的には広口面を内側に向け、墓坑底面に密着して据えられていた。２段目と３段目は小口積みされ、基底石より大型の石材が用いられている部分もある。横目地は床面の傾斜に合わせ開口部側に向けて降る様子が観察された。石材の隙間には小礫を充填し、側壁の安定化を図るとともに土の流入を防ぎ、墓坑壁との間には、褐灰色土が充填されていた。

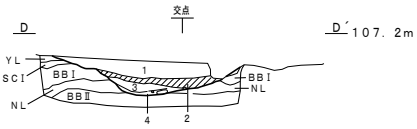
基底石の設置状況を見ると、開口部側から２石目に大型の石材が設置されている。この石材の手前付近に梱石状の石材が並べられていることから、大型石材までを玄室空間として区画しているものと考えられる。さらに入口側にも基底石が設置されているが、他の基底石に比べて非常に小型で華奢な印象を受ける。しかしその上部には３段目まで石材が積み上げられており、検出時の状況からも天井石が架構されていた可能性が高い。また、奥側から５石目の基底石は左右とも小型で、他の基底石とは異なり小口面を内側に向けている。側壁の目地を観察するとこの部分で縦目地がきれいに通っており、その両隣りの基底石は平坦な広口面が真っ直ぐそろうよう丁寧に配置されていた。従ってこの石材は、側壁を構

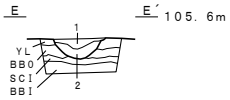
第 211 図　芝荒 2 号墳全体図







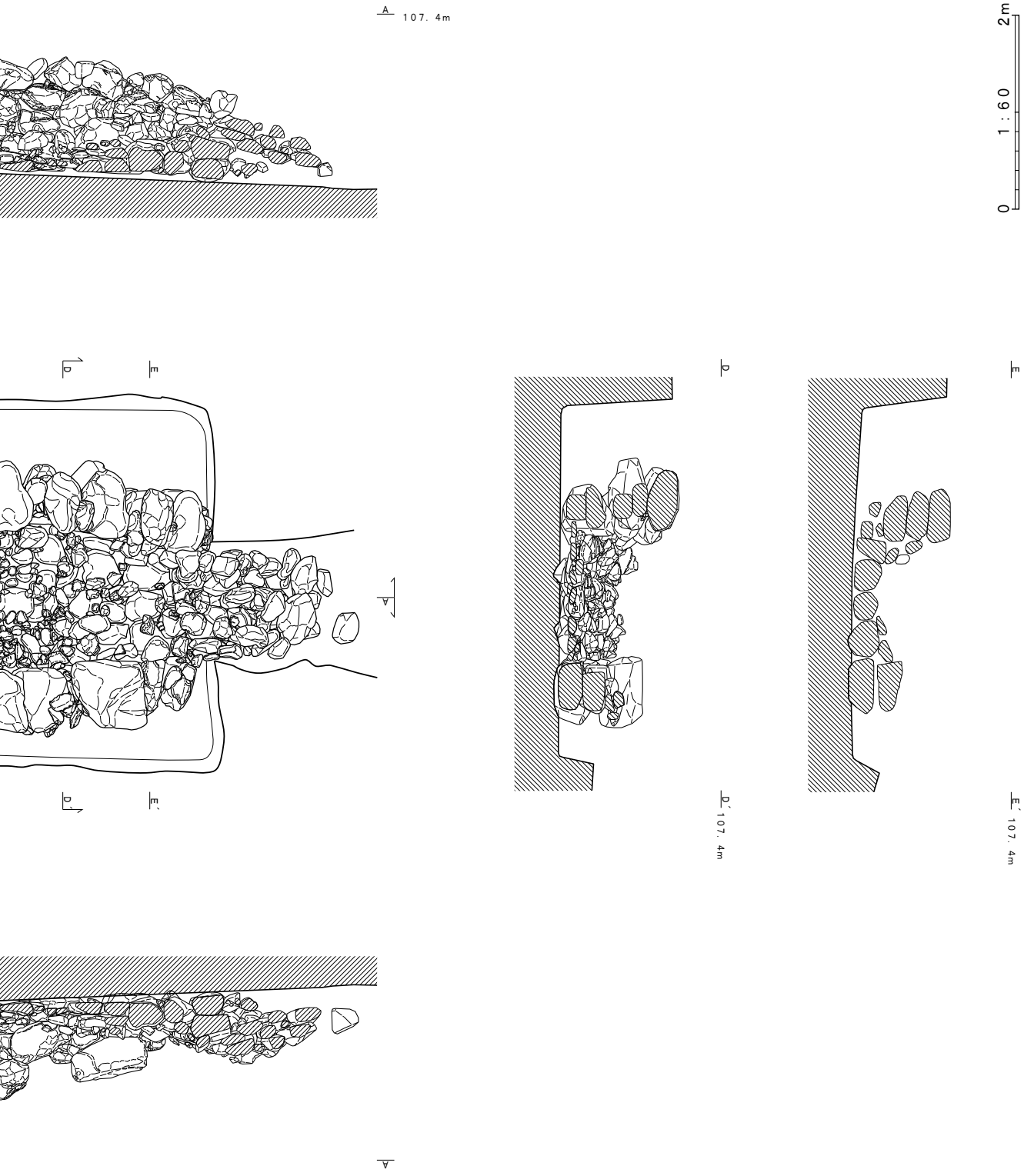




石室	1 層	7.5YR4/2（灰褐色土）	粘性が弱い。
	2 層	7.5YR1.7/1（黒色土）	KU・FB・YL の混合土で、径 20㎜～ 50㎜の黒色土ブロックを少量含む。粘性は弱く、締まりがない。
	3 層	7.5YR2/1（黒色土）	KU・FB・YL の混合土で、径 10㎜～ 30㎜の黒色土ブロックと黄色土ブロックを少量含む。粘性は弱く、締まりがない。
	4 層	7.5YR1.7/1（黒色土）	KU・FB・YL の混合土。粘性は弱く、締まりがほとんどない。
	5 層		KU・FB・YL の混合土に灰褐色土が混じる。粘性はやや強く、締まりがある。
	6 層		石室床面。粘性が強く、硬く締まっている。
	7 層	7.5YR4/1（褐灰色土）	径 3㎜～ 10㎜の黒色土ブロックを含む。粘性は弱く、やや締まりがある。
墓道	8 層	5YR4/2（灰褐色土）	径 1㎜～ 3㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性はやや弱く、やや締まりがある。
	9 層	5YR4/6（赤褐色土）	径 1㎜～ 3㎜の橙色スコリアを多量に含む。粘性は弱く、やや締まりがある。
	10 層	5YR4/2（灰褐色土）	径 1㎜～ 3㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性はやや弱く、やや締まりがある。
周溝	11 層	7.5YR5/6（明褐色土）	径 1㎜～ 10㎜の橙色スコリアを少量含み、径 10㎜～ 50㎜の黄色土ブロックを少量含む。粘性はやや強く、やや締まりがある。
	12 層	10YR3/2（黒褐色土）	粘性は弱く、やや締まっている。
	13 層	5YR4/2（灰褐色土）	径 1㎜～ 5㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性は弱く、非常に硬く締まっている。
	14 層	7.5YR3/2（黒褐色土）	径 1㎜～ 3㎜の橙色スコリア、径 10㎜の黒色土ブロックを少量含み、小砂利を多量に含む。粘性はやや弱く、やや締まりがある。
	15 層	7.5YR4/6（褐色土）	径 1㎜～ 3㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性はやや強く、締まりがほとんどない。
C－C′	1 層	5YR2/1（黒褐色土）	径 1㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性は弱く、締まりがない。
	2 層	5YR5/2（灰褐色土）	粘性はやや弱く、やや締まりがある。
	3 層	5YR4/4（にぶい赤褐色土）	径 1㎜～ 5㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性は弱く、締まりがある。
	4 層	5YR4/2（灰褐色土）	径 2㎜～ 5㎜の砂礫を含む。粘性は弱く、やや締まりがある。
D－D′	1 層	7.5YR4/4（黒褐色土）	径 1㎜～ 5㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性はやや強く、やや締まりがある。
	2 層	5YR4/2（灰褐色土）	径 1㎜～ 5㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性は弱く、非常に硬く締まっている。
	3 層	7.5YR4/4（黒褐色土）	径 1㎜～ 5㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性はやや強く、やや締まりがある。
	4 層	7.5YR4/3（褐色土）	径 1㎜～ 5㎜の橙色スコリアを少量含む。粘性はやや弱く、締まりがある。
E－E′	1 層	7.5YR4/2（灰褐色土）	径 1㎜～ 3㎜の橙色スコリアを微量に含む。粘性はやや弱く、締まりがない。
	2 層	7.5YR4/3（褐色土）	径 5㎜の橙色スコリアを微量に含む。粘性はやや弱く、締まりがない。

0　1：100　2m

A´
B´
C´
A
B
C
A´ 107.4m
B´ 107.4m
C´ 107.4m
B
C



第212図　芝荒２号墳 石室展開図（閉塞石あり）

築する際の基準となっていた可能性が高い。

【石室入口構造と閉塞石】

石室入口は床面から開口部まで水平に推移するが、入口付近には高さ 25㎝～ 30㎝程度の石材４石と、それよりやや小型の石材５石が墓坑底面に密着して据えられていた。奥側の４石は、開口部側から２石目に設置された大型の基底石にそろえられ、上面は平坦に近く、角が取れてやや丸味を帯びている。手前の５石は２列に並べられ、奥側４石に比べると石材の形状が整っておらず粗い印象を受ける。検出状況から、奥側４石の上には閉塞石が積まれていなかったものと考えられ、貼床は４石の手前まで貼られていた。従ってこの４石は、両側に接する大型の基底石とともに玄室空間を区画する機能を果たしており、梱石的な役割を担っていたものと考えられる。

２列に並べられた５石の上部から墓道にかけては、約 1.8m の範囲に渡り閉塞石が多量に検出された。山形に雑然と積まれており、最頂部は床面から 0.95m 程度の高さに達する。墓道内の閉塞石は、墓道底面から 20㎝ほどの高さまで土を充填し、その上に積み上げられている。これらの状況から５石は閉塞石の最下段に当たると思われるが、梱石状の石材と大きさや形状が近い点や、墓坑底面に密着し南壁のラインに合わせてきれいに並べられている点などから、初葬時に設置されたものと考えたい。

【床面】

礫床が確認されたが、盗掘や木の根による撹乱、天井石や側壁の崩落による影響を受けて荒れており、側壁から崩落した小礫と敷石との判別も非常に難しかった。確実に面として把握できた礫床は１面であり、断面図からも複数の面に分層することは困難である。ただし玄室中央付近を境として、床面の造作には違いが認められた。

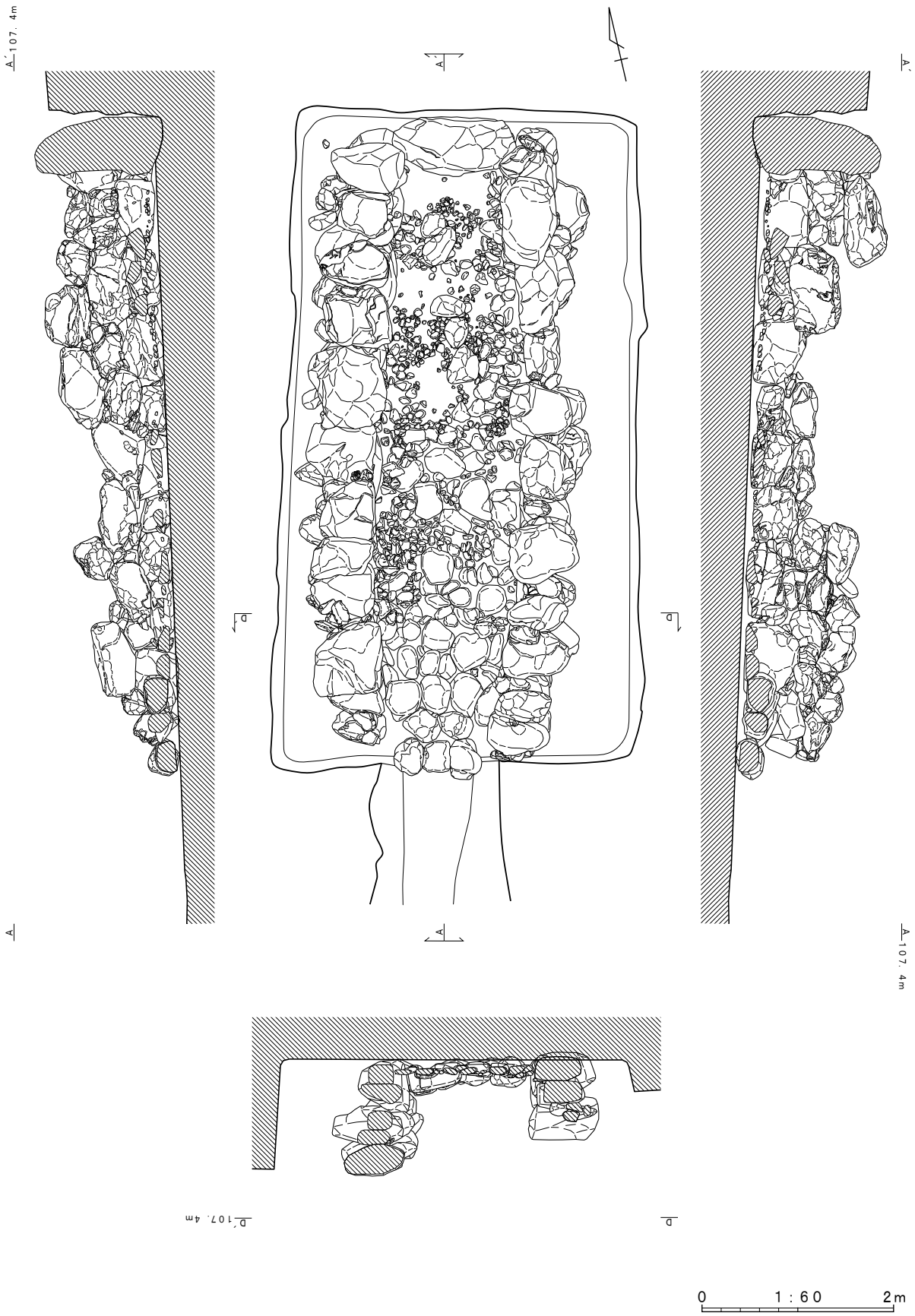
基本構造としては、粘性の強い黄褐色土による薄い貼床（６層）を梱石状の石材が設置されたところまで施し、その上に奥壁から約 4.6m の範囲まで拳大の小礫を敷き詰めている。玄室中央より奥壁側は、手前側に比べ小さな礫が密に敷かれているようにも見えるが、天井石や側壁の崩落に伴って寄せ集められている影響もあり判然としない。開口部側は、小礫の施されなかった入口付近に 25㎝～ 45㎝程度の扁平な礫を敷き詰め、玄室中央寄りの部分にも 40㎝以上の扁平な礫を敷いている。これらの礫は小礫の無い部分を埋めるように置かれていることから、追葬時に補われた可能性がある。

奥壁側の小礫上には、30㎝以上の石材５石が直線的に並んでおり、棺台として用いられていた可能性が高い。またその右側から玄室中央付近にかけては、敷石よりやや大きい礫が帯状にまとまっている。これらは何かを囲っていたような形状を呈していることから、棺を固定する役割を果たしていたのかもしれない。棺台と想定される石材は本来の位置を移動していると思われるが、この状況から棺はおそらく左側壁寄りの位置に設置されていたものと推測され、丁寧な造作からは初葬時に伴う棺であったことがうかがえる。開口部側の玄室中央寄りでも 40㎝以上の大きな石材が検出されているが、追葬時に棺台として機能していたものかは不明である。このように床面の造作からも、玄室中央を境に意識的な空間区分が行われていた状況が見えてくる。

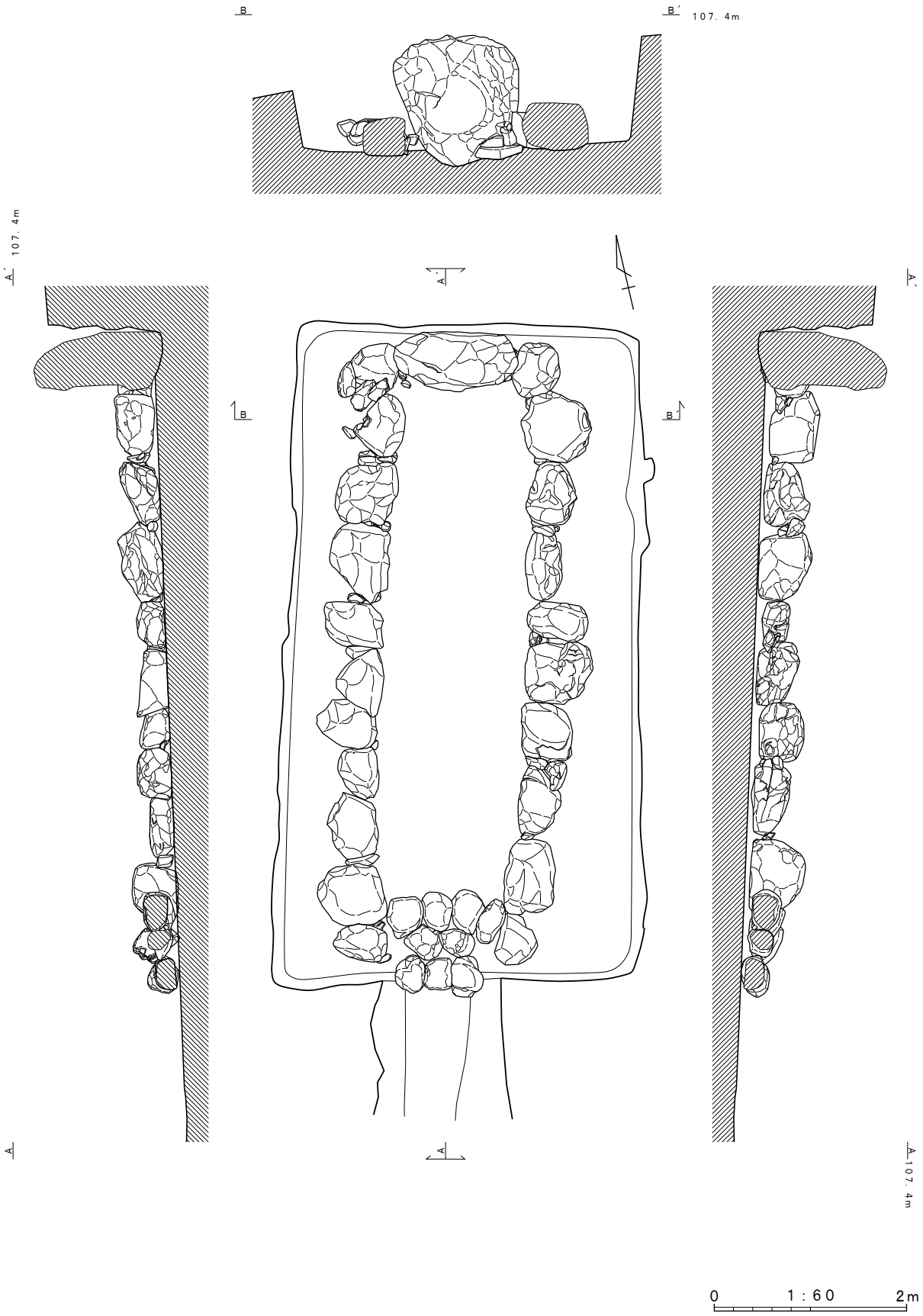
ｄ．遺　物（第 215 図・第 217 図～第 222 図）

【遺物検出状況と副葬位置】

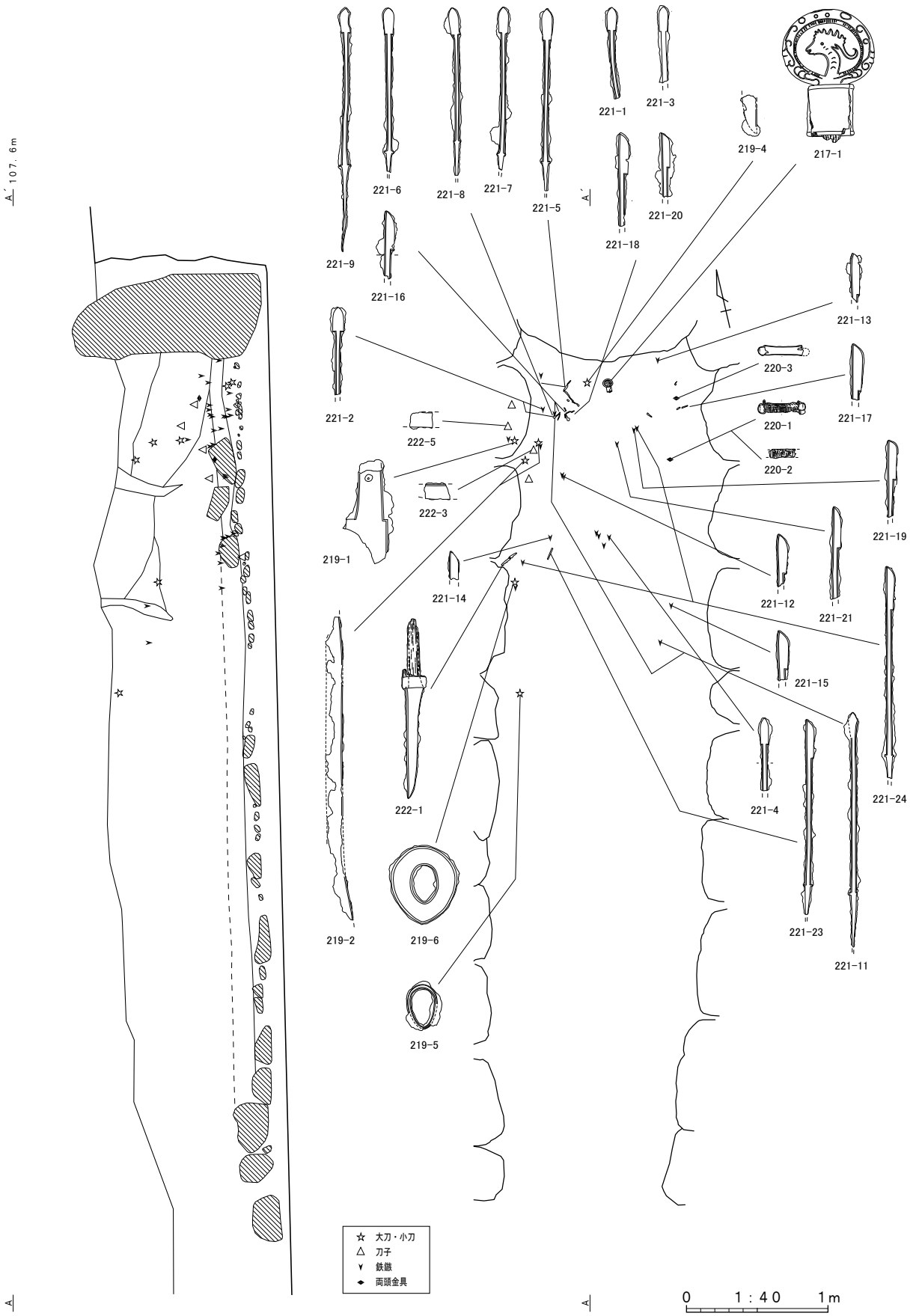
埋葬施設内部から検出された遺物はすべて金属製品で、単鳳環頭大刀の柄頭（第 217 図１）と刀身の一部と思われる破片（第 219 図１）、小刀の刀身（第 219 図２～４）とそれに伴うと思われる鏃（第 219 図５）と鐔（第 219 図６）、飾り弓の両頭金具３点（第 220 図１～３）、鉄鏃 62 点（第 221 図１～ 46）、刀子５点（第 222 図１～５）が出土した。その大半は覆土中に巻き上げられて床面から浮いた状態で発見され、本来の副葬品組成は不明である。これらはすべて中央より奥壁側に分布しており、奥側に埋葬された被葬者に伴う副葬遺物である可能性が高い。奥側が遺骸安置空間として強く意識され



第 213 図　芝荒 2 号墳 石室展開図（閉塞石なし）



第 214 図　芝荒２号墳 基底石・墓坑実測図



第 215 図　芝荒 2 号墳 遺物検出状況図

ていたとするならば、これらの遺物は初葬時と早い段階の追葬に伴うものといえる。また、全体的に分布が左側壁側に寄っているが、盗掘の影響や天井石・側壁の崩落によって移動している可能性が高く、本来の副葬位置を特定することは困難である。

単鳳環頭大刀は、柄頭が奥壁手前中央付近の礫床上、刀身の一部と思われる破片が左側壁寄りの覆土内で発見された。柄縁以下の拵えや刀身の大部分は失われており、盗掘時に持ち出された可能性が高い。柄頭の出土位置から、棺と奥壁の間の空間に納められていたものと想定される。

小刀の刀身とそれに伴うと考えられる鎹・鐔および刀子は、おもに左側壁寄りの覆土内で検出されたが、本来の副葬位置からは移動している可能性が高い。鉄鏃は、折れた状態で中央より奥壁側の全面に散在しており、接合作業を進めた結果、総数は 46 点に絞り込まれた。鏃身部の数から少なくとも 24 本が副葬されていたと考えられるが、鏃身部の形態による分布の差は見られず、本来の副葬位置も不明である。両頭金具は右側壁寄りの覆土内にまとまっており、本来の副葬位置に近い可能性がある。

後述するように、編年的位置付けから単鳳環頭大刀は初葬に伴うものと考えられるが、その他の遺物は年代的にやや下る可能性が高く、追葬に伴うものと理解される。しかし、上記の検出状況から追葬状況や本来の副葬品組成を想定することは難しい。

【金属製品】

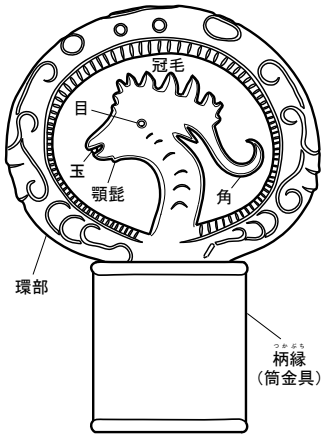
単鳳環頭大刀（第 217 図・第 218 図・第 219 図 1 ）

〈概要〉　舌や歯を持たずに玉を噛んだ中心飾の姿は鳳凰を表現したものと考えられることから、本例は「単鳳環頭大刀」に分類される。柄頭本体と柄縁の筒金具がほぼ完存しており、佩表側と考えられる面を上にした状態で礫床上に遺存していた。また、覆土内で見つかった刀身の一部（第 219 図 1 ）は、重量感のあるしっかりとした造りで、刀身の幅が 3.0㎝と広いことから、単鳳環頭大刀の刀身であると推測される。その他に、本例と関係する遺物は検出されておらず、刃部の大半および鞘は盗掘時に持ち出された可能性が高い。従って、全長や筒金具以下の拵えについては不明である。柄頭および筒金具は緑青の進行が著しいものの、中心飾には鍍金が広く残されている。また、発見当初の筒金具は細かく割れてしまっていたが、保存・修復作業により元の形状がほぼ復元できた。筒金具の内部には木柄が残されており、木柄と柄頭の茎に目釘が打ち込まれている。

以下に詳細な観察結果を記載する。柄頭の実測図は筒金具を装着した状態を基本とし、筒金具の一部を外して内部の木柄を露出させた図と柄頭のみの図を加えて示した。環部文様は緑青により把握が困難な状況であったが、目視による観察に加え、３次元レーザースキャナーによる画像や写真画像を用いてできるだけ詳細な図を描くよう努め、併せて平面展開図を記載した。平面に展開したことでやや正確性を欠くため、あくまで文様構成を把握するための模式図とし、文様が不明瞭な部分についても復元的に示している。柄頭のみの図には、X 線透過写真により判明した製作技法に係わる痕跡を表現した。

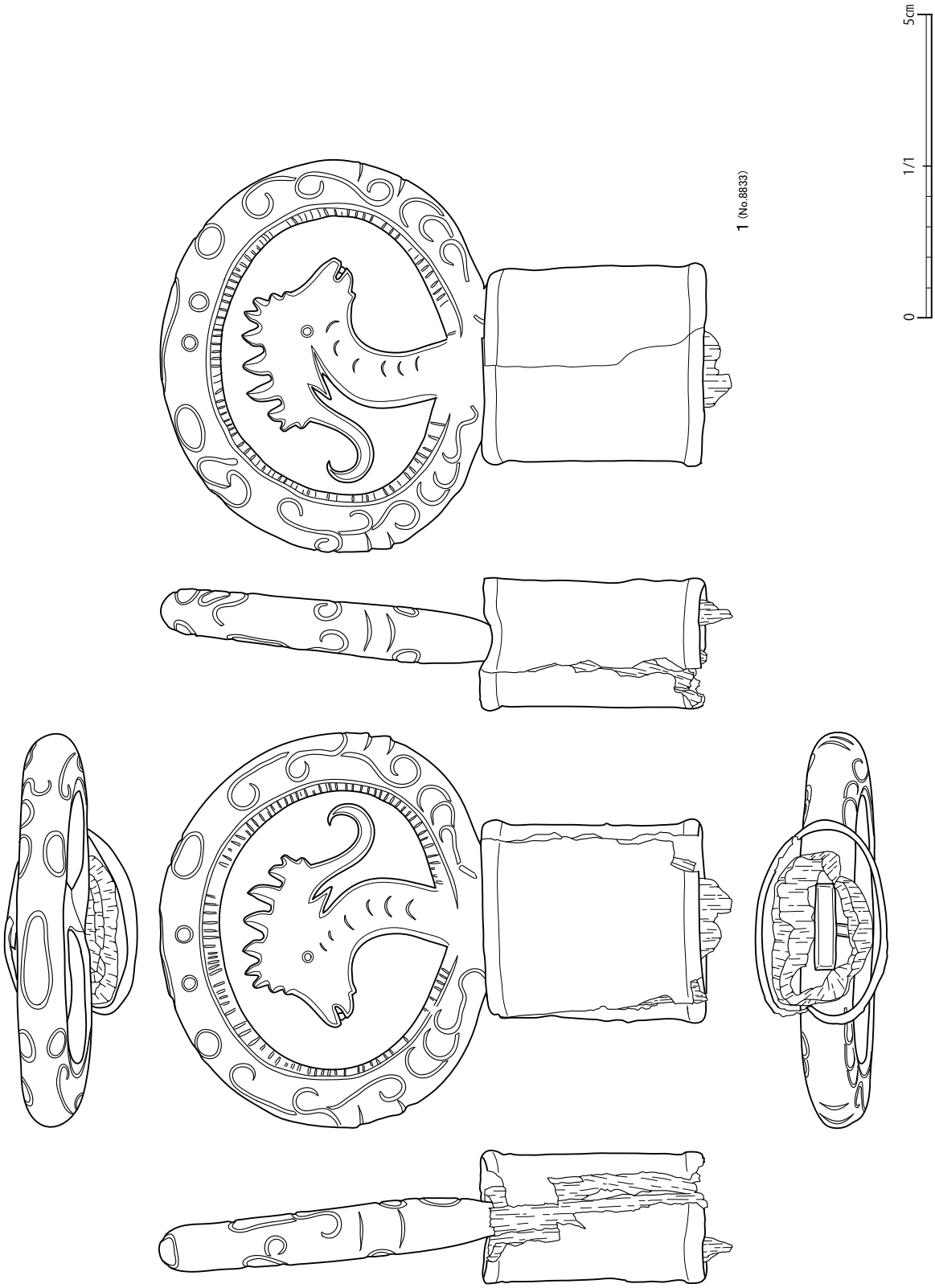
〈鳳凰頭部〉　鳳凰頭部は 0.2㎝～ 0.4㎝程度の薄い板状で、角側に向かって厚さを減じる。立体感は薄れ、浅い線刻により非常に平面的に仕上げられている。細部の表現は簡略化されてシンプルな造形となる一方、従来の鳳凰には見られない独特な変化も認められる。全体として鳳凰の形を捉えてはいるが、本来の姿とは大きく異なる特異な形態といえよう。

目とその周辺：目は直径 1 ㎜程の円形の浅い彫り込みで表現される。眉は無く、線刻などを用いて目の周辺を立体的に表現する意図も見られない。

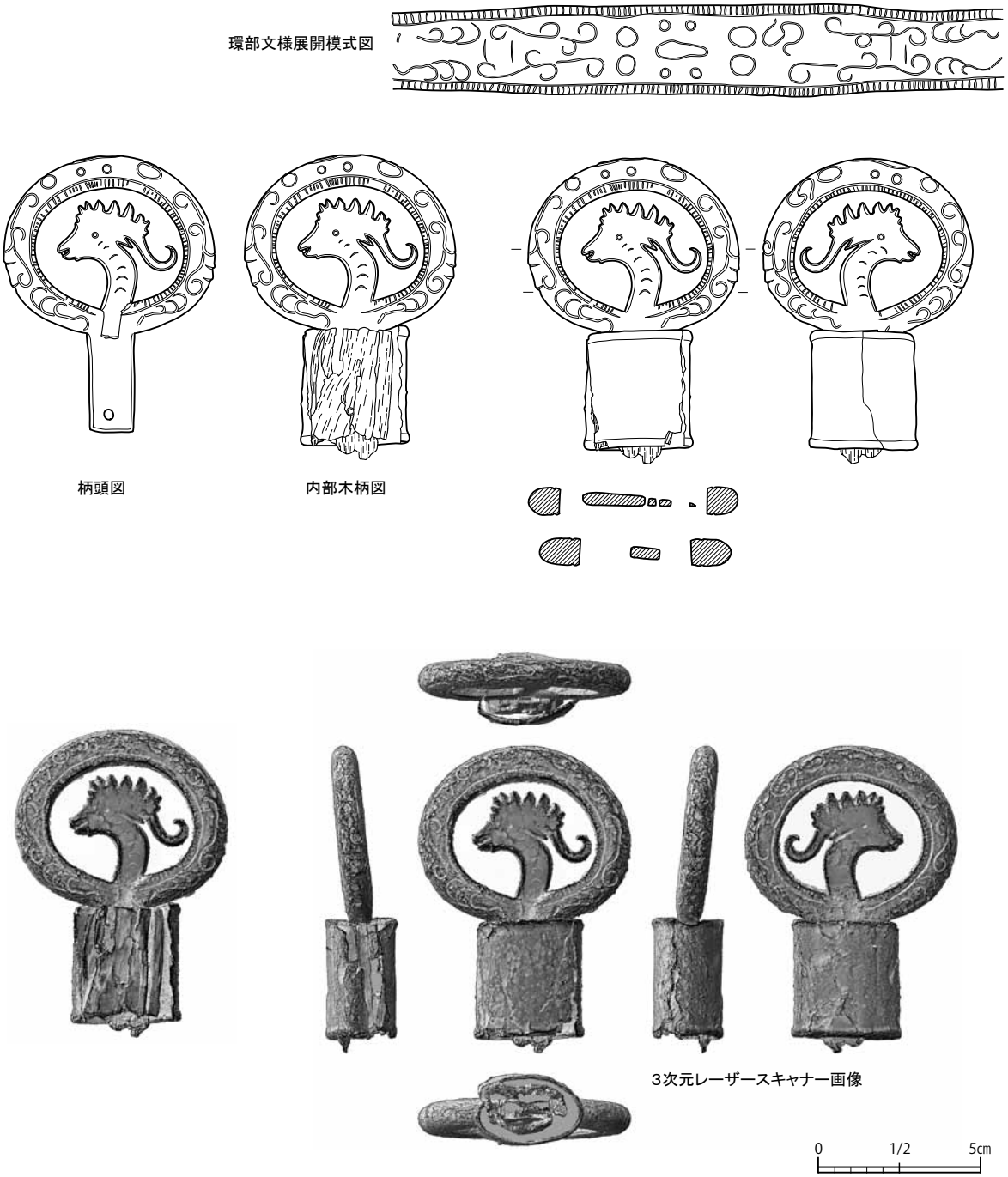


第 216 図　単鳳環頭柄頭部分名称

耳：本来、目の後ろに見られるはずの耳のような表現は認められず、首と角の間から角のような突起が突出する。
口：非常に小さいが嘴状に表現され、わずかに開いた嘴の間に玉を噛んでいる。玉は縦長の楕円形状を呈し、直径１㎜程度しかないため目を凝らさないと確認できないほどである。
顎髭：わずかに突出する程度であるが、嘴のすぐ後方に表現される。
冠毛：額から角の手前にかけて、頭頂部には 10 本の突起が伸びている。大きく長めに表現された中央の３本が本来の冠毛に対応するものと思われ、１本１本の形状が丁寧に造り出される。額付近の４本と角手前の３本は短く、形状も毛というよりトサカのようである。
角：先端は非常に薄手だが綺麗に尖り、しっかりと巻き上がっている。
首：鱗を表現したと考えられるＵ字状の文様が、目の下から一列に刻まれる。全部で６か所に確認できるが、表と裏では位置や大きさにばらつきがある。
　このように観察していくと、細部には省略化が見られ、本来の形状から変化を遂げている部位が認められるものの、鳳凰が本来持つべき要素を大きく失っているわけではないことがうかがえる。
〈**環部走龍文**〉　単龍鳳環頭大刀の環部には本来、２匹の龍を表現した走龍文が表現される。しかし本例の環部は、到底、龍の姿を現したようには見えず、非常に簡略化された意味不明の文様で構成されている。その表現手法は、すべて幅１㎜以下の非常に細く浅い沈線によるもので全く立体感がなく、左右２か所の浅い刻み部分だけが、わずかに段状を呈する。文様構成を見ると、中央付近に楕円形状の文様を配し、円形状、蕨手状、Ｓ字状の文様が多用される。一見すると、中央の楕円形を中心に背中合わせの文様構成となっているように思われるが、細部には差異が認められ、単純な対称関係ではないことがわかる。内側には細かい刻み目が入れられているが、緑青により不明瞭な部分が多い。
〈**製作技法**〉　環部、鳳凰頭部とも銅製の鍍金仕上げであるが、Ｘ線透過写真の観察から、環部と鳳凰頭部を別々に鋳造して接合した「別鋳式」であることが判明した。環部に設けられた長方形状の枘穴は茎との境界付近まで達し、そこに別造りの鳳凰頭部が嵌め込まれる。枘穴付近の環部は押し潰されたように厚みを減じており、佩表側では内側の刻み目が潰れて見えにくい状態となっている。また鳳凰頭部は真横を向かず、わずかに曲がった状態である。これらは、嵌め込んだ鳳凰頭部が枘穴から抜け出ないよう最終的に処置を施した影響によるものであろうか。
〈**表現様式**〉　鳳凰頭部は 0.2㎝～ 0.4㎝程度の板状で、正面から見ると冠毛をやや立体的に表現する以外は平面的に仕上げられる。目と首の鱗状文を線刻で刻むが非常に浅く、単純な沈線による表現となっている。環部も鳳凰頭部と同様の浅く細い沈線で文様を刻み、半肉彫りのような彫りの深さによる立体表現は見られない。
〈**柄縁**〉　柄縁には上下端を折り返して肥厚させた玉縁の筒金具が装着され、責金具は伴わない。筒金具は金銅板を筒状に折り曲げたもので、断面は楕円形を呈する。現状では、内部に遺存する柄木が浮き上がっている影響で元の形状を完全に復元することができず、刃側が浮いた状態となっている。佩裏側には金銅板を折り曲げた際の接合部が観察された。また、柄頭の茎と柄木には銅製と思われる目釘が打ち込まれており、その状態から佩表と佩裏を判断した。筒金具には、柄頭環部の茎のみを挿し込んでいる。
〈**刀身**〉　第 219 図１は、刀身の幅が 3.0㎝と幅広く、しっかりした造りであることから、単鳳環頭大刀の刀身であると推測される。関を含めた茎部と刃部の一部が残存しており、残存値は 7.2㎝、そのうち刃部長は 3.2㎝、茎部長は 4.0㎝で、棟の厚さは 0.7㎝を測る。関は直角両関、茎は茎尻に向かってやや幅が狭まっていく形状で、切先と茎尻の形状は不明である。関から３㎝の位置には目釘孔が穿たれている。
〈**位置付け**〉　本例は鞘の拵えが不明であるため、柄頭の製作技法や規格、表現様式と柄縁金具の形態

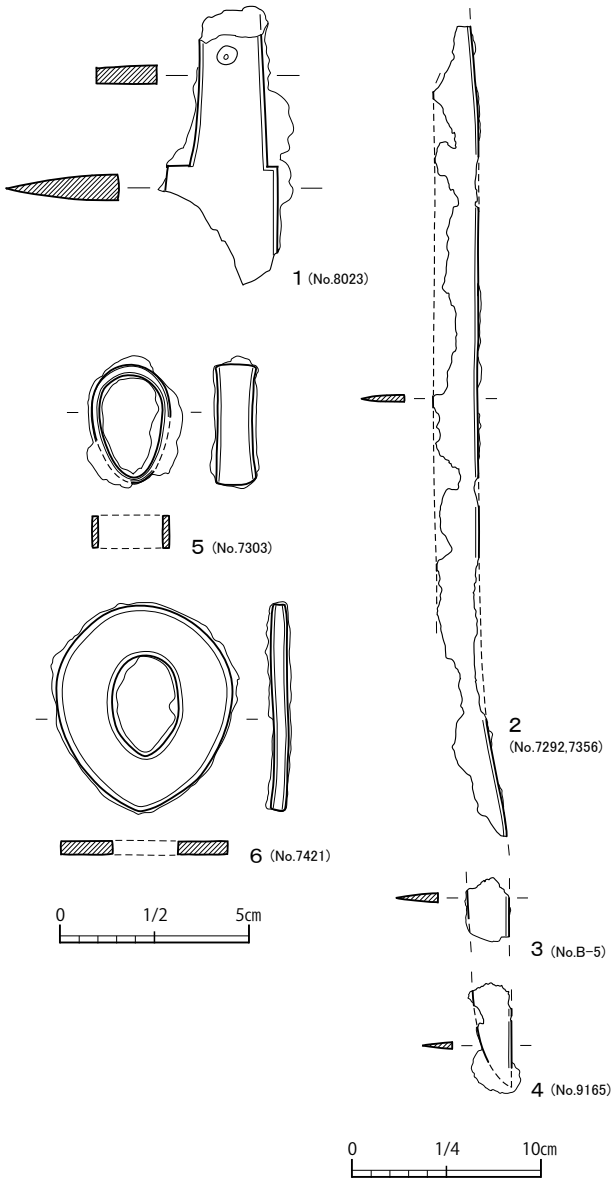


第 217 図　芝荒 2 号墳出土 金属製品実測図（1）単鳳環頭大刀柄頭①

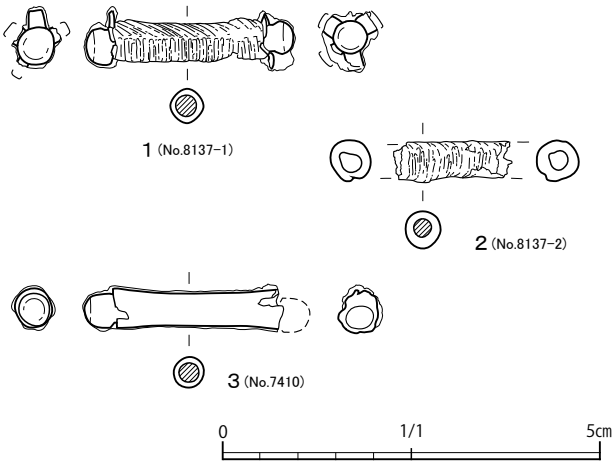


第 218 図　芝荒 2 号墳出土 金属製品実測図（2）単鳳環頭大刀柄頭②

に着目し、新納泉による編年（新納 1982・1987）と対比させる。まず柄頭の製作技法に着目すると、すべてが鍍金による金銅製となるのは新納Ⅳ式からとされる。また幅 6.5㎝という大きさは、新納Ⅴ式に多く生産された製品と規格が類似している。さらに表現様式や意匠のうえで、鳳凰頭部および環部の造形が平面的となり、細部が簡略化されて文様の退化が認められる点は、新納Ⅴ式以降、顕著に現れる変化といえよう。次に柄縁金具に着目すると、玉縁の筒金具を用い、責金具を伴わなくなるのは新納Ⅴ式からとされ、環部の茎のみを筒金具に挿し込む例はやはり新納Ⅴ式から多く見られるものである。製作技法（別鋳式）や文様の崩れという面では、新納Ⅵ式に位置付けられる富士市船津古墳例が類似しており、製作工房も含めた近似性が見出せる。以上の要素を総合すると、本例は新納Ⅴ式以降（TK43 型



第 219 図　芝荒２号墳出土 金属製品実測図（３）大刀・小刀



第 220 図　芝荒２号墳出土 金属製品実測図（４）両頭金具

式期～ TK209 型式期古相）に位置付けるのが妥当であろう。佩用方法や柄縁金具以下の装具が明らかではないことから、さらに詳細な時期を絞り込むことは困難であるが、新納Ⅵ式よりⅤ式に近い要素が目立つように思われる。

小刀（第 219 図２～６）

２～４は全長 60㎝以下の小刀の刀身である。それぞれ覆土内から発見されたが、刃がほとんど欠けた状態で佩表側に大きく反り返るなど遺存状況は非常に悪く、元の形状を想定することが難しい。接合することはできなかったが、４は切先、３はその手前付近の破片と考えられ、刃側には関と思われる屈曲が認められた。規模と形状から、５と６に示した鏻と鐔を装着していた可能性が高い。

５、６は鉄製の鏻と鐔で、ともに２の小刀に装着されていたものと考えられる。鏻は平面形が倒卵形を呈し、装着した際の長さは 1.0㎝、幅 3.1㎝を測る。鐔は長軸長 5.5㎝、短軸長 4.6㎝を測る小型の無窓鐔である。平面形は倒卵形を呈し、切先側の先端がわずかに尖る。長軸と短軸の差が１㎝以下で、最大幅（短軸長）は長軸の中心にある。

〈**位置付け**〉　時期を想定することは難しいが、静岡県内における鉄製板鐔の分類と編年（西沢 2002）を参考に鐔の形態から時期を推測してみると、長軸と短軸の差が１㎝以下の正円形状を呈し、最大幅が長軸の中心にある点で、無窓鐔Ａ類に最も類似している。県内におけるこの形態の鐔は TK43 型式期段階から安定的に出土し、TK209 型式期段階以降は数が次第に減少するとされる。本例は小型鐔であるが、編年的位置付けを考えるうえで参考となるであろう。

弓金具（第 220 図１～３）

鉄製の両頭金具が３点出土した。半球状の頭部を持った鉄棒の周りに薄い鉄板を巻いた構造で、芯棒の左右頭部が遺存する１を参考にすると全長は 2.8㎝前後を測ると推測され、直径は 0.5㎝程度に達する。１は筒状金具の両端に切り込みを入れて折り曲げ花弁状にする様子が観察でき、残存状況から方形状の花弁を５弁有し

ていたものと思われる。２は芯棒の左右頭部、３は片側の頭部を欠損し、ともに花弁を観察することは困難であった。筒状金具の断面形状は１が正方形に近く、２・３は円形を呈する。また、１・２の筒状金具の表面には木目が認められ、軸に直交する木目の残る面と、木目が斜めに乱れる面がそれぞれ向かい合っていた。

〈位置付け〉　出土した両頭金具は、規模・形状とも県内で一般的に見られる事例に類似していた。静岡県内における飾り弓の副葬は、遠江Ⅲ期中葉～後葉段階から認められ、遠江Ⅳ期前半段階には県内全域に広がり、Ⅳ期後半段階まで継続して副葬される（井鍋 2003）。東駿河の出土事例を見ると、遠江Ⅲ期後葉～遠江Ⅳ期前半段階（TK209 ～ TK217 型式期）を中心に副葬されていることから、本例も同様の時期に位置付けられるものであろう。従って、これらは追葬時に副葬されたものと考えられる。

鉄鏃（第 221 図１～ 46）

接合作業を進めた結果、総数を 46 点に絞り込むことができたが、鏃身部から茎部先端まで遺存するものは少ない。これらのうち鏃身部が確認できるものは 24 点、茎関の遺存するものは 17 点出土していることから、副葬本数は少なくとも 24 本に達したことが推測される。錆の進行が著しく形状の不明瞭なものが多いものの、すべて尖根式鏃に分類されると考えられ、鏃身部の形態は柳葉式、鑿箭式、片刃箭式の３種類が確認できた。その内訳は片刃箭式が 13 点と最も多く、次いで柳葉式が９点、鑿箭式が２点である。頸部は幅 0.4㎝～ 0.5㎝程度、厚さ 0.2㎝程度と細く薄い華奢な造りで、断面形状は長方形を呈する。茎関が確認できたものはすべて棘関で、頸部から 1.5㎜～ 2.0㎜ほど突出するが、突起部の形状がやや曖昧となり山形を呈するものも認められた。茎部には一部で矢柄の木質やその痕跡が観察される。なお、本報告書内で用いる鉄鏃の名称や分類、編年については、大谷宏治の整理（大谷 2003）を基準とする。

柳葉式（第 221 図１～９）

９点が確認された。鏃身先端部から鏃身関にかけてほぼ直線的に垂下するもので、鏃身部の断面形状は片丸造、鏃身関は直角関である。鏃身部は長さ 1.8㎝前後、幅 0.8㎝前後と小振りで、２は鏃身関にかけてややハの字状に開き、４はフクラの張りが弱いものの、形状に大きな違いは見られない。９は出土した鉄鏃のなかで唯一、鏃身先端部から茎先端部までが遺存し、全長が 17.2㎝と判明する。

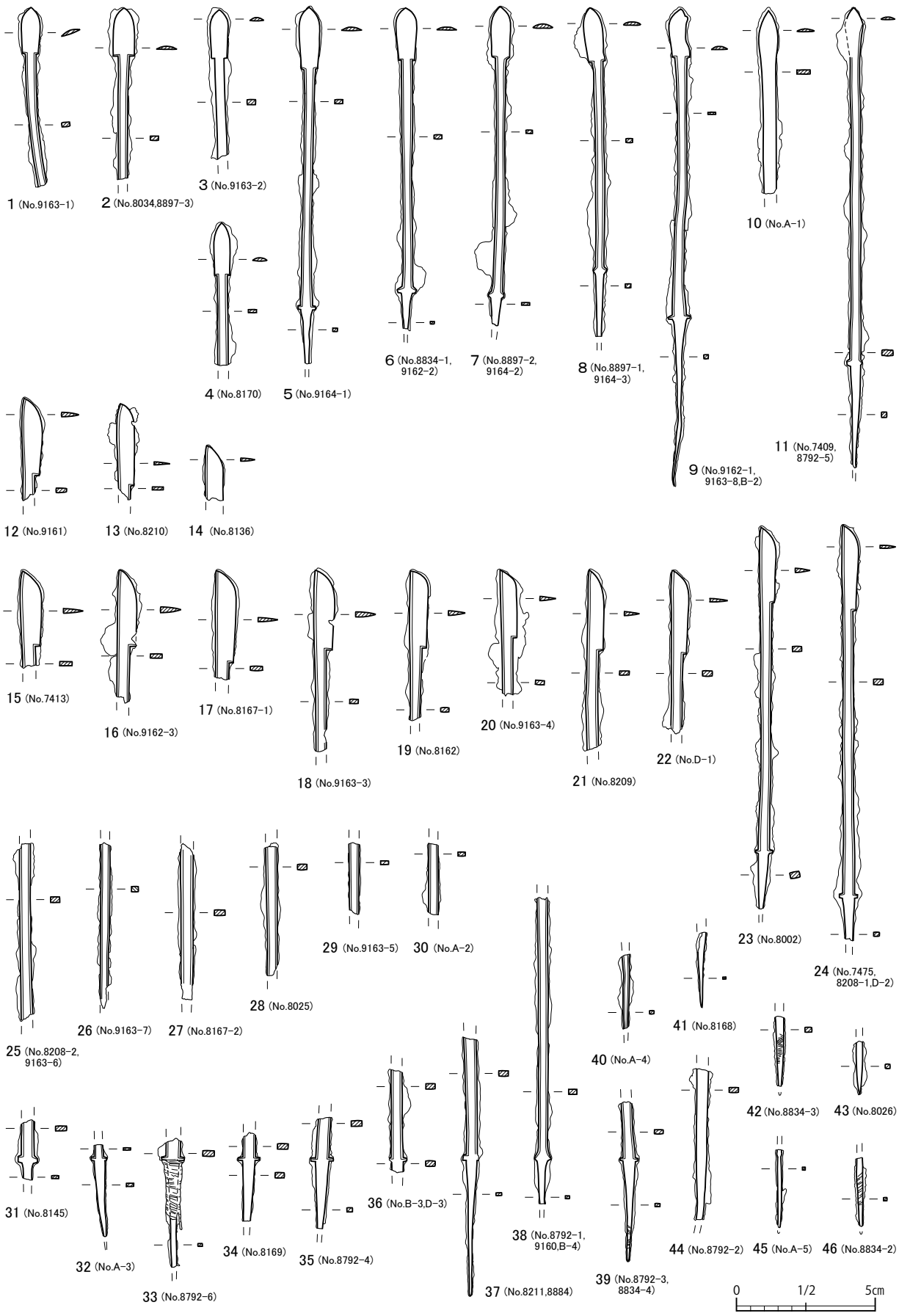
鑿箭式（第 221 図 10・11）

２点が確認された。鏃身部と頸部に明瞭な境を持たない無関のもので、幅 0.7㎝の小振りな鏃身部の先端から 0.7㎝前後の長さを刃部として研ぎ出す。鏃身部の断面形状は片丸造で、11 は頸部から刃部への移行部分に明瞭な屈曲を有するが、10 はなだらかな弧を描いている。11 は茎末端部を欠損するもののほぼ全体の形状が確認でき、残存長は 16.6㎝を測る。

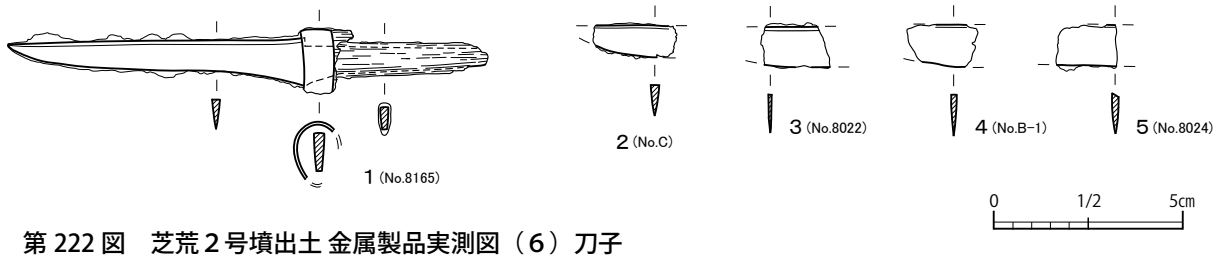
片刃箭式（第 221 図 12 ～ 24）

13 点が確認された。刀子状に鏃身部の片側のみに刃部が形成されたもので、鏃身部の断面形状は平造、鏃身関は直角関である。すべて鏃身先端部から鏃身関にかけて刃部を砥ぎ出す共通の形態を有するが、鏃身長は 2.6㎝～ 3.3㎝とやや幅が認められた。13・14・20 ～ 24 のように鏃身幅が 0.6㎝程度の細身でフクラの張りがそれほど目立たないものが多く、12・15・17 のようにやや強く張ったフクラから鏃身関に向かい幅を減じて垂下するものも含まれる。最も残存状況の良い 24 で、残存長 15.0㎝を測る。

〈位置付け〉　確認された茎関がすべて棘関であることから、TK43 型式期以降に位置付けられる。鏃身部の形態を見ると、柳葉式は MT15 型式期から主要組成に加わり TK209 型式期まで主要な位置を占め、鑿箭式と片刃箭式は TK43 型式期から主要組成に加わり、TK217 型式期になっても主要形態として副葬される。さらに片刃箭式では、TK217 型式期になると鏃身関が無関のものや鏃身先端部が裁断されたままの鋭角なものが増加するとされる（大谷 2003）。本例は、全体を通して鏃身部が小振りで頸部



第 221 図　芝荒２号墳出土 金属製品実測図（５）鉄鏃



第 222 図　芝荒 2 号墳出土 金属製品実測図（6）刀子

が細身である点が共通し、鏃身形態以外に大きな個体差は認められなかった。従って柳葉式と鑿箭式・片刃箭式に時期差はなく同時に副葬されたものと考えられる。柳葉式の多さや、片刃箭式の形態などは、TK217 型式期以前に位置付けられる可能性を示しているが、全体的に華奢な造りを示す点で TK217 型式期まで下る可能性が高い。従ってこれらは追葬時に副葬されたものと考えられ、TK209 型式期～TK217 型式期に位置付けるのが妥当と思われる。

その他（第 221 図 25 ～ 46）

鏃身部を欠損した尖根式の頸部～茎部にかけて部位のもので、25 ～ 30 は頸部、31 ～ 39 は頸部～茎部にかけて、40 ～ 46 は茎部である。

23～39は茎関が遺存しており、いずれも棘関の形態を呈し、突出幅は 1.5㎜～ 2.0㎜程度である。また、33・39・42・46 には矢柄の木質痕が遺存している。

刀子（第 222 図 1 ～ 5）

全体形状の判明する 1 点（1）と、刀身部の破片 4 点（2 ～ 5）の合計 5 点が出土しており、少なくとも 4 点が副葬されていたと考えられる。 1 は鉄製柄縁金具が装着された刀子で、切先から茎尻まで遺存するものの、切先が痩せ細って刃部は大きく内湾していることから、研ぎ減りした可能性が高い。刃部側は撫関、棟側は直角関で、茎尻は丸く仕上げられる。柄縁金具は半分ほど欠損するが、長軸長 1.7㎝、短軸長 1.3㎝前後を測り、断面倒卵形を呈するものと推定される。

第 98 表　芝荒 2 号墳出土 単鳳環頭大刀・小刀観察表

図版No.	種別	遺物No.	部位		材質	製作技法	平面・断面形状	全長（㎝）	長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	備考
217-1	単鳳環頭大刀	8833	柄	柄頭中心飾	金銅製（鍍金）	別鋳式		9.0	4.2	3.7	0.2～0.4	
				柄頭環部	金銅製（鍍金）				5.5	6.5	1.0	
				柄頭茎部					3.0	1.4	0.3	茎のみを筒金具に挿し込む
				柄縁金具	金銅製（鍍金）	端部を内側に折り返し、肥厚させる	楕円形		3.6	3.2	0.1	断面形が楕円形を呈する玉縁の筒金具
219-1		8023	刀身	全長	鉄製			(7.2)	—	—	—	
				刀部			二等辺三角形		(3.2)	3.0	0.7	切先形状不明
				茎部			長台形		(4.0)	2.0	0.5	関形状：直角両関
				目釘	銅製？		円形		1.5	0.2	0.2	
219-2	小刀	7292 7356	刀身部～茎部		鉄製		二等辺三角形		(43.2)	2.4	0.4	関形状：片関（刃部側撫関）
219-3		B - 5	刀身部		鉄製		二等辺三角形		(3.4)	2.2	0.4	小刀 1 の切先側刀身部？
219-4		9165	刀身部		鉄製		二等辺三角形		(5.5)	2.1	0.3	小刀 1 の切先？
219-5		7303	鎺		鉄製		倒卵形		1.0	3.1	0.2	測定値は小刀に装着した際の方向で計測 小刀 1 に伴う？内孔長軸 2.6㎝、断面は長方形
219-6		7421	鐔		鉄製		倒卵形		5.5	4.6	0.4	鎺とともに小刀 1 に伴う？内孔長軸 2.6㎝ 断面は長方形

第 99 表　芝荒２号墳出土 鉄鏃観察表

図版No.	遺物No.	部 位	鏃身形状	鏃身断面	茎関形状	全長（cm）	鏃身部			頸 部			茎 部			備 考
							長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	
221-1	9163-1	鏃身部～頸部	尖根柳葉式	片丸造		(6.5)	1.7	0.7	0.2	(4.8)	0.4	0.2	—	—	—	
221-2	8034・8897-3	鏃身部～頸部	尖根柳葉式	片丸造		(6.2)	1.8	0.9	0.1	(4.4)	0.4	0.2	—	—	—	
221-3	9163-2	鏃身部～頸部	尖根柳葉式	片丸造		(5.5)	1.8	0.6	0.2	(3.7)	0.4	0.2	—	—	—	
221-4	8170	鏃身部～頸部	尖根柳葉式	片丸造		(5.0)	1.7	0.7	0.1	(3.3)	0.4	0.2	—	—	—	
221-5	9164-1	鏃身部～茎部	尖根柳葉式	片丸造	棘関	(12.9)	2.3	0.7	0.2	8.6	0.4	0.2	(2.0)	0.3	0.2	茎関突出 1.5㎜
221-6	8834-1・9162-2	鏃身部～茎部	尖根柳葉式	片丸造	棘関	(11.7)	1.9	0.9	0.1	8.4	0.4	0.2	(1.4)	0.3	0.2	茎関突出 2㎜
221-7	8897-2・9164-2	鏃身部～茎部	尖根柳葉式	片丸造	棘関	(11.5)	1.9	0.7	0.2	8.6	0.4	0.2	(1.0)	0.4	0.1	茎関突出 1㎜
221-8	8897-1・9164-3	鏃身部～茎部	尖根柳葉式	片丸造	棘関	(11.9)	1.9	0.7	0.2	7.6	0.4	0.2	(2.4)	0.3	0.2	茎関突出 1.5㎜ 突起の形状が山形
221-9	9162-1・9163-8・Ｂ－２	鏃身部～茎部	尖根柳葉式	片丸造	棘関	17.2	1.8	0.7	0.2	9.4	0.4	0.2	6.0	0.4	0.2	茎関突出 2㎜
221-10	Ａ－１	鏃身部～頸部	尖根鑿箭式	片丸造		(6.7)	0.8	0.7	0.1	(5.9)	0.5	0.2	—	—	—	
221-11	7409・8792-5	鏃身部～茎部	尖根鑿箭式	片丸造	棘関	(16.6)	0.6	0.7	0.2	12.4	0.4	0.2	(3.6)	0.3	0.2	茎関突出 2㎜
221-12	9161	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(3.7)	2.8	0.7	0.2	(0.9)	0.4	0.2	—	—	—	
221-13	8210	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(3.5)	3.0	0.6	0.1	(0.5)	0.4	0.2	—	—	—	
221-14	8136	鏃身部	尖根片刃箭式	平造		(2.0)	(2.0)	0.6	0.1	—	—	—	—	—	—	
221-15	7413	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(3.5)	2.7	0.8	0.2	(0.8)	0.5	0.2	—	—	—	
221-16	9162-3	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(4.8)	2.8	0.7	0.2	(2.0)	0.5	0.2	—	—	—	
221-17	8167-1	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(4.0)	3.3	0.7	0.2	(0.7)	0.5	0.2	—	—	—	
221-18	9163-3	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(6.6)	2.9	0.7	0.2	(3.7)	0.4	0.2	—	—	—	
221-19	8162	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(5.4)	2.8	0.7	0.2	(2.6)	0.4	0.2	—	—	—	
221-20	9163-4	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(4.6)	2.6	0.6	0.2	(2.0)	0.4	0.2	—	—	—	
221-21	8209	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(6.5)	3.0	0.6	0.2	(3.5)	0.4	0.2	—	—	—	
221-22	Ｄ－１	鏃身部～頸部	尖根片刃箭式	平造		(5.9)	3.1	0.6	0.2	(2.8)	0.4	0.2	—	—	—	
221-23	8002	鏃身部～茎部	尖根片刃箭式	平造	棘関	(13.8)	2.7	0.6	0.2	9.1	0.4	0.2	(2.0)	0.4	0.2	茎関突出 1.5㎜
221-24	7475・8208-1・Ｄ－２	鏃身部～茎部	尖根片刃箭式	平造	棘関	(15.0)	3.1	0.6	0.1	10.3	0.4	0.2	(1.6)	0.4	0.2	茎関突出 1.5㎜
221-25	8208-2・9163-6	頸部	尖根式			(6.4)	—	—	—	(6.4)	0.5	0.2	—	—	—	
221-26	9163-7	頸部	尖根式			(6.0)	—	—	—	(6.0)	0.3	0.2	—	—	—	
221-27	8167-2	頸部	尖根式			(5.6)	—	—	—	(5.6)	0.4	0.2	—	—	—	
221-28	8025	頸部	尖根式			(4.8)	—	—	—	(4.8)	0.4	0.2	—	—	—	
221-29	9163-5	頸部	尖根式			(2.6)	—	—	—	(2.6)	0.4	0.2	—	—	—	
221-30	Ａ－２	頸部	尖根式			(2.6)	—	—	—	(2.6)	0.4	0.2	—	—	—	
221-31	8145	頸部～茎部	尖根式		棘関	(2.2)	—	—	—	(1.6)	0.5	0.2	(0.6)	0.3	0.2	茎関突出 1.5㎜
221-32	Ａ－３	頸部～茎部	尖根式		棘関	(3.3)	—	—	—	(0.6)	0.3	0.1	(2.7)	0.3	0.1	茎関突出 1.5㎜
221-33	8792-6	頸部～茎部	尖根式		棘関	(4.7)	—	—	—	(0.8)	0.5	0.2	(3.9)	0.2	0.1	茎関突出 2㎜ 矢柄の木質残存
221-34	8169	頸部～茎部	尖根式		棘関	(3.2)	—	—	—	(1.0)	0.4	0.2	(2.2)	0.4	0.2	茎関突出 2㎜
221-35	8792-4	頸部～茎部	尖根式		棘関	(4.0)	—	—	—	(1.6)	0.5	0.2	(2.4)	0.4	0.2	茎関突出 2㎜
221-36	Ｂ－３・Ｄ－３	頸部～茎部	尖根式		棘関	(3.8)	—	—	—	(3.4)	0.4	0.2	(0.4)	0.4	0.2	茎関突出 1.5㎜
221-37	8211・8884	頸部～茎部	尖根式		棘関	(9.4)	—	—	—	(4.4)	0.5	0.2	5.0	0.4	0.2	茎関突出 2㎜
221-38	8792-1・9160・Ｂ－４	頸部～茎部	尖根式		棘関	(11.0)	—	—	—	(9.5)	0.4	0.2	(1.5)	0.3	0.2	茎関突出 1.5㎜ 突起の形状が山形
221-39	8792-3・8834-4	頸部～茎部	尖根式		棘関	(5.8)	—	—	—	(2.2)	0.4	0.2	3.6	0.4	0.2	茎関突出 2㎜ 矢柄の木質痕残存
221-40	Ａ－４	茎部	尖根式			(2.7)	—	—	—	—	—	—	(2.7)	0.2	0.1	
221-41	8168	茎部	尖根式			(2.8)	—	—	—	—	—	—	(2.8)	0.3	0.1	
221-42	8834-3	茎部	尖根式			(2.5)	—	—	—	—	—	—	(2.5)	0.3	0.2	矢柄の木質痕残存
221-43	8026	茎部	尖根式			(1.9)	—	—	—	—	—	—	(1.9)	0.2	0.2	
221-44	8792-2	茎部	尖根式			(5.5)	—	—	—	—	—	—	(5.5)	0.4	0.2	
221-45	Ａ－５	茎部	尖根式			(2.8)	—	—	—	—	—	—	(2.8)	0.2	0.2	
221-46	8834-2	茎部	尖根式			(2.5)	—	—	—	—	—	—	(2.5)	0.2	0.2	矢柄の木質痕残存

第 100 表　芝荒２号墳出土 両頭金具観察表

図版No.	遺物No.	全長（cm）	筒状部		軸　部				備　　考
			長さ（cm）	直径（cm）	長さ（cm）	直径（cm）	頭部直径（cm）		
220-1	8137-1	2.8	2.0	0.4	2.8	0.3	0.5	0.4	方形状の花弁を５弁有すると想定される、筒状金具の断面形状は正方形に近い 筒状金具の表面に木目が残る
220-2	8137-2	(1.6)	(1.6)	0.5	(1.4)	0.3	－	－	頭部欠損、筒状金具の断面形状は円形、筒状金具の表面に木目が残る
220-3	7410	(2.7)	(2.2)	0.5	(2.7)	0.3	0.5	－	片側頭部欠損、筒状金具の断面形状は円形

第 101 表　芝荒２号墳出土 刀子観察表

図版No.	遺物No.	部　位	関形状	全長（cm）	刀身部			茎　部			備　　考
					長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	
222-1	8165	刀身部～茎部	刃関：撫関 棟関：直角関	12.7	7.7	1.3	0.2	5.0	1.1	0.2	刃部内湾、茎に木質遺存、断面倒卵形の鉄製柄縁金具を伴う
222-2	C	刀身部		(2.2)	(2.2)	0.9	0.3	－	－	－	
222-3	8022	刀身部		(1.8)	(1.8)	1.1	0.1	－	－	－	
222-4	B - 1	刀身部		(1.9)	(1.9)	1.1	0.1	－	－	－	
222-5	8024	刀身部		(1.6)	(1.6)	1.1	0.2	－	－	－	

芝荒３号墳（第 223 図～第 227 図）

ａ．検出状況

南調査区西側、標高 107.5m ～ 108.0m 付近の緩斜面上で検出された。芝荒２号墳の東側周溝内で大型礫の密集する状況が確認されたため検出作業を進めたところ、盗掘を免れたほぼ完全な状態の石室が残されていることが判明した。周溝を含めた古墳の施設が芝荒２号墳の周溝と重複する、非常に小規模な古墳である。墳丘盛土は全く残存しておらず、石室も一部は崩落していたが、天井石を含めた石室構造が容易に理解される。また、芝荒３号墳周辺の芝荒２号墳周溝覆土はやや硬く締まっており、一部で橙色スコリアを含む非常に硬い灰褐色土層が認められた。前嶋の肉眼による観察から、これは大淵スコリアである可能性が高いと考えられる。切り合い関係を見ると、埋没し溝としての機能を完全に失った芝荒２号墳の周溝を掘り込んで、芝荒３号墳の石室や周溝を構築した様子がうかがえる。

墓坑底面からは装飾付大刀、小刀、刀子が検出された。近接する芝荒２号墳と芝荒３号墳の両方に装飾付大刀が納められている状況は、２基の位置関係や構築過程と併せて互いの強い関係性を示唆するものといえよう。

ｂ．墳丘および外部施設

【墳丘】

墳丘盛土は削平され、確認できなかった。周溝の残存状況から、墳丘長は最長で 2.9m 程度と推測される。

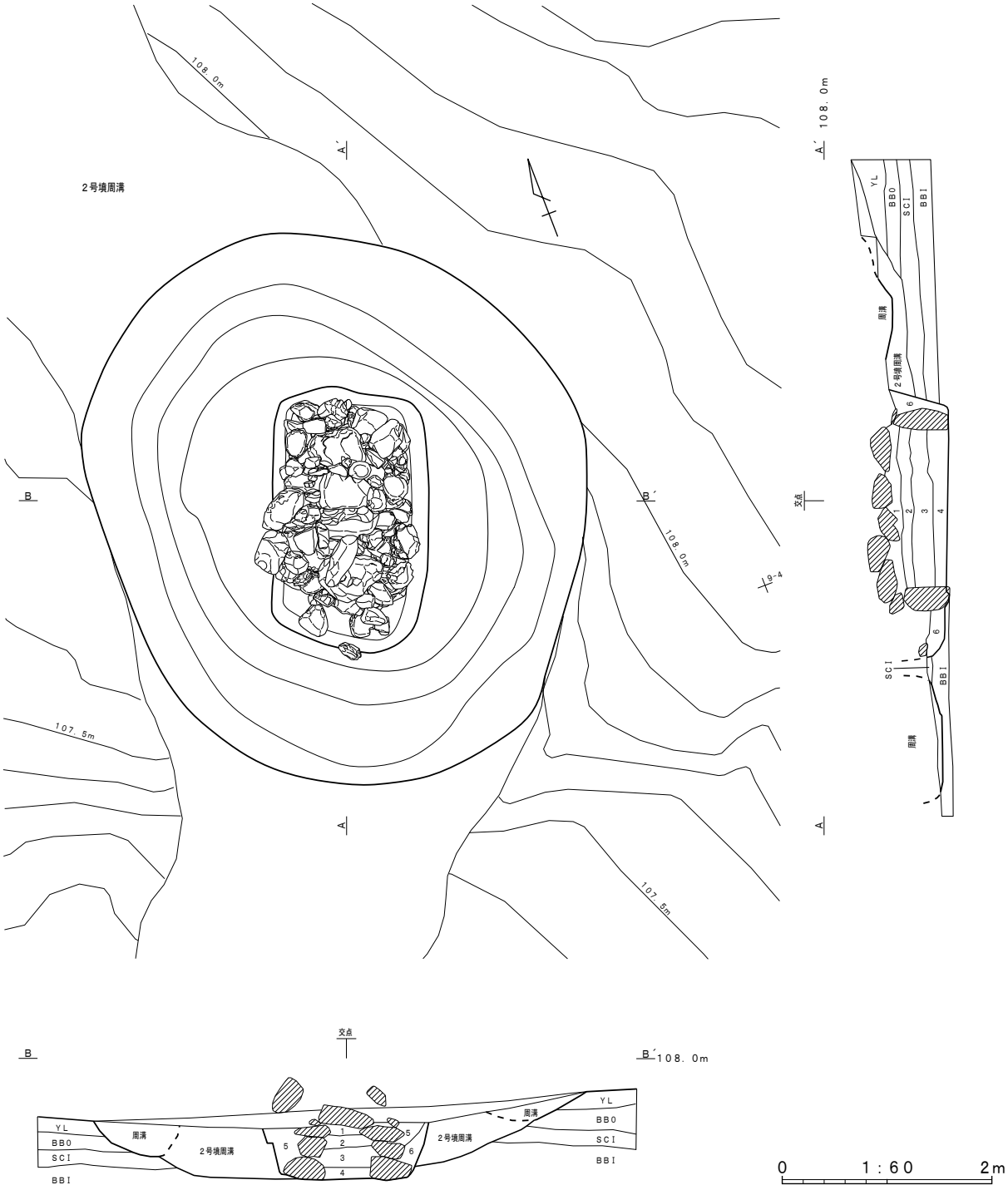
【周溝】

全周する周溝が検出されているが、芝荒２号墳の周溝検出作業に伴いプランは不明瞭である。埋没した芝荒２号墳の周溝を切って掘り込まれ、幅 0.8m ～ 1.3m、最も深いところで検出面から 0.3m を測る。断面は U 字状を呈する。

ｃ．埋葬施設

【規模・石室構造】

石室は全長 2.0m、玄室長 1.7m、玄室幅は中央付近で最大 0.5m、奥壁側と開口部側で 0.4m、平面形は長方形状を呈し、今回検出された古墳のなかで最少規模となる。主軸は N － 20°－ E で、開口部



1 層　10YR3/2（黒褐色土）　粘性が弱く、やや締まりがない。
2 層　10YR4/3（にぶい黄褐色土）径 1mm大の黄色土粒子を微量に含む。粘性がやや強く、やや締まりがある。
3 層　10YR2/1（黒色土）　径 1mm大の黄色土粒子を微量に含む。粘性がやや強く、締まりがある。
4 層　10YR3/3（暗褐色土）　栗色土層の堆積。粘性がやや強く、締まりがある。
5 層　10YR4/4（褐色土）　径 1mm～ 3mm大の小砂利を多量に含む。粘性は弱く、やや締まりがない。
6 層　10YR4/4（褐色土）　径 1mm～ 3mm大の小砂利を多量に含む。粘性は弱く、やや締まりがない。

第 223 図　芝荒 3 号墳 全体図

を斜面方向に向ける。石室形態は無袖式の横穴式石室で、墓坑（掘り方）が竪穴状に深く掘り込まれ、床面が開口部より低く設置されている。石室入口の段差手前に框石状の石材１石を据えた段構造を有する。石室を構成する石材は、近くの川で採取されたと思われる安山岩を使用している。

【墓坑・墓道】

墓坑は長さ 2.5m、最大幅 1.5m を測る。開口部側は重複する芝荒２号墳周溝調査時の影響を受けプランの把握が明確に行えず、立ち上がりはやや正確性を欠く。平面形状は長方形状を呈し、奥壁付近がわずかに張り出している。斜面上位にあたる右側壁側では深いところで 0.6m 掘り込まれるが、斜面下位にあたる左側壁側では 0.35m 程度となる。このように立地条件に合わせた墓坑の掘削が行われているものの、墓坑全体が開口部側に向かって深さを減じていく様子が見られないこと、石室の大半が墓坑内に納まることから、墓坑形態としては掘り込み式に分類するのが適切であろう。また墓道は検出されておらず、墓道を持たない構造であったと考えられる。

【天井石】

５石が確認された。50㎝～ 65㎝程度の石材を用い、最大の石材を最も開口部側に架構している。その上に載っている石材は、手前から２石目に配置されていたものが移動したと考えられる。隙間に小礫を充填し、周囲に人頭大から天井石に近い大型の石材を置くことで、天井石や側壁を固定し盛土の崩落を防止している。天井構造は平天井で、床面の傾斜とほぼ平行する。開口部側は框石状の石材まで天井石を架構するが､奥側は奥壁の手前までしか架構されていない。上端は標高 107.5m 前後にそろえられ、墓坑より上に位置する。

【奥壁】

長さ 52㎝、幅 54㎝、厚さ 20㎝ほどの扁平な鏡石１石を設置する。角がほとんど取れて丸味を帯びた正方形に近い板状の石材で、加工の痕跡は見られない。平坦な面を内側に向け、垂直に軽く地山へねじ込んでいる。墓坑壁との間には小砂利を含む褐色土が充填されていた。

【側壁】

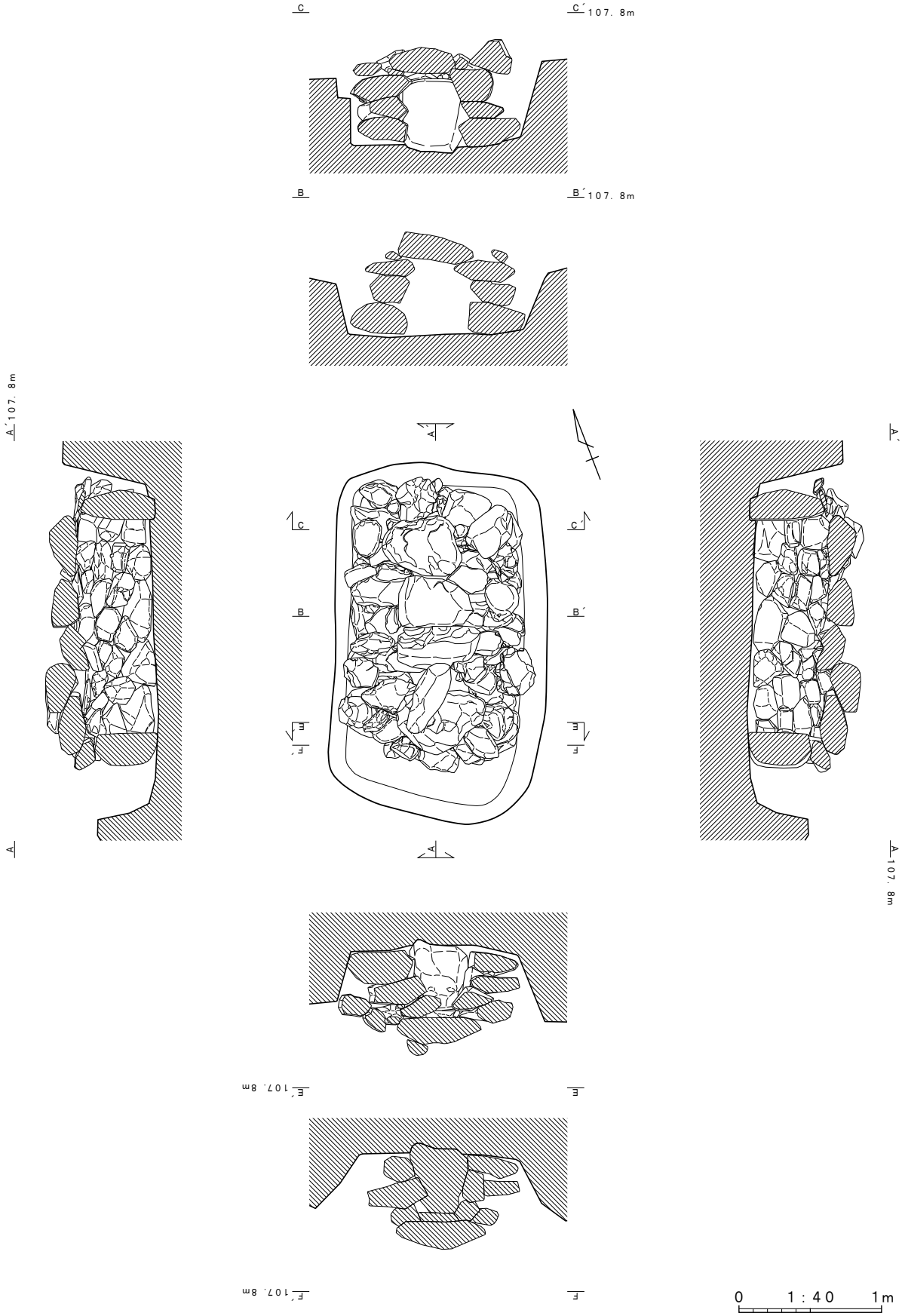
３～４段積とし、石室高は 0.5m 前後に達する。石材は角が取れてやや丸味を帯びている。

基底石は右側に６石、左側に５石が設置され、30㎝～ 50㎝程度の石材が用いられる。基本的には小口面を内側に向け、墓坑底面に密着して据えられていた。２段目以降も小口積みとし、基底石よりやや小型の石材を多く用いる。すでに積まれている石材の形状に合わせ、空間を埋めるように積み上げていくことで石材どうしの隙間を無くし、小礫をほぼ充填せずに側壁を造りあげている。横目地は、床面の傾斜に合わせ開口部側に向けて降る様子が観察された。また天井石を設置するために、最上段は小型の礫を用いた調整が図られている。墓坑壁との間には、小砂利を含む褐色土が充填されていた。

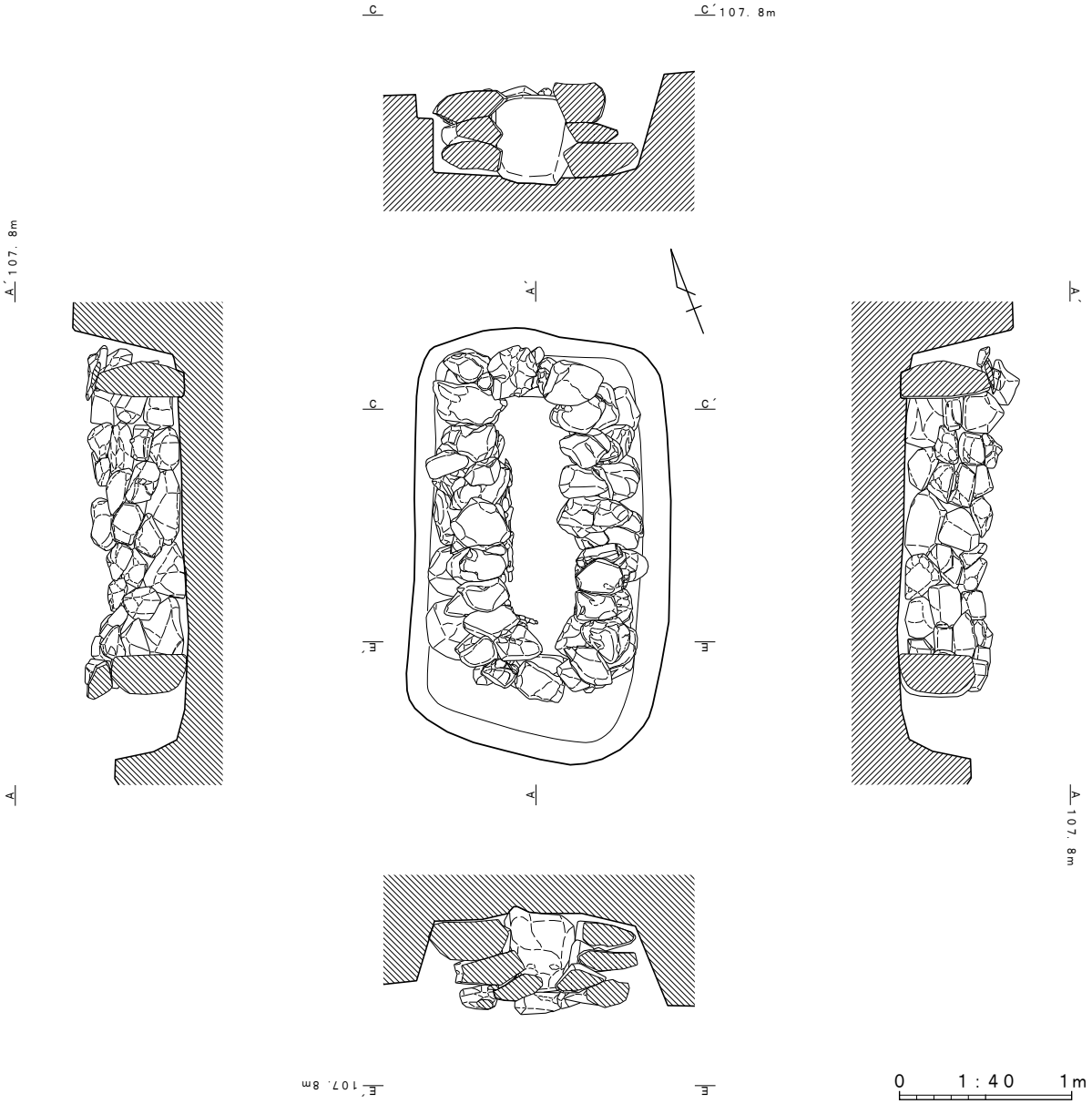
左側壁と右側壁の基底石を比較すると、左側壁は中央から開口部側に大型の石材を並べ、最も手前に最大の石材を設置しているのに対し、右側壁は最奥と中央の石材以外はやや小振りで、最奥に最大の石材を設置している。しかしどちらも奥から３石目に、平坦な広口面を内側に向けたやや大型の石材を設置する点が共通しており、奥壁の手前、玄室中央、開口部を基準に基底石の配置が行われた可能性が考えられよう。側壁の横目地を観察すると、左右とも目地の乱れは少ないが、左側壁では隙間を最小限に抑えるため小型の石材を入れ込みながら構築する傾向がうかがえる。奥壁側の断面（C-C' セクション）では、墓坑壁が途中でハングする様子が観察された。従って、２段目の積み上げまでを側壁構築作業のひとつの区切りとし、盛土や棺の搬入など何らかの作業が行われた可能性がある。

【石室入口構造と閉塞石】

開口部の段差手前に框石状の大型石材１石を据えた段構造を有する。框石状の石材は長さ 48㎝、幅 40㎝、厚さ 24㎝程度を測り、奥壁に比べ厚みがある。石材は角が取れて丸味を帯びており、平坦面を



第 224 図　芝荒３号墳 石室展開図（天井石あり）



第 225 図　芝荒 3 号墳 石室展開図（天井石なし）

内側に向けてほぼ垂直に地山へねじ込まれ、加工の痕跡は見られない。上には天井石が架構されるが、間に小型の石材 1 石を挟み込むことで天井石の高さ調整や、安定化を図っている。また、左右側壁基底石との隙間には薄手の礫を挿し込むように置き、墓坑壁から 20㎝近く内側に設置されたことで生じた広い空間には、小砂利を含む褐色土を充填する。

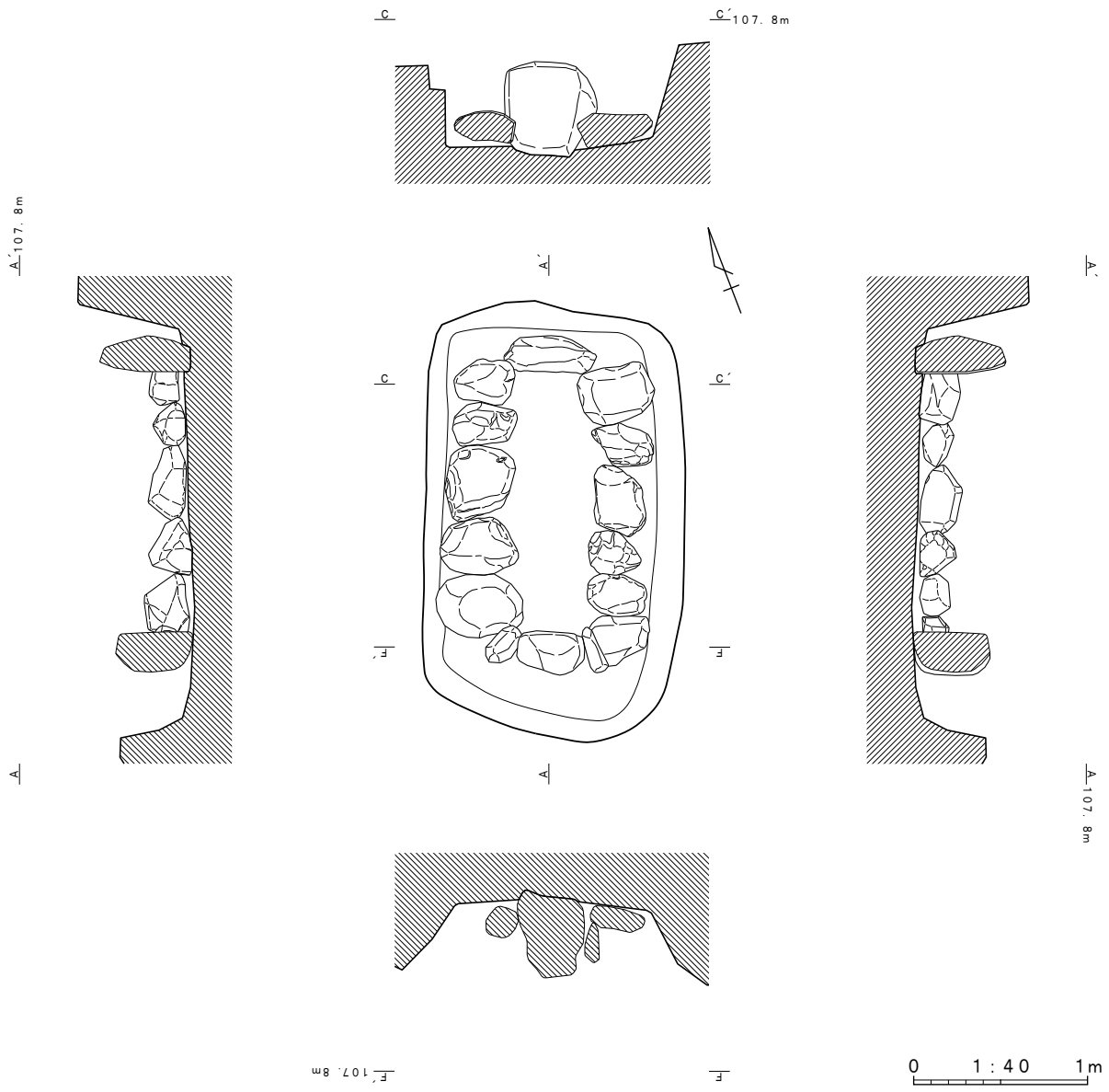
【床面】

墓坑底面には崩落土が堆積しており、貼床は認められなかった。敷石と思われる石材も全く確認されず、副葬遺物が墓坑底面上に直接、置かれた状態であった。従って、床面としての特別な造作は施されず、墓坑底面にそのまま埋葬が行われたものと考えられる。

ｄ．遺　物（第 227 図・第 229 図～第 231 図）

【遺物検出状況と副葬位置】

埋葬施設内部から検出された遺物はすべて金属製品で、装飾付大刀 1 点（第 229 図 1 ）、小刀 1 点（第

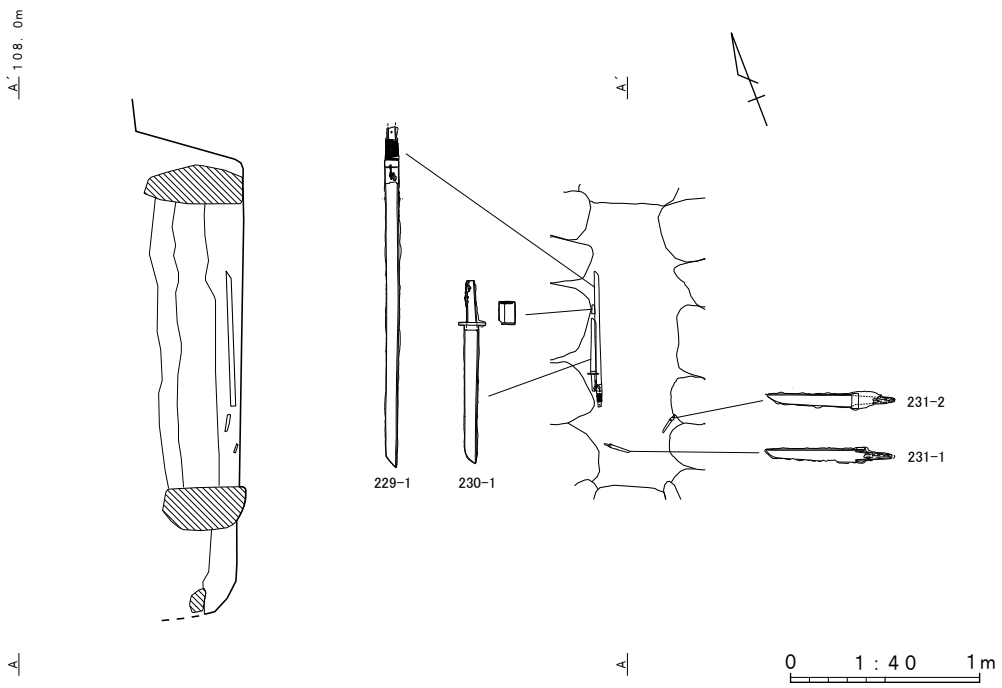


第 226 図　芝荒３号墳 基底石・墓坑実測図

230 図１）とそれに伴う鞘尻金具（第 230 図２）、刀子２点（第 231 図１・２）が出土した。本古墳は盗掘を免れ、石室もほぼ完全な状態で残存していたことから、これらは本来の副葬位置からほぼ移動していないものと考えられる。

装飾付大刀と小刀は左側壁沿いの墓坑底面上に置かれていた。左から小刀、装飾付大刀の順で並べられ、切先を奥壁側に向ける。小刀の切先側には鞘尻金具と考えられる筒状の金具が遺存しており、検出時には大刀と小刀が付着した状態であった。切先の方向から、被葬者は奥壁側に足を向けた状態で埋葬されていた可能性が高く、これらの刀は被葬者の左手側に配置されていたものと想定される。

刀子は、框石状の石材から 20㎝ほど内側で１が、さらに奥寄りの右側壁付近で２が発見された。１は切先を左側に向け、石室の長軸と直交するように置かれていたことがうかがえる。２は本来、１の右隣に同様のかたちで並べられていた可能性が高い。従って、２本の刀子は被葬者の頭上に配置されていたものと想定される。



第 227 図　芝荒 3 号墳 遺物検出状況図

【金属製品】

装飾付大刀（第 229 図 1）

〈**概要**〉 装飾付大刀は、切先を奥側に向け左側壁に沿うように置かれていた。刀身の遺存状態は比較的よく、ほぼ全体の形をうかがうことができるが、茎の先端部を欠損していることから本来の全長は不明である。柄頭の形状が不明なため大刀の型式は断定できないが、拵えは柄間、柄元、鋒、鞘の責金具に金属製の装具が用いられ、金や銀の装飾が施されている。ただし柄頭は失われ、鞘口と鞘尻に装着されていたと考えられる金具は確認されなかった。芝荒 3 号墳は盗掘などによる被害を受けておらず、その他の金属製装具は残存していることから、これらは有機質であったものが腐食して消滅した可能性が高い。

柄間は刃側がわずかに内湾し、銀線が蔓巻にされる。金属製の鐔は検出されず、鐔を持たない呑口式で鞘に納められていたことが想定される。鞘は、責金具のみに金銅装の金具を用いた素鞘（瀧瀬 1984）であり、明確な佩用金具は検出されていない。以下に各部位の詳細を記載していくが、本例は柄頭の形状から大刀型式を判断することができないため、「装飾付大刀」という名称で統一することとする。

〈**刀身**〉 刀身は鉄製の直刀で、鎬は確認できない。全長（残存値）は 72.0㎝、刃部長 59.6㎝、茎部長 12.4㎝で、刀身の幅は 2.7㎝、棟の厚さは 0.7㎝である。茎の先端部を欠損するものの遺存状態は比較的よく、カマス形の切先がはっきりと確認できる。X線透過写真や拵えの状況により、関は金銅装金具の下端に対応して存在するものと考えられるが、正確な形状は不明瞭である。X線透過写真の観察からかろうじてうかがえる形状を基に、実測図は両関として示した。刃側は直角に近い形状で、棟側はなだらかな曲線を描く可能性が高い。茎には鉄製の目釘が打ち込まれているが、先端部を欠損するため茎尻の形状は不明である。わずかに残る柄木を観察すると、柄全体（少なくとも柄間銀線巻から鋒まで）は同一部材から成ると思われる。腐朽により詳細な構造を捉えられず、一木造り（落し込み式）か、表裏二枚の部材を合わせたものかは判断が難しい。

〈拵え - 柄装具〉

柄頭　全く残存しておらず、材質や形状は不明である。ただし、本古墳は盗掘などによる被害は受けていないことから、後世に持ち出された可能性は低い。従って、腐食して消滅してしまうような有機質の素材が用いられていたものと考えられる。

柄間　柄木を装着した後、刻み入りの銀線を蔓巻にしている。銀線は幅 0.3㎝で、現状では柄元から 4.4㎝まで残存する。厚みはなく、内部の銅線が浮き出ているため断面は扁平な山形状を呈する。柄間としては短すぎるが、他に銀線巻の破片は検出されておらず、本来の長さは不明である。また、柄元付近から刃側が緩やかに内湾する様子が認められたが、倭風大刀に見られるような意図的な湾曲かは判然としない。

柄元　銀線巻の下には、銀線を留めるための柄元装具が装着されていたと考えられる。現状では錆が著しく不明瞭であり、X線透過写真の観察では金具のようなものは見られず、刀身部の錆が膨張した状態である可能性が高い。従って、柄頭と同様に有機質の素材を用いた柄元装具が装着されていたことが想定される。

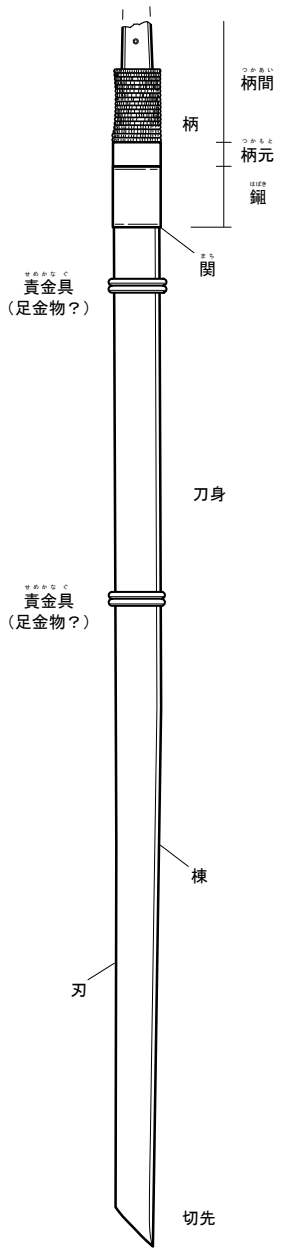
鏚　柄元金具の下には、関に接して金銅製の金具が装着されており、鏚に相当するものと考えられる。この金銅製鏚は長さ 3.6㎝を測り、筒状に折り曲げた薄い金銅板を柄間・柄元の柄木と同一部材と思われる木芯に装着しており、平面形は楕円形を呈する。

〈拵え - 鞘装具〉

鞘口と鞘尻　鞘口金具と鞘尻金具に相当する金属製の装具は確認されなかった。柄頭と同様に、盗掘などによって後世に持ち出された可能性は低いことから、有機質の素材が用いられていたものと想定されるが、詳細は不明である。

責金具と佩用装置　関から切先方向へ 3.5㎝の地点と、22.0㎝の地点の２か所に、金銅製の責金具が装着されている。これらは断面が扁平な蒲鉾形を呈し、２列１組で構成される。装着された位置から、２列のうち１本を単脚足金物（吊手孔付佩用金具）と捉えることも可能であるが、ほぼ佩裏側しか残存しておらず背側に小孔は認められなかった。従って、佩用装置を元から持たないか、布紐などの有機質を用いた佩用であった可能性もある。

〈位置付け〉　本例は拵えの大部分に有機質の素材を用いていたと思われるが、腐食により失われているため、時期の検討は非常に限られた装具に頼らざるを得ない。従って本例の時期を明確に断定することは難しいが、柄間に銀線を蔓巻する点や、金属製の鐔を持たない点に、装飾付大刀生産体制が大きな変化を迎える時期以前に強く認められる要素を残している。一方、鞘に装着された断面蒲鉾形の責金具は新納７段階（６世紀末）から出現するとされるものだが（菊池 2010）、本例の責金具は平面形が縦長の倒卵形であることから、出現時より時期が降るものと考えられる。吊手孔付佩用装置の編年に照らし合わせるならば、新納 10 段階に見られる形状に近く、生産体制再編以降の要素がうかがえる。このように、装飾付大刀盛行期間において比較的古相を示す要素と、生産体制再編後の新しい要素の混在する様子が認められることから、編年的位置付けは TK209 型式期

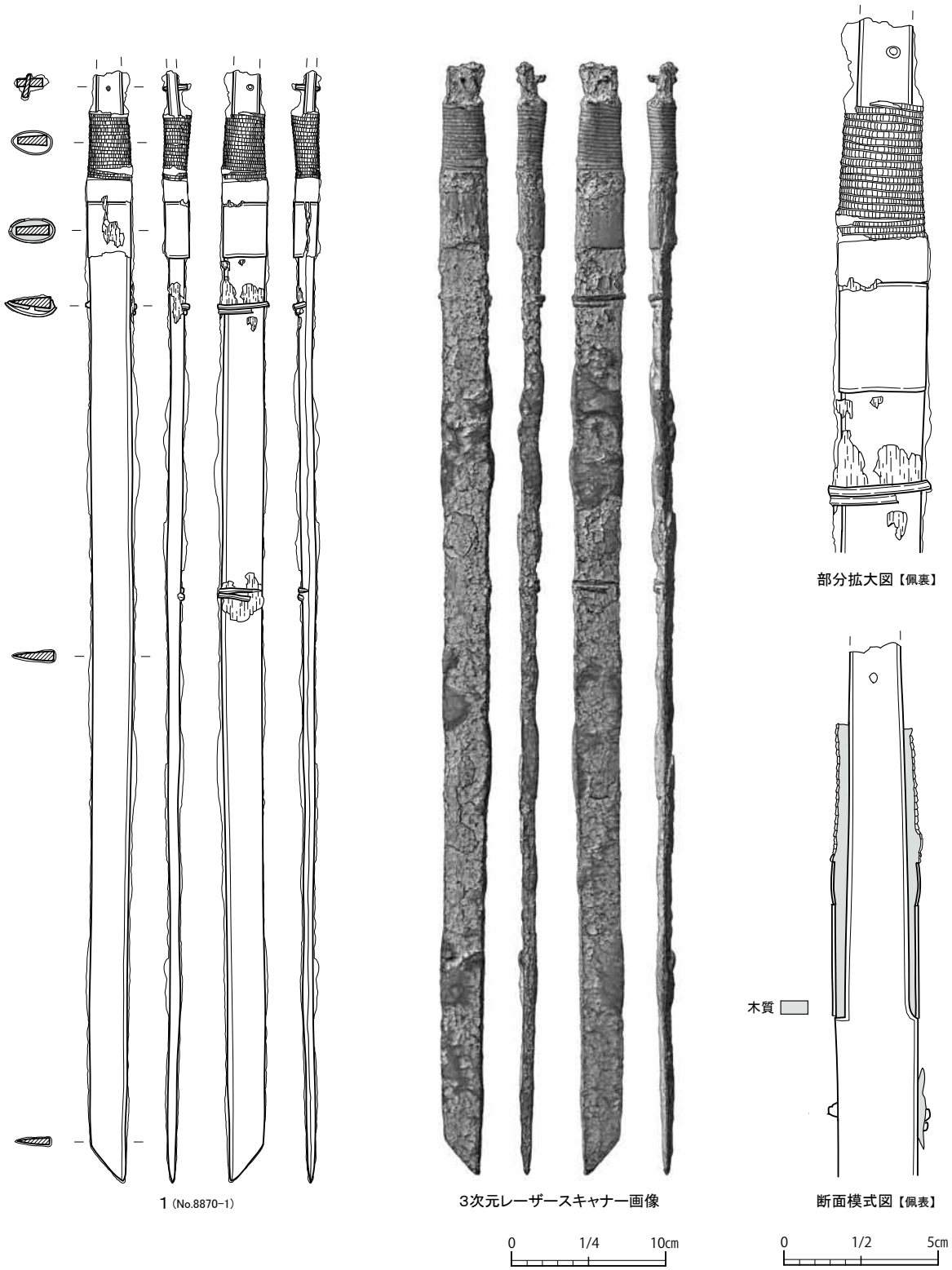


第 228 図　装飾付大刀部分名称

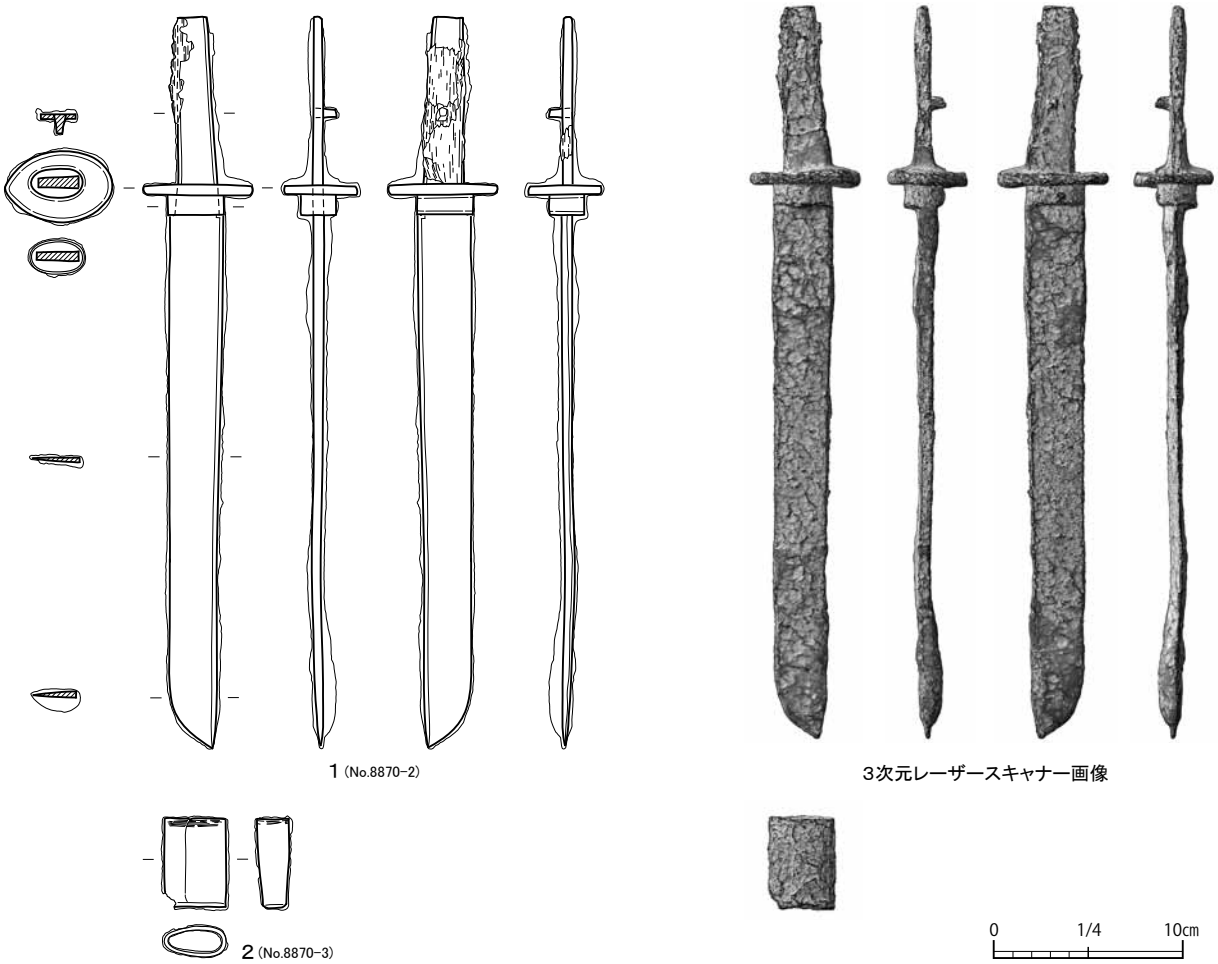
新相～ TK217 型式期（新納８～ 10 段階）周辺に求められるものと考えたい。

小刀（第 230 図１・２）

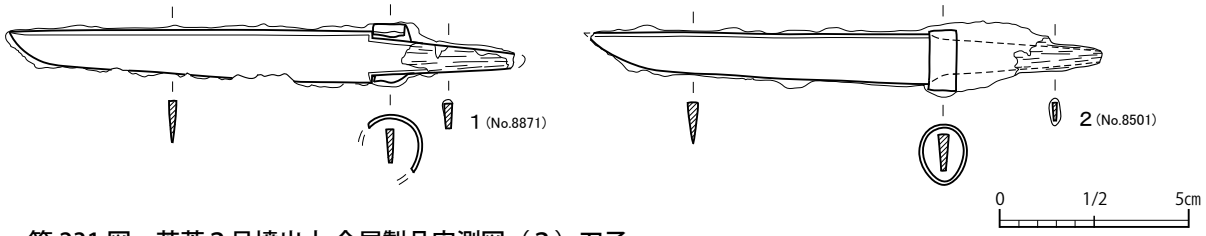
〈**概要**〉 小刀は、装飾付大刀の左隣りに並べて置かれていた。装飾付大刀と同様に切先を奥側に向け、



第 229 図　芝荒３号墳出土 金属製品実測図（１）装飾付大刀



第 230 図　芝荒３号墳出土 金属製品実測図（２）小刀



第 231 図　芝荒３号墳出土 金属製品実測図（３）刀子

切先の下付近では鞘尻金具が検出されている。刀身の遺存状態は比較的よく、茎尻から切先までが完存する。鉄製の鎺と鐔が装着され、鉄製の鞘尻金具を用いた鞘に納められていたと考えられる。

〈刀身〉　刀身は鉄製の直刀で、鎬は確認できない。全長 38.6㎝、刃部長 28.1㎝、茎部長 10.5㎝で、刀身の幅は最大 2.8㎝、棟の厚さは 0.4㎝を測り、関は直角両関、切先はフクラ切先である。茎は茎尻に向かってやや幅が狭まっていく形状で、茎尻は平尻とし、佩裏を中心に木柄の一部が付着している。茎尻から５㎝の位置に残存する鉄製の目釘は、下部方向へ細くなる形状で佩裏側に突出しており、佩表側から打ち込まれたことがわかる。

〈装具〉

鐔　切先側の先端がわずかに尖り、長軸側に細長い形態を呈した小型の鉄製無窓鐔である。長軸長 5.7㎝、短軸長 3.8㎝で、長軸と短軸の差が 2.0㎝程度あり、最大幅（短軸長）は長軸の中心にある。内孔

は楕円形を呈し、中央からややずれて穿たれているため、切先側と佩表側の面幅が狭くなっている。

鞘尻金具　２は本例の鞘に装着されていたと考えられる鉄製鞘尻金具で、長さ 4.7㎝、幅 3.3㎝、厚さ 0.2㎝を測る。平尻で底部はやや凹み、断面形は倒卵形を呈する。上部縁には約 0.5㎝の幅に渡って紐状の有機材が認められ、内部には木製鞘の一部と糸巻きが付着していた。

鋒　関には鉄製の鋒が装着されている。長さ 1.0㎝、幅 3.0㎝、厚さ 0.15㎝で、平面形は倒卵形を呈する。

〈位置付け〉　本例の時期を断定することは難しいが、40㎝に満たない小刀でありながら鉄製無窓鐔を持つ点が注目される。そこで、静岡県内における鉄製板鐔の分類と編年（西沢 2002）に照らし合わせてみると、軸上に細長い形態と最大幅が長軸の中心にある点で無窓鐔Ｄ類に最も類似している。県内において、この形態の鐔は TK209 型式期段階から TK46 型式期段階にかけて出土が見られ、その中心は TK217 型式期段階にあるとされる。これらの編年は中型鐔と大型鐔の集成によるものであるが、本例の編年的位置付けを考えるうえでも参考となるであろう。

刀子（第 231 図１・２）

鉄製柄縁金具を装着する２点の刀子が出土した。１は茎尻、２は切先をわずかに欠損するが、全長は 13.5㎝前後、刀身幅は 1.4㎝とほぼ同じ大きさである。１は刃部側・棟側ともに直角関、２は両側とも撫関で、茎部は茎尻に向かって先細っていく。装着された柄縁金具は長軸長 1.8㎝、短軸長 1.3㎝前後を測り、断面倒卵形を呈する。

芝荒６号墳（第 232 図～第 235 図）

ａ．検出状況

南調査区を南北に走る市道の下を調査するため、標高 108.8m ～ 109.0m 付近の緩斜面上で舗装と砕石を除去していたところ、石室構成材と考えられる大型の石材を確認した。市道により古墳上部は失われていたものの基底石はすべて残存しており、ある程度の石室規模や形態は把握が可能である。また周溝の一部も検出され、石室周辺で須恵器壺、床面および覆土内から土師器坏が出土した。また、火山ガラスと推測される白い粉状の塊が覆土内から見つかっている。

ｂ．墳丘および外部施設

市道により大きく削平され、墳丘は確認できなかった。周溝は石室の西側から南側にかけて検出された。幅 0.36m 前後、深さは検出面から 0.07m 程度で、断面は皿状を呈している。全周していたかは不明である。

ｃ．埋葬施設

【規模・石室構造】

残存する石材の状況から石室の全長は 2.8m 程度と推定され、玄室幅は中央部で最大 0.6m を測り、平面形は長方形状を呈する。主軸はＮ－ 15°－Ｗで、開口部を南東側に向ける。石室形態は無袖式の横穴式石室で、墓坑（掘り方）が竪穴状に掘り込まれ、床面が開口部より低く設置されている。石室入口の段差手前に框石状の石材１石を据えた段構造を有する。石室を構成する石材は、近くの川で採取されたと思われる安山岩を使用している。

【墓坑・墓道】

墓坑は長さ 3.2m、最大幅 1.8m を測る。撹乱により南東部分の立ち上がりはやや不明瞭であるが、竪穴状に掘り込まれ、開口部に向かって幅を広げた長方形状を呈する。最も深いところで 0.48m 掘り込まれており、基底石がほぼ納まる程度であることから、墓坑形態としては石室の大半が地表上に構築された準地表上式に属する。また墓道は検出されておらず、墓道を持たない構造であったと考えられる。

第 102 表　芝荒３号墳出土 装飾付大刀・小刀観察表

図版No.	種別	遺物No.	部位			材質	平面・断面形状	全長（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
229-1	大刀	8870-1	刀身		全長	鉄製		(72.0)	－	－	－	
					刀部				59.6	2.7	0.7	カマス切先
					茎部				(12.4)	2.1	0.6	関形状：両関（刃部側直角関、棟側なだらかな曲線状）
					目釘	鉄製	円形		1.6	0.4	0.4	
			拵え	柄装具	柄頭	不明			－	－	－	形状不明、有機質の可能性あり
					柄間金属線巻	銅地銀張	扁平な山形		(4.4)	0.3	0.2	刻み入りの銀線を蔓巻
					柄元装具	不明	楕円形		1.4	2.9	0.2	有機質の装具が装着されていた可能性あり
					鎺	金銅製	楕円形		3.6	2.9	0.2	柄木（木芯）に金銅板を被せる
				鞘		木製			－	－	－	金属製の飾金具は責金具のみの素鞘
				鞘装具	鞘口装具	不明			－	－	－	残存せず、有機質の可能性あり
					鞘尻装具	不明			－	－	－	残存せず、有機質の可能性あり
					責金具	金銅製	扁平な山形		－	0.3	0.2	２列１組で２か所に装着
					佩用装置	不明			－	－	－	有機質の佩用装置（布紐など）もしくは、元から装着されていない可能性あり
230-1	小刀	8870-2	刀身		全長	鉄製		38.6	－	－	－	
					刀部		二等辺三角形		28.1	2.8	0.4	フクラ切先
					茎部		長台形		10.5	2.0	0.3	関形状：直角両関
					目釘	鉄製	方形		0.8	0.5	0.5	
			拵え	柄装具	鐔	鉄製	倒卵形		5.7	3.8	0.4	内孔長軸 2.7cm、断面は長方形
					鎺	鉄製	楕円形		1.0	3.0	0.2	内孔長軸 2.7cm、断面は長方形
				鞘		木製			－	－	－	
		8870-3		鞘装具	鞘尻金具	鉄製	倒卵形		4.7	3.3	0.2	上部端に有機質が巻かれたような痕跡あり

第 103 表　芝荒３号墳出土 刀子観察表

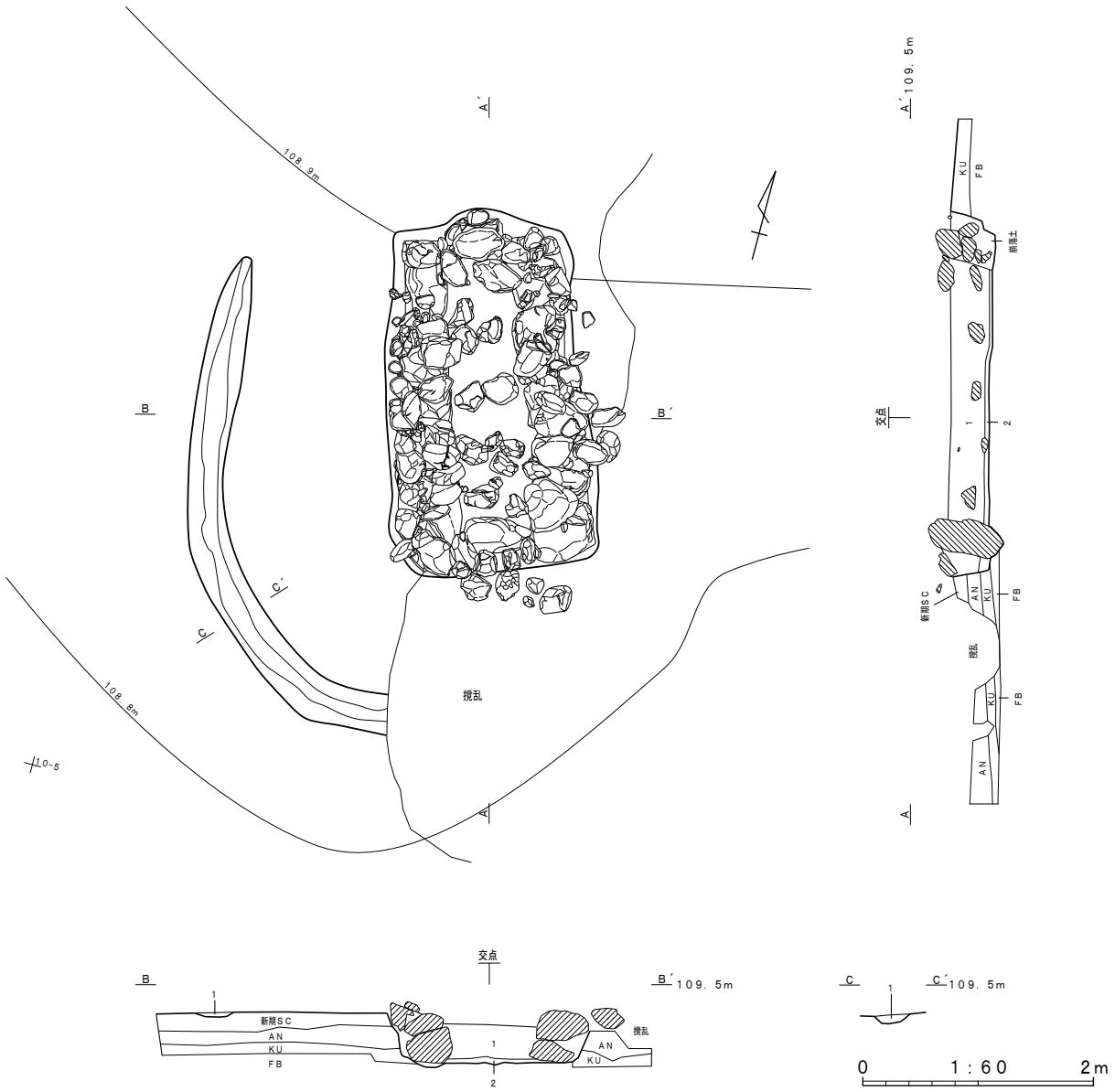
図版No.	遺物No.	部位	関形状	全長（cm）	刀身部			茎部			備考
					長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	
231-1	8871	刀身部～茎部	直角両関	(13.4)	9.6	1.4	0.3	(3.8)	0.9	0.2	茎に木質遺存、断面倒卵形の鉄製柄縁金具を伴う
231-2	8501	刀身部～茎部	刃関：撫関 棟関：撫関	(13.5)	(9.0)	1.4	0.3	4.5	0.9	0.2	茎に木質遺存、断面倒卵形の鉄製柄縁金具を伴う

【奥壁】

奥壁は残存していなかったが、側壁の配置と据付痕跡から、幅 55cm～ 60cm程度の大型石材（鏡石）を設置していた可能性が高い。後方の少し張り出した墓坑壁に沿って小礫が残されていたことから、側壁で挟み込んで固定した後、墓坑壁との間に小礫を充填してさらに裏側を補強していたとものと考えられる。これら小礫の上部では側壁２段目と同程度の石材１石が検出されており、奥壁２段目に用いられていた石材の可能性がある。

【側壁】

上部の石材は失われており、側壁として明確に確認できたのは２段目までである。石室の内外には、上部の石室構成材または裏込めに用いられていたと考えられる礫が崩れ落ちていた。石材は角が取れてやや丸味を帯びている。

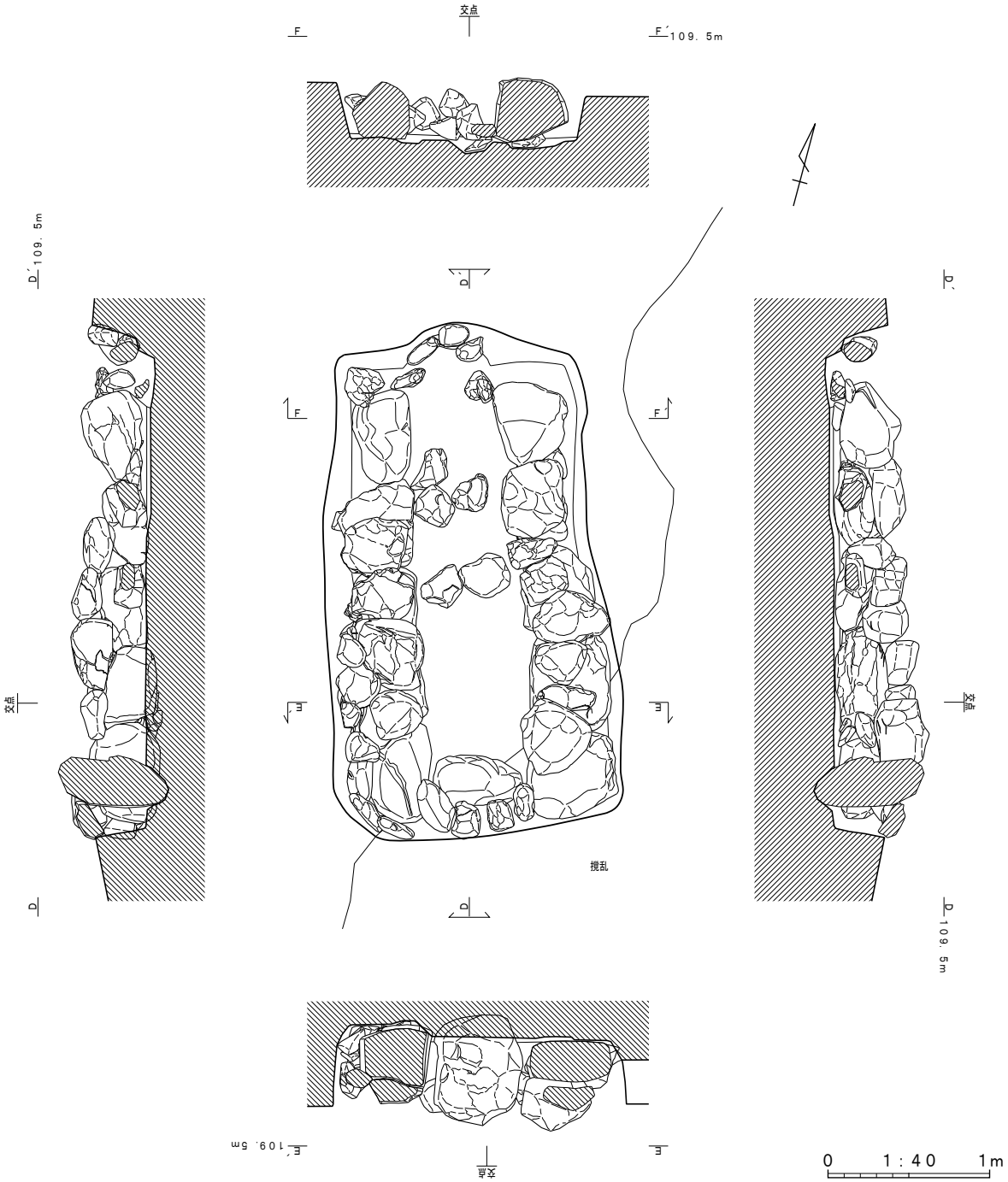


1 層　10R2/1（赤黒色土）　径 5mm～ 10mmの焼土粒子と径 5mm大の炭化物を微量に含む。粘性が強く、締まりがある。
2 層　10R3/3（暗赤褐色土）石室床面。径 5mm～ 10mmの焼土粒子を少量含み、径 5mm大の炭化物を微量に含む。粘性が強く、硬く締まっている。

第 232 図　芝荒６号墳 全体図

基底石は左右５石が設置され、50㎝～ 65㎝程度の石材が用いられる。平坦な広口面を内側に向け、墓坑底面に薄く貼られた貼床上に据えられており、ややばらつきはあるものの墓坑内にほぼ納まる高さで揃えられている。下部に小礫を充填することで、さらに安定化を図っているものも見受けられた。２段目は基底石より小型の石材を小口積みにする。検出時の状況を見ると、２段目以降は小礫を用い２～３段目で框石状の石材と同じ高さに達するように調整を図っていたものと推測される。墓坑壁との間には、様々な形状や大きさの礫を裏込めし、横目地は床面の傾斜に合わせ開口部側に向けて降る様子が観察された。

右側壁と左側壁の基底石を比較すると、左側壁の方が内側に向けた平坦面がより真っ直ぐに整っており、横目地の乱れも少ない。従って石室を構築する際は、左側壁を基準にしていた可能性がある。また、両側壁とも開口部側に大型の基底石を配置している点や、奥壁を挟み込んでいたと考えられる基底石を

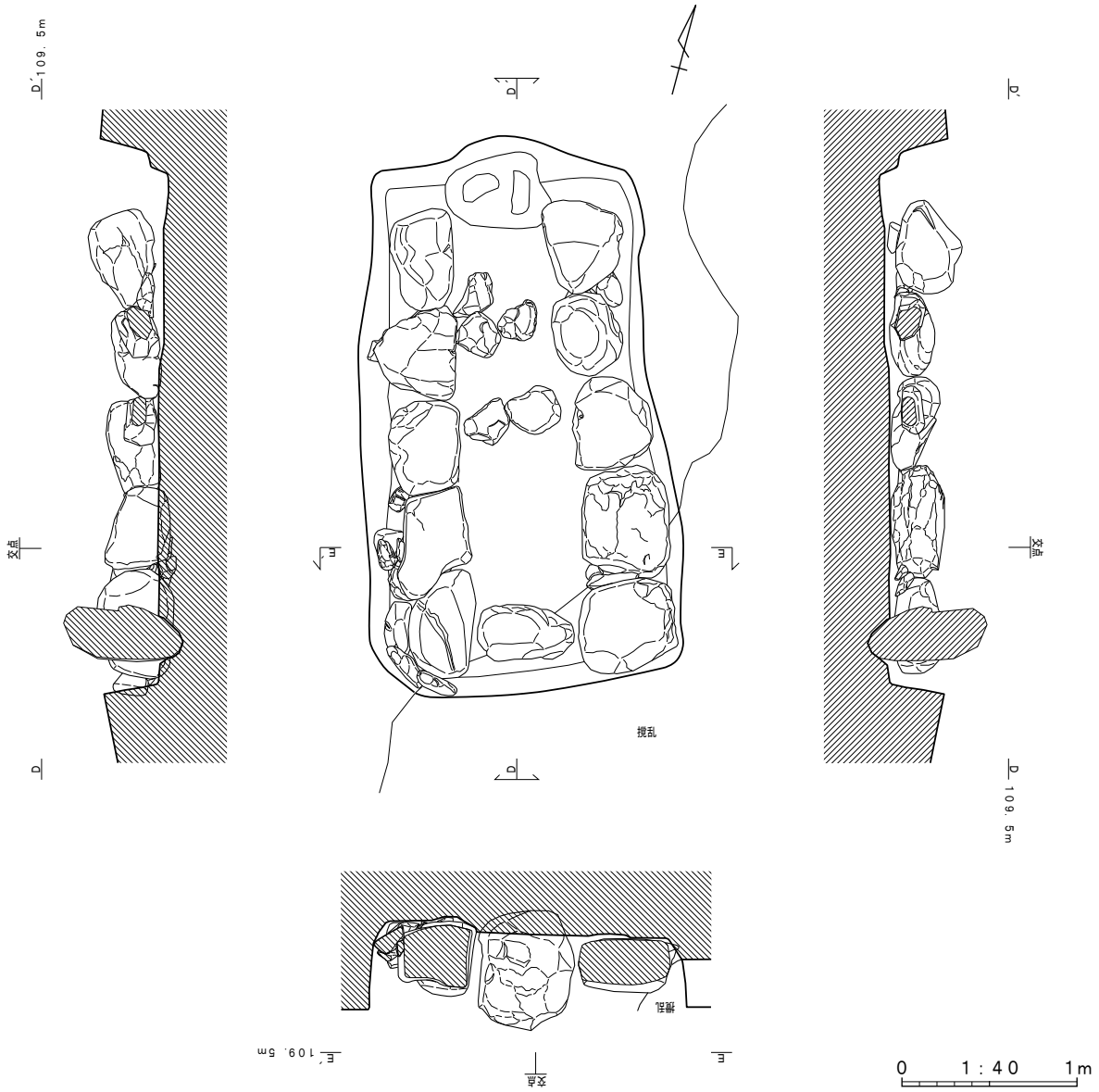


第 233 図　芝荒６号墳 石室展開図

やや高さのある石材で統一している点から、奥壁側と開口部側それぞれの配置を確定させてからその間に残りの石材を充填したと想定することも可能である。

【石室入口構造と閉塞石】

開口部の段差手前に框石状の大型石材１石を据えた段構造を有する。長さ 70㎝、幅 54㎝、厚さ 32㎝程度の扁平な石材を垂直に設置し、広口面を内側に向ける。他の石材に比べ角が取れて丸味を帯びており、加工の痕跡は見られない。安定的に据えるため 15㎝ほど地山にねじ込み、手前墓坑壁との間に小礫を充填するなどの造作が見られる。



第 234 図　芝荒６号墳 基底石・墓坑実測図

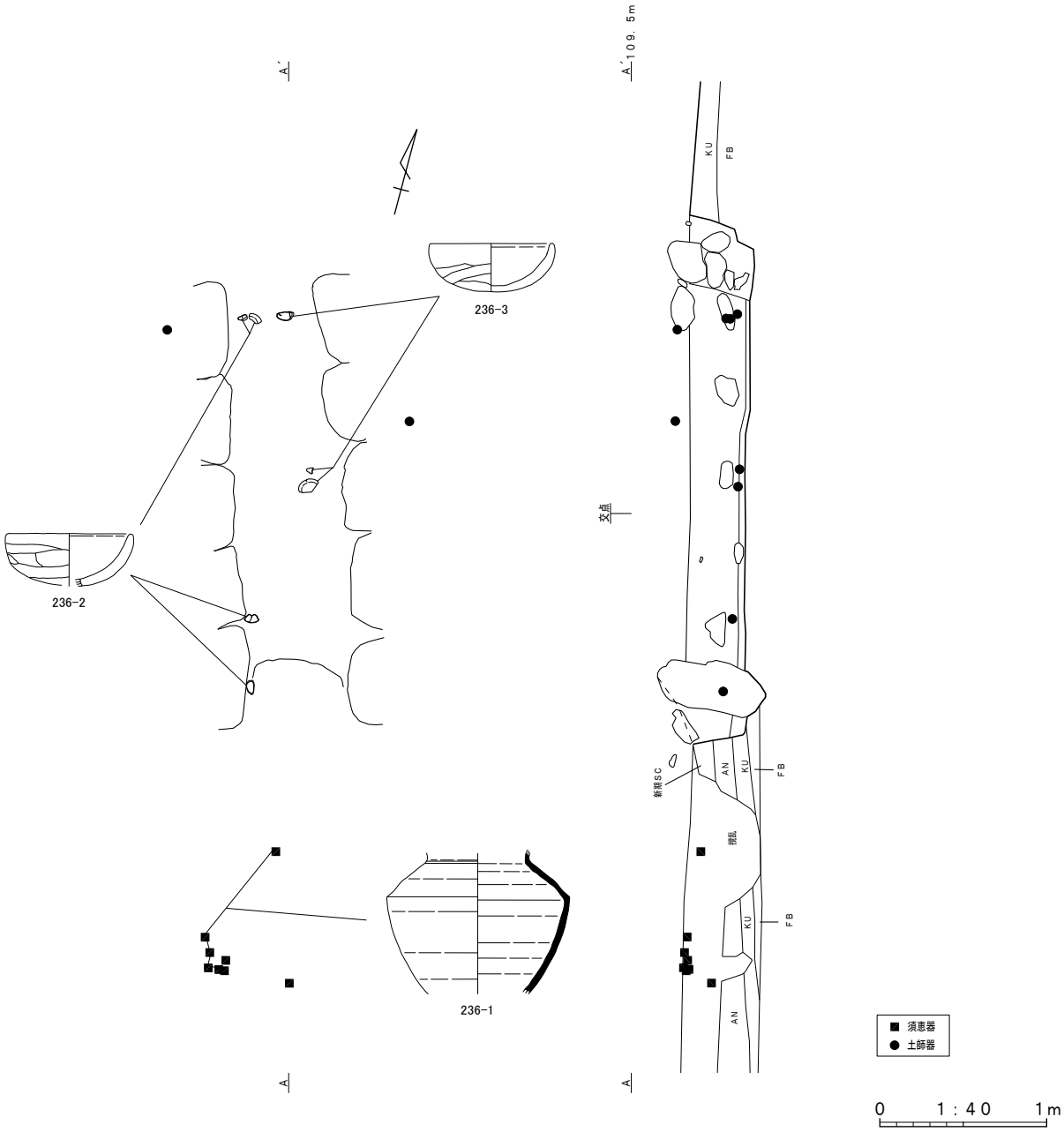
【床面】

非常に硬く締まった暗赤褐色粘質土による貼床が、厚さ５㎝程度に渡って施されている（２層）。敷石と思われる石材は確認されなかったが、貼床上で検出された上面がやや平坦な人頭大の石材は棺台の可能性がある。棺台と想定される石材の下に土師器坏が遺存していたことから、石材は本来の位置を移動しているものと考えられるが、内部へ崩落した側壁の一部と考えることもできる。土師器坏が貼床上で出土したことを考慮すると、当初から敷石は施されておらず、人頭大の石材を棺台として設置していた可能性が高い。

ｄ．遺　物（第 235 図・第 236 図）

【遺物検出状況と副葬位置】

石室周辺および覆土内で須恵器、貼床上および覆土内で土師器坏を検出した。須恵器はほとんどが南側の撹乱から見つかり、接合により壺１点が復元できた（第 236 図 1）。埋葬時に行われた葬送儀礼に用いられた可能性もあるが、古墳に伴うものであるかは明確でない。土師器は坏２個体分が、奥壁手前



第 235 図　芝荒６号墳 遺物検出状況図

と石室中央、開口部側に散在していた。中央部の破片（第 236 図 3）は底面を上に向け、上に棺台と想定される石材が載った状態で貼床上から出土した。

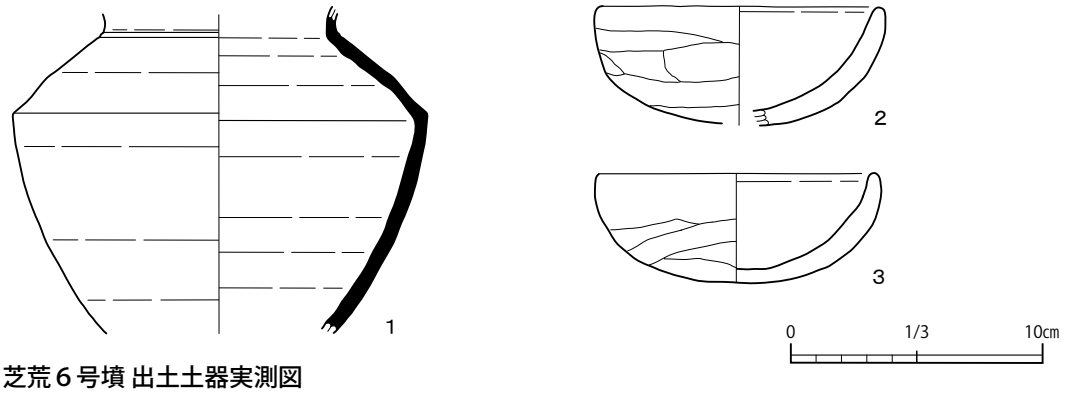
覆土内には縄文時代の遺物も流入していたが、土師器坏は床面上や床面に比較的近い覆土内で検出されていることから、古墳の副葬遺物であると考えられる。

【土器】

接合作業により、須恵器壺１点と、土師器坏２点が確認できた。

須恵器壺（第 236 図１）

１は口縁部と底部を欠損するが、残存部の形状から壺と考えられる。体部は算盤玉状を呈し、上位に明瞭な稜を伴い肩が張る。口頸部の形態や長さは不明であるが、わずかに残された頸部は太く、「く」の字状に強く屈曲してそのまま外反するものと思われる。従って口頸部が短く、底部は尖り気味の丸底



第 236 図　芝荒６号墳 出土土器実測図

第 104 表　芝荒６号墳出土 土器観察表

図版 No.	種別 器種	遺物 No.	出土地点	口径 器高 底径	胎土	焼成 色調	残存部位	形態の特徴	手法の特徴
236-1	須恵器壺	13033・13034 13035・13039 13049・13055	撹乱 覆土	— — —	密	良 7.5Y5/1（灰色）	頸部～胴部	胴部は算盤玉状を呈し、上位に明瞭な稜を伴った屈曲部が形成され最大径を測る。頸部は「く」の字状に強く屈曲する。短頸か？	内外面：回転ナデ
236-2	土師器坏	14154・14155 14156・14175	覆土	10.9 4.6 5.7	密	良好 7.5YR6/4 （にぶい橙色）	口縁部～底部	丸底の底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。底部と口縁部の間に明瞭な境目がなく、半球形状を呈する。	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ、ナデ
236-3	土師器坏	14172・14173 14174	床面 覆土	11.0 4.4 5.5	密	良好 7.5YR6/6（橙色）	口縁部～底部	丸底の底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。底部と口縁部の間に明瞭な境目がなく、半球形状を呈する。	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ、ナデ

となる広口壺であった可能性が高い。下部の調整は確認できないものの、全体は回転ナデによる調整が施され、整った器形となっている。

土師器坏（第 236 図２・３）

２・３の土師器坏は法量、形態とも類似し、厚手で重量感のある造りであるが、２の方がやや身が深く全体的に厚くしっかりした印象を受ける。丸底の底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁部には明瞭な境界が見られないことから器形全体が半円形状を呈する。内面はナデによって整えられ、外面はヘラケズリによる調整を多用するとともに、口縁端部を丁寧に撫でて形状を整えている。

〈位置付け〉

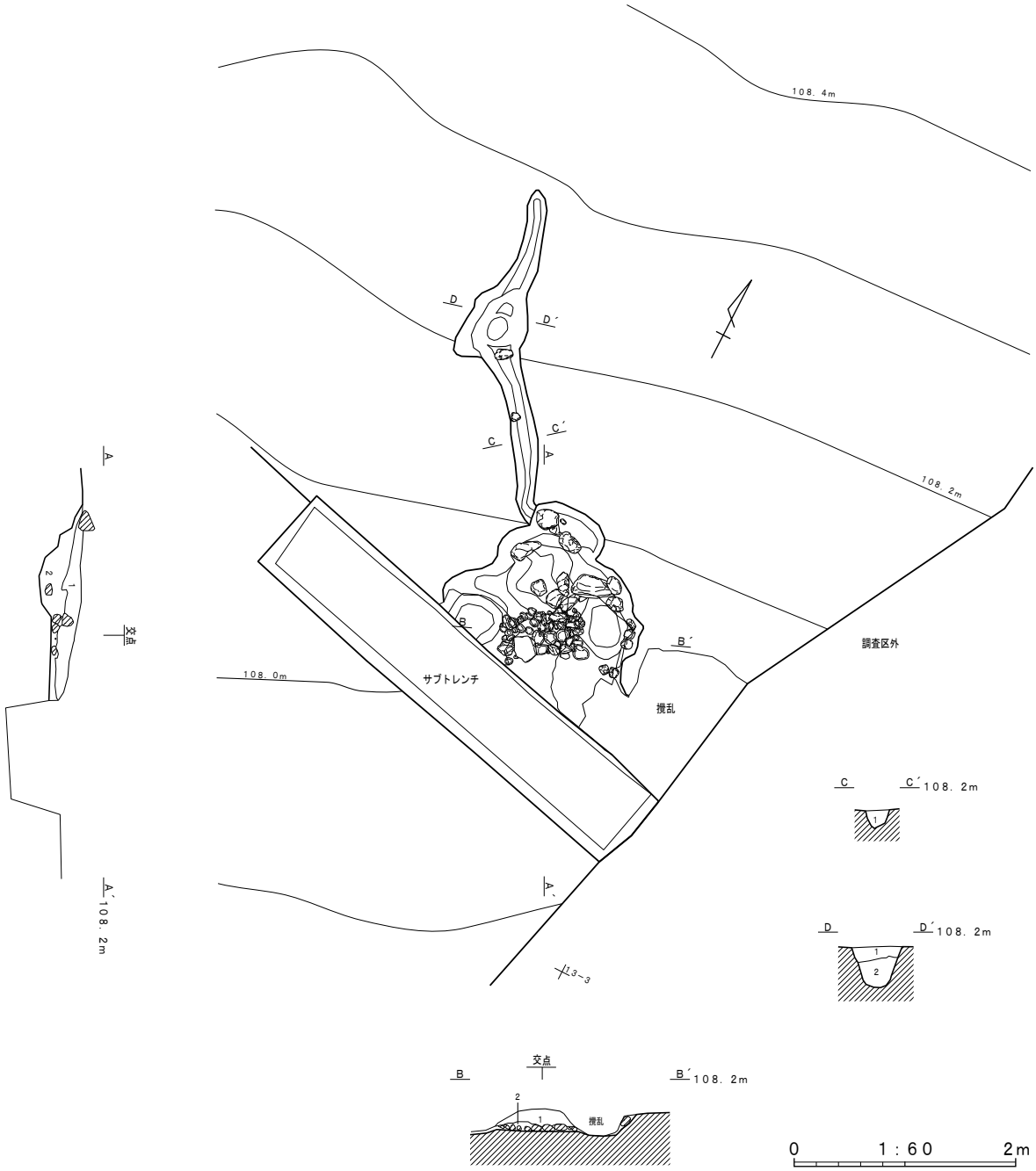
土師器坏は、静岡県東部、伊豆地域でよく見られる坏とは異なる特徴を持ち、時期の特定が難しい。在地の古墳時代集落に見られる坏のなかでは、６世紀以前の系譜を持つとされる坏に形態が最も類似しているが、この種の坏は６～７世紀に継続して出土が見られ、あまり目立った変化が見られないものである（山本 1995）。また、９世紀の遠江系に位置付けられる可能性があるとの指摘も受けており、年代を絞り込むことは困難であった。

須恵器壺は７世紀の湖西窯を特徴付ける器種のひとつである、広口壺の可能性が高い。口縁部と底部の形状が不明であるものの、肩の強い張りを特徴とし、全体の器形も整っていることから、湖西窯型の盛行期である遠江Ⅳ期前半段階（TK217 型式期）としたい。

芝荒７号墳（第 237 図・第 238 図）

ａ．検出状況

平成 27 年６月３日に、南調査区東端、標高 108.0m 付近の緩斜面上で表土の掘削を始めたところ、石室構成材と考えられる大型の石材を確認した。礫床の一部が残存していたが、撹乱によって大半が失



石室
1 層　N2/0（黒色土）赤褐色スコリア（新期スコリア類似）を微量に含む。粘性は弱く、締まりがない。
2 層　N2/0（黒色土）栗色土層に相当。1 層に類似するが、スコリアを含まない。粘性はやや強く、やや締まりがある。

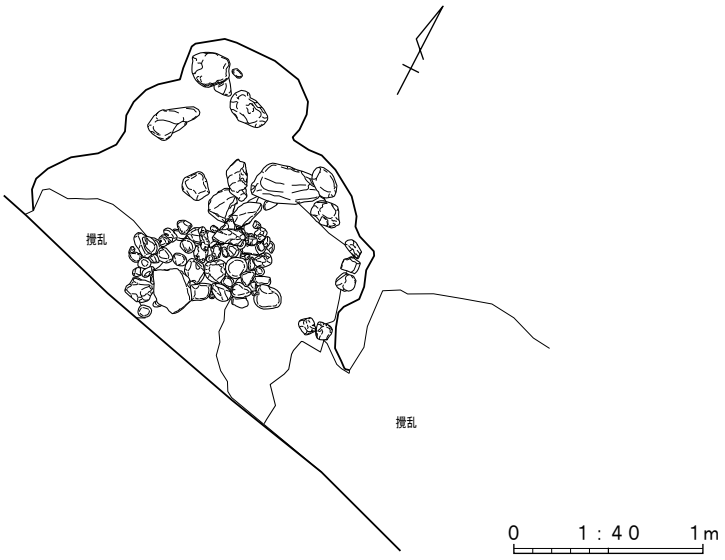
溝状遺構
1 層　N2/0（黒色土）カワゴ平パミスと径 1mm～ 5mmの赤褐色スコリアを微量に含む。粘性は弱く、締まりがない。
2 層　N2/0（黒色土）富士黒土層に類似したブロックを含む。粘性は弱く、締まりがない。

第 237 図　芝荒 7 号墳 全体図

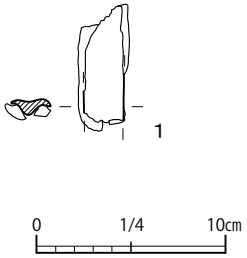
われており、石室規模や形状は不明である。石室北西部分では溝状の遺構が検出された。覆土内から、大刀の一部と考えられる金属製品が出土している。

b．墳丘および外部施設

耕作により大きく削平され、墳丘および周溝は確認できなかった。北西部では長さ３ｍに渡って溝状の遺構が検出された。幅 0.2m 前後、深さは中央付近で 0.4m 程度を測り、断面はＵ字状を呈する。幅が狭く、石室奥壁側に接続することから用途は不明である。



第 238 図　芝荒７号墳 礫床実測図



第 239 図　芝荒７号墳出土
金属製品実測図

c．埋葬施設

【規模・石室構造】

石室の大半が失われていることから石室の正確な規模は不明であるが、残存する礫床と側壁の据付痕跡から、幅 0.6m 前後であったことが推測される。残存状況から主軸はＮ－ 28°－Ｗで、開口部を南東側に向けていたものと考えられるが、石室の形態や詳しい構造は不明である。

【墓坑・墓道】

墓坑は検出されたプランが不整形で、最大幅 1.7m を測る。墓道の有無は不明である。

【床面】

礫床の一部と考えられる敷石が、長さ 0.5m、幅 0.8m ほどの範囲に渡って確認された。敷石のほとんどは丸味のある扁平な軽石である。東駿河地域において、礫床に軽石を用いる例は非常に珍しい。

d．遺　物

大刀の一部と思われる金属製品が 1 点出土した。

【金属製品】

大刀片（第 239 図１）

大刀の刀身部と思われる破片 1 点が出土した。風化が著しく、大きく変形してしまっているが、木製鞘の一部と考えられる破片が遺存している。（北）

第 105 表　芝荒７号墳出土 大刀観察表

図版No.	種 別	遺物No.	部 位	材 質	製作技法	平面・断面形状	全長（cm）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　考
239-1	大刀		刀身部	鉄製			(6.7)	(6.3)	2.1	0.6	木製の鞘を伴う

第Ⅴ章　調 査 成 果

第Ⅴ章　調査成果

第１節　芝荒遺跡の性格

今回、本調査が行われた２つの調査区は、地形環境から同じ芝荒遺跡の範囲に含まれ、両調査区で検出された古墳も同じ芝荒古墳群に属するものと考えられる。共に旧石器時代、縄文時代、古墳時代の遺構や遺物を検出したが、南北に大きく距離が離れていることからその出土傾向には差異が認められ、やや性格が異なる。

北調査区は旧石器時代を主体とする。なかでも休場層を中心に多量の石器と礫が出土している。縄文時代はわずかな土坑と集石、縄文時代早期前半から中期の土器が出土した。古墳時代は小型の古墳２基が検出されたが、石室上部は崩壊し、副葬遺物もほとんど残されていない。

南調査区は縄文時代と古墳時代を主体とする。縄文時代は遺構こそ少ないものの、縄文早期の土器が集中し、石器も多量に出土した。古墳時代は４基の古墳が検出され、副葬遺物として単鳳環頭大刀や装飾付大刀などが見つかっている。旧石器時代は石器・礫とも出土点数が少なかった。

これらの状況から、南北に長く広がる芝荒遺跡では、旧石器時代には標高の高い地点（北側）を中心に活動が行われ､時代が降ると標高の低い地点（南側）に活動の中心を移していったことがうかがえる。

第２節　各時代の概略と評価および考察

以下に、本調査の各時代における概略とそこからうかがえる評価および若干の考察をまとめる。

１．旧石器時代

（１）第Ⅰ文化層　層位：第Ⅲ黒色帯から第Ⅱ黒色帯

北調査区は、配石１基と単独出土の２点の石器群で構成される。石器組成は断片的で、剥片２点である。定型的な石器は認められなかった。石材組成は、黒曜石２点、6.7g である。剥片剥離技術は、黒曜石製の剥片の剥離面の観察から、調整打面を有し、剥片剥離方向を一定方向にした石核をうかがうことができる。

配石は第Ⅱスコリア層の降灰前後に配置され、層位的に安定している尾根Ａの頂部に位置し、３㎏以上の重量であることから、原位置を保っていると推定される。一方、石器群は重量 1.1g の剥片が第Ⅲ黒色帯、重量が 5.6g の剥片が第Ⅱ黒色帯から出土しており、出土層位と平面的な距離から配石と石器群の間には一定の時間差があると推定される。

南調査区の第Ⅰ文化層は、配石４基４点、単独出土の礫８点、５か所の小規模な石器ブロックから出土した 28 点、単独出土した８点の石器群で構成される文化層である。示準的な石器は認められない。石器組成は断片的で、掻器１点、敲石１点、剥片 31 点、石核１点である。定型的な石器は掻器１点である。石材組成は、第１石材が黒曜石、第２石材がＦ．ホルンフェルス、第３石材が珪質岩である。剥片剥離技術は、求心的な剥片剥離作業を行う石核と、板状の石核素材から剥片剥離方向を一定方向にした剥片剥離作業を行う石核からうかがうことができる。

本遺跡で検出した第Ⅰ文化層は､愛鷹･箱根山麓の旧石器時代編年（以下「第□期」）において「第２期」と呼ばれ、本格的な石刃石器群の出現と台形様石器群および石斧石器群の衰退に特徴づけられる。

「第２期」の遺構と遺物は上部愛鷹ローム第Ⅲスコリア帯黒色帯２（SC Ⅲ -b2）～第Ⅰ黒色帯下部（BB Ⅰ下部）に含まれ、武蔵野台地を中心とする南関東の層位編年（前半期をⅩ・Ⅸ・Ⅶ・Ⅵ層段階）のⅨ層の一部からⅥ層段階に対比されている（静岡県考古学会 1995）。その後、出土資料の増加を受け、第Ⅲスコリア帯黒色帯２（SC Ⅲ -b2）～第Ⅰ黒色帯下部（BB Ⅰ下部）、放射性炭素年代の較正値では 33,500 ～ 28,500 cal BP までの 5,000 年間がそれに相当し、石器群の様相により SC Ⅲ -s2 期、SC Ⅲ

-s1 期、BB Ⅲ下・中部期、BB Ⅲ上部 -BB Ⅱ期、NL-BB Ⅰ下部期の 5 期に細分されている（阿部 2016）。「第２期」の 75 遺跡の内、31 遺跡（41％）が BB Ⅲ上部 -BB Ⅱ期に帰属しており、BB Ⅲ上部の遺跡数が少なく、BB Ⅱ期の遺跡数が多い。石器群は初音ヶ原遺跡の石刃製石器群と清水柳北遺跡の小型剥片製石器群が認められる。北調査区と南調査区の第Ⅰ文化層は石刃が認められない点で初音ヶ原遺跡の石刃製石器群と異なり、清水柳北遺跡の小型剥片製石器群の一部であり、小型剥片製石器群が顕著な西日本や九州の様相に近いと考えられる（阿部 2018）。

（2）第Ⅱ文化層　層位：第Ⅰ黒色帯から休場層下部黒色帯

北調査区は、配石３基３点と単独出土３点の石器群によって構成される文化層である。石器組成は断片的で示準的な石器が認められないものの、組成の中に掻器を有する石器群である。石材組成は、F. ホルンフェルス 1 点、黒曜石 1 点、ガラス質黒色安山岩 1 点である。石器石材は、掻器がガラス質黒色安山岩となっている。また、掻器の素材剥片から縦長剥片を作出する剥片剥離技術がうかがうことができ、掻器の剥離痕の観察により剥離面と主要剥離面の剥離方向が 180 度異なることから、両設打面石核が推定される。

南調査区は、礫群 1 基 7 点、単独出土の礫 14 点からなる合計 21 点の礫と、単独出土した 22 点の石器で構成される文化層である。石器組成はナイフ形石器 5 点、楔形石器 2 点、削器 1 点、磨石 1 点、剥片 11 点、砕片 1 点、石核 1 点の 22 点で構成されている。

本遺跡で検出した第Ⅱ文化層の遺構と遺物は、「第３期」と呼ばれ、基部加工尖頭形石器と角錐状石器に特徴づけられる。

第Ⅱ文化層は、上部愛鷹ローム第Ⅰ黒色帯（BB Ⅰ）から休場層下部黒色帯（BBO）に含まれ、武蔵野台地を中心とする南関東の層位編年（Ⅵ、Ⅴ、Ⅳ）のⅥ層の一部からⅣ層段階に対比されている。出土した石器は大形の掻器であるが、Ⅳ層段階に特徴的な基部加工尖頭石器や角錐状石器を欠落することから、断片的な石器組成となっており、当該期の石器群の一部を検出したと判断される。

（3）第Ⅲ文化層　層位：休場層

北調査区は、配石 24 基 24 点、礫群 44 基 665 点、単独出土の礫 345 点からなる合計 1034 点の礫と、石器ブロック 10 か所 698 点、単独出土した 465 点の合計 1163 点の石器で構成される文化層である。石器組成は、ナイフ形石器 97 点、尖頭器 2 点、掻器 28 点、抉入石器 2 点、彫器 5 点、楔形石器 3 点、削器 12 点、石錐 1 点、磨石 3 点、台石 1 点、加工痕のある剥片 14 点、使用痕のある剥片 23 点、石刃 87 点、石核 44 点、剥片 777 点、砕片 64 点の合計 1163 点である。文化層の示準的な器種はナイフ形石器である。これに尖頭器、掻器、抉入石器、彫器、楔形石器、削器、石錐等の各器種が伴うナイフ形石器石器群である。石材組成は、第 1 石材がガラス質黒色安山岩で 594 点（51％）、3652.6g（21.8％）であり、出土点数の比率が高く重量の比率も高い。第 2 石材が F . ホルンフェルスで 281 点（24％）、4336.4g（25.9％）と出土点数の比率がやや高く、重量の比率も高い。第 3 石材は黒曜石で 246 点（21％）、832.1g（５％）である。剥片剥離技術は、ナイフ形石器・掻器・削器の素材剥片、両設打面石核、単設打面石核、90 度打面転移が認められる石核、接合資料から石刃技法を技術基盤として石刃・縦長剥片を作出し、定型的な石器を製作していることが明らかとなった。

休場層下部黒色帯から休場層下部は、石刃・縦長剥片の打面を基部に残し、やや丸い基部を形成する側縁加工ナイフ形石器や斜位使用で二側縁加工し涙滴形を呈するものが特徴的で、角錐状石器と掻器は継続するが、角錐状石器を多数組成する遺跡が少ない（阿部 2016）とされ、下ノ大久保遺跡第Ⅲ文化層、秋葉林第Ⅶ文化層が典型とされる。本遺跡で出土したナイフ形石器は休場層から出土しており、石刃・縦長剥片製で基部に打面を残す中形・小形の二側縁加工のナイフ形石器や斜位使用の二側縁加工で涙滴形を呈するナイフ形石器を組成する点から、当該期に含まれると指摘できる。

（4）第Ⅳ文化層　層位：漸移層

北調査区の第Ⅳ文化層の石器群は、散在的に分布しており、単独出土した22点の石器が検出された。これらは、第Ⅲ文化層のナイフ形石器石器群の中から細石刃石器群を抽出したものであり、平面分布や垂直分布で集中地点が認められない単独出土の石器群である。石器組成は細石刃と細石刃石核を組成する細石刃石器群である。細石刃は完形4点、打面～中間5点、中間8点、中間～末端1点の各部位が認められた。細石刃石核は剥片剥離作業面や打面の位置によって細分したが「野岳・休場型」（鈴木1971）の範疇に含まれるものであった。石材組成は黒曜石で22点（100％）13.7g（100％）を占める。細石刃石核は、両設打面の細石刃石核で右側面と裏面に剥片剥離作業面を形成するものが認められた。

「第5期」の層位は休場層上層から漸移層にかけて、多量の細石刃と細石刃石核に大形の削器が伴う石器群が特徴的である。細石刃石核は野岳･休場型石核を中心に舟野型石核や海老山型石核が認められ、小形の野岳・休場型細石刃石核を主体とする野台遺跡第Ⅱ文化層、大形の野岳・休場型石核を主体とする大奴田場A遺跡第Ⅱ文化層、両者が混在する山中城第1地点第Ⅰ文化層などが知られる。本遺跡で出土した細石刃と細石刃石核を主体とする石器群は当該期の石器群であり、野台遺跡第Ⅱ文化層に類似すると指摘できる。（前嶋）

2．縄文時代

（1）遺構について

検出された遺構は北調査区で、土坑2基、集石6基、南調査区で土坑2基、集石4基、焼土址2基と、二つの調査区を合わせても遺構数は絶対的に少ない。また､これらの遺構のうち第2号～第4号集石(SG2～4）は調査区中央北側に集中するものの、その他は散在しており確認された位置にまとまりは見られない｡併せて住居址といった一定の期間に渡って定住的な生活を行うような遺構が確認できなかった。

これらのことから、北調査区で検出された土坑のうち1基は陥穴と判断できるとともに、大半の集石において被熱による赤化した礫が見られることを踏まえると、本遺跡はいわゆるキャンプサイトとして機能した遺跡と判断される。なお、愛鷹山麓の沼津市域における縄文時代早期の遺跡において住居址の確認事例は少なく、大半が土坑や集石といったものであることから、本遺跡はこれまでに確認されている状況と大差がなく、愛鷹山麓の遺跡ついて典型的な様相を示しているといえる。

（2）土器について

a．土器出土状況

土器の分布状況は、北調査区では調査区西側における地形の傾斜が緩やかな008～013－024～029グリッドの範囲と、等高線の間隔が狭い調査区東側中央部の018－025グリッド付近に集中する。南調査区では、等高線の間隔が広く傾斜がとても緩やかな調査区中央部の009～011－002～008グリッドの範囲に集中している。出土した土器の時期は北調査区では早期及び中期、南調査区で早期のものが確認できた。そして、土器型式については多数の型式に及んでおり、型式学的特徴からⅠ～Ⅴの5つの群に分類が可能であった。なお、出土点数という点では南調査区が多く、北調査区は少ない。

出土した土器のうち、南調査区で出土したⅠ群2類とした駿豆撚糸文系土器では西洞段階（池谷2002）の良好なセット関係が確認できる。また、北調査区及び南調査区ともに出土点数が多いのが第Ⅱ群の早期後半の土器であり、4類とした鵜ヶ島台式はまとまって出土している。南調査区で出土した第Ⅲ群とした早期末葉の土器は器形を把握できる状態で一定量が出土している。これらは愛鷹山麓における縄文時代の遺跡の分布や展開、土器様相を考える上で重要な出土事例といえる。中でも特に第Ⅱ群4類とした鵜ヶ島台式の出土様相はこれまでに愛鷹山麓で確認されてきた当該土器の様相とは異なっており、前後の土器型式である野島式や茅山下層式との関連も含めて重要な出土成果である。以下では、

本調査で出土した鵜ヶ島台式についてみていきたい。

ｂ．芝荒遺跡で出土した鵜ヶ島台式について

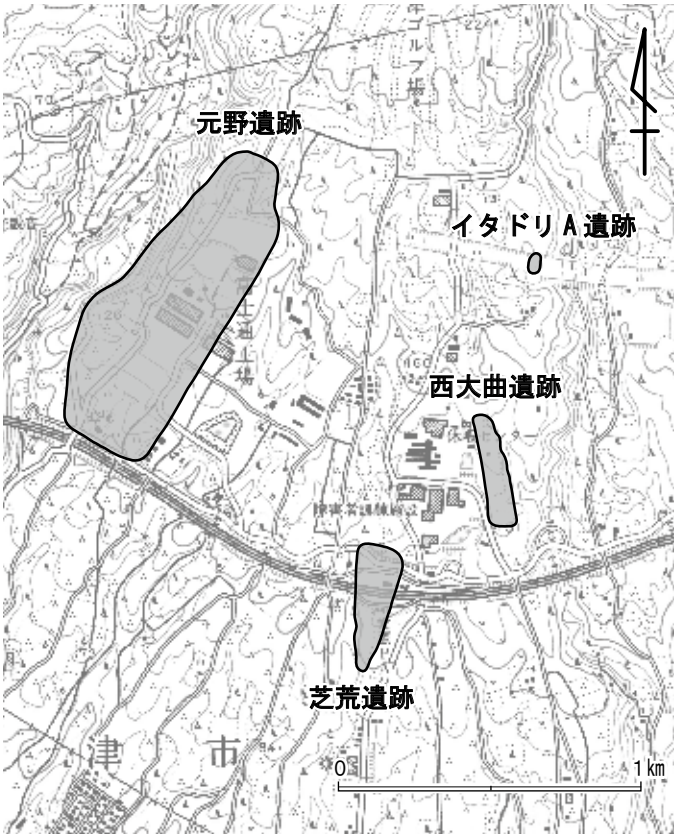
出土した鵜ヶ島台式の特徴

鵜ヶ島台式は縄文時代早期後半に関東地方を中心に分布する茅山系土器の一型式であり、前型式として野島式、次型式には茅山下層式が位置付けられている。鵜ヶ島台式の分布範囲は北関東から琵琶湖周辺までと広範囲なのが特徴であり、次型式の茅山下層式も同様の分布範囲となっている。鵜ヶ島台式の器形は２段の文様帯とそれに伴う屈曲が明瞭な段部を有し、底部は平底となる。そして文様帯に施文される文様は微隆起線や沈線を用いて襷状の構成による区画文（襷状区画文）を作り、区画を形成する線の交点には円形の刺突が施文され、さらに文様区画の中に充填文を施文することが最大の特徴である。本遺跡で出土した鵜ヶ島台式の文様構成は、①区画の施文を微隆起線によるものと②沈線によるものの２種類に大きく分けられる。なお、①とした微隆起線を使用するものについては、北調査区で出土している第 118 図 41 のみであり、以外は②とした沈線によるもの（北調査区：第 113 図 5・第 119 図 43・44、南調査区：第 177 図 84、第 178 図 85）である。例外として南調査区で出土した第 177 図 83 のような縦位の押し引きによる集合沈線文を文様帯に施文するもの、第 178 図 88 のように押し引きによる渦巻き状の併行沈線による文様を施文するものも存在する。

また、文様以外の面でも、段部の屈曲部に連続した刻みを加えるものと加えないものが存在することや、屈曲が強いと第Ⅰ・第Ⅱ文様帯の間に空白部が生じ、屈曲が弱いと空白部は生じず、第Ⅰ・第Ⅱ文様帯における文様が連続して施文されることなど、文様施文に特徴の差違が見られる。これらのことは施文される文様も含めて、出土した鵜ヶ島台式において時期差が存在している可能性があろう。

芝荒遺跡出土の鵜ヶ島台式が示すこと

これまで、鵜ヶ島台式の前型式である野島式と次型式である茅山下層式については愛鷹山麓においてまとまって出土している遺跡が確認されていた。一方、鵜ヶ島台式は静岡県東部の縄文時代の遺跡を中心に出土事例が数多く確認できるものの、まとまって出土している事例は伊豆半島の賀茂郡河津町に所在する家ノ上遺跡くらいであり、他の遺跡での事例は確認できず、散在的な状況にとどまっている。これは縄文時代早期後半の遺跡が数多く確認されている愛鷹山麓や箱根西麓においても同様である。このような状況の中で、本遺跡での鵜ヶ島台式の出土状況は、野島式と茅山下層式の間の時期においてもまとまった出土事例を有する遺跡の存在が確認できたといえ、愛鷹山麓における茅山系土器の分布・展開を考える上で良好な事例である。



第 240 図　芝荒遺跡周辺における茅山系土器出土の遺跡

芝荒遺跡周辺では、元野遺跡や西大曲遺跡といった茅山下層式期の土器がまとまって出土する遺跡の存在が知られてきた。また、新東名建設工事に伴って、西大曲遺跡

の北にイタドリＡ遺跡（第二東名Ｎ o.13 地点）の存在が確認され、発掘調査の結果、鵜ヶ島台式と茅山下層式が出土している。芝荒遺跡において鵜ヶ島台式のみでなく茅山下層式が出土していることも併せると、鵜ヶ島台式から茅山下層式の時期にかけて、芝荒遺跡及びその一帯で人が断続的ながらも遊動的な活動していたと推測できる。そして、このことは縄文時代早期後半の愛鷹山麓における当時の人の生活の様相を示すものとして、重要な調査結果といえよう。

（３）石器について

縄文時代の石器群は草創期と早期に大別される。

ａ．北調査区

草創期の石器群は狩猟に係わる尖頭器と有茎尖頭器が単独で出土しており、当該期の遺構や土器、石器製作跡に伴う石核や剥片類を伴わないことから、他地域で製作された製品を本遺跡内に搬入して使用した可能性が高いと推定している。一方、早期の石器群は同時期の土器、集石、土坑と重複して分布しており、当該期の人々が野営地として利用した際、調理に関連する遺構として集石と焼土跡を遺し、遺物として石皿と磨石を残したものと推定している。また、これらの遺構の周辺からは、石器製作に係わる石核と供に剥片や砕片が出土していることから、石鏃等の狩猟具の製作等も行っていたと思われる。

ｂ．南調査区

草創期の石器群は北調査区と同様に狩猟に係わる尖頭器と有茎尖頭器が単独で出土しており、製品を搬入して使用した可能性が高いと推定している。また、早期の石器群も北調査区と同様に集石や土坑と重複して分布しており、当該期の人々が野営地として利用した際、調理に関連する遺構として集石と焼土跡を遺し、遺物として石皿と磨石を残したものと推定している。また、これらの遺構の周辺からは、石器製作に係わる石核や楔形石器とともに剥片や砕片が出土していることから、石鏃等の狩猟具の製作等も行っていたと思われる。

３．古墳時代

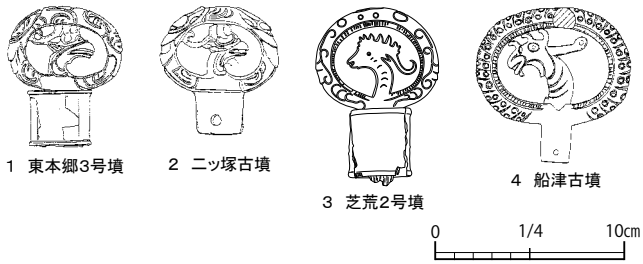
古墳時代の遺構としては、古墳６基が検出された。北調査区では南東部の緩斜面上で芝荒４号墳と芝荒５号墳が、南調査区では西側の谷近くで芝荒２号墳と芝荒３号墳、中央付近で芝荒６号墳、東端で芝荒７号墳が検出されている。調査区内には茶畑や森林が広がっていたことから、耕作による削平の影響や木の根による攪乱の影響が大きく、墳丘は確認できなかった。石室も多くで破壊が進んでいるが、芝荒２号墳と芝荒３号墳は石室、副葬遺物とも遺存状況が良く、特に芝荒３号墳は盗掘を免れて築造時に近い状態を保っていた。

埋葬施設はすべて無袖式の横穴式石室で、東駿河地域で一般的に見られる石室形態を有している。そのうち芝荒３号墳から芝荒６号墳の４基では、石室入口に段構造が認められた。最も石室規模の大きい芝荒２号墳は、単鳳環頭大刀をはじめとする豊富な金属製品が副葬され、古墳群の初現期に築造されたものと考えられる。その他の古墳は石室の縮小化が認められるが、最も小型の石室を持つ芝荒３号墳には、装飾付大刀や鐔付の小刀が副葬されていた。石室形態や副葬遺物を検討した結果、今回検出された古墳は後期後半から終末期後半（７～８世紀）に築造されたものと考えられる。また出土した遺物は、古墳の年代や追葬行為、被葬者の性格・階層性を検討するうえで大きな目安となるものであり、特に芝荒２号墳の単鳳環頭大刀、芝荒３号墳の装飾付大刀は注目される発見といえよう。

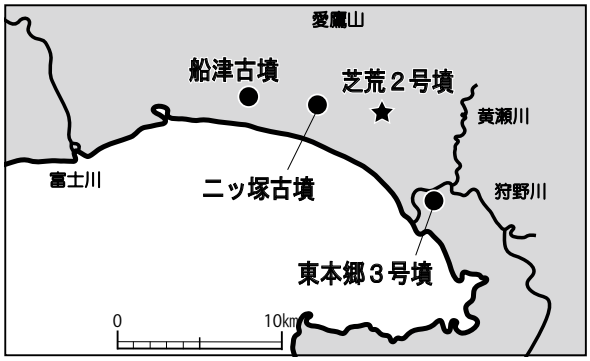
（１）芝荒２号墳・芝荒３号墳出土副葬遺物ー装飾付大刀を中心にー

芝荒２号墳 単鳳環頭大刀柄頭の特徴と位置付け

単龍鳳環頭大刀は、これまで多くの研究者によって変遷や系譜が研究されてきた。また、新納泉によって整理された編年は、現在も装飾付大刀の編年を考える際の軸とされている（新納 1982、1987）。単



第 240 図　東駿河地域における単鳳環頭大刀の出土事例



第 241 図　東駿河地域の単鳳環頭大刀出土分布図

龍鳳環頭大刀は、日本列島において分布の偏在性が認められる外来系大刀であり、芝荒古墳群の位置する東駿河地域は集中地域の一つとして注目される。そこで、芝荒２号墳から出土した単鳳環頭大刀柄頭について周辺の出土事例と比較しながら特徴まとめ、先学の研究を参考にその位置付けについても触れたい。今回は出土事例を含め、対象を単鳳環頭大刀に絞って検討する。

現在までに東駿河地域で出土が確認された単鳳環頭大刀は、沼津市の二ッ塚古墳例、東本郷３号墳例、富士市の船津古墳例の３例である。これらの事例は、単龍鳳環頭大刀の変遷や系譜を整理するにあたって度々、採り上げられており、研究者による相違はあるものの位置付けが示されている（穴沢・馬目 1986、大谷 2006）。

東本郷３号墳例は新納Ⅴ式に比定され、東本郷系列の最古式に位置付けられる。この系列は、日本各地に広く配布され、最も出土事例が多く認められる龍王山系列の亜系列とされ（穴沢・馬目 1986）、単鳳環頭大刀の量産期に製作されたものである。二ッ塚古墳例は同じく新納Ⅴ式に比定され、龍王山系列に類似するが、嘴で玉を噛む。船津古墳例は装具や製作技法に双龍環頭大刀の影響が見られることから新納Ⅵ式に比定され、単鳳環頭大刀の最新例とされる。このように、東駿河地域における出土事例は、単鳳環頭大刀製作最盛期の新納Ⅴ式以降に位置付けられるもので占められている。次に、芝荒２号墳柄頭の位置付けを検討するにあたって注目すべき点をまとめていく。

〈製作技法〉　本例の柄頭は銅製鍍金仕上げで、環部と中心飾を別々に鋳造して接合した「別鋳式」の製作技法を用いている。新納Ⅳ式以降は一鋳式の銅製鍍金仕上げを主流とすることから、本例の製作技法は非常に特異な例といえよう。環部と中心飾を別々に造る方法は新納Ⅱ式に見られるもので、その代表としては海北塚古墳例（ただし、環部と中心飾は別素材）が挙げられる。東駿河地域の事例としては、船津古墳例が全く同じ製作技法で造られている。

〈鳳凰頭部・環部走龍文の意匠と表現様式〉　鳳凰頭部は立体感が薄れ、浅い線刻によって平面的に仕上げられており、細部の表現が簡略化されたシンプルな造形となる。全体として鳳凰の形を捉えてはいるが、従来の鳳凰には見られない独特な変化が認められ、類似する事例の見い出せない特異な表現をとる。環部の走龍文は鱗や半肉彫りの表現が失われ、鳳凰と同様に浅い沈線のみの平面的な手法で表現されている。中央に楕円形状の文様を配置する点が古い型式の環部に類似しており、蕨手状やＳ字状に巻き上がる表現は、龍の胴部や脚部における曲線的な表現を想起させる。内側の刻み目は、本来、重ね合せた金箔を留めるために入れられたものだが、鍍金仕上げになった後も文様として残存する（新納 1982）とされることから、本例もそうした例の一つに数えられよう。一見したところ、中央の楕円形を中心とした背中合わせの文様構成に思われるが、表裏左右で細部に違いが認められ、単純な対称関係にはなってない。このように本例は、走龍文の名残がわずかに認められるものの龍を表現しているとは言い難く、既存の走龍文の分類（大谷 2006）に当てはまらない特異な文様を持つ。

〈装具と佩用方法〉　柄縁には上下端を折り返して肥厚させた玉縁の筒金具が装着され、責金具は伴わない。鞘装具は遺存せず、佩用方法は不明である。

〈位置付け〉　単龍鳳環頭大刀の編年（新納 1982,1987、穴沢・馬目 1986、大谷 2006、持田 2011 他）や出土事例を参考に、編年的位置付けを検討する。製作技法を見ると、本例のような鍍金による金銅製が主流となるのは新納Ⅳ式からである。また、環部の横幅が 6.5㎝を測る点は、多くがほぼ６㎝の規格で造られている新納Ⅴ式（穴沢・馬目 1986）の製品に近い。さらに表現様式や意匠のうえで、鳳凰頭部および環部の造形が平面的となり、細部が簡略化されて文様の退化が認められる点は、新納Ⅴ式以降、顕著に現れる変化といえる。柄縁金具に玉縁の筒金具を用い、責金具を伴わなくなるのは新納Ⅴ式からとされ、環部の茎のみを筒金具に挿し込む例は、やはり新納Ⅴ式から多く見られるものである。これらの特徴から、本例は新納Ⅴ式以降（TK43 型式期～ TK209 型式期古相）に位置付けるのが妥当であろう。

これまでに整理された事例と比較すると、本例の鳳凰頭部、環部走龍文はともに独特の表現を用いており、既存の系譜上に類例を求めることは難しい。近隣の出土事例で最も類似性が認められるのは富士市船津古墳例（新納Ⅵ式）で、「別鋳式」という製作技法、環部内側の刻み目、鳳凰と環部走龍文が崩れて既存の系譜とは異なる意味不明の意匠を用いる点が共通する。しかし、船津古墳例が装具の意匠や技法の点で双龍環頭大刀と多くの共通点を持つのに対し、本例は新納Ⅴ式に近い要素が目立ち、本来鳳凰が持つべき要素の欠落が比較的少ないことから、船津古墳例より古い時期に位置付けられる可能性が高い。佩用方法や柄縁金具以下の装具が不明なため詳細な時期を絞り込むことは困難であるが、新納６～８段階（TK43 型式期～ TK209 型式期古相）のなかで、６段階に近い時期に位置付けられるものと考えたい。

ただし、これらの時期に単龍鳳環頭大刀の一般的な製作技法として用いられる一鋳式ではなく、同時期の双龍環頭大刀に見られる「別鋳式」という技法を採用している点は、製作工房や工人を検討するうえで非常に注目すべき点である。本例を製作した工人は、鳳凰や龍の造形をよく理解しておらず、環部に龍を表現するといった単鳳環頭大刀本来の要素じたいも認識していなかったものとみられる。

単鳳環頭大刀以外に注目される芝荒２号墳の副葬遺物

単鳳環頭大刀以外の副葬品としては、鉄鏃が注目される。鉄鏃は少なくとも 24 本が副葬され、そのすべてが尖根式鏃（柳葉式、鑿箭式、片刃箭式）で構成されている。古墳時代後期において最も多く指向された鉄鏃の副葬スタイルは「少量の平根式鏃＋多量の尖根式鏃」とされるが、尖根式鏃のみの鏃束構成が必ずしも階層的に劣るわけではなく、田村が指摘するように階層秩序とは異なる指向が働いた可能性がある（田村 2003）。また岩原は、副葬本数が 20 点以上の古墳を階層的にやや上位に位置付けることが可能であるとし、鉄鏃の出土点数が所有者の社会的な地位や階層差をある程度反映するものと指摘している（岩原 2001）。本例の「少種多量の尖根式鏃のみ」という構成は、職種や出自など被葬者の持つ特異性と、芝荒古墳群における芝荒２号墳の優位性を示すものといえる。

また両頭金具は、規模・形状とも県内で一般的に見られる事例に類似していた。県内の弓金具については、井鍋がその変遷や他副葬品との共伴関係、階層構造にまで言及しており（井鍋 2003）、県内の両頭金具は大きな個体差の見られない規格品であったことがうかがえる。今回出土が確認されたのは単鳳環頭大刀を副葬する芝荒２号墳だけである点、少種の尖根式鏃と共伴する点など、本例は県内における両頭金具の出土傾向を反映したものといえる。

芝荒３号墳 装飾付大刀の復元と位置付け

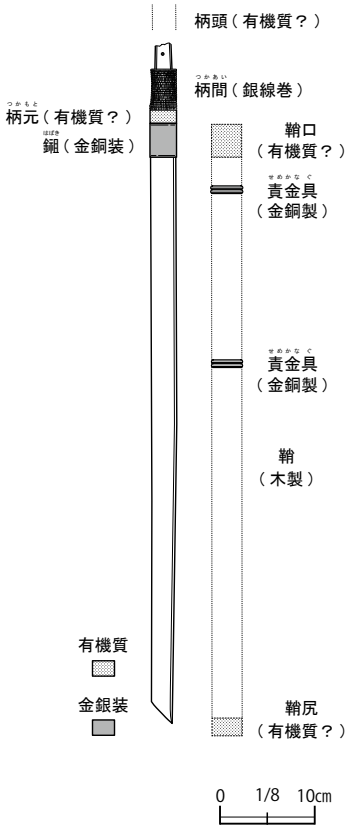
芝荒３号墳から出土した装飾付大刀は、柄間、鏥、鞘の責金具に金属製の装具を用い、金や銀の装飾が施されている。柄頭は失われ、柄元、鞘口、鞘尻に装着されていたと考えられる装具は確認されていないが、芝荒３号墳は盗掘などによる被害を受けておらず、その他の金属製装具は残存していることから、これらは有機質であったものが腐食して消滅した可能性が高く、金属製の鐔を持たない呑口式で鞘

に納められていたものと考えられる。

〈大刀の構造と復元〉　全長は現状で 72.0㎝を測り、欠損部を加えても 100㎝には達しないであろう。刀身幅は 2.7㎝と細身で、切先はカマス形である。

柄の構造を見ると、柄間には刻み入りの銀線が蔓巻にされ、金銅製の鏶が装着される。柄木は柄間銀線巻から鏶まで同一部材で構成されるものと思われるが、その構造は目視による判断が難しい。柄頭や柄元の素材としては、鹿角製や木製が想定される。次に鞘を見ると、金銅製で断面が扁平な蒲鉾形を呈する責金具が２列１組で２か所に装着されている。鞘と責金具以外の鞘装具が失われた状態ではあるが、現状で環付足金物が装着されていた痕跡は認められなかった。責金具のうち１列を単脚足金物と捉えることもできるが、小孔は認められなかった。従って、布紐などによる二脚佩用、または元から佩用装置を持たなかったと考えることもできる。

〈位置付け〉　刀身については新納６段階以降、二足佩用に伴う軽量化により本例のような全長 70㎝前後を主体とする大刀が増加し、切先形状はカマス切先が増加する傾向が認められる（菊池 2010）。ただし、それ以前の段階に全く見られないわけではないため、時期を断定する決定的な要素とはならない。断面蒲鉾形の責金具は新納７段階から登場し、７世紀末にはほぼ姿を消すとされるが、縦長の倒卵形を呈した平面形は出現段階からやや時期が降ったものと推測でき、吊手孔付佩用装置の編年に照らし合わせるならば、新納 10 段階に見られる形状に近い。これらの状況からは、装飾付大刀生産体制再編後の新しい要素がうかがえる。一方で、刻み入りの銀線巻や金属製の鐔を持たない呑口式は、生産体制再編後も認められるものの古相を示すといえ、二足佩用盛行以前の要素がうかがえる。このように、本例には装飾付大刀盛行期間において比較的古相を示す要素と、生産体制再編後の新しい要素の混在する様子が認められた。このような一見すると違和感を感じる構成や簡素な有機質の拵えは、製作後に補修が加えられたことを示唆するものであろうか。詳細な時期を絞り込むことは難しいため、編年的位置付けは TK209 型式期新相～ TK217 型式期（新納８～ 10 段階）周辺に求められ、７世紀代に位置付けられるものとしておきたい。



第 242 図　装飾付大刀想定図

（２）特筆すべき石室構造ー芝荒２号墳における空間利用ー

芝荒２号墳は今回検出された６基のなかで最大規模を誇り、副葬遺物と併せて他の古墳とは明確な階層の差が認められる。石室は袖部による玄室と羨道の区分が見られない無袖式であり、間仕切石のような明確に空間を区分する存在も検出されていない。しかし、側壁の構築状況や床面の造作などから、中央より奥壁側を遺骸安置空間として強く意識していたことが読み取れる。

石室構造から見た空間区分

側壁の構築状況を観察すると、空間利用の在り方を強く意識した築造過程が見えてくる。まず注目したいのは、開口部側から２石目に設置された大型の基底石である。この石材の手前付近には梱石状の石材４石が並べられていることから、大型石材と梱石状の石材によって玄室空間を区画する意図が感じられる。次に注目されるのは奥側から５石目の基底石である。この石材は左右とも小型で、他の基底石とは異なり小口面を内側に向けている。側壁の目地を見るとこの部分で縦目地がきれいに通っており、それより手前側の左側壁基底石は、この石材と同程度の高さにそろえられていた。従って奥側から５石目

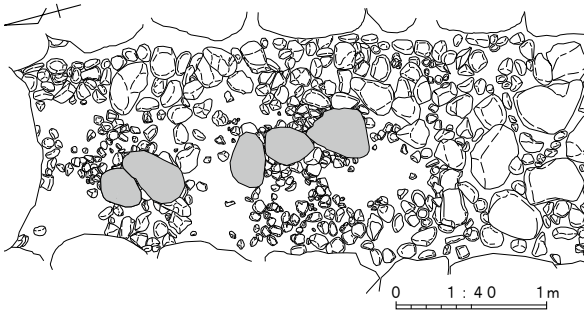
は、側壁を構築する際の指標となる石材であった可能性が高い。

また、この指標石より奥側の側壁は全体的に大型の石材を用いており、横目地を意識しながら丁寧に積み上げられた印象を受ける。それに対して、手前側は石材の大きさにばらつきがあり、目地もやや乱れている。このような構築状況の差異は、奥壁側を遺骸安置空間として重要視し、その意識の基に構築作業が進められたことを想像させる。それに伴い、埋葬行為を含めた作業単位も、指標となる石材を境に異なっていた可能性が考えられよう。

床面構造から見た空間区分

確実に面として把握できた礫床は１面であったが、側壁と同様に玄室中央付近を境として造作に違いが認められた。基本の床面構造として貼床の上に拳大の小礫を敷き詰めているが、この小礫は梱石状の石材から 0.6m ほど内側までしか施されていない。中央より奥側の小礫上には棺台と想定される石材が直線的に並んでおり、周囲には何かを囲っていたかのように帯状にまとまった石材が認められた。これらの石材は初葬時の棺の設置に係わるものと考えられる。対して、追葬時に使用したであろう手前側の空間は、礫床を敷き直したというより小礫の施されなかった、もしくは乱れてしまった部分に大きめの石材を並べたような様相を呈しており、奥壁側とは異なる意識が感じられる。

このような状況を踏まえ、石室を空間利用の面から厳密に区分すると、中央の指標となる石材より奥側の空間が「玄室」に相当し、手前側の空間は「羨道」的な意味合いを持っていたといえよう。追葬回数は不明だが、副葬遺物の出土状況を見ると初葬からそう遠くない時期の追葬は、やはり奥側で行われた可能性が高い。



第 243 図　棺台と想定される石材とその周辺状況

（３）芝荒２号墳と芝荒３号墳の関係性

隣接する芝荒２号墳と芝荒３号墳は、石室の規模や築造時期に大きな差異が認められるが、ともに装飾付大刀を検出した。また芝荒３号墳は、埋没した芝荒２号墳の周溝を掘り込んで石室や周溝を構築しており、周溝を含めたすべての施設が芝荒２号墳の墓域と重複している。

後述するが、芝荒２号墳は芝荒古墳群の初現期に築造され、石室規模と副葬遺物から古墳群内の階層上位に位置付けられる。一方、芝荒３号墳の石室は富士川西岸から愛鷹山南麓の終末期に見られる著しく小型化した石室で、一般的に「小石室」と呼称されるものである。小石室の定義は明確に定まっておらず認識には多少のばらつきがあるが、小石室とされる事例を見るとおおむね全長 2.0m 前後で（およそ 2.5m 以下）、伸展葬での埋葬が困難と考えられるものが多く、単次葬墓として認識されている（石川 2008）。

芝荒３号墳築造時、芝荒２号墳の周溝は埋没してその機能を完全に失っていたことが読み取れるが、ある程度の墳丘の高まりは残存し、古墳が存在することは明らかであっただろう。その状況下において、わざわざ芝荒２号墳の墓域を浸食し、芝荒２号墳の墳丘と接するように芝荒３号墳の墓域を設定したのはいかなる理由からであろうか。同時期に築造された他の古墳との位置関係を考慮し、芝荒２号墳を完全に無視してただ単に掘りやすい場所を選択したとの見方ができる一方、芝荒２号墳との強い関係性から石室の軸方向や位置をほぼ揃え、意図的に近接した位置を選んだと考えることもできる。出土した装飾付大刀は製作から副葬までにある程度の伝世期間が想定され、製作時にはまだ芝荒２号墳の追葬が行われていた可能性もある点は、両古墳の関係性を想像させる。

（4）検出古墳の比較と編年的位置付け

今回の調査では芝荒２号墳から芝荒７号墳までの計６基が検出された。北調査区と南調査区は約200m 離れており、両調査区の間に分布していた可能性のある古墳については詳細不明であるものの、これらは同一尾根上に立地して芝荒古墳群を形成していたと考えられる。以下に６基の規模や構造を比較しながらまとめ、その編年的位置付けも検討したい。

石室の構造

富士川西岸から箱根西麓（北部）までのいわゆる東駿河と呼ばれる地域に分布する横穴式石室は、袖部による玄室と羨道の区別が見られない無袖式を基本とする。なかでも富士山・愛鷹山麓に隣接する地域では、開口部に「段構造」と呼ばれる特徴的な構造を有した地域色の強いタイプの石室が集中的に見られる（ここでいう段構造とは、玄室床面が開口部より一段低くなった構造を指す）。芝荒古墳群でも、石室形態の判明した５基はすべて無袖式であったが、石室入口の構造に着目すると２つのタイプが認められ（井鍋 2003、菊池 2008 参照）、その他の部位についても分類が可能であった。

〈石室入口構造〉

段差のないタイプ：玄室と羨道の区別が見られない通常の無袖式石室で、床面から開口部にかけて水平に推移し段差が認められないもの。２号墳のみが該当し、開口部付近には玄室を区画する意図を持つと考えられる梱石状の石材４石が並べられている。

段構造を有するタイプ：芝荒３号墳から芝荒６号墳が該当する。共通する特徴として、竪穴状に掘り込まれた墓坑を持ち、開口部に墓道と考えられる施設を接続しない点が挙げられる。ただし段構造には違いがあり、芝荒３号墳と芝荒６号墳は鏡石状の大型石材１石を配置するのに対し、芝荒５号墳は小口面を内側に向けた２石を配置する。

〈墓坑形態〉　細かく形態を分類すると、山寄せ式、準地表上式、掘り込み式（菊池 2007）に分けることが可能である。芝荒２号墳と芝荒３号墳は掘り込みが深いが、丘陵斜面を利用した掘削が行われるため斜面上位から下位方向に向かって深さを減じている。谷により近く傾斜の急な芝荒２号墳の方が地形利用による掘削が顕著なことから以下のように分類を行ったが、芝荒２号墳と芝荒３号墳は山寄せ式と掘り込み式のどちらがより適切か判断が難しい。平面形はすべて長方形状を呈する。

山寄せ式：芝荒２号墳が該当する。最も深いところで 1.1m 掘り込まれているが、丘陵斜面の傾斜に合わせ墓坑全体が斜面下位に向かって深さを減じる。また、開口部方向へも深さを減じていく。

準地表上式：芝荒４号墳・芝荒５号墳・芝荒６号墳が該当する。掘り込みの深さは基底石が納まる程度と浅く、石室の大半が地表上に構築される。

掘り込み式:芝荒３号墳が該当する。深い竪穴状の掘り込みに、石室の大半が納まる。斜面下位に向かって深さを減じている。

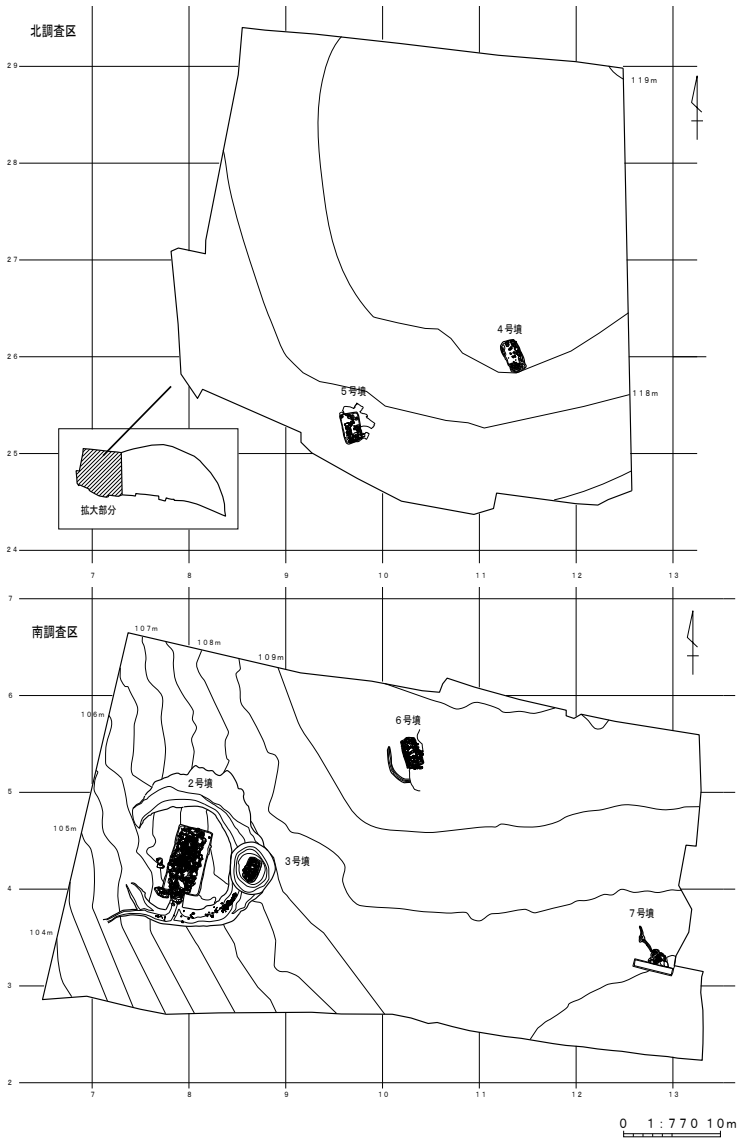
〈床面構造〉　東駿河の無袖式石室では敷石を施すのが一般的であり、追葬に伴い複数の礫床が重複して認められることも多い。しかし本調査で検出された古墳には敷石を施さないものが一定数認められた。

敷石を施さないタイプ：芝荒３号墳から芝荒６号墳が該当する。芝荒５号墳・芝荒６号墳は墓坑底面に硬く締まった貼床が認められ、芝荒４号墳と芝荒６号墳では人頭大の石材が検出された。当初から敷石が施されず、人頭大の石材は棺台として使用されていた可能性が高い。

敷石を施すタイプ：芝荒２号墳・芝荒７号墳が該当する。芝荒２号墳は貼床の上に拳大の小礫を敷き詰め、追葬時には開口部側の小礫が施されていない部分にやや大きな礫を加えている。また、奥壁側の敷石上には棺台と想定される石材が並んでいた。芝荒７号墳は軽石を用いた敷石が施されている。

〈その他の構造的特徴〉

天井石：芝荒２号墳と芝荒３号墳で天井石が検出されている。検出状況からどちらも平天井と考えられ



第 244 図　南北調査区における古墳の分布状況

る。

奥壁：芝荒２号墳と芝荒３号墳で奥壁が検出されており、どちらも大型の鏡石１石で構築されている。その他の古墳も、据付痕跡から多段積みの可能性は低いと考えられる。

側壁と裏込め：基底石を安定的に据えるための掘り込みは認められず、不安定な部分については小礫を嵌め込むなどの工夫がされている。側壁２段目以降が残存するものを観察すると、芝荒２号墳以外は２段目以降に基底石より小型の石材を用いている。横目地は床面の傾斜に合わせ、開口部に向かって降る。裏込めとして礫の充填が認められたが多用する様子はなく、芝荒２号墳・芝荒３号墳では土を充填していた。

棺：棺と考えられる痕跡は検出されず、棺台として使用したと想定される石材が認められただけであった。愛鷹山麓から箱根西麓にかけては組合式箱形石棺を採用する石室が多く見られるが、本古墳群では残存状況から木棺を用いていた可能性が高いと思われる。

石室と墳丘の規模

残存する石材や墓坑の大きさから石室規模を推測したところ、芝荒２号墳が突出して大きく、他古墳の２倍以上の長さを有している。芝荒４号墳・芝荒５号墳・芝荒６号墳は全長 3.0m 前後、幅も 0.6m 程度と類似した規模を示し、芝荒３号墳は全長 2.0m と著しく小型であった。墳丘長は、周溝の検出状況から芝荒２号墳で 10.5m 程度になるものと思われる。

副葬遺物と築造時期

今回検出された古墳は総じて土器の出土が少なく、副葬遺物から築造時期を推定することが難しい。従って、石室の形態や規模も含めた総合的な情報から築造時期を示す。

芝荒２号墳は副葬遺物と床面の状況から追葬が行われていると判断される。確実に初葬時に伴うと見られる遺物は単鳳環頭大刀のみで、その位置付けを TK43 型式期～ TK209 型式期古相と想定した。その他の金属製品は TK209 型式期～ TK217 型式期に位置付けられ、追葬に伴うものと考えられる。ただし、装飾付大刀は示された年代がそのまま副葬時期に対応するわけではない点で考慮が必要であり、追葬回数も不明である。

芝荒４号墳・芝荒５号墳・芝荒６号墳は石室の規模や形態、長軸方向、副葬遺物内容が似通った等質

第 106 表　調査古墳一覧表

	芝荒２号墳（南調査区）	芝荒３号墳（南調査区）	芝荒４号墳（北調査区）	芝荒５号墳（北調査区）	芝荒６号墳（南調査区）	芝荒７号墳（南調査区）
石室形態	横穴式石室（無段無袖式）	横穴式石室（有段無袖式）	横穴式石室（有段無袖式）	横穴式石室（有段無袖式）	横穴式石室（有段無袖式）	横穴式石室
主軸	N－15°－E	N－20°－E	N－27°－W	N－10°－W	N－15°－W	N－28°－W
平面形	長方形	長方形			長方形	
全長	8.2m	2.0m	― （3.2m 前後）	― （2.8m 前後）	― （2.8m 前後）	―
玄室長	5.2m	1.7m	―	―	― （2.2m 前後）	―
最大幅	1.5m（石室中央）	0.5m（石室中央）	0.6m 前後	0.6m 前後	0.6m（石室中央）	不明（0.6m 前後？）
奥壁側幅	1.2m	0.4m	―	―	0.5m	―
開口部側幅	1.2m	0.4m	―	0.6m	0.6m	―
墓坑長	6.9m	2.5m	3.5m	3.2m	3.2m	―
墓坑幅	最大 3.9m	最大 1.5m	最大 1.8m	最大 1.9m	最大 1.8m	最大 1.7m
墓坑深さ	最深 1.1m	最深 0.6m	最深 0.24m	最深 0.44m	最深 0.48m	―
墓坑形態	山寄せ式	掘り込み式（深い竪穴状）	準地表上式（浅い竪穴状）	準地表上式（浅い竪穴状）	準地表上式（浅い竪穴状）	
天井	平天井？（６～７石？）	平天井（５石架構）				
奥壁	鏡石１石	鏡石１石				
側壁	３～４段積、石室高 1.3m 前後 基底石は右 10 石・左 11 石 墓坑壁との間に褐灰色土を充填	３～４段積、石室高 0.5m 前後 基底石は右６石・左５石 墓坑壁との間に小砂利を含む褐色土を充填	基底石の一部のみ残存 左右５石（据付痕跡から推定）	２段目まで残存 基底石は右４石、左５石が残存（本来は各６石？）	２段目まで残存 基底石は右左５石 墓坑壁との間に礫裏込め	側壁材の一部が残存
石室入口構造と閉塞石	梱石状の４石を設置 最下段の５石（初葬時） ＋多量の礫から成る閉塞石	框石状の１石を設置		框石状の２石を設置 框石の上に閉塞石の一部	框石状の１石を設置	
床面	貼床、礫床１面、棺台設置		棺台設置？	貼床	貼床、棺台設置？	礫床１面（軽石）
外部施設	周溝全周 墓道接続	周溝全周		周溝全周？	周溝一部検出	奥壁側に溝状遺構
副葬遺物	単鳳環頭大刀１、小刀１、刀子４、鉄鏃（最少 24 本）、両頭金具３	装飾付大刀１、小刀１、刀子２	土師器坏（２個体？）	（須恵器破片）	土師器坏２ （須恵器壺１）	大刀の一部
副葬遺物時期	単鳳柄頭：TK43 ～ TK209 古相 鉄鏃：TK209 ～ TK217 両頭金具：TK209 ～ TK217	装飾付大刀：TK209 新相～ TK217 小刀：TK217 ？				
備考	墳丘長 10.5m 程度？ 追葬あり 初葬時は玄室中央で空間区分	墳丘長 2.9m 程度？ 小石室				

的な古墳である。出土土器の時期が判然としないため、石室の情報から築造時期の推定を試みる。愛鷹山南麓において、この３基のような石室入口に段構造を持つタイプの石室は遠江Ⅲ期末葉頃から見られるが、富士川西岸や富士山南麓地域の事例を見るとその築造は遠江Ⅳ期を中心とし、後半段階で石室の縮小化が顕著になるようである。従って、本例のように石室の縮小化が見られるものは、TK46 型式期（遠江Ⅳ期後半）段階の築造とするのが妥当であろう。ただし、芝荒６号墳の覆土から検出された白い粉状の塊が火山ガラスであるとすれば、その由来や下降時期は自ずと絞られ、石室から見た年代とは、ずれが生じてくる。墳丘が崩落した際に内部へ入り込んだものでないとすれば、築造年代は１世紀以上降る可能性があることを示しておく。

芝荒３号墳は出土した装飾付大刀の時期を TK209 型式期新相～ TK217 型式期（７世紀前半）に位置付けた。それに対し、小石室の築造が主流となるのは MT21 型式期以降（８世紀）とされる。また、墓坑は大淵スコリアらしき土層を掘り込んでいることから、その降灰以降に構築されたことになる。このように副葬遺物と石室から導かれる年代には差が認められるが、装飾付大刀は須恵器に比べて製作から副葬までの時間差が長く、その長短も個体差が大きいと考えられるため、ある程度の伝世期間を見込み、TK48 型式期～ MT21 型式期に築造時期を求めたい。

従って、今回検出された古墳群の築造順序を見ると、**６世紀末～７世紀前半：芝荒２号墳→７世紀後半：芝荒４・５・６号墳→７世紀末～８世紀前半：芝荒３号墳**という大まかな流れを捉えることができよう。ただし、芝荒３号墳と芝荒４号墳・芝荒５号墳・芝荒６号墳は逆の築造順序になる可能性もある。

古墳群における階層構造の詳細は不明だが、初現期に築造された芝荒２号墳は石室規模や副葬遺物の内容から階層上位に位置付けられる。それに対して７世紀後半代築造の古墳は、副葬遺物の組成が不明確であるものの、石室の規模や形態が類似しており、明確な階層差は見い出せなかった。これらの終末期における等質的な古墳は、愛鷹山南麓における典型的な石室形態を有しているが、床面に敷石を施さない点に特徴がある。このような細部の違いは、同一古墳群内に異なる性格を有する集団が混在し、様々な石室情報がもたらされていたことをうかがわせる。そして、小石室であるにもかかわらず装飾付大刀と鐔付の小刀を併せて副葬していた芝荒３号墳は、古墳群内に存在した造営秩序では語れない異質な存在であったかもしれない。

東駿河地域は墓制面において、「無袖式の横穴式石室」という極めて共通した特徴を有しており、強い規範の下で石室が築かれていたことがうかがえる。副葬遺物の面では、装飾付大刀の出土が多いとされる駿河地域のなかでもその分布が際立ち、特に装飾付大刀の生産体制再編以前における単龍鳳環頭大刀の濃密な分布を特徴とする。松尾は、東駿河地域を伝統的な首長権のある拠点地域に近い新興地域に当て、早い段階で地域の重要性が中央から認知されていたとする。さらに、単龍鳳環頭大刀の偏在する地域に対して、大王権と直結した関係にあったことを想定し、地域社会の構造や王権との関係性についても踏み込んで言及している（松尾 2005）。東駿河地域は墓制や副葬遺物の出土傾向から、一定のまとまりを持った地域（領域）であったことがうかがえるが、突出した最上位階層は見出し難く、等質的な立場の首長が複数存在していたと考えられる。従って、単龍鳳環頭大刀という特定種別の装飾付大刀を有することは、階層差を強調するだけでなく、特定の職能や中央との関係性などを示す機能も果たしていた可能性がある。

芝荒２号墳の被葬者はそうした上位階層に位置付けられる一人であり、今回の調査は芝荒古墳群が東駿河地域に形成された古墳群の構成や動向を示す一例として注目すべき存在であることを明らかにした。今後、さらに調査が進みその全容が明らかとなることを期待したい。（北）

【第Ⅲ章～第Ⅴ章　主な引用・参考文献および図の出典】

〈旧石器時代・縄文時代・古墳時代〉

［報告書］

函南町教育委員会 2001『上原遺跡』東京電力（株）桑原開閉所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 231 集『富士山・愛鷹山麓の古墳群』

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 218 集『合代島丘陵の古墳群』

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 184 集『原分古墳 調査報告編』

静岡県企業局・磐田市教育委員会 1994『匂坂中遺跡群発掘調査報告書－磐田北部工業団地造成事業に伴う発掘調査－』

中日本高速道路（株）・（財）静岡県埋蔵文化財研究所 2009『秋葉林遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 207 集

中日本高速道路（株）・（財）静岡県埋蔵文化財研究所 2007『向田Ａ遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 178 集

中日本高速道路（株）・（財）静岡県埋蔵文化財研究所 2010『富士石遺跡Ⅰ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 232 集

沼津市教育委員会 1996『柏葉尾遺跡』沼津市文化財調査報告書第 52 集

沼津市教育委員会 2010『八兵衛洞遺跡（第３次）』沼津市文化財調査報告書第 99 集

沼津市教育委員会 2011『二ッ洞遺跡・植出北Ⅱ遺跡』沼津市文化財調査報告書第 102 集

沼津市教育委員会 2011『井出丸山遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 100 集

沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会 2002『沼津市史 資料編　考古』

三島市教育委員会 1999『初音ヶ原遺跡』都市計画道路谷田幸原線初音ヶ原インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

［論文等］

穴沢咏光・馬目順一 1986「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布」『考古学ジャーナル』№ 266　ニューサイエンス社

池谷信之・冨樫孝志・麻柄一志 2010「第二章旧石器文化の編年と地域性　六東海・北陸地方」『講座日本の考古学Ⅰ　旧石器時代（上）』

池谷信之 2003「縦位密接施文から異方向帯状施文へ－駿河地方押型文土器の変遷と立野式－」『利根川』第 24・25 号　特集：押型文土器とその周辺

石川武男 2008「富士川西岸における古墳群－富士川町内を中心として－」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室－駿河東部の無袖式石室を中心に－』

井鍋誉之 2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会

井鍋誉之 2003「静岡県内の飾り弓について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第 10 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

岩原　剛 2001「副葬品の変質－東海地方における後期古墳の副葬品から－」『第８回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』三河古墳研究会

大谷晃二 2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」
『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 年度共同研究成果報告書』

大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』古代出雲文化センター

大谷宏治 2010「 第７節上神増Ｂ７号墳出土の環付足金物で佩用する大刀について」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 218 集『合代島丘陵の古墳群』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治 2003「地域区分、時代区分と鉄鏃分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第 10 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治 2003「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第 10 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

加藤晋平・鶴丸俊明 1980『図録　石器の基礎知識Ⅰ・Ⅱ先土器（上）・（下）』柏書房

菊池芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会

菊池吉修 2008「駿河における無袖石室」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室－駿河東部の無袖式石室を中心に－』

佐藤宏之 1988「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第 37 巻第３号　日本考古学会

静岡県考古学会 1996『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年　収録集』

静岡県考古学会 1995『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年　予稿集』

島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1996『特別展　黄金に魅せられた倭人たち』

杉山秀宏 2009「単龍環頭柄頭の終末例－太田市南金井出土例より－」『群馬県立歴史博物館紀要』第 30 号

鈴木一有 2009「鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜」『鳥居松遺跡５次円頭大刀編』（財）浜松市文化振興財団

鈴木一有 2006「東海の馬具と飾大刀にみる地域性と首長権」『東海の馬具と飾大刀』東海古墳文化研究会

鈴木一有 2001「東海地方における後期古墳の特質」『第８回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』三河古墳研究会

諏訪間順 1988「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』第 24 号　神奈川考古同人会

髙尾好之 2006「東海地方の編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社

瀧瀬芳之 2011「古墳時代後・終末期における大刀拵の様相」『考古学ジャーナル』№ 616　ニューサイエンス社

瀧瀬芳之 1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』№ 266　ニューサイエンス社

田村隆太郎 2003「副葬鏃群への指向」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第 10 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』

豊島直博 2013「金属製品の型式学的研究　剣・刀・槍・矛」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社

中村雄紀 2011「愛鷹山麓最古の石器群の諸問題－第Ⅶ黒色帯付近の石器群－」『石器文化研究』17

新納　泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第 34 巻第３号

新納　泉 1982「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第 65 巻第４号

西澤正晴 2002「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第９号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

橋本英将 2013「金属製品の型式学的研究　装飾大刀」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社

前田勝己 2008「富士市中原第４号墳」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室－駿河東部の無袖式石室を中心に－』

松尾充晶 2005『装飾付大刀と後期古墳－出雲・上野・東海地域の比較研究－』島根県古代文化センター調査研究報告書 31
島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

持田大輔 2011「古墳時代後期・終末期の装飾付環頭大刀」『考古学ジャーナル』№ 616　ニューサイエンス社

山本惠一 1995「静岡県下の６～７世紀の土師器－駿河東部・伊豆北部の現状について－」『東国土器研究』第４号

写　真　図　版

調査区全景（北側から）

調査区全景（南側から）

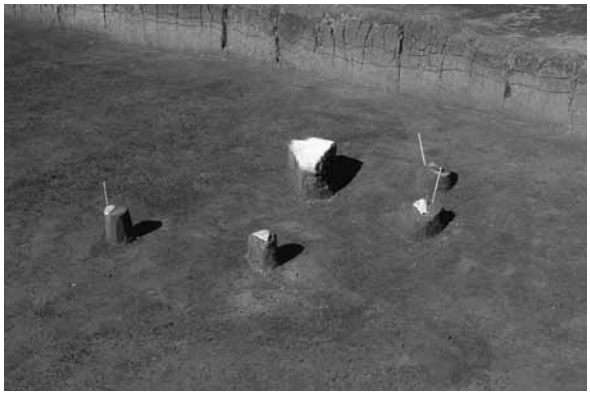
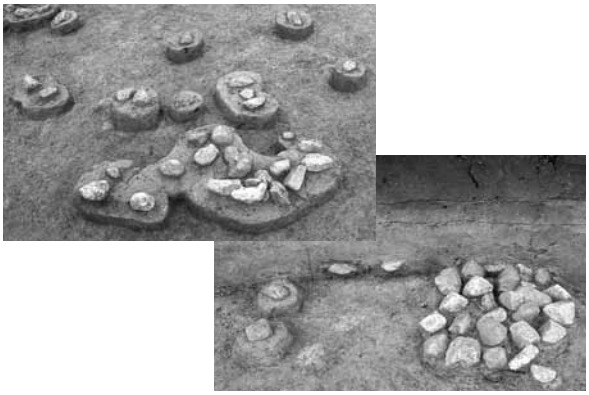
北調査区全景

北調査区 基本層序（上段 TP17、下段 TP43）

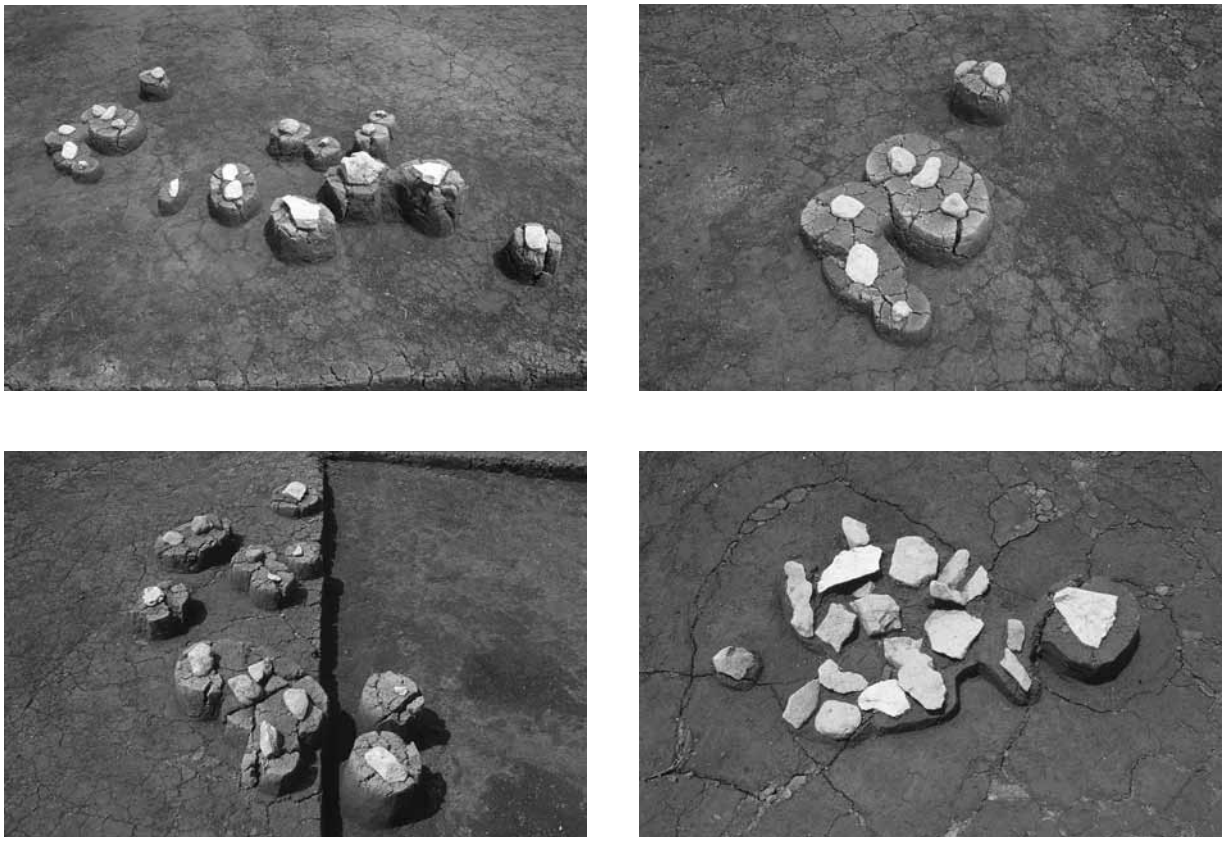
北調査区 第Ⅲ文化層 礫群（上段 PH1・2、下段 PH3・4）

北調査区 第Ⅲ文化層 礫群（上段 PH5・6、下段 PH7・8）

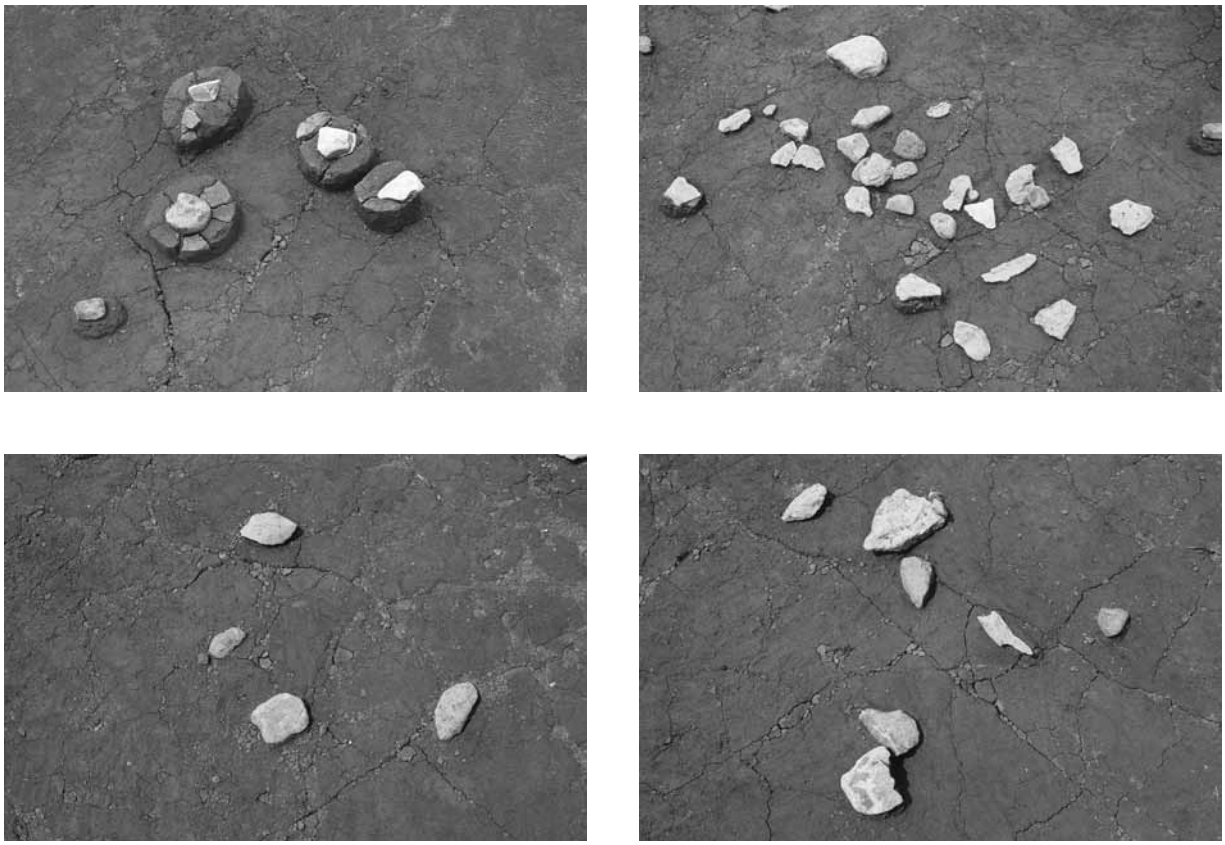
北調査区 第Ⅲ文化層 礫群（上段 PH9・10、下段 PH11・12）

北調査区 第Ⅲ文化層 礫群（上段 PH13・14、下段 PH15・16）



北調査区 第Ⅲ文化層 礫群（上段 PH34・35、下段 PH36・37）

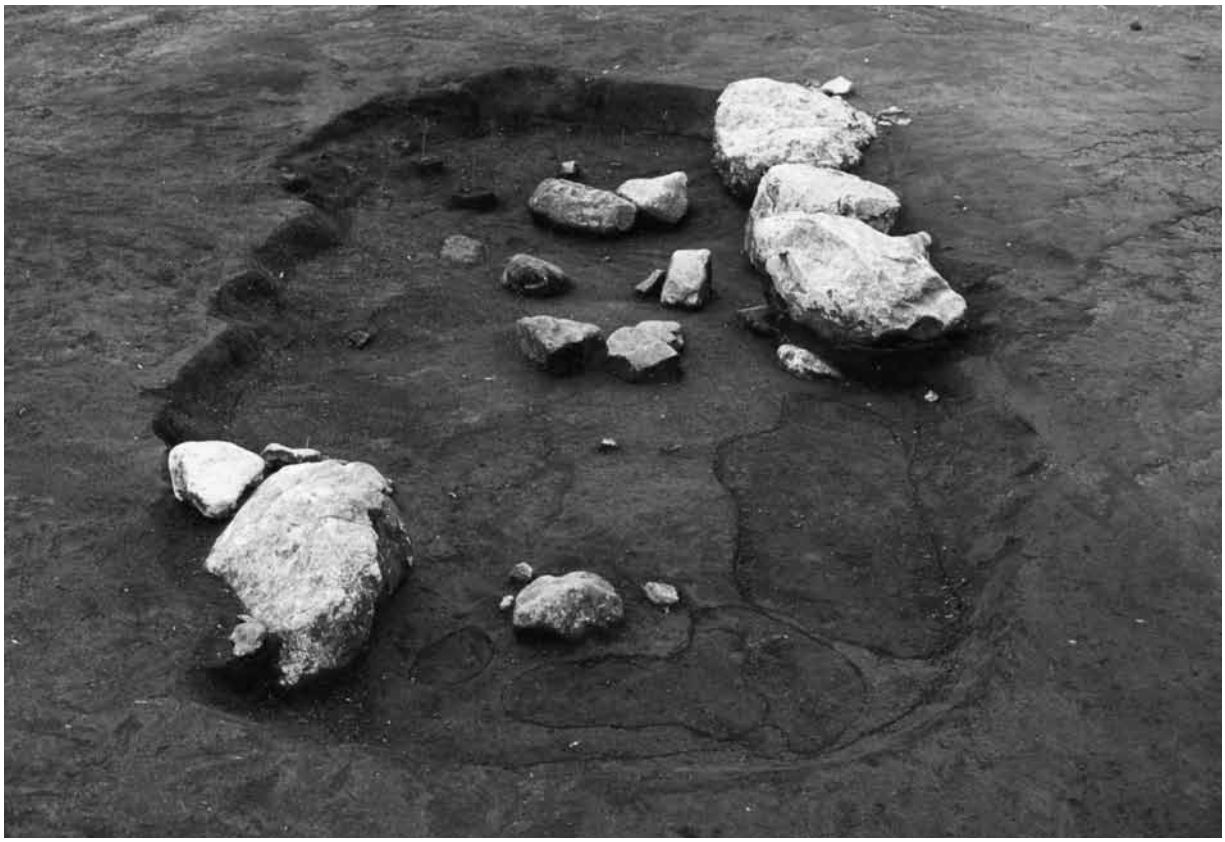


北調査区 第Ⅲ文化層 礫群（上段 PH37・38、下段 PH39・40）

北調査区 縄文時代 土坑・集石（上段 SK1・2、下段 SG1）

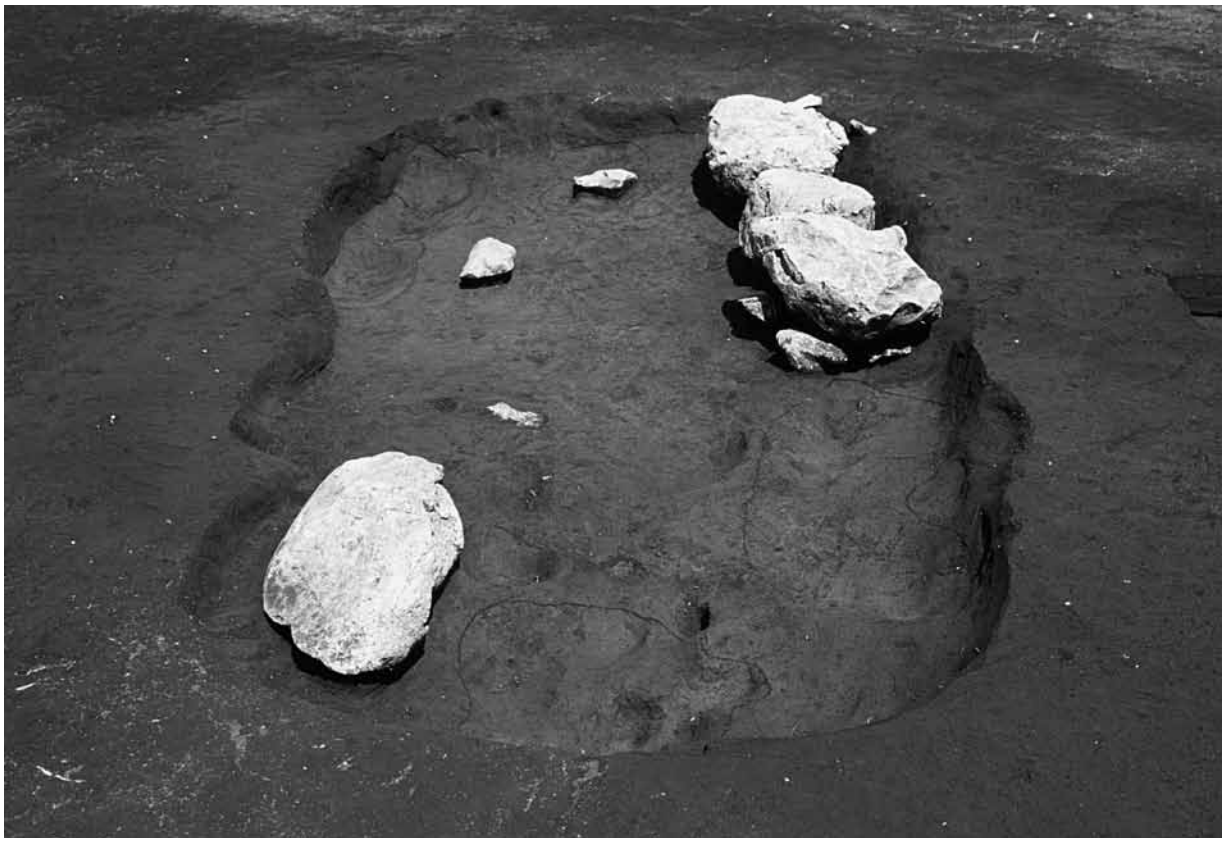
北調査区 縄文時代 集石（上段 SG2・3 および 4、下段 5・6）

北調査区 ４号墳・５号墳 全景



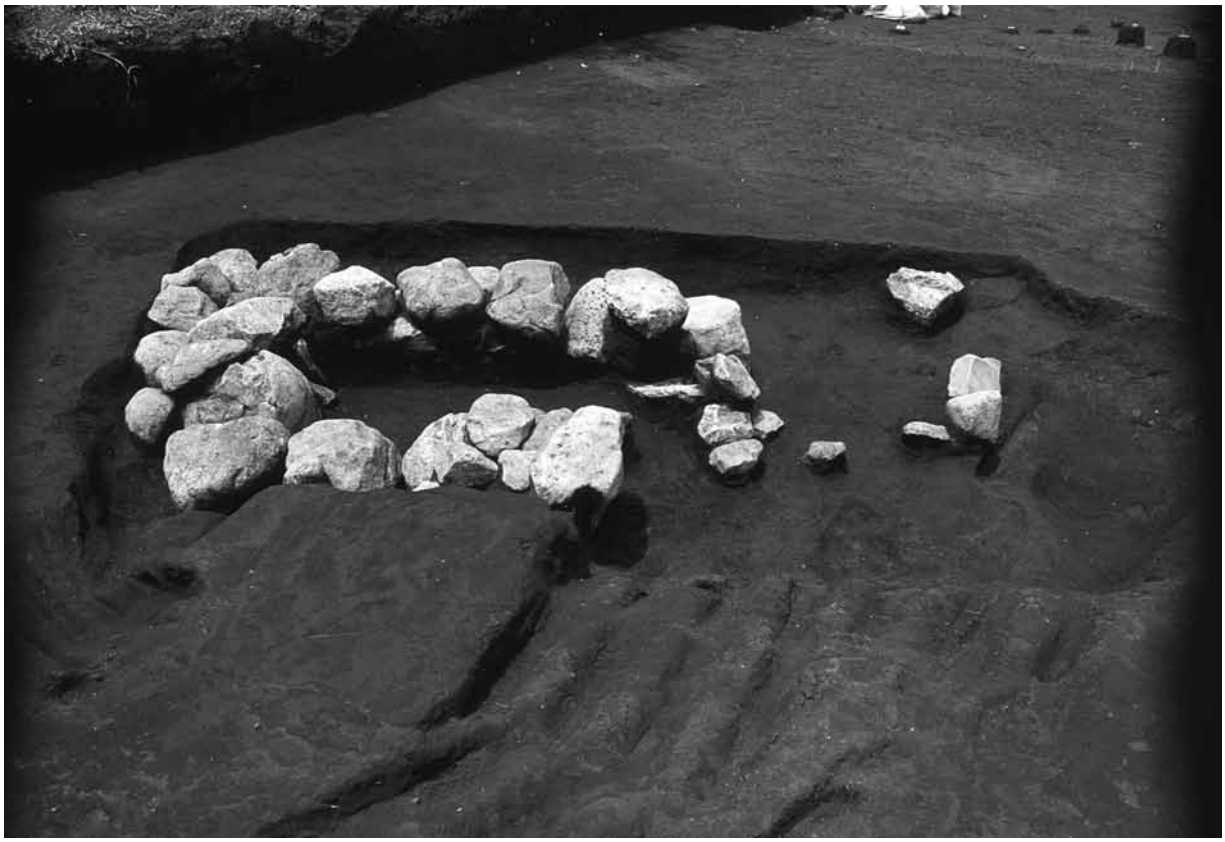
北調査区 ４号墳 検出状況（開口部側から）

北調査区 ４号墳 側壁検出状況（南西側から）

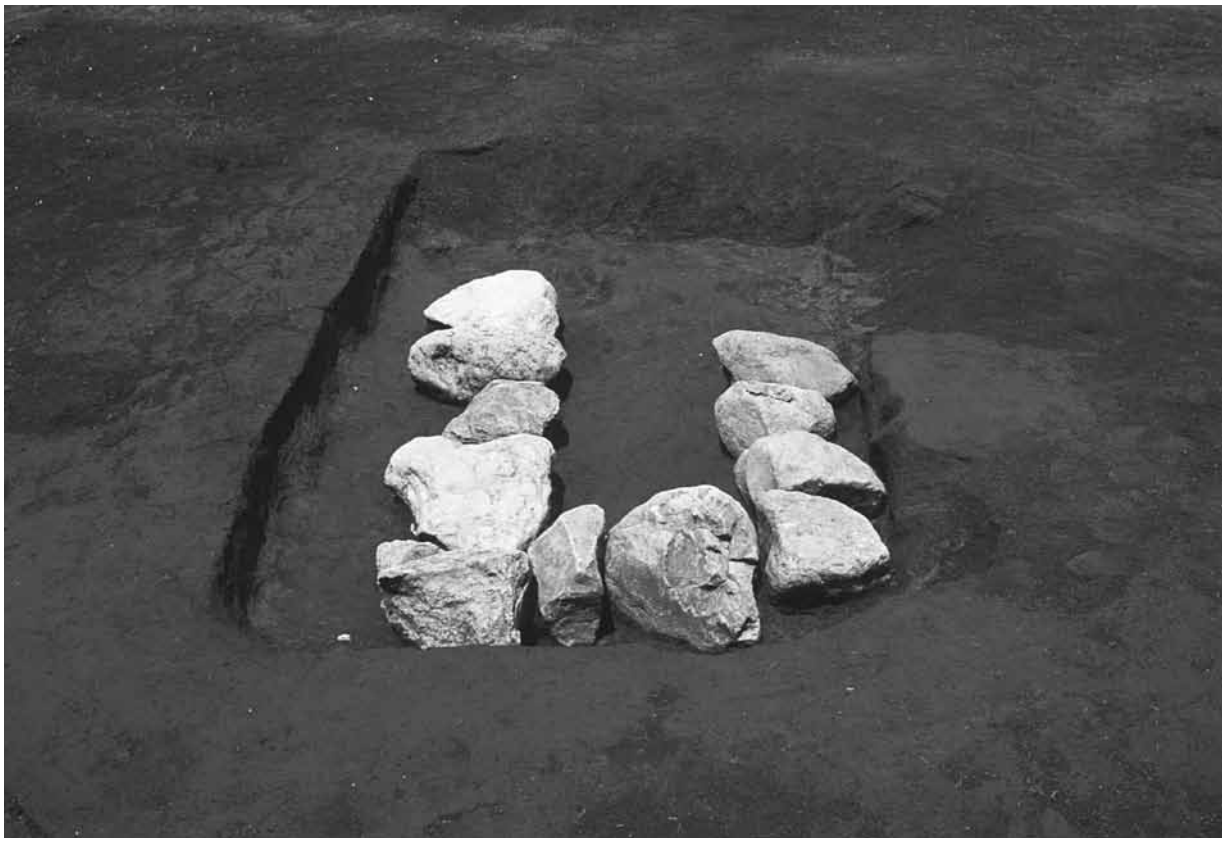


北調査区 ４号墳 基底石と墓坑（開口部側から）

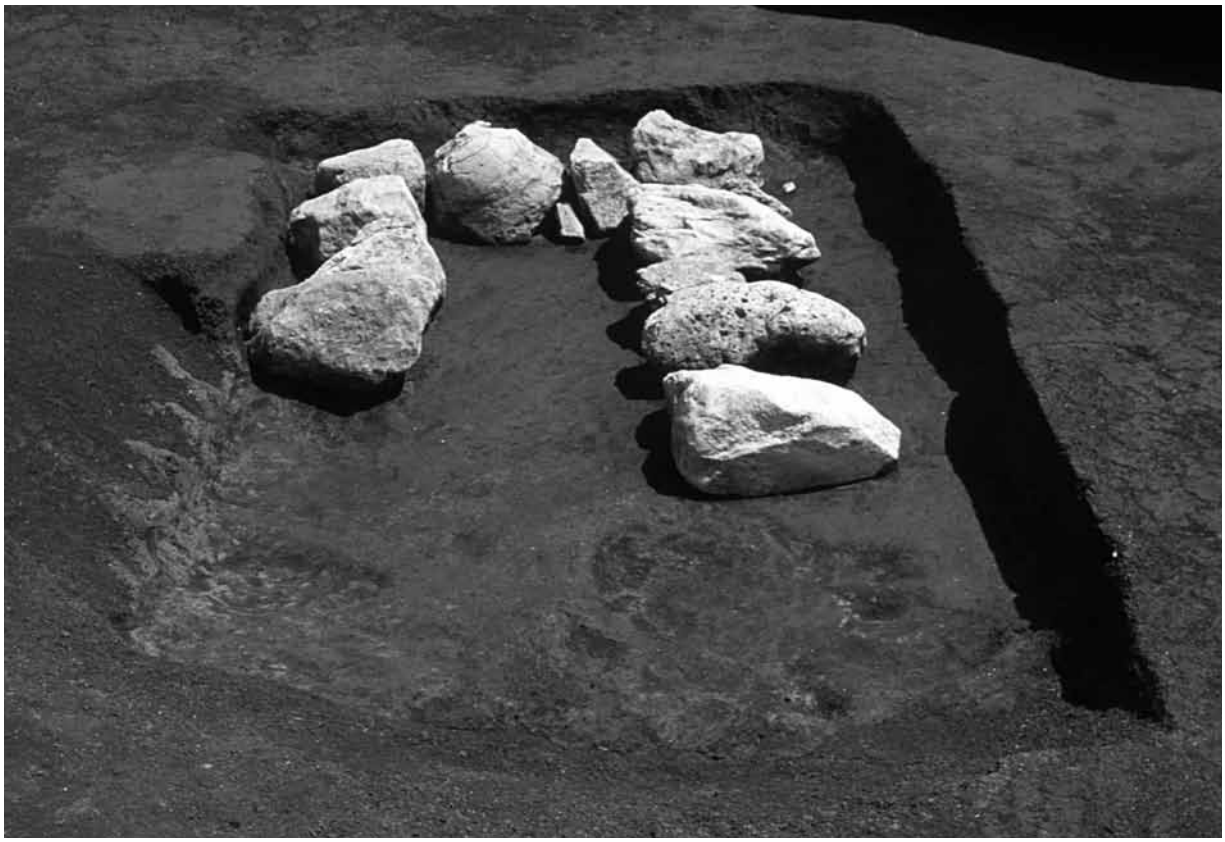
北調査区 5号墳 検出状況（開口部側から）



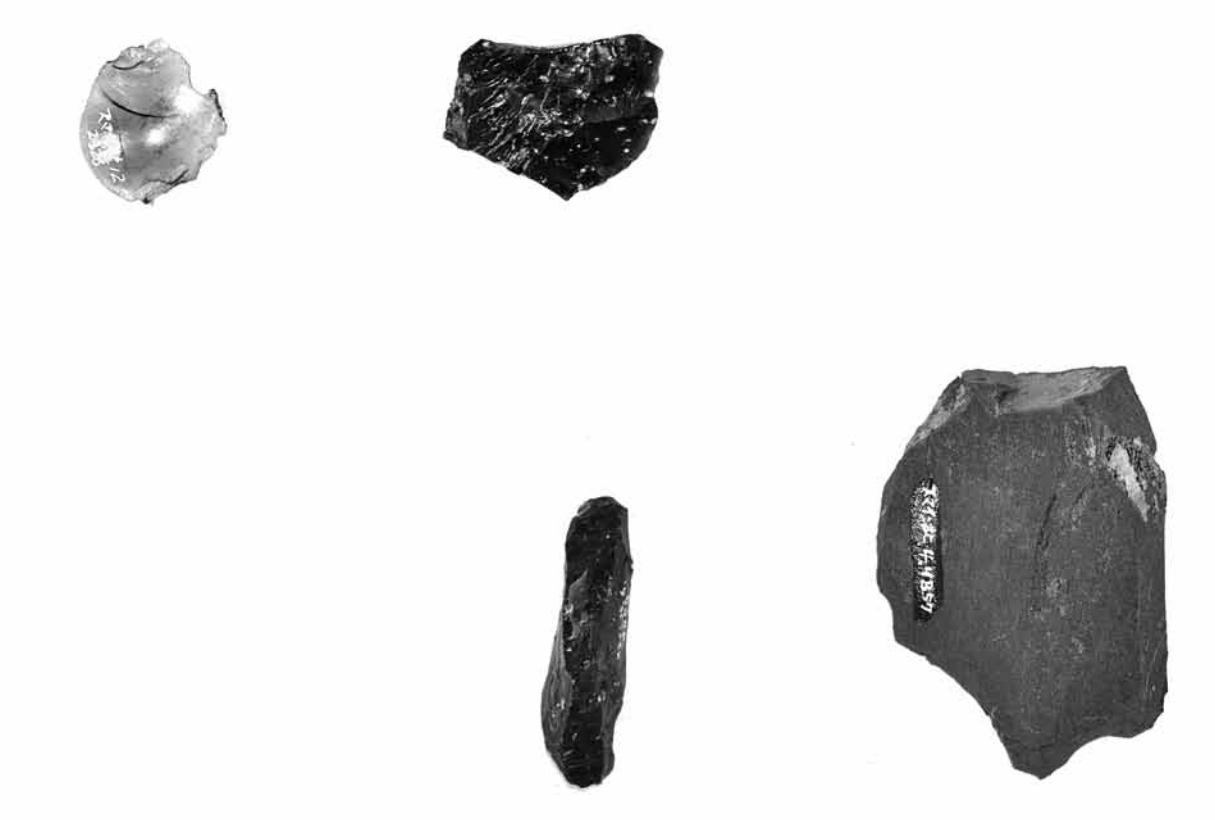
北調査区 5号墳 検出状況（東側から）



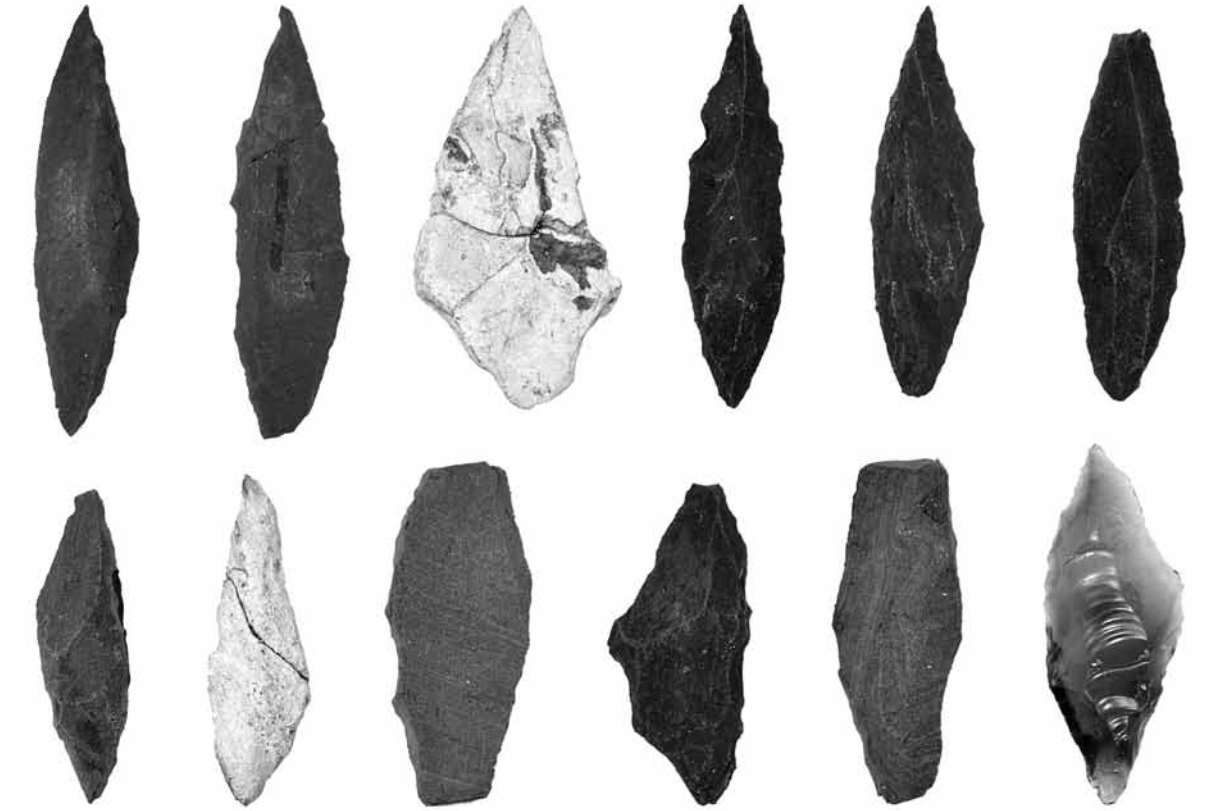
北調査区 5号墳 基底石と墓坑および段構造（開口部側から）



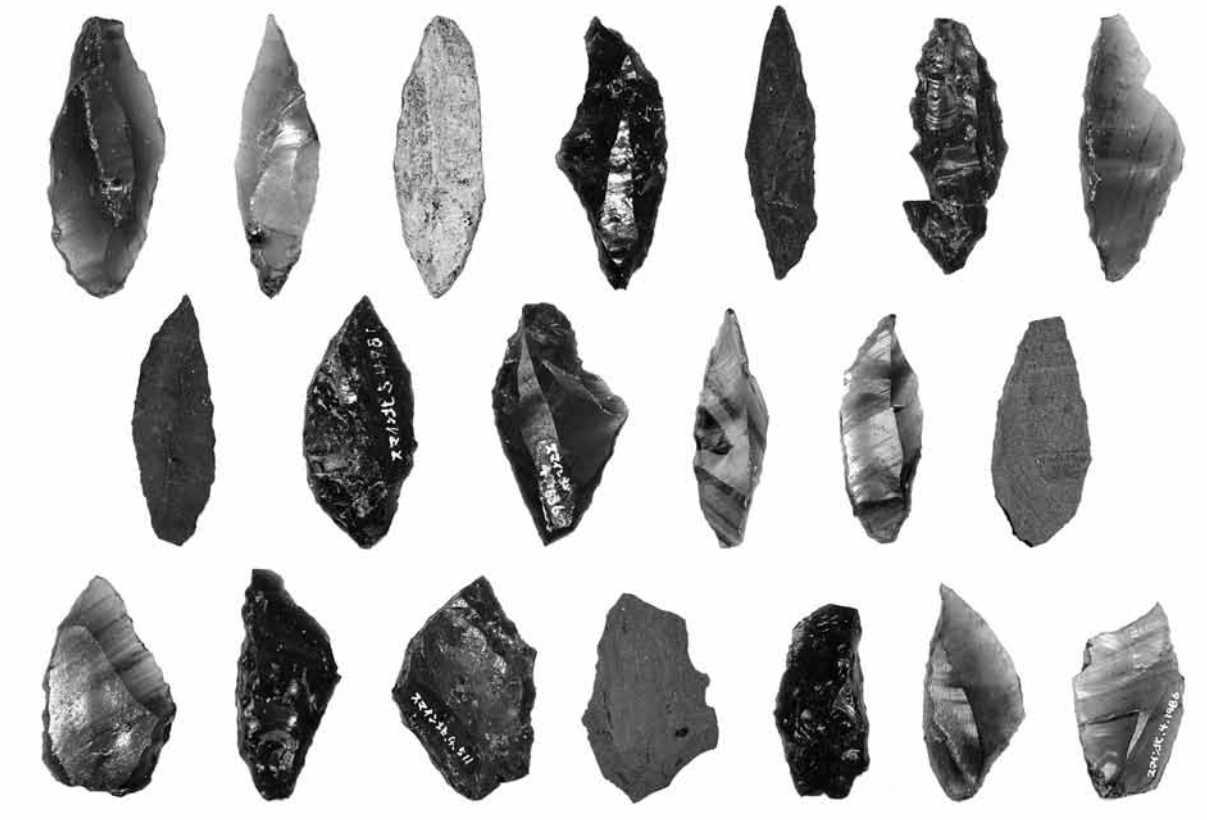
北調査区 5号墳 基底石と墓坑および段構造（奥壁側から）



北調査区 第Ⅰ文化層・第Ⅱ文化層出土石器（剥片）

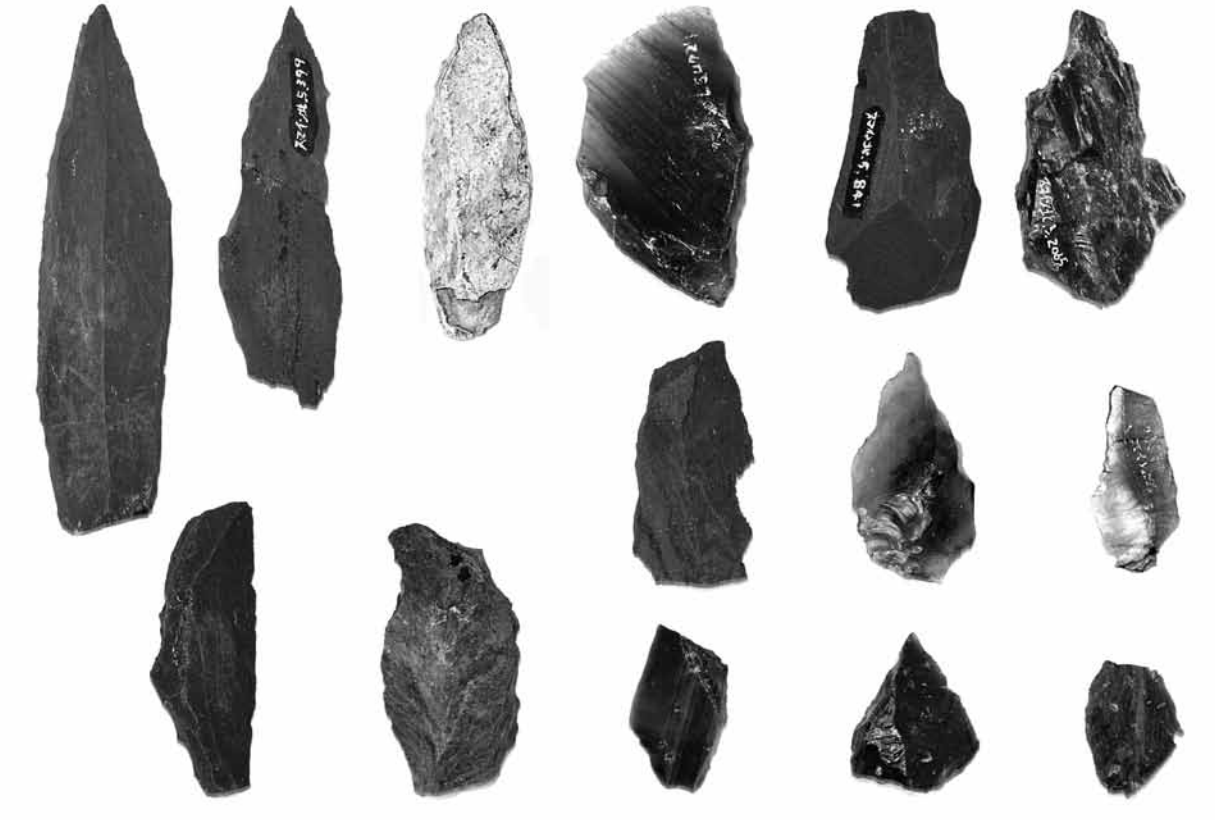


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器）



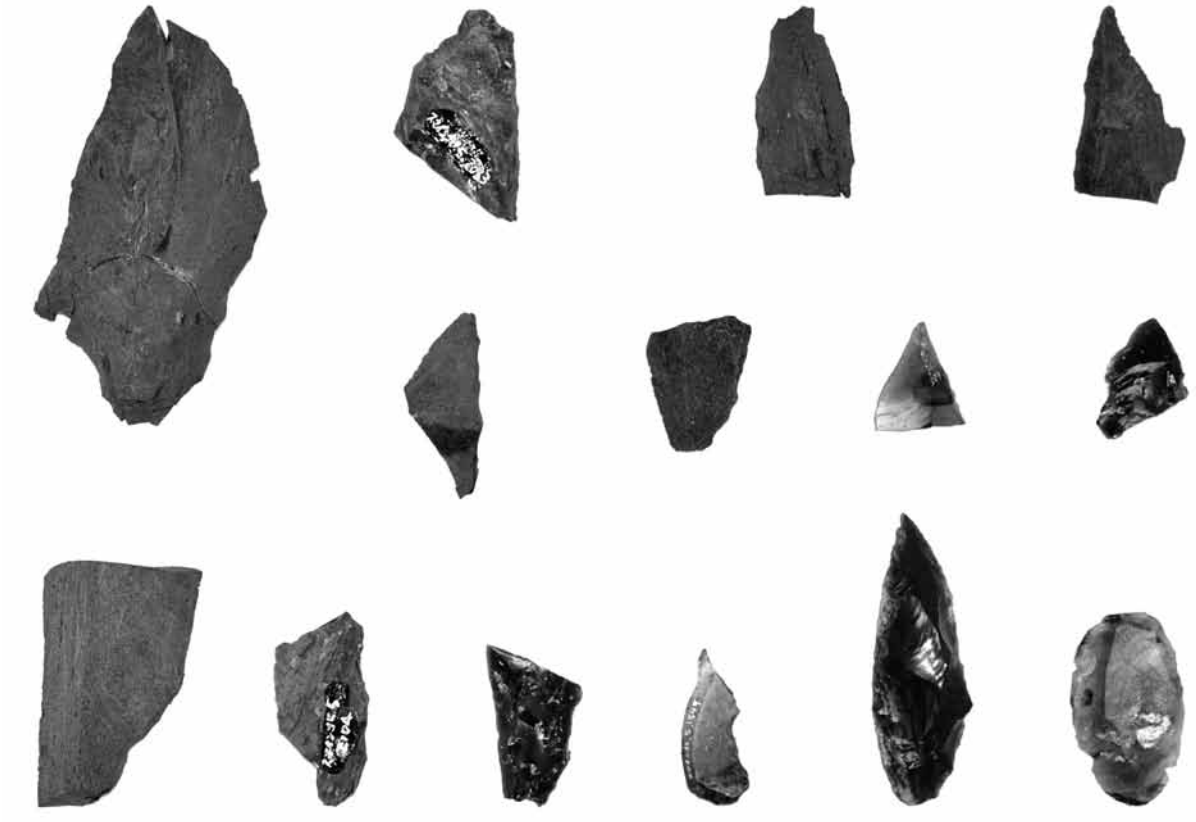
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器）

北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器）

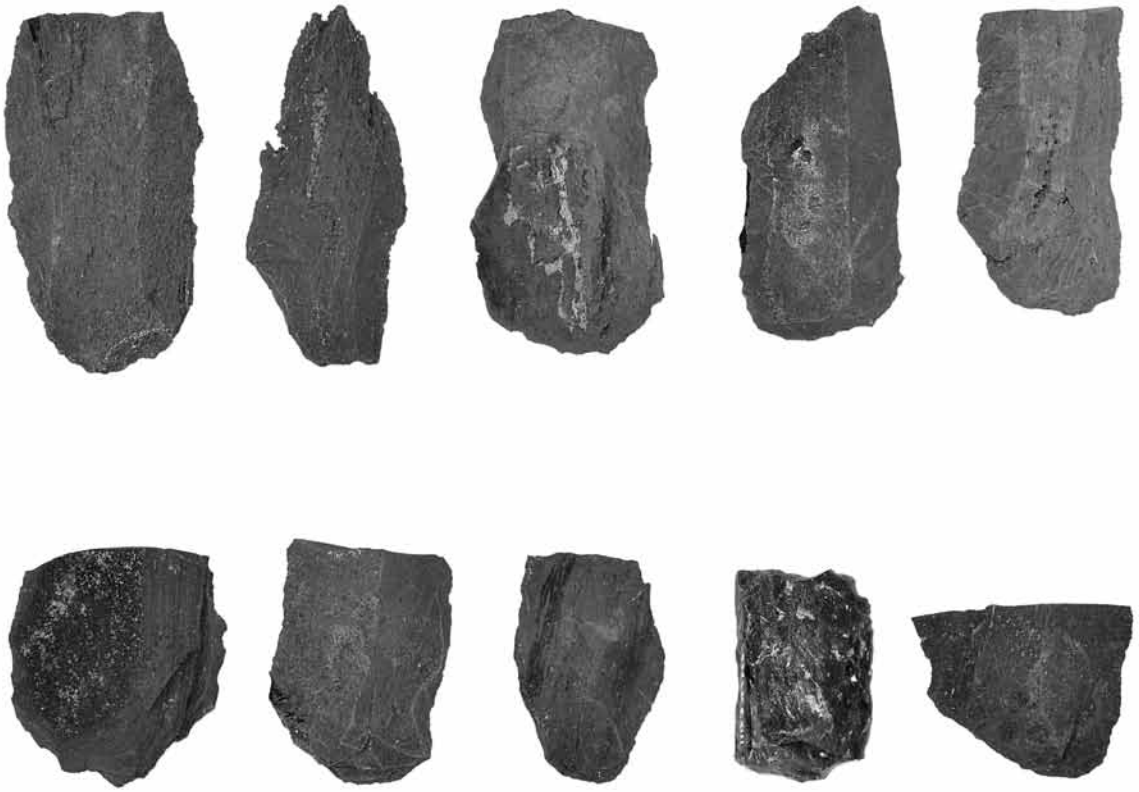


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器）

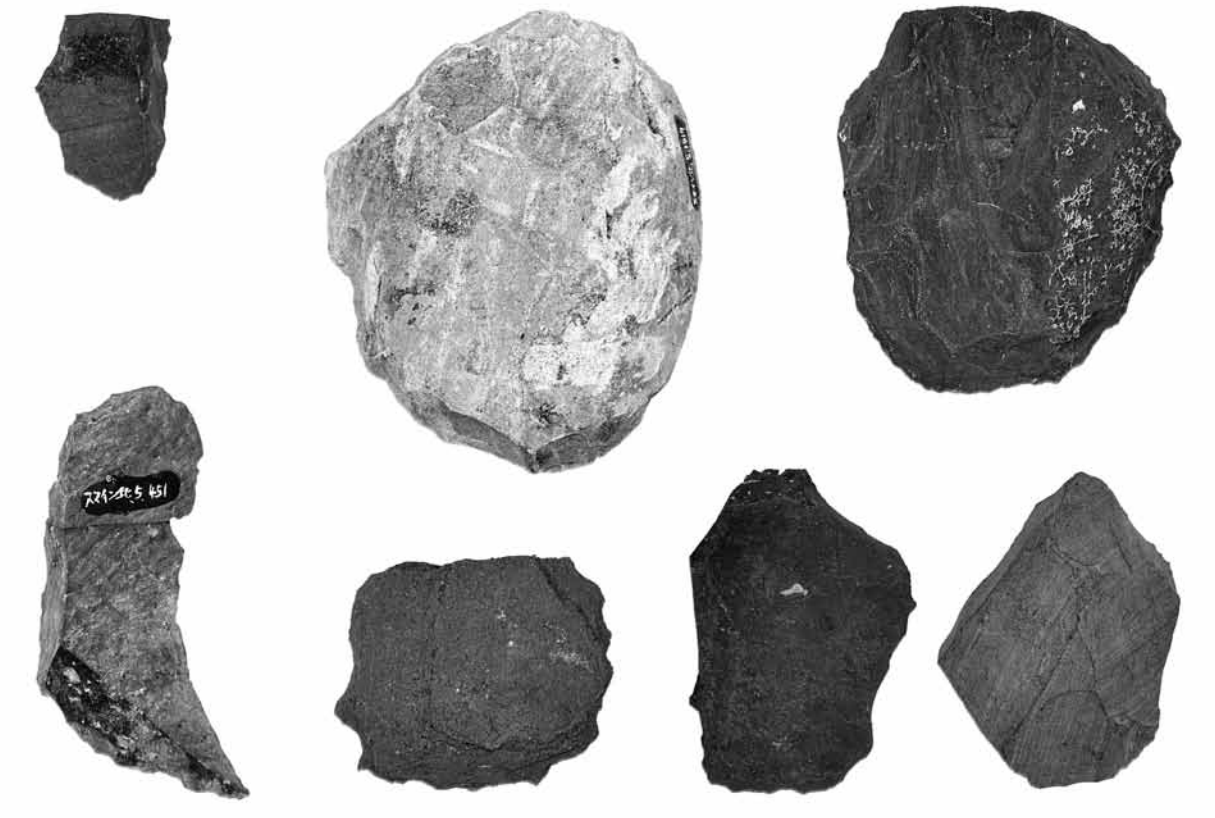
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器）



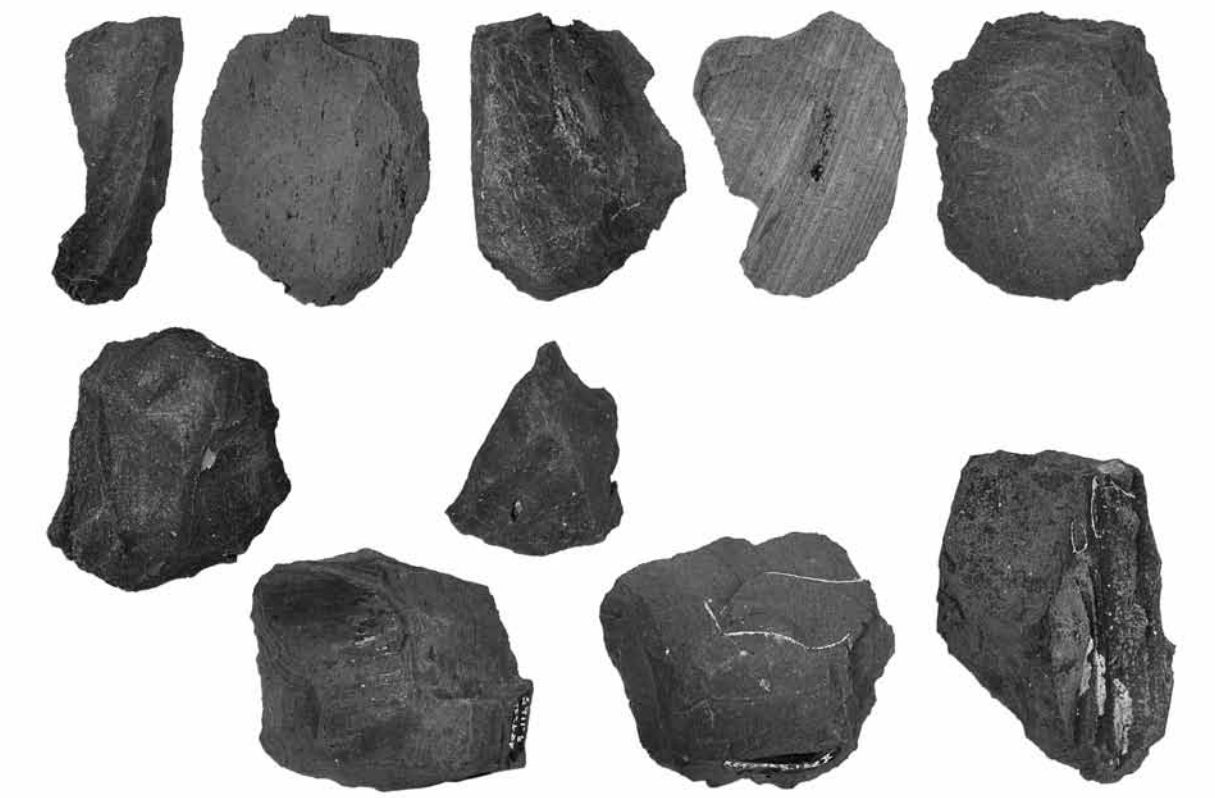
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器・尖頭器）



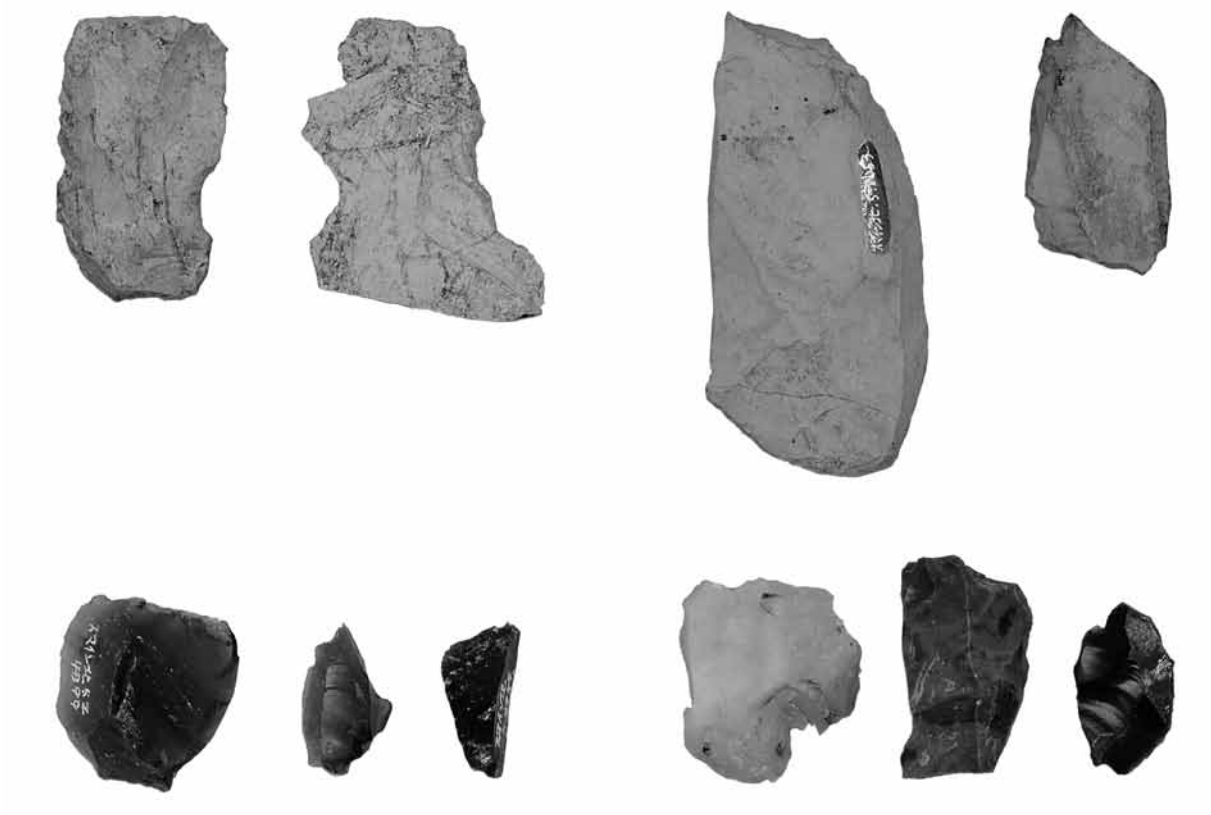
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（掻器）



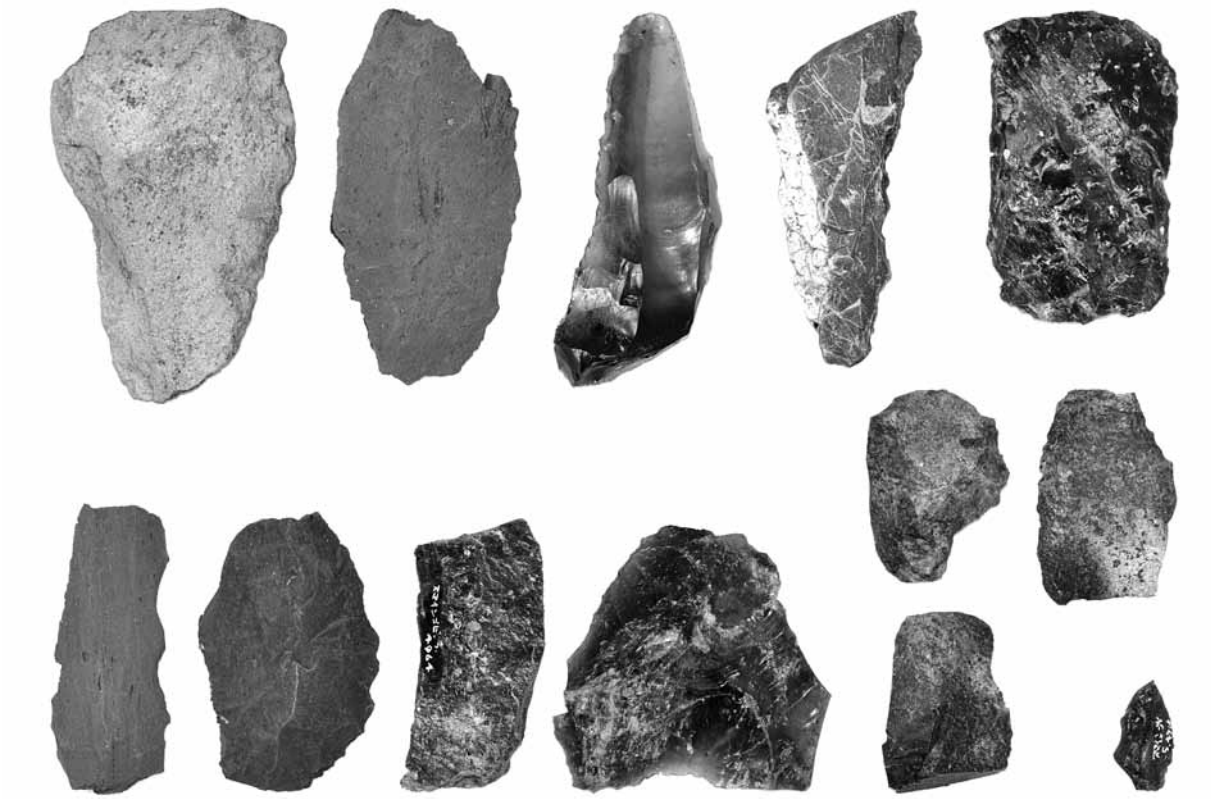
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（掻器）



北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（掻器）



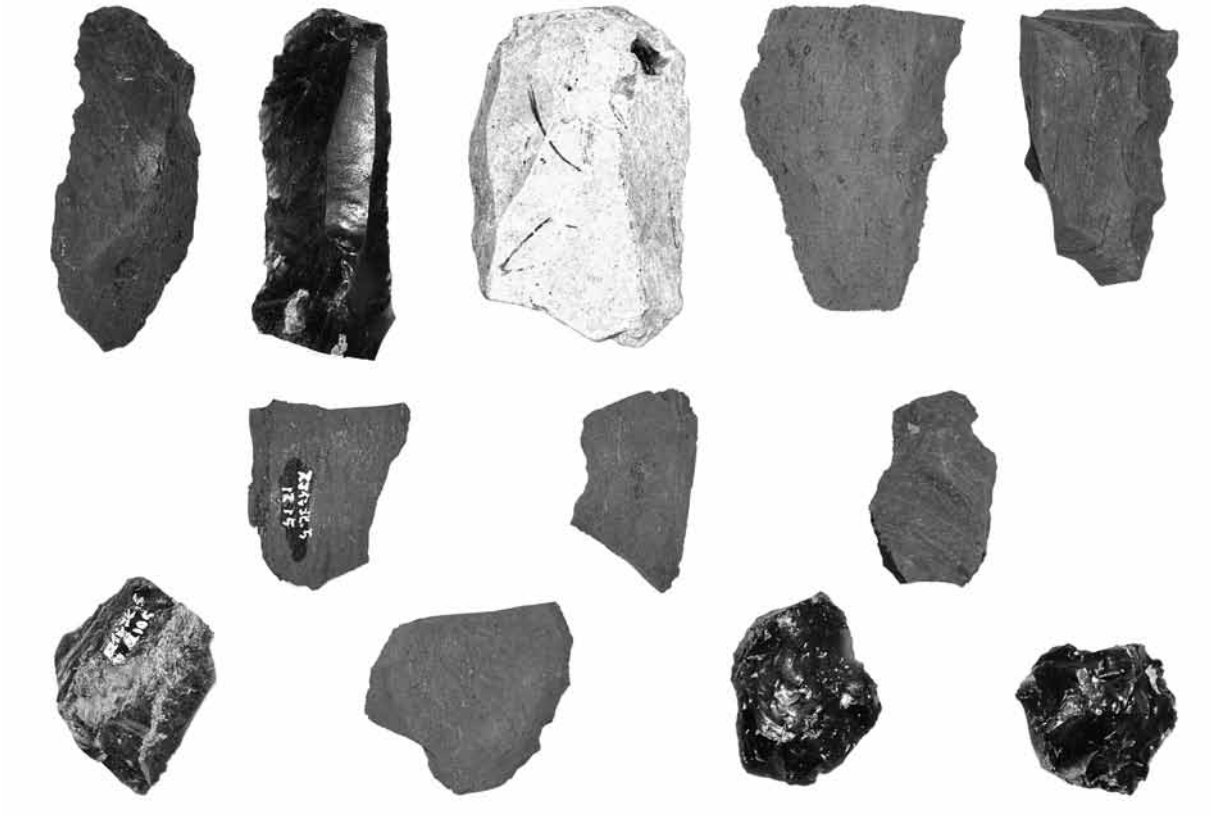
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（抉入石器・彫器・楔形石器）



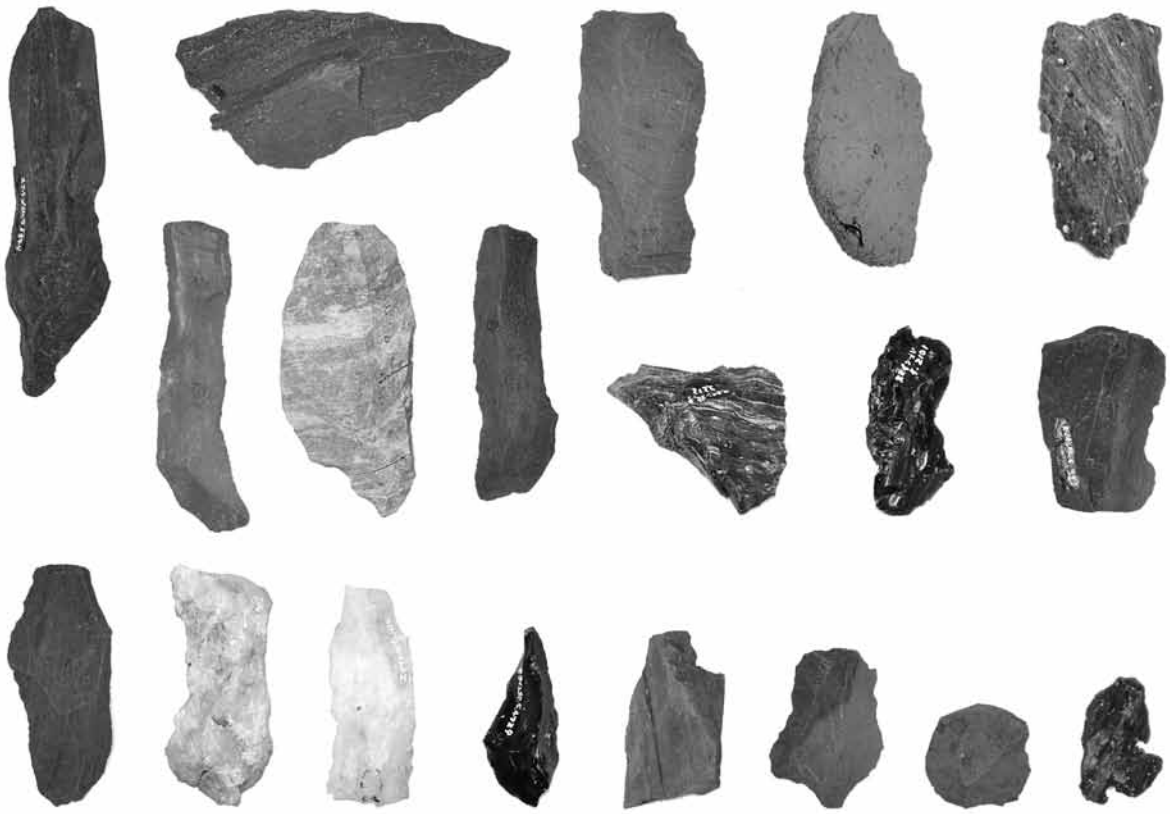
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（削器・石錐）

北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（磨石）

北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（台石）

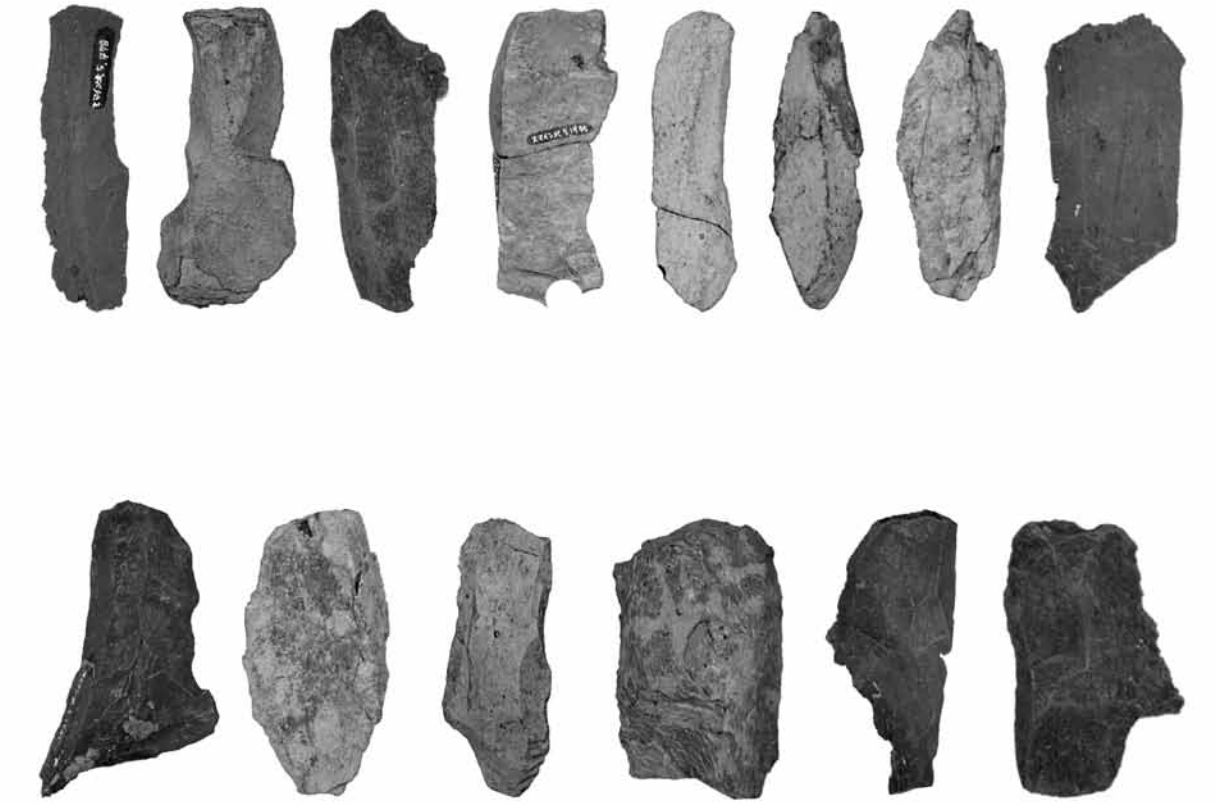


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（加工痕のある剥片）

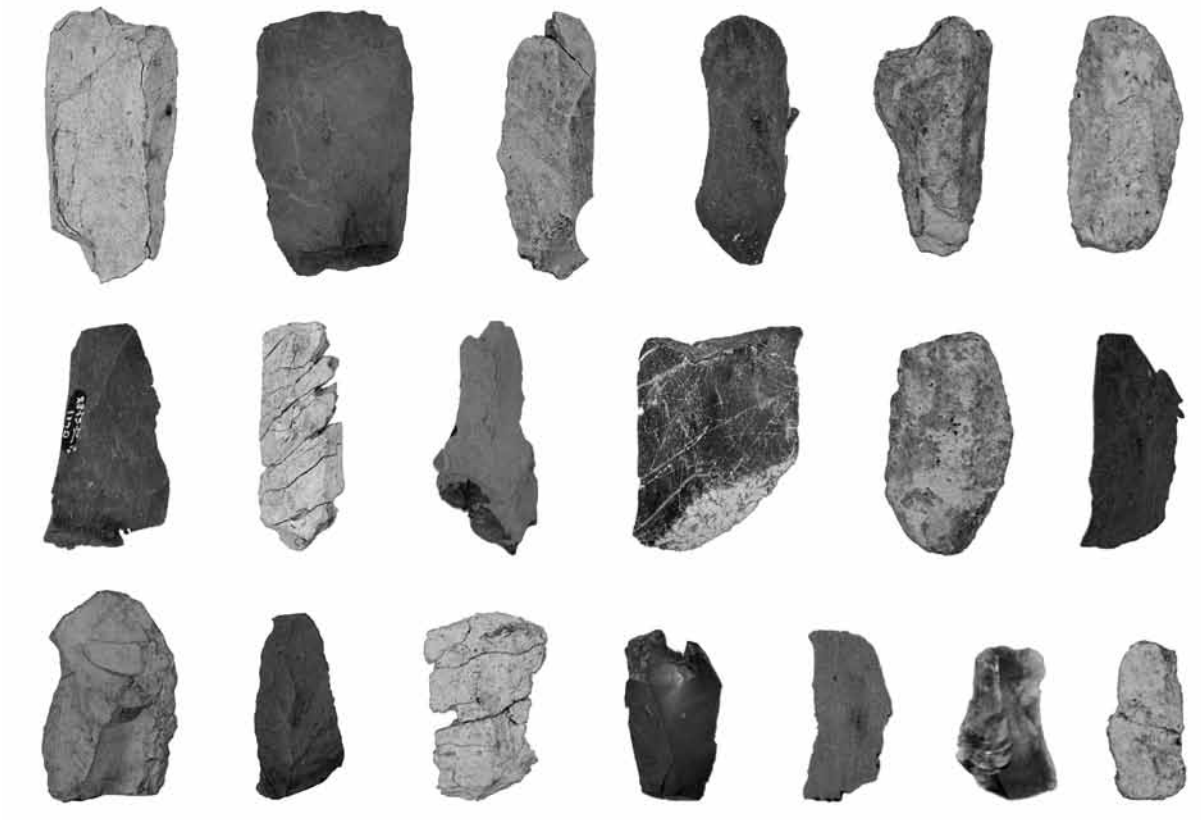


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（使用痕のある剥片）

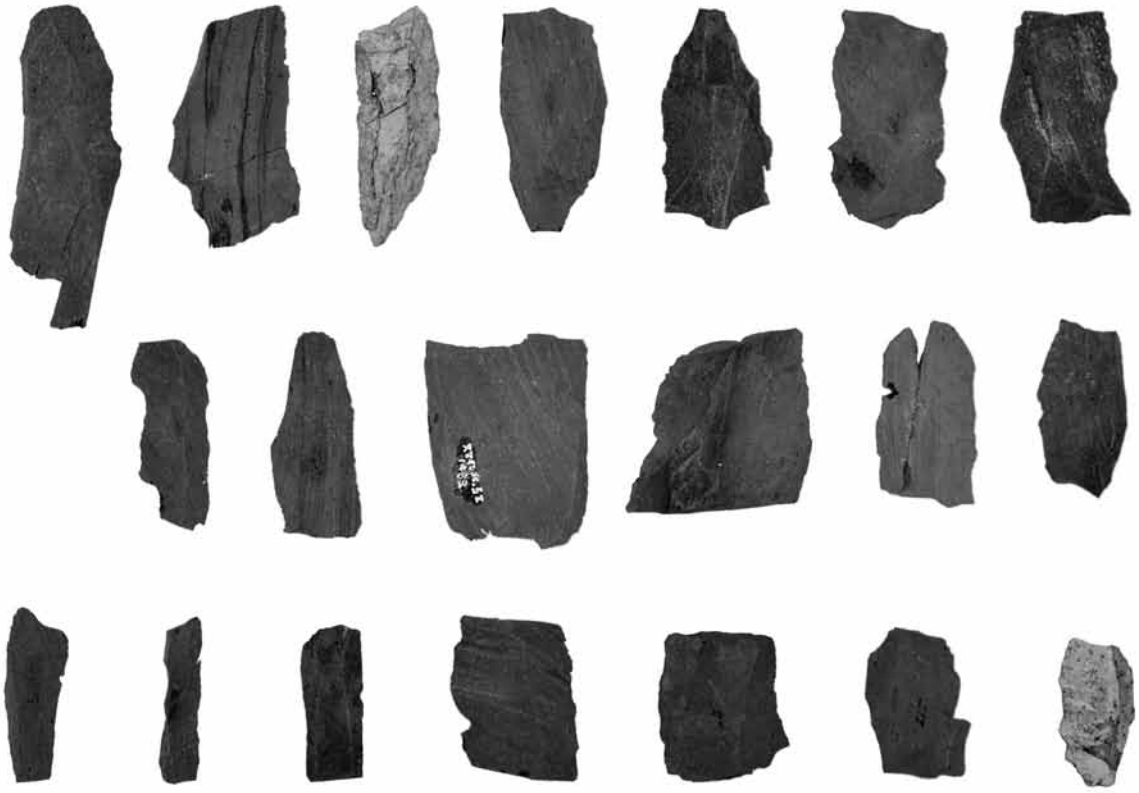
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石刃）



北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石刃）

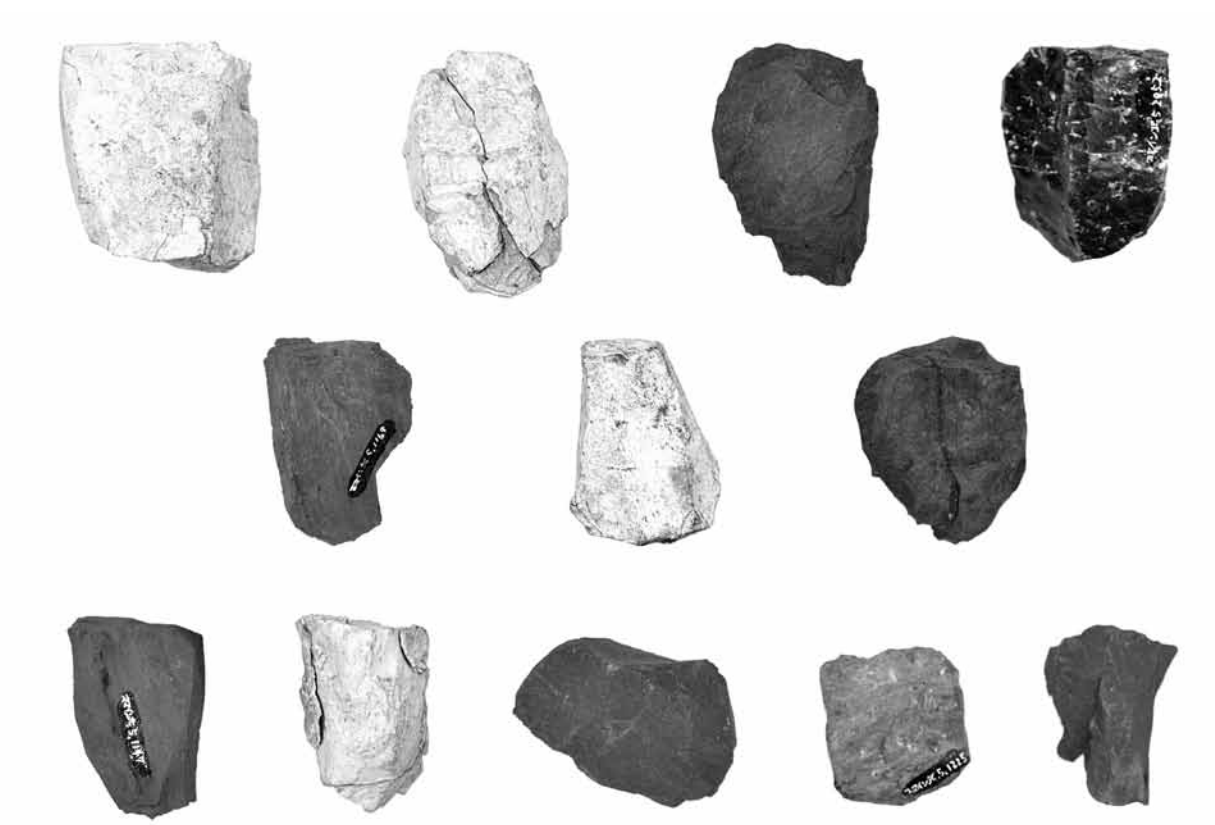


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石刃）



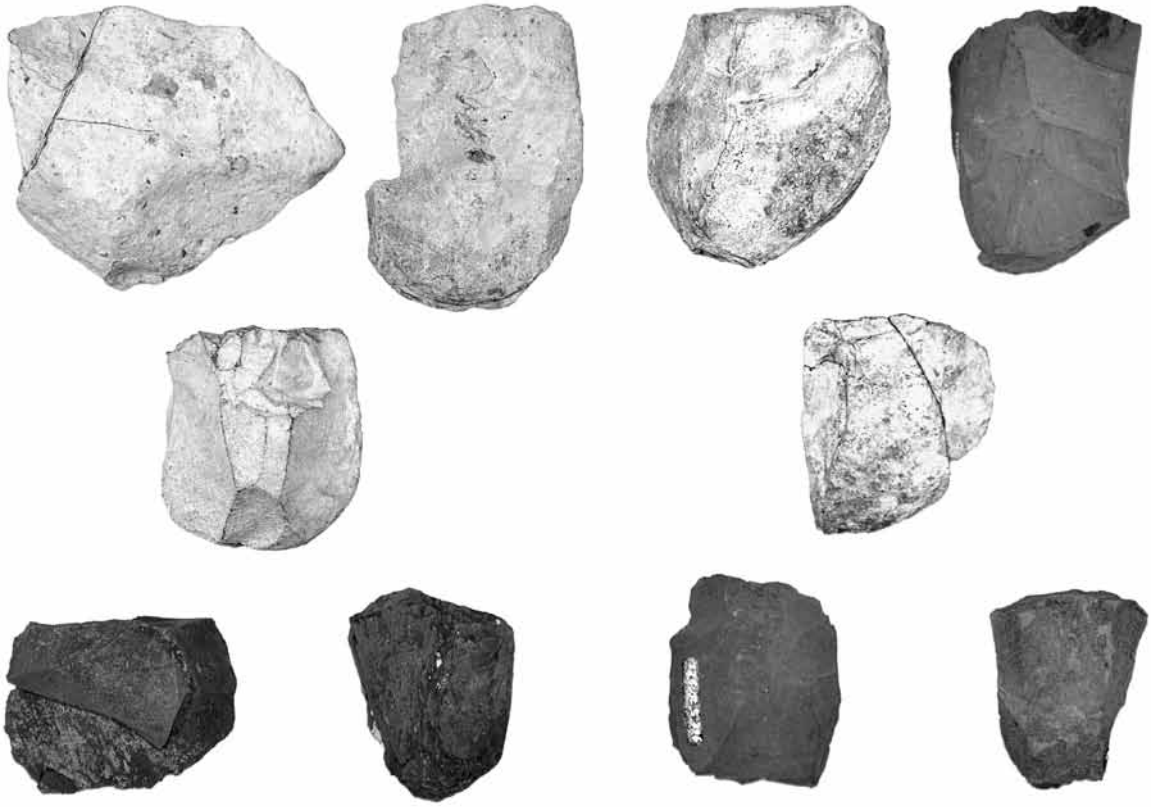
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石刃）

北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石核）

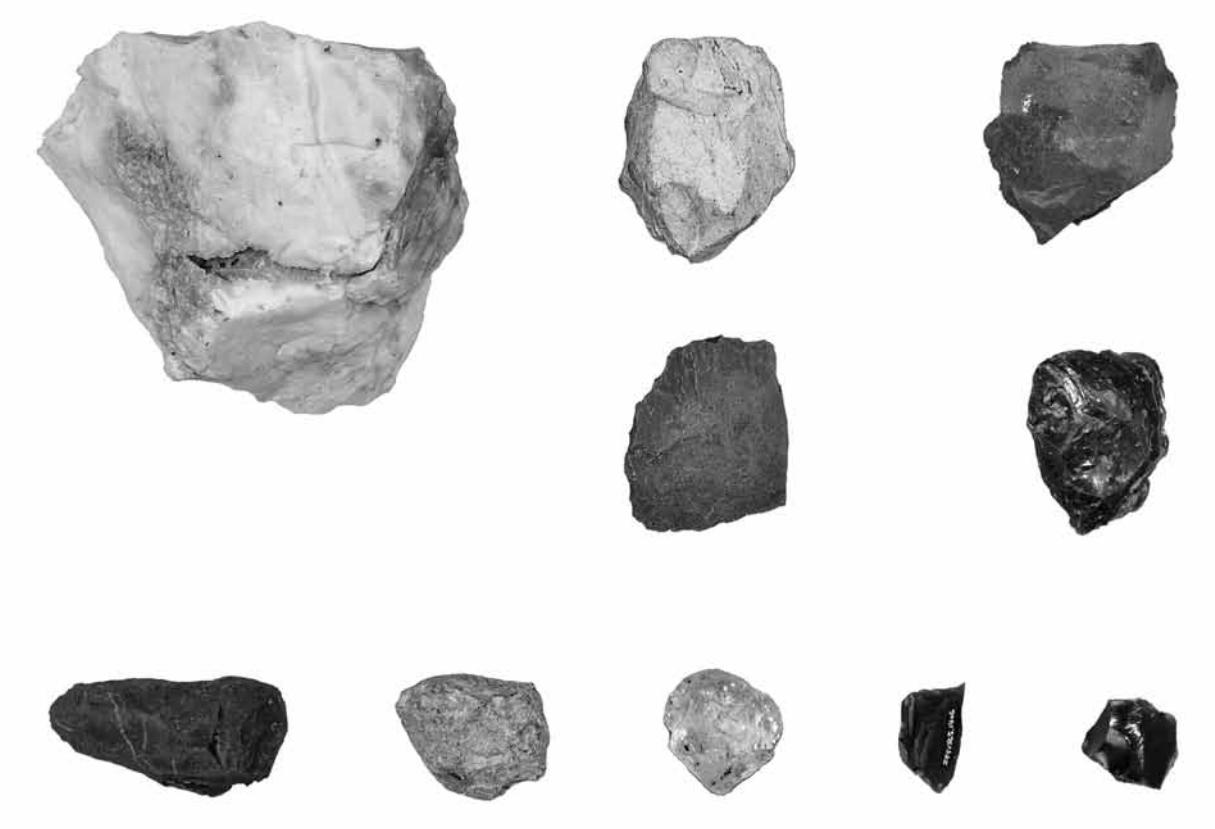


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石核）

北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石核）

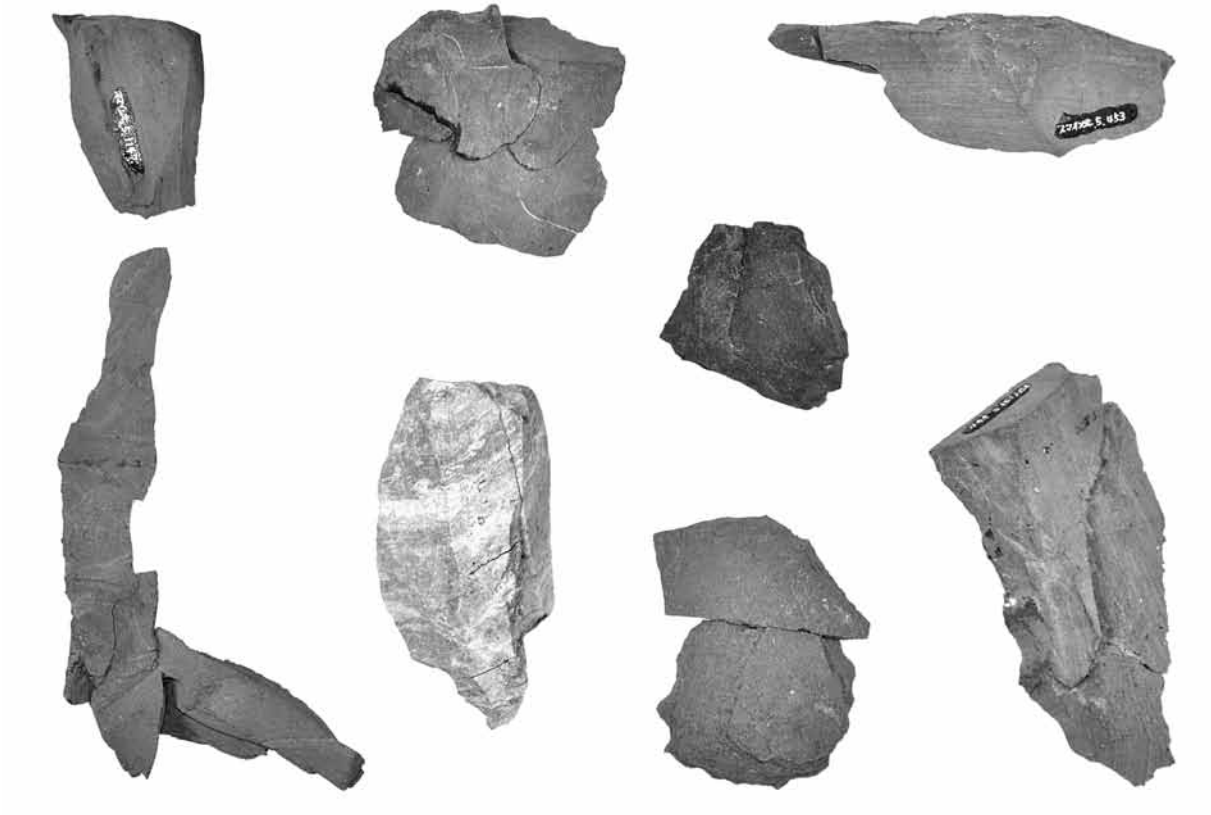


北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石核）



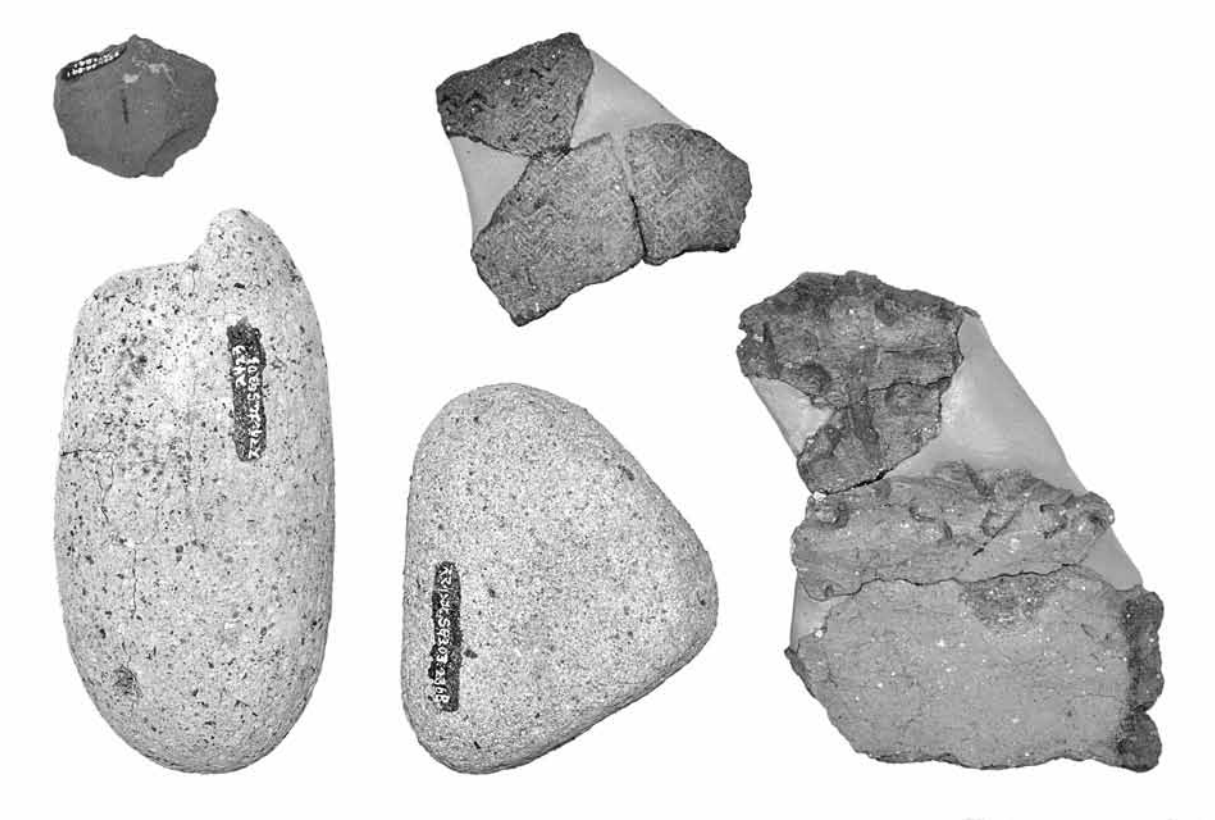
北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（石核）

北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（接合資料）



北調査区 第Ⅲ文化層出土石器（接合資料）

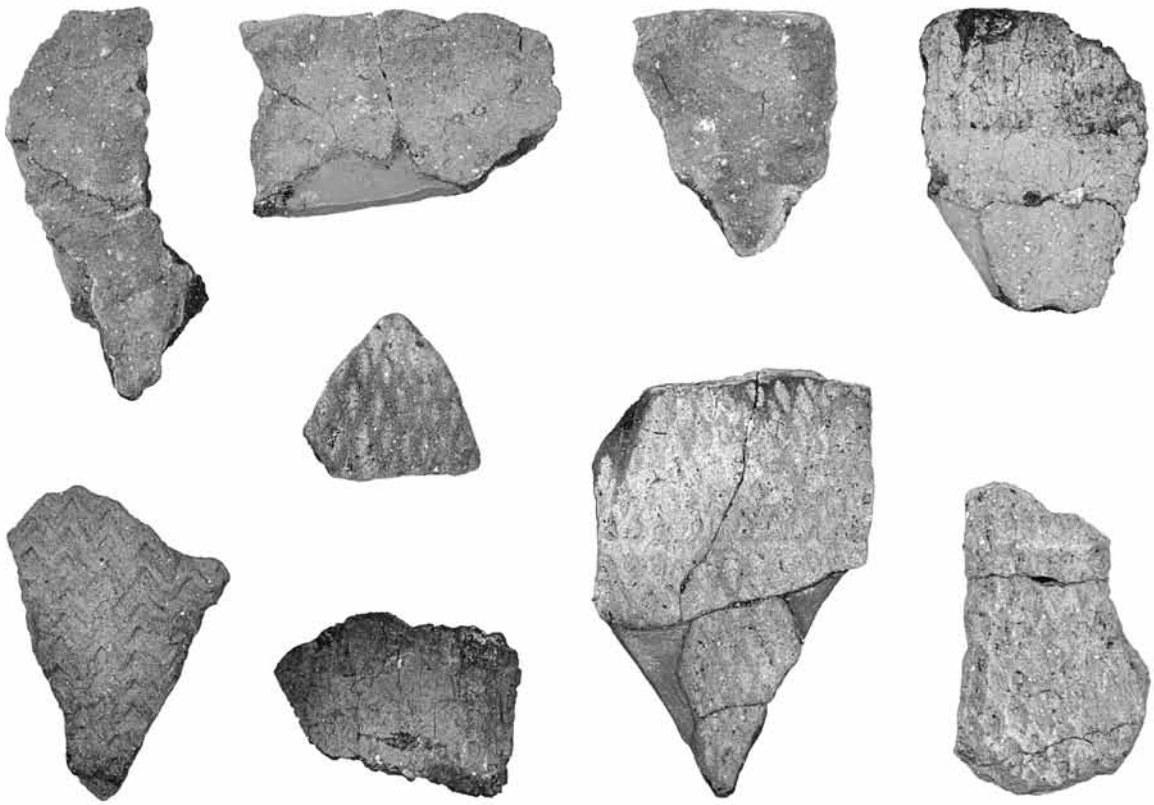
北調査区 第Ⅳ文化層出土石器（細石刃）



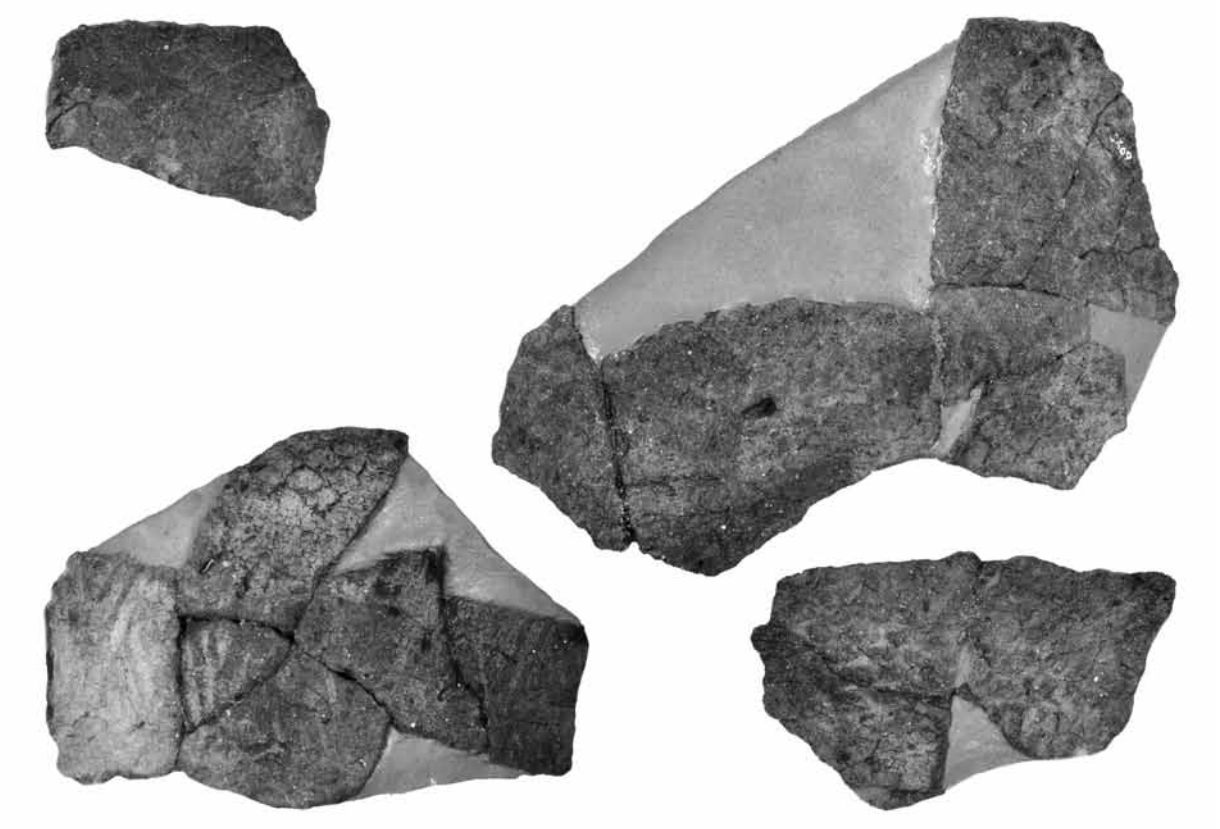
北調査区 縄文時代遺構内出土遺物

北調査区 縄文時代出土土器（撚糸文土器）

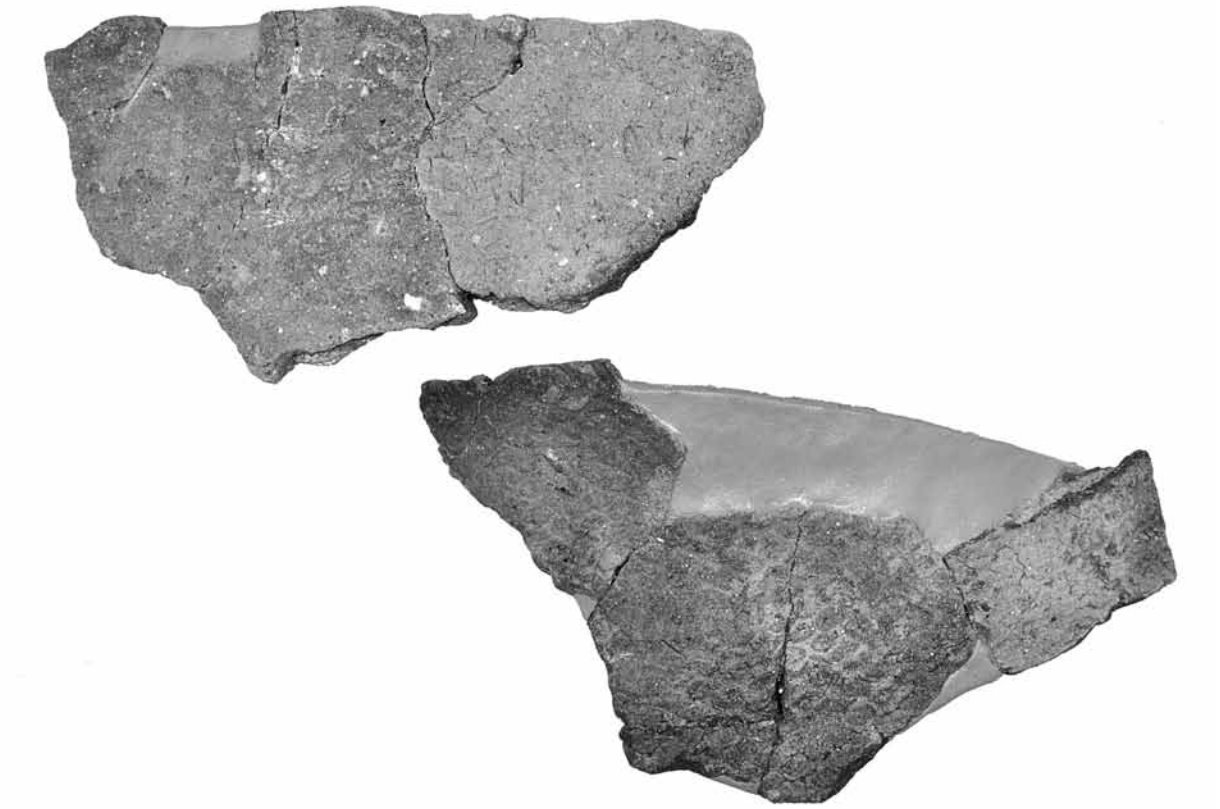
北調査区 縄文時代出土土器（撚糸文土器）



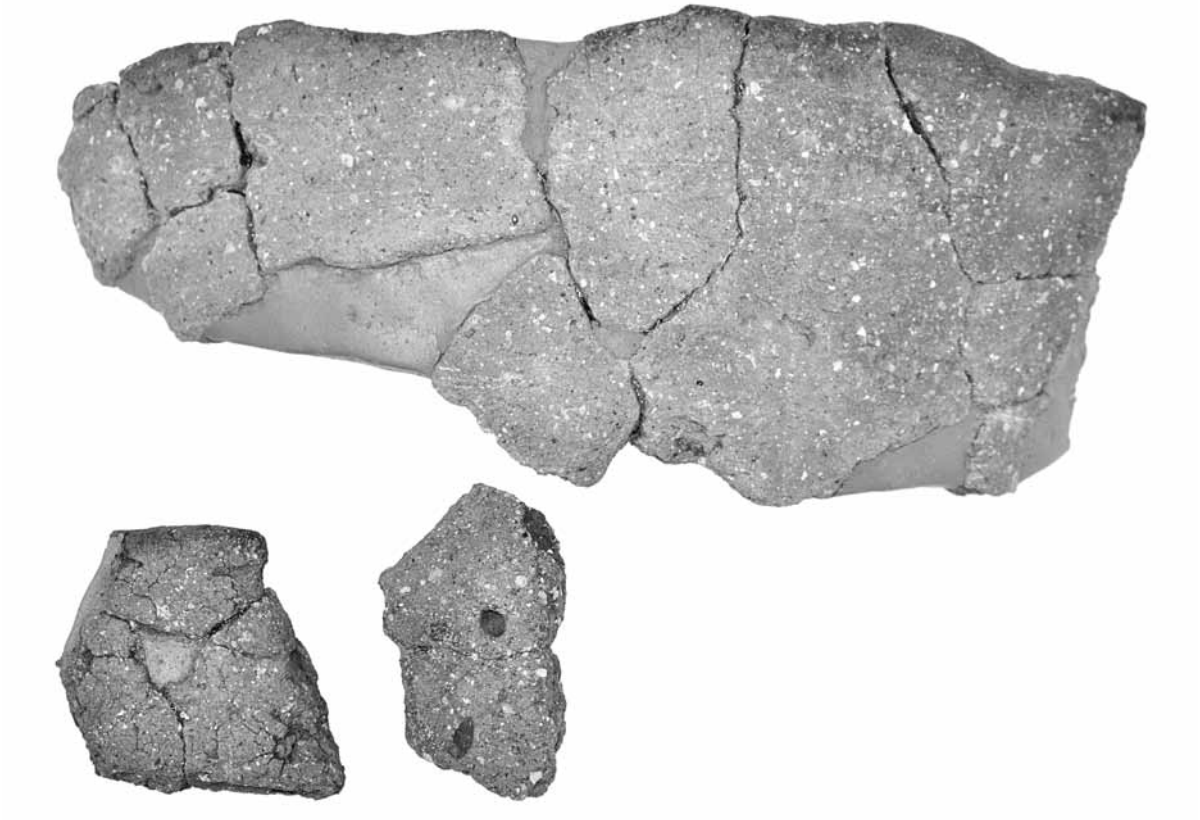
北調査区 縄文時代出土土器（押型文土器）



北調査区 縄文時代出土土器（押型文土器）



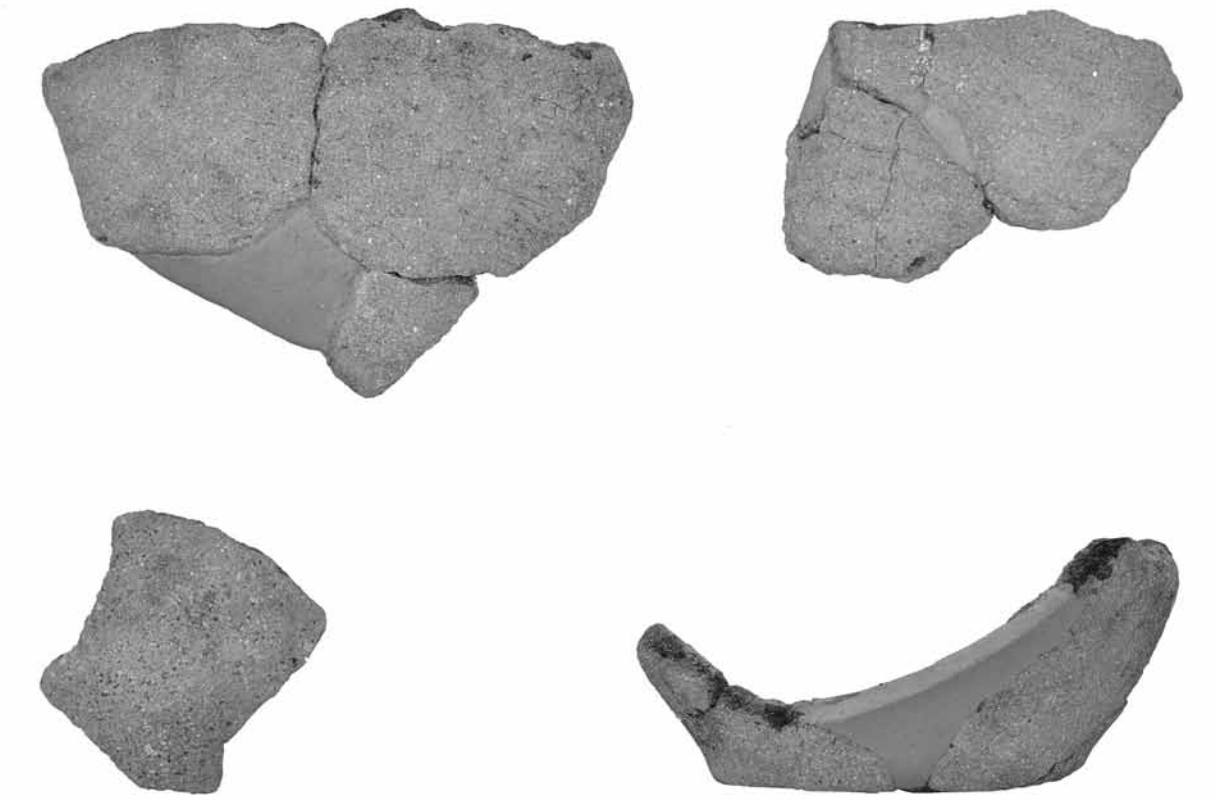
北調査区 縄文時代出土土器（押型文土器）



北調査区 縄文時代出土土器（早期中葉）

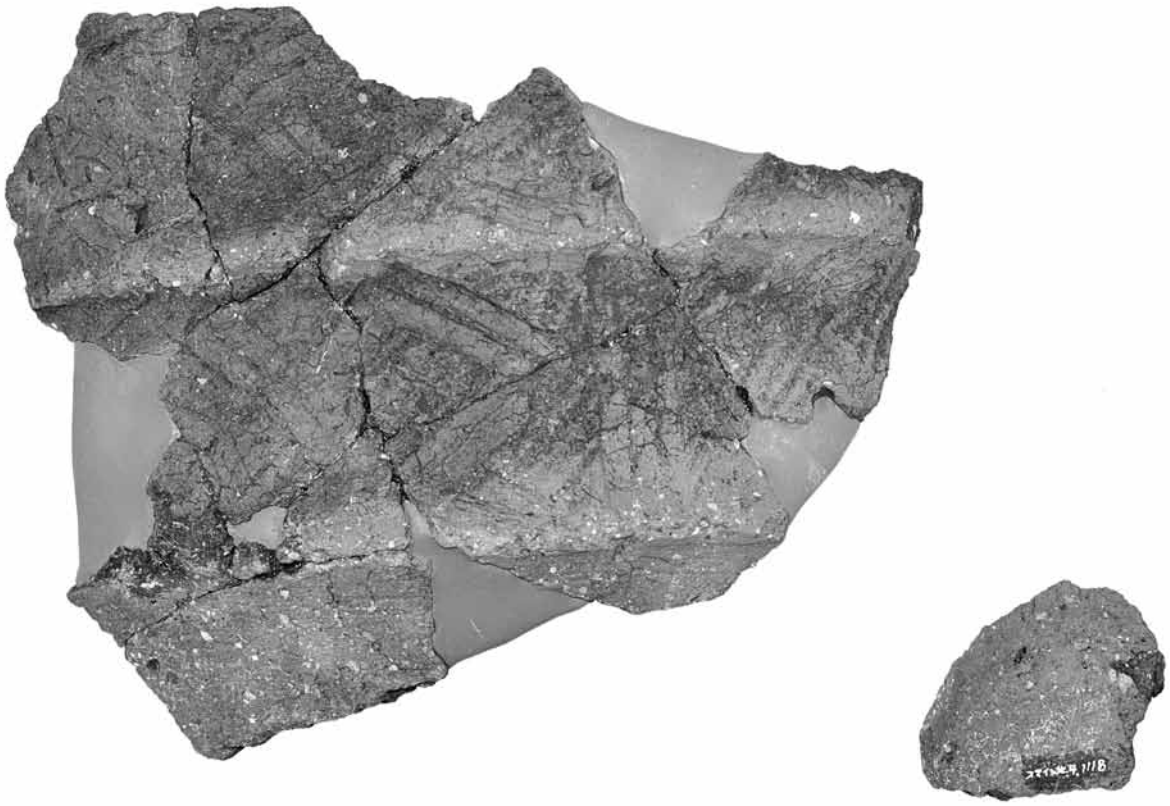
北調査区 縄文時代出土土器（田戸上層式）

北調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）

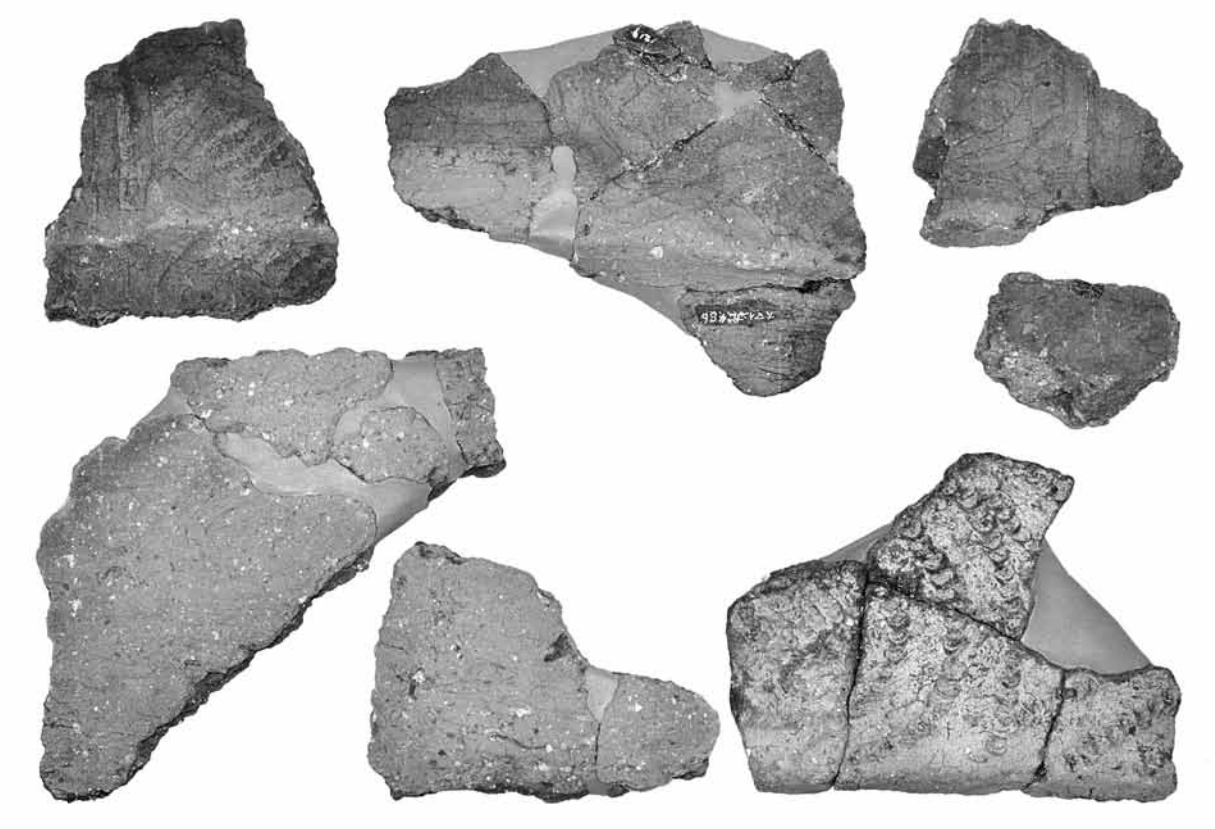


北調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）

北調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）

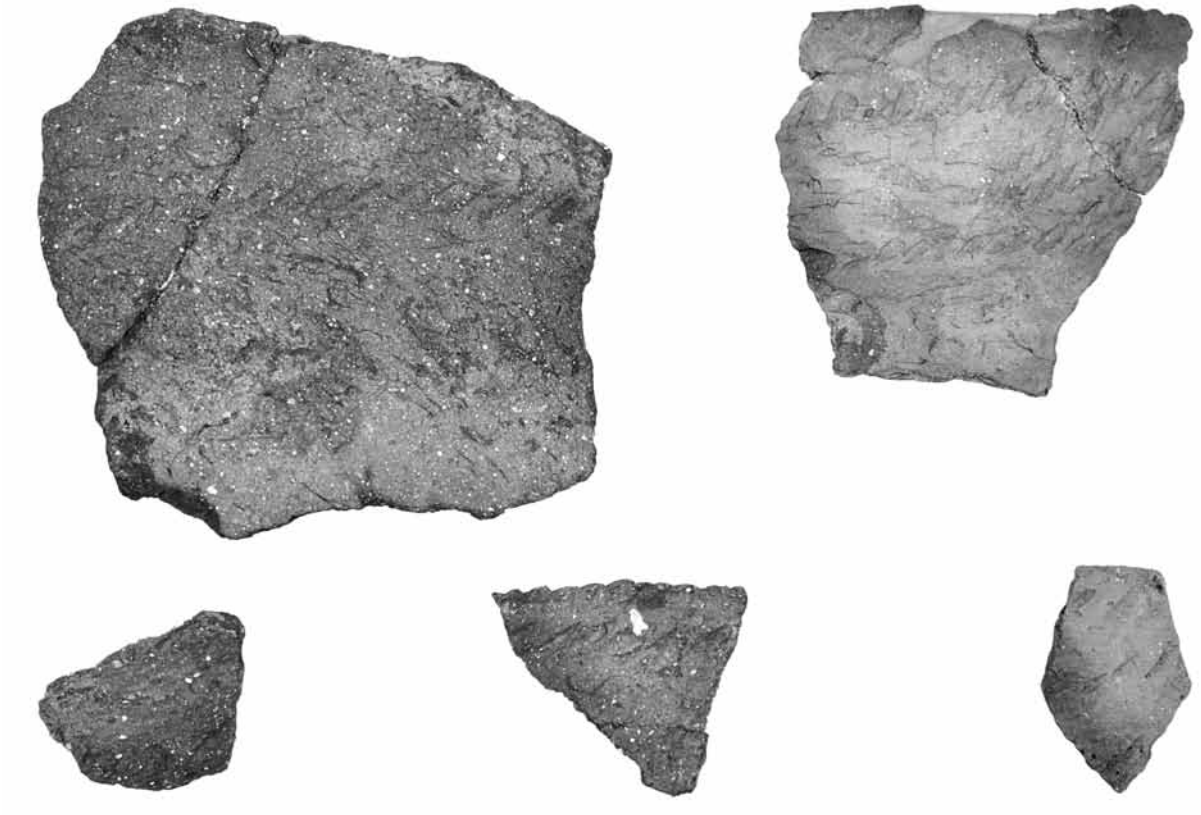


北調査区 縄文時代出土土器（茅山下層式）



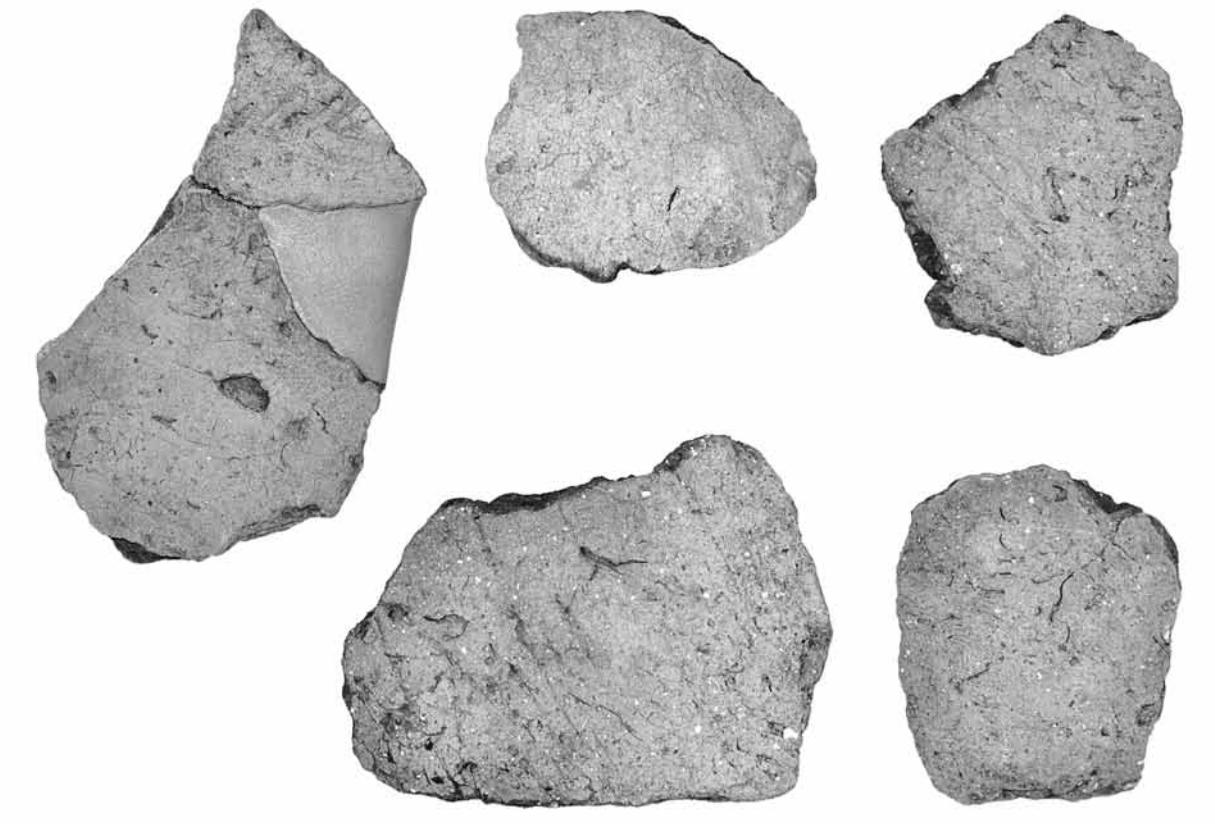
北調査区 縄文時代出土土器（茅山下層式）

北調査区 縄文時代出土土器（八ッ崎Ⅰ式）

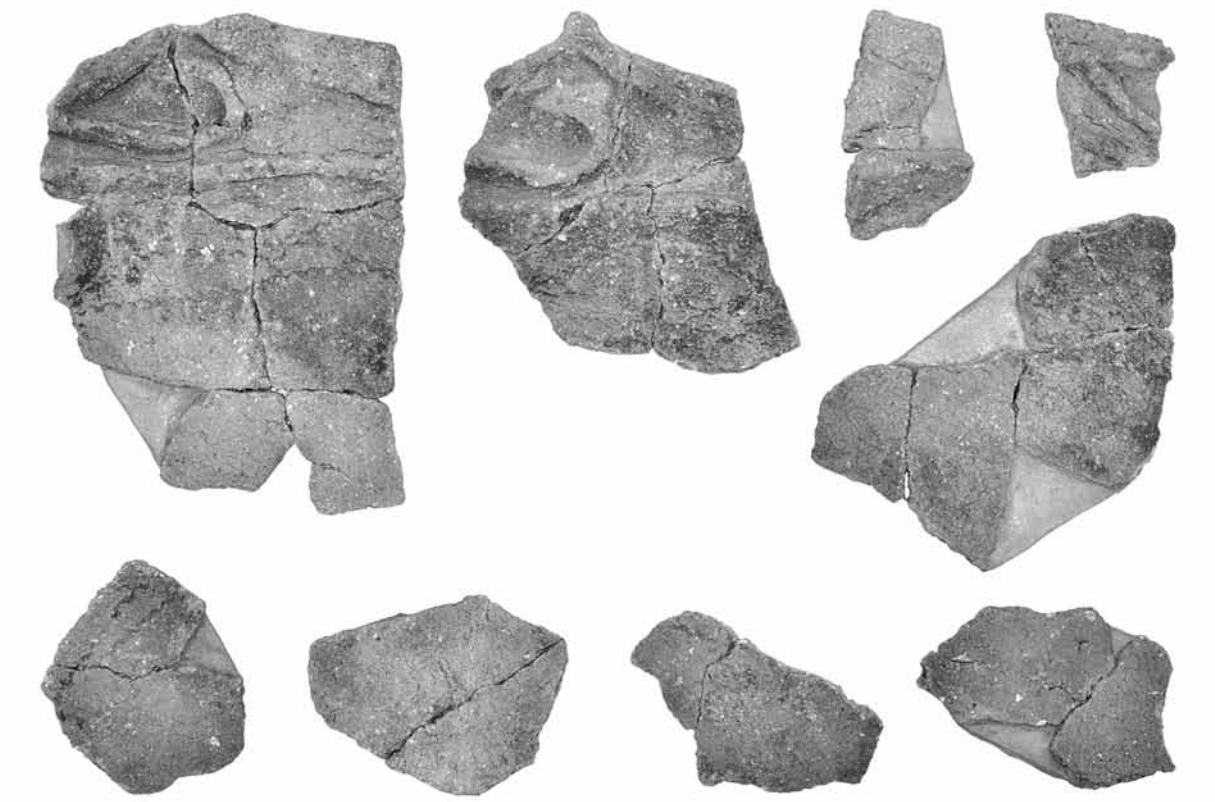


北調査区 縄文時代出土土器（八ッ崎Ⅰ式）

北調査区 縄文時代出土土器（八ッ崎Ⅰ式）



北調査区 縄文時代出土土器（八ッ崎Ⅰ式）

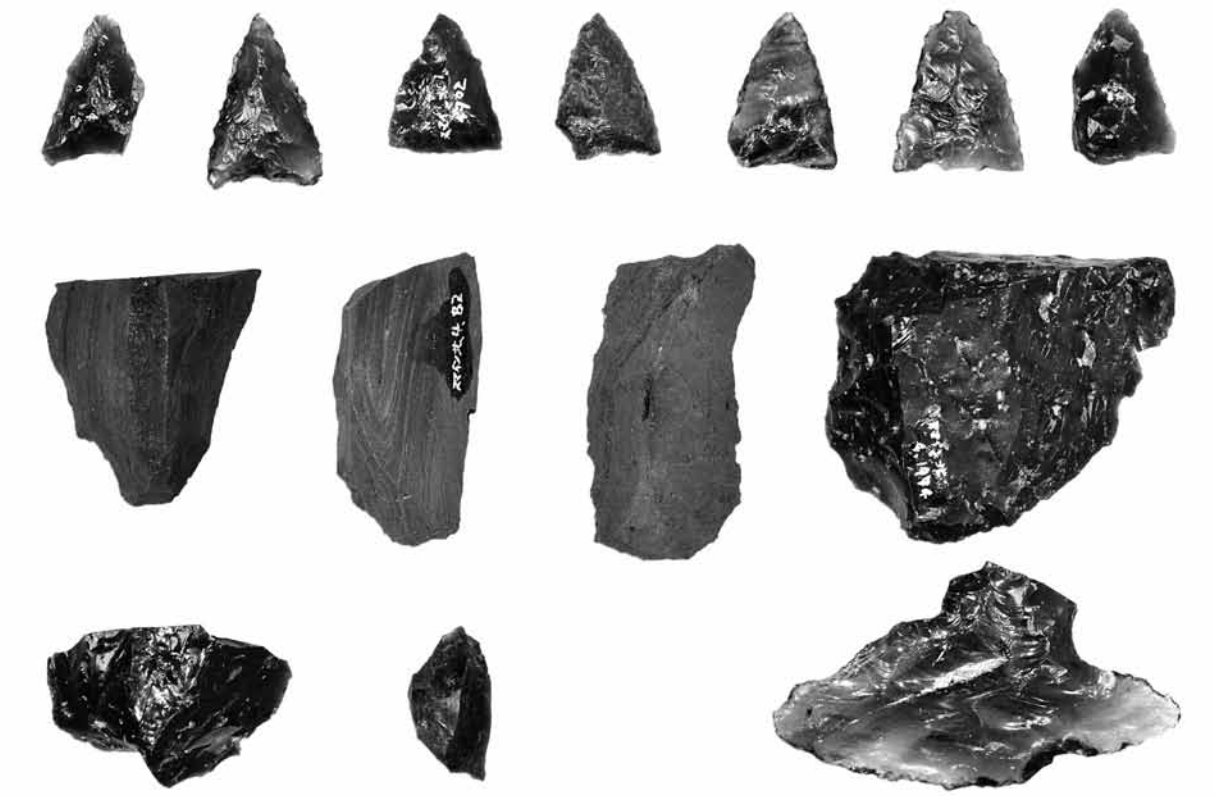


北調査区 縄文時代出土土器（神之木台式）

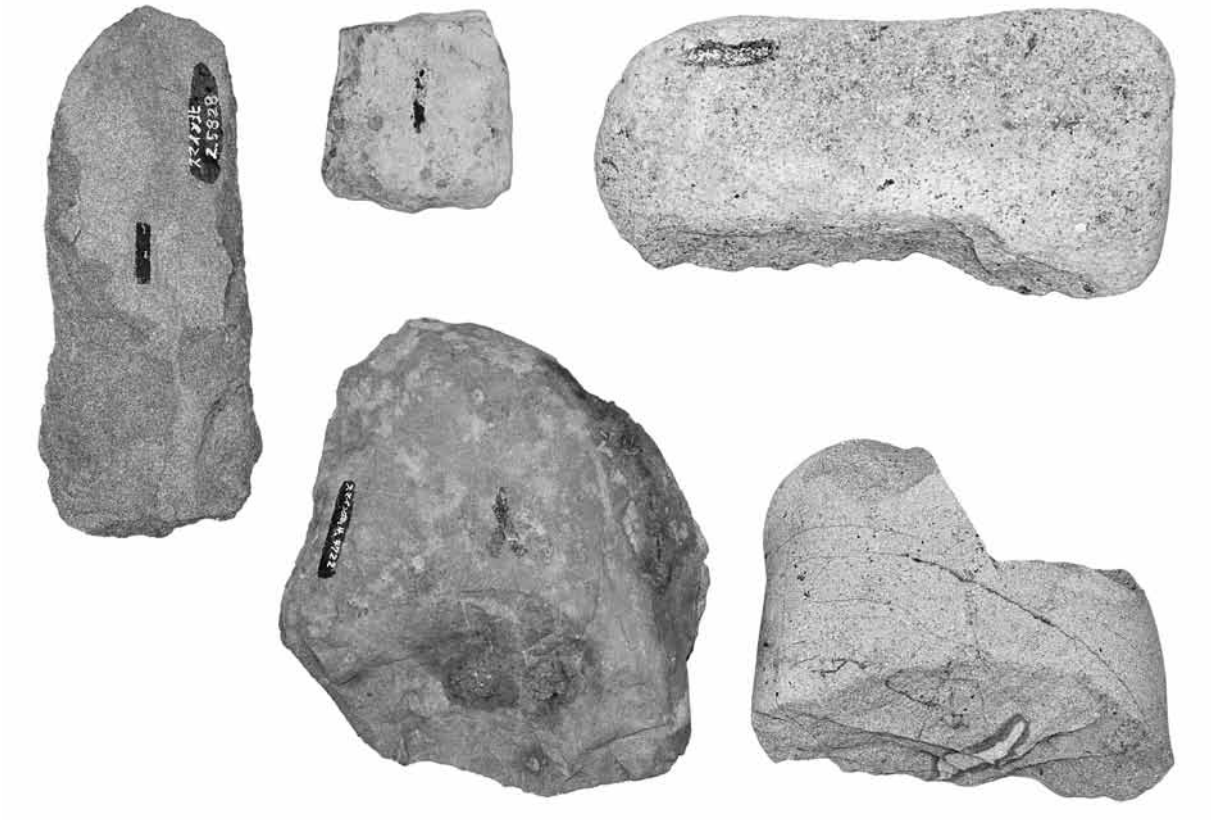
北調査区 縄文時代出土土器（早期末）

北調査区 縄文時代出土土器（勝坂式・型式不明土器）

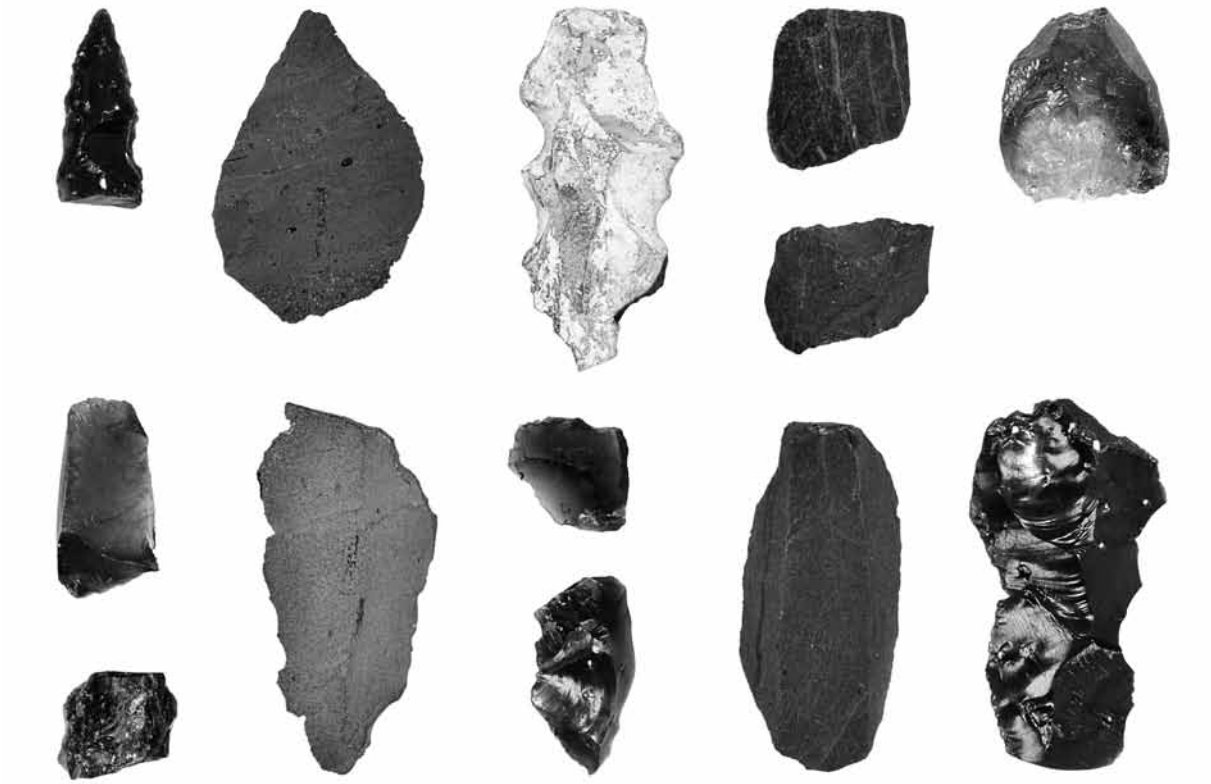
北調査区 縄文時代出土石器（尖頭器・石鏃）



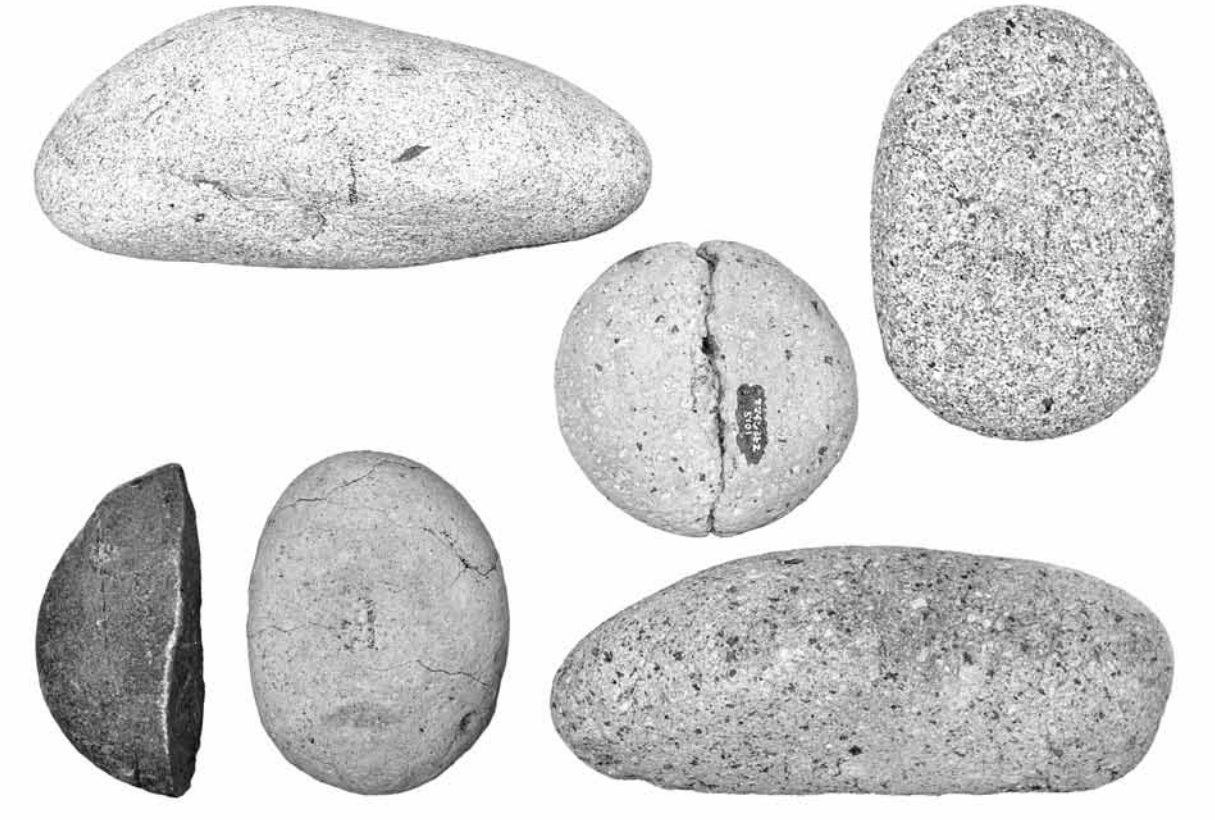
北調査区 縄文時代出土石器（石鏃）



北調査区 縄文時代出土石器（打製石斧・礫斧）



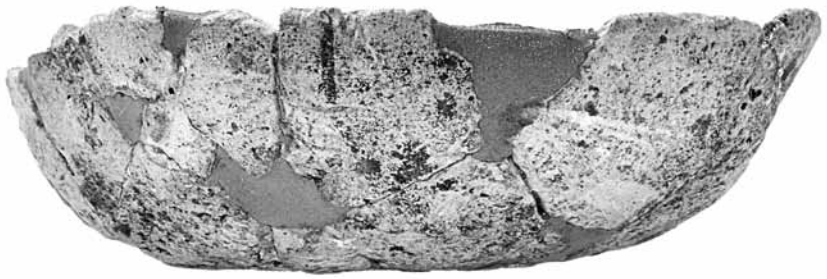
北調査区 縄文時代出土石器（石錐・抉入石器・楔形石器・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片）



北調査区 縄文時代出土石器（磨石・敲石）

北調査区 縄文時代出土石器（石核）

北調査区 縄文時代出土石器（石核）



北調査区 芝荒５号墳出土遺物（土師器坏）

南調査区全景

南調査区 基本層序

南調査区 縄文時代 土坑・集石（上段 SK3・4、下段 SG7・9）

南調査区 縄文時代 集石・焼土址（上段 SG10・11、下段 SYO1・2）

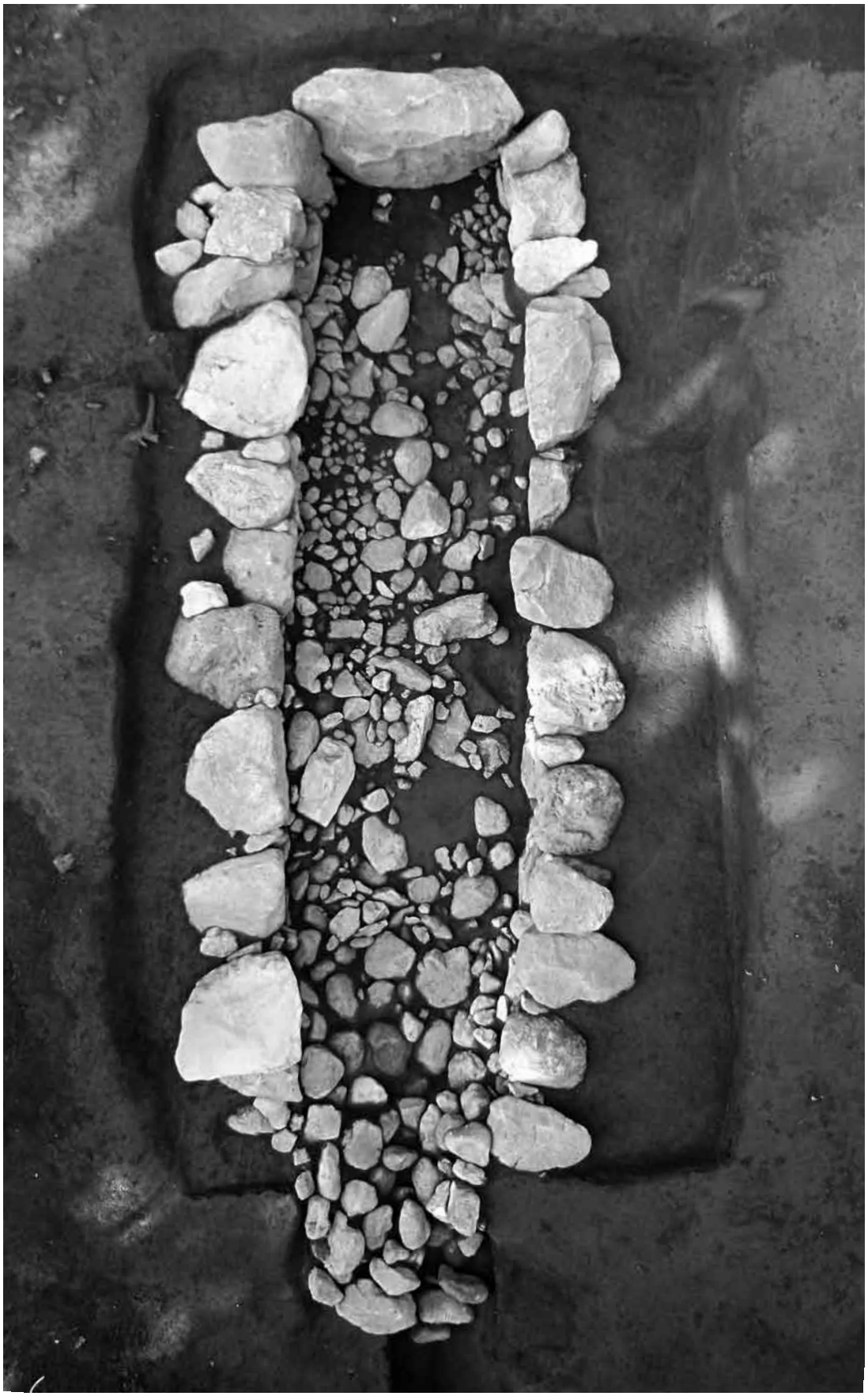
２号墳および３号墳 検出状況

２号墳および３号墳 全景

２号墳 全景

２号墳 天井石崩落状況

２号墳 基底石と入口構造

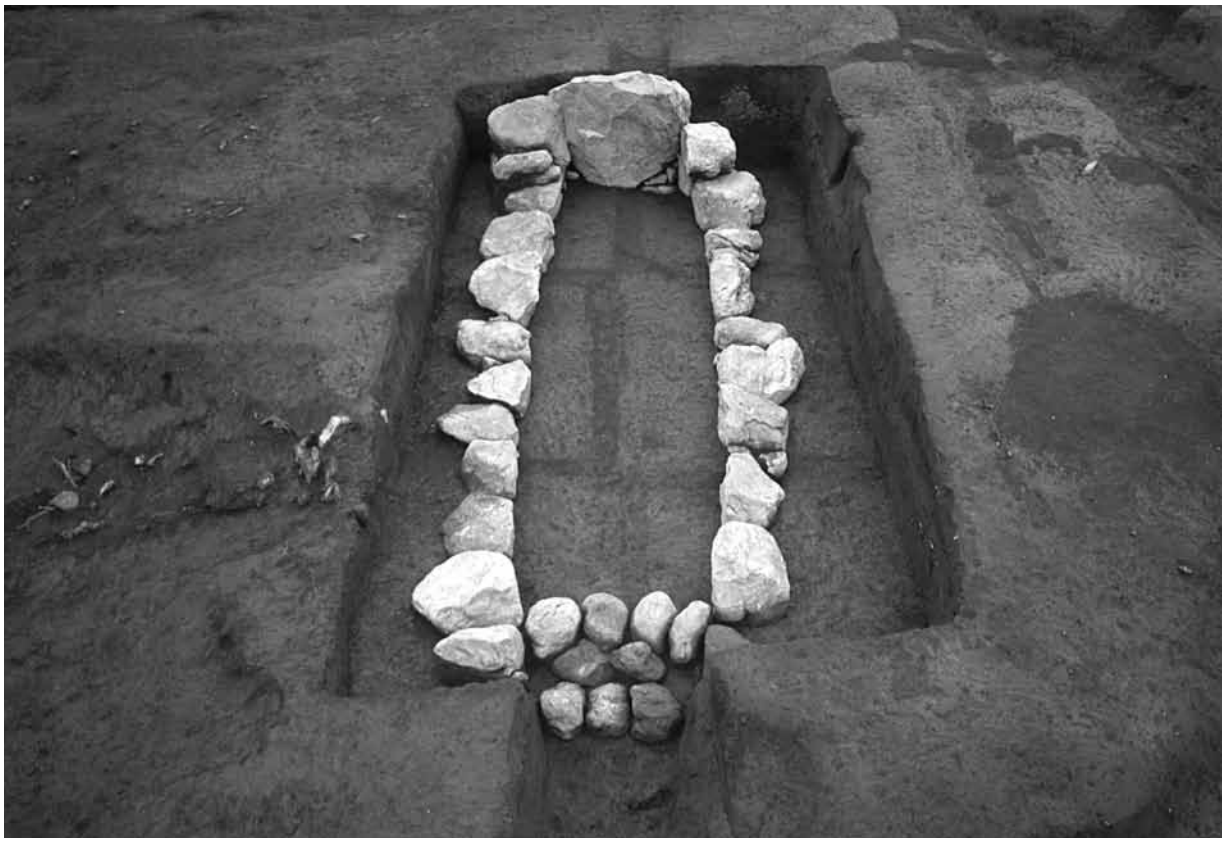


2号墳 検出状況

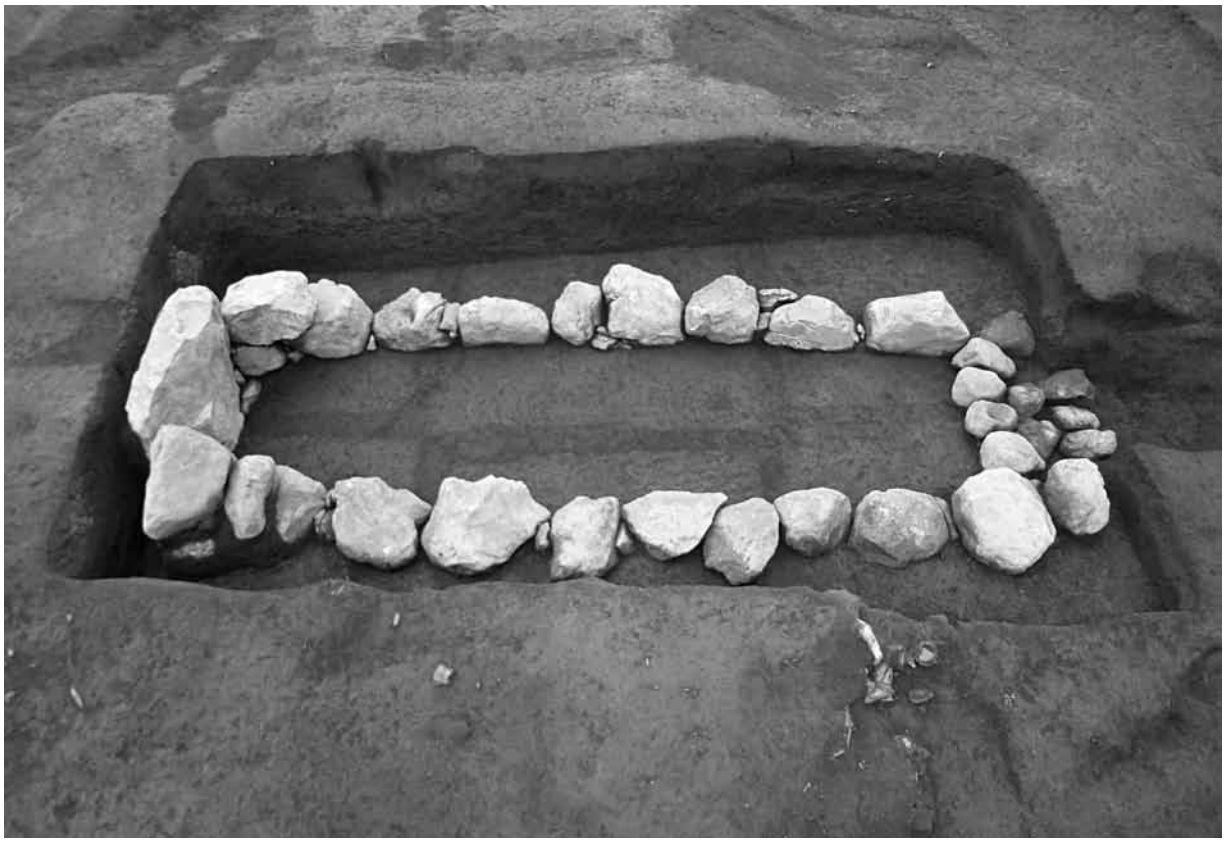
２号墳 検出状況

２号墳 側壁

２号墳 周溝検出状況



２号墳 基底石および梱石状の石材・閉塞石と墓坑（開口部側から）



２号墳 基底石および梱石状の石材・閉塞石と墓坑（西側から）

２号墳 鏡石（左上）および梱石状の石材と最下段の閉塞石

２号墳 閉塞石

２号墳 棺台と想定される石材

２号墳 単鳳環頭大刀柄頭の出土状況

3号墳 全景

3号墳 天井石検出状況（南東側から）

3号墳 検出状況

3号墳 基底石と墓坑（開口部側から）

3号墳 基底石と墓坑および副葬遺物出土状況

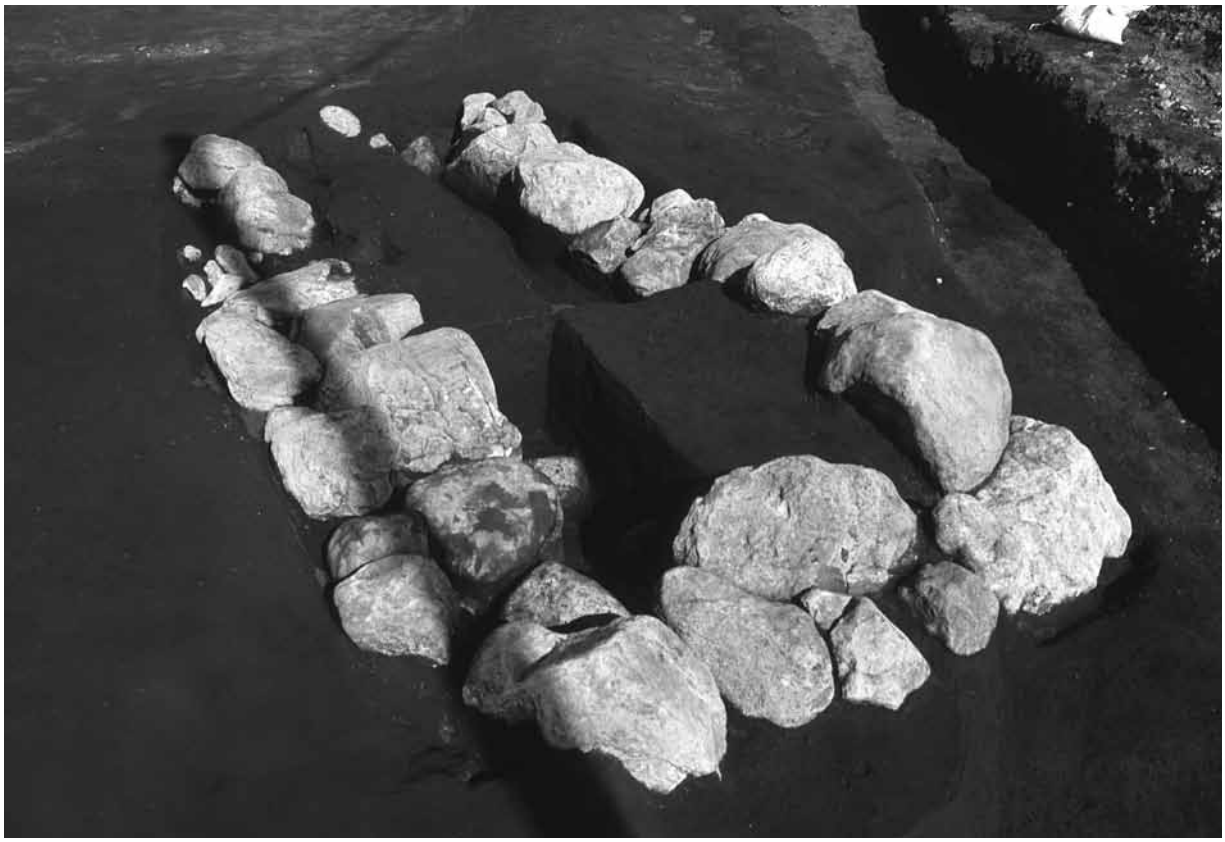
3号墳 鏡石

3号墳 段構造

3号墳 副葬遺物出土状況

3号墳 装飾付大刀・小刀出土状況

6号墳 全景



6号墳 検出状況（開口部側から）

6号墳 基底石と墓坑

6号墳 基底石と墓坑（東側から）

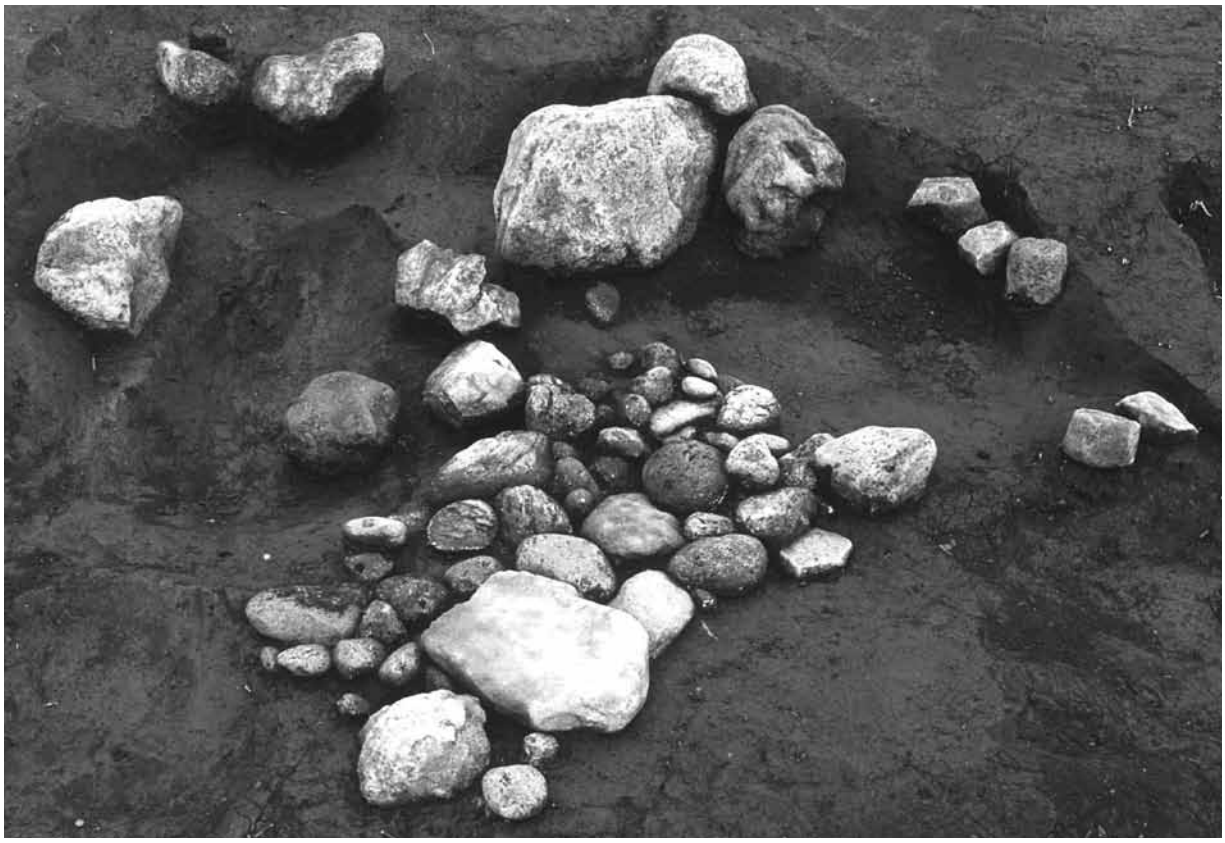
6号墳 框石状の石材

6号墳 段構造

6号墳 棺台と想定される石材

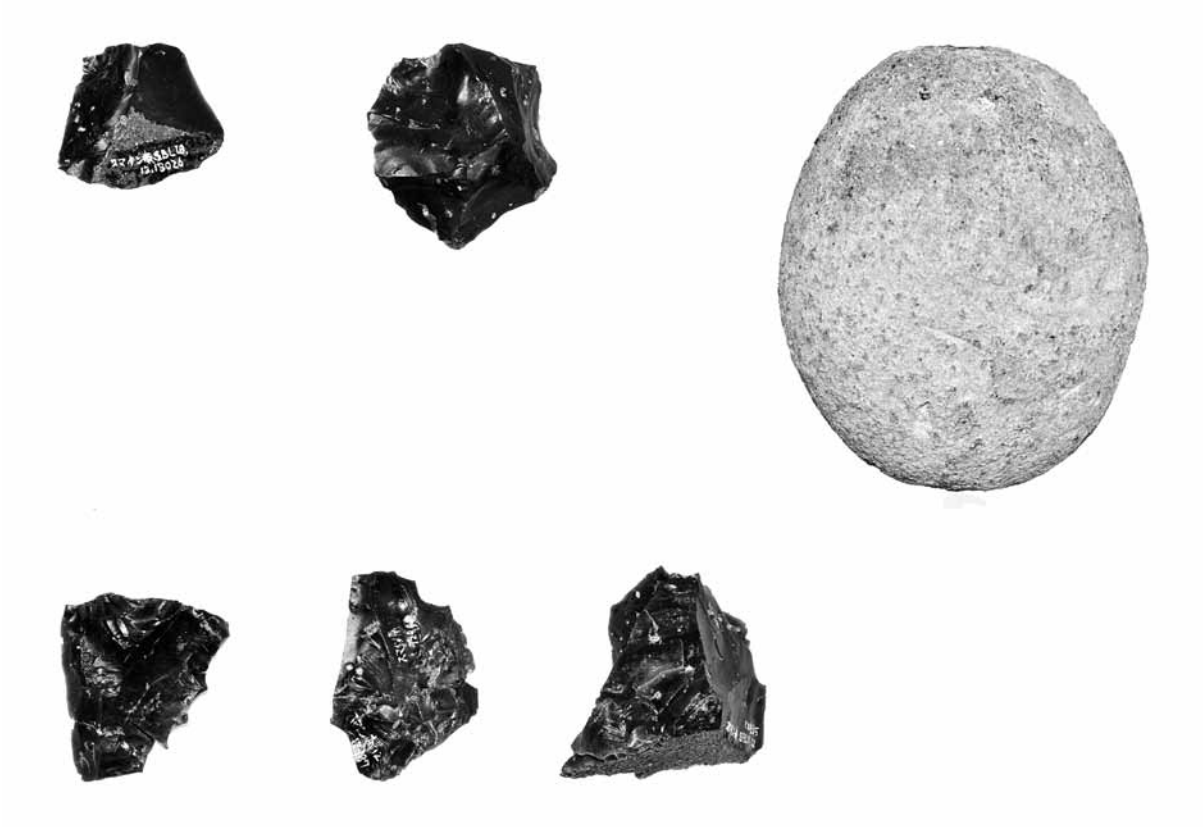
6号墳 副葬遺物出土状況

7号墳 検出状況（南東側から）



７号墳 礫床状況

７号墳 溝状遺構

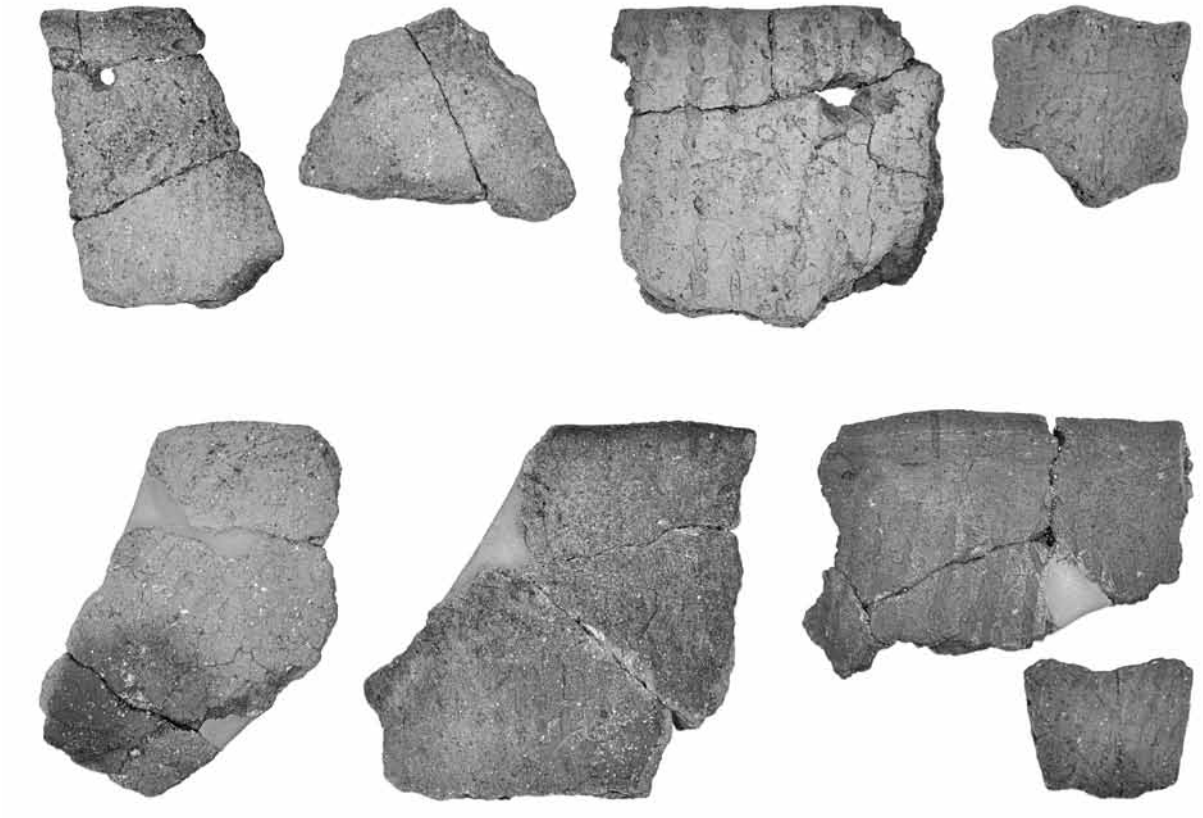


南調査区 第Ⅰ文化層出土石器（掻器・石核・敲石・接合資料）

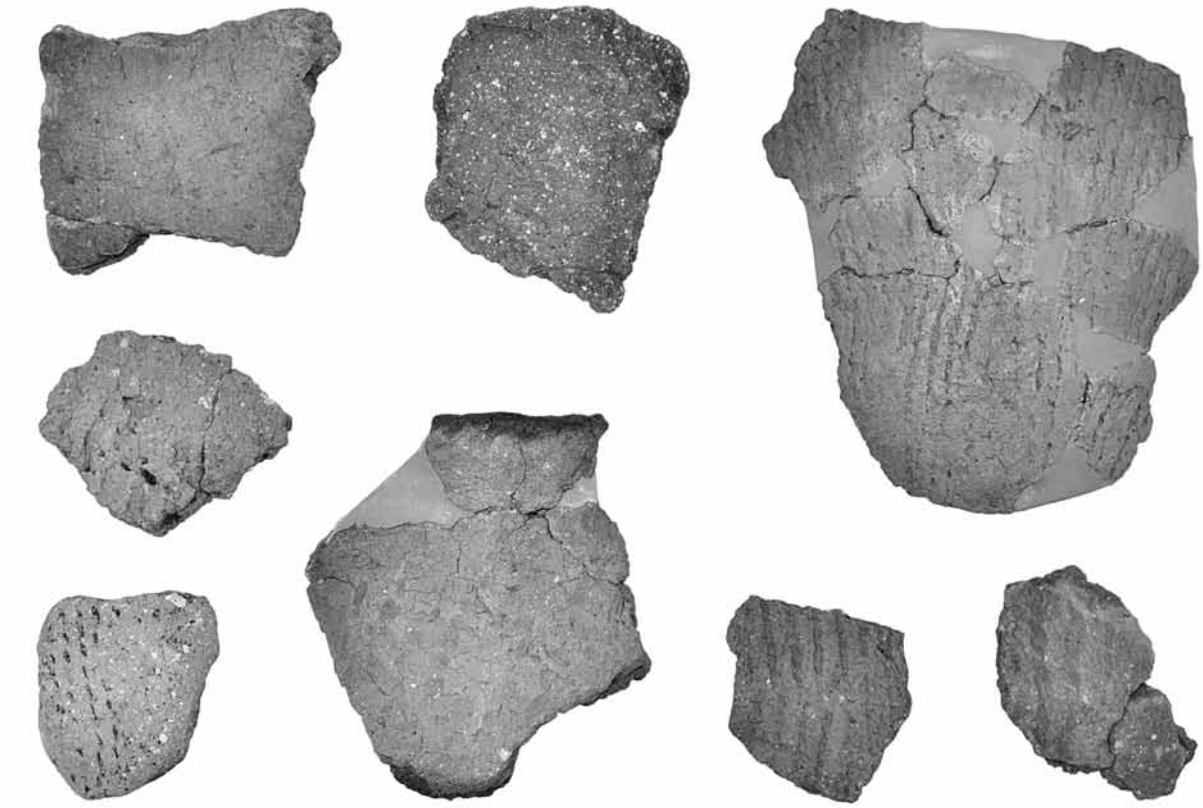
南調査区 第Ⅱ・第Ⅲ文化層出土石器（ナイフ形石器・楔形石器・細石刃）

南調査区 第Ⅱ文化層出土石器（石核・磨石）

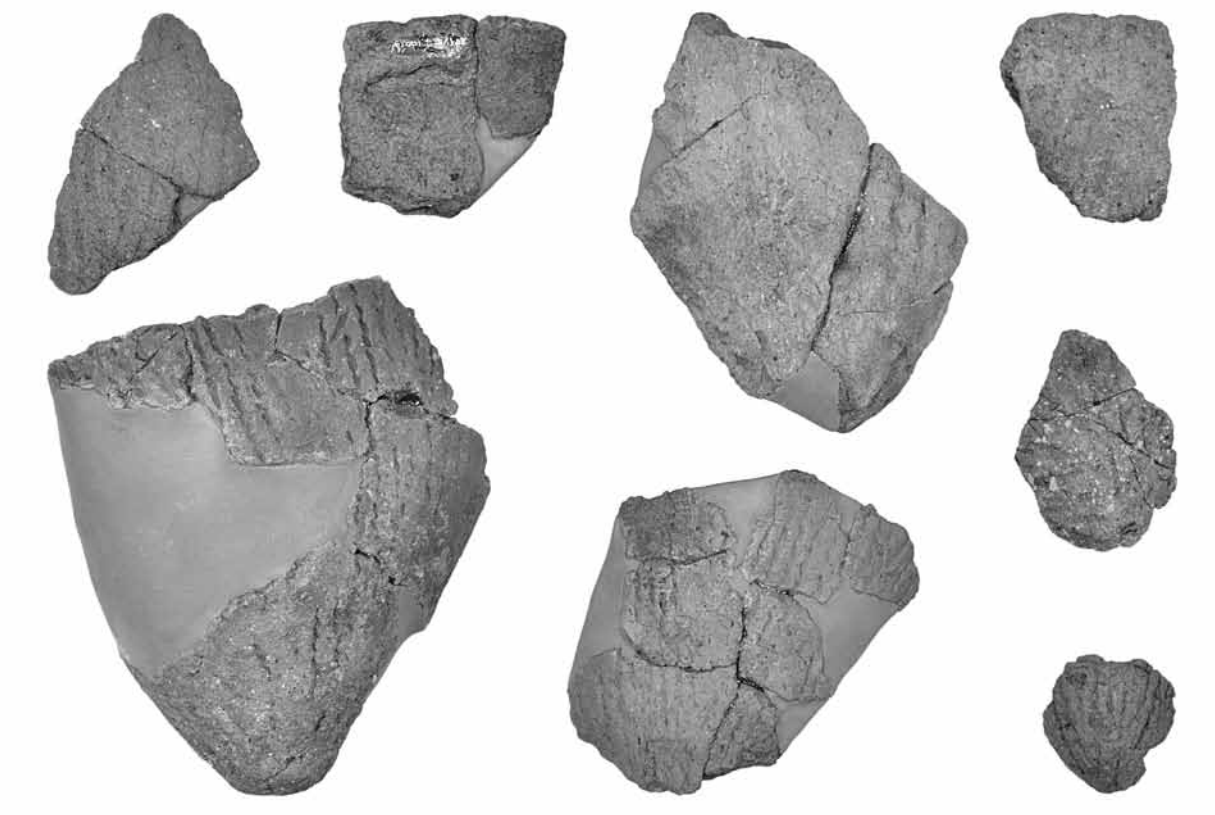
南調査区 第Ⅱ文化層出土石器（接合資料）



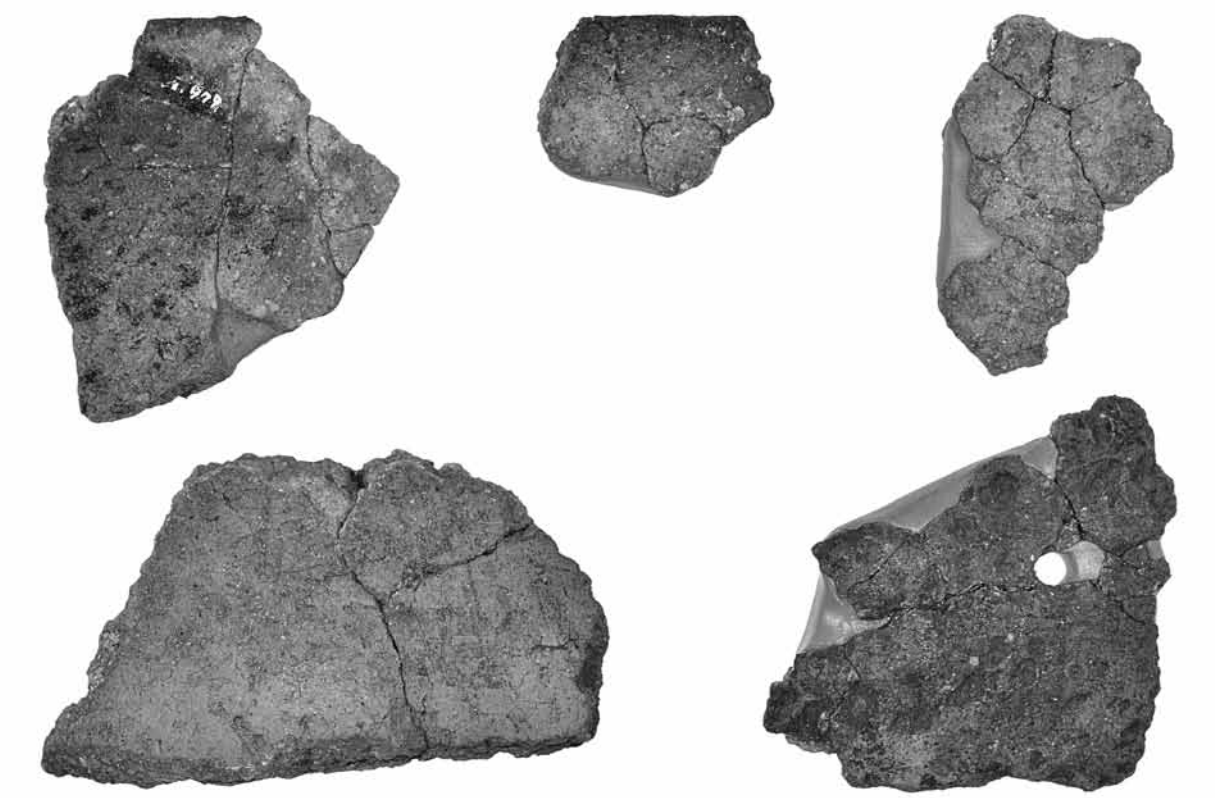
南調査区 縄文時代出土土器（撚糸文土器）



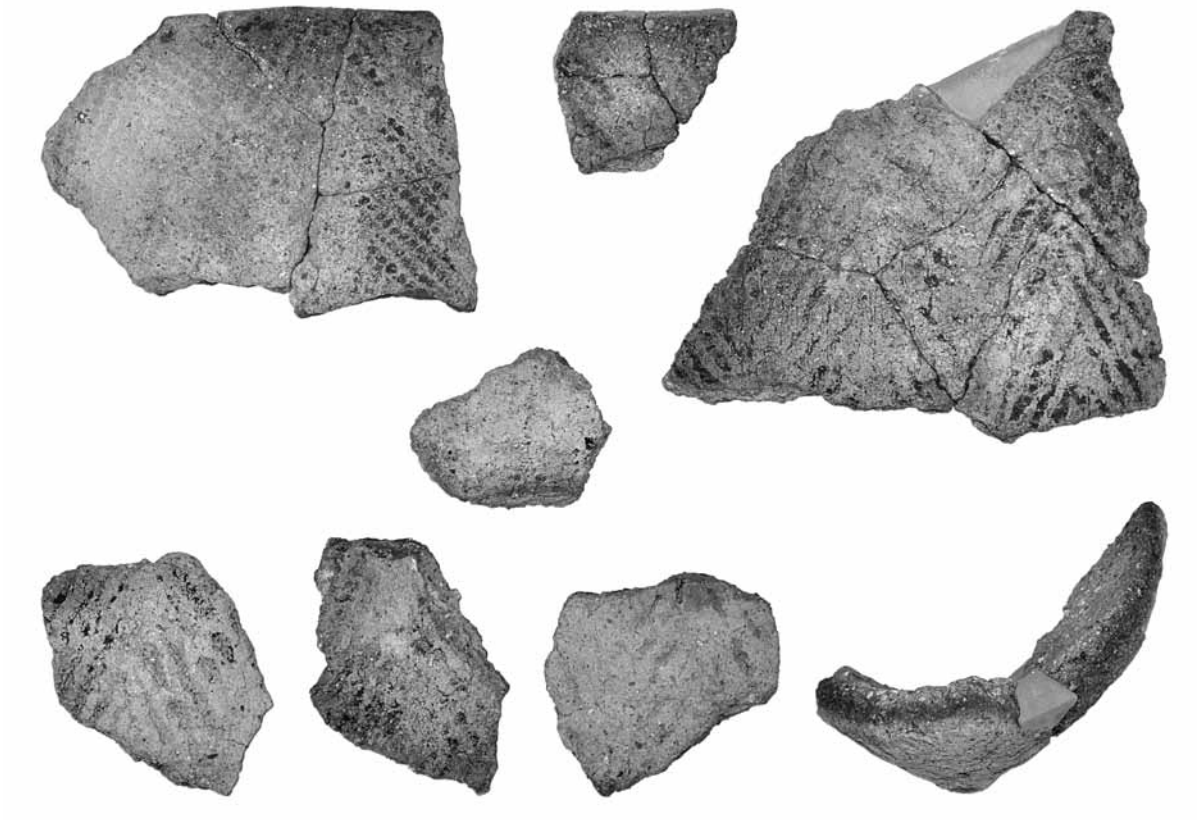
南調査区 縄文時代出土土器（撚糸文土器）



南調査区 縄文時代出土土器（撚糸文土器）

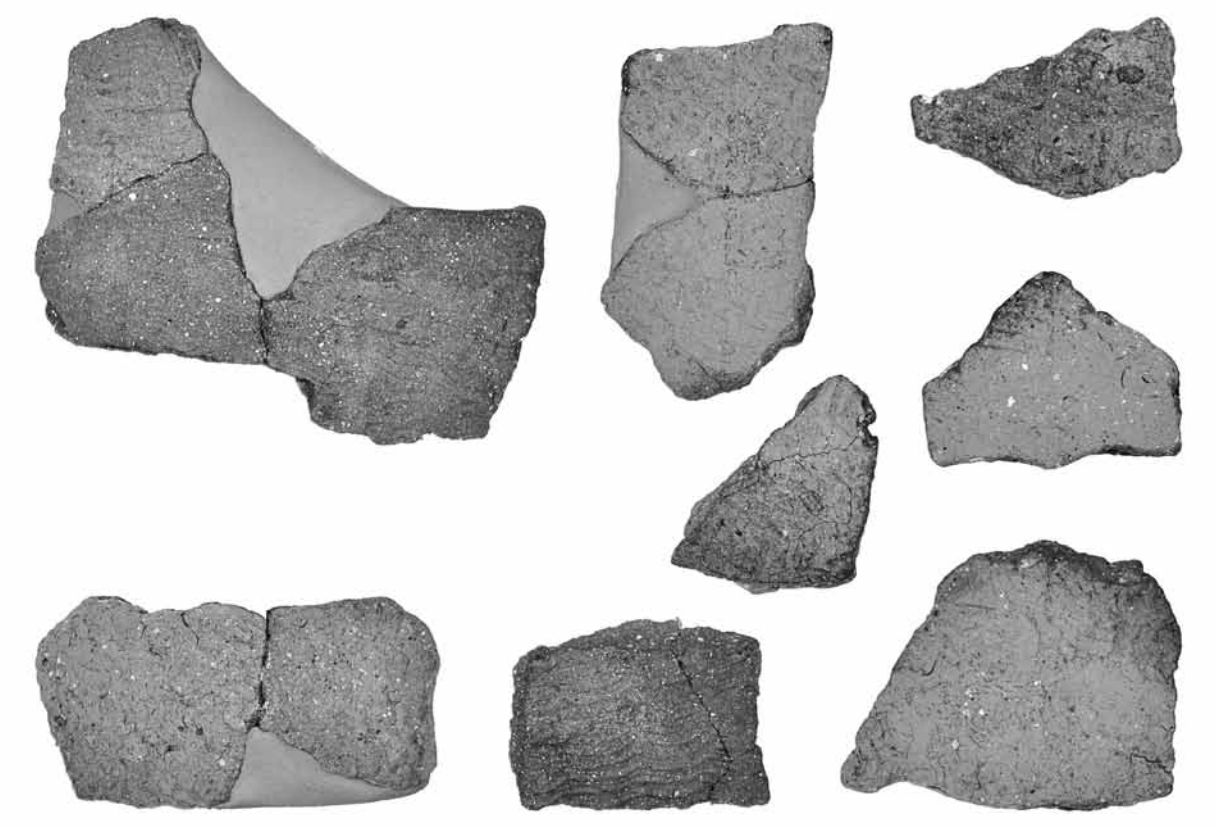


南調査区 縄文時代出土土器（駿豆撚糸文土器）

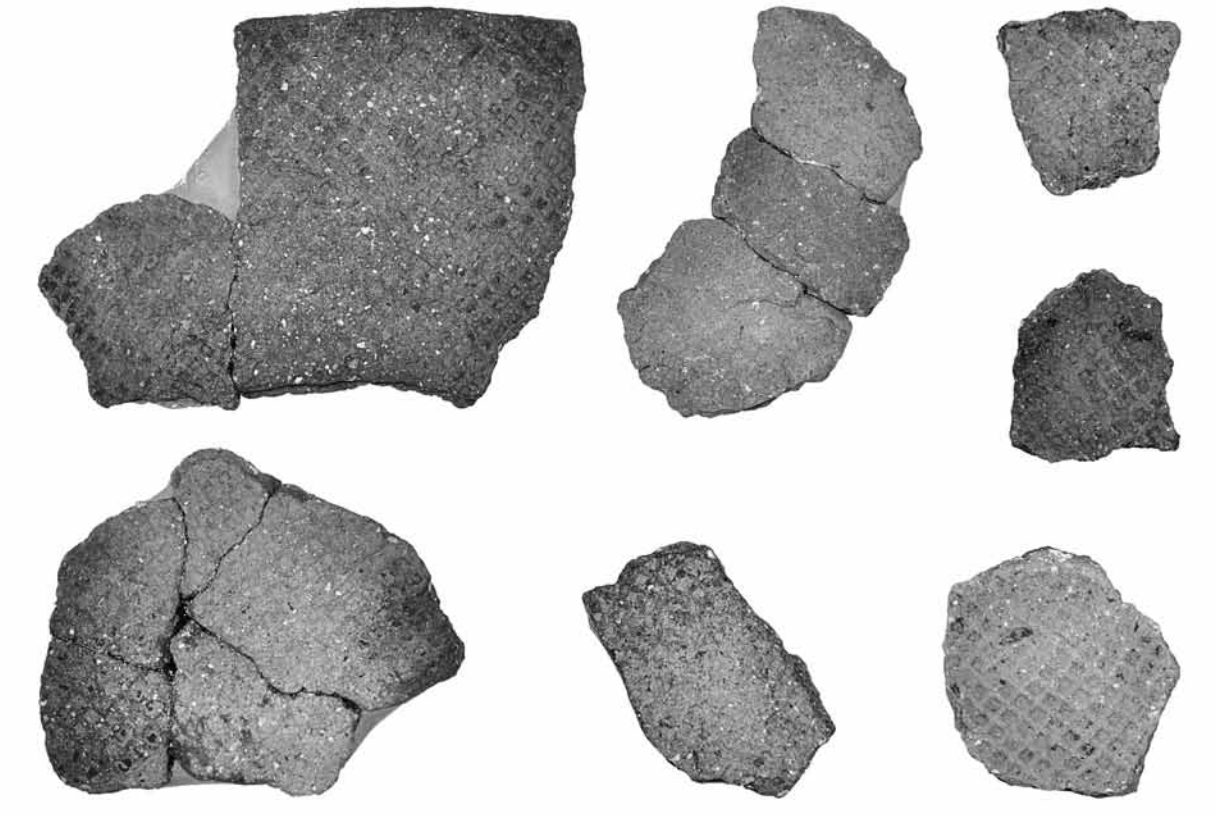


南調査区 縄文時代出土土器（駿豆撚糸文に伴う縄文土器）

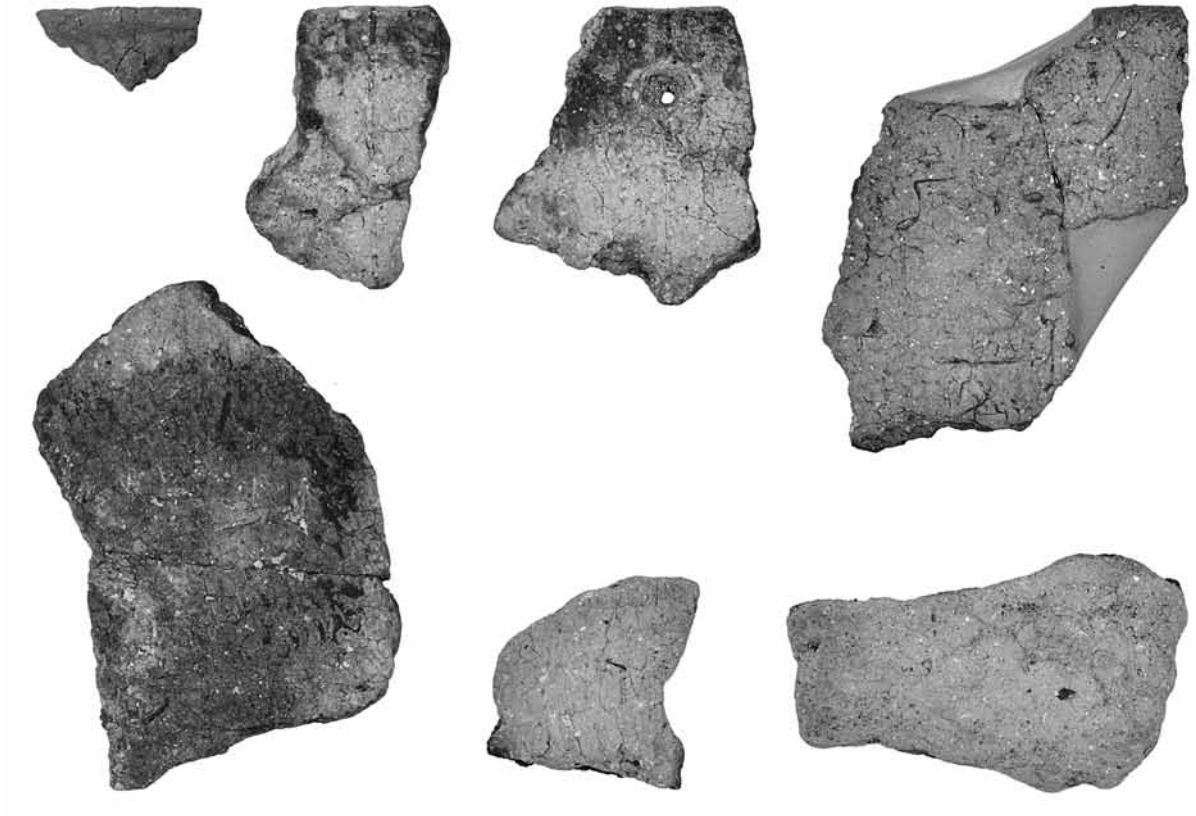
南調査区 縄文時代出土土器（駿豆撚糸文に伴う押型文土器）



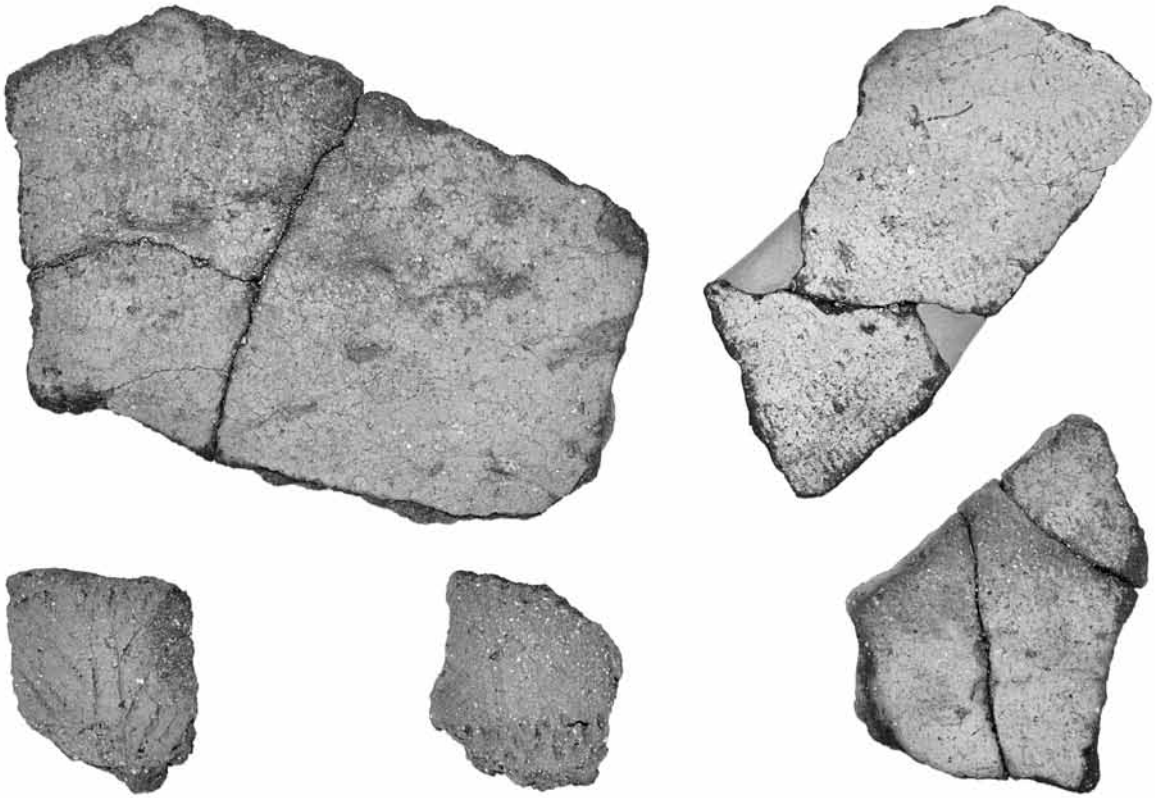
南調査区 縄文時代出土土器（押型文土器）



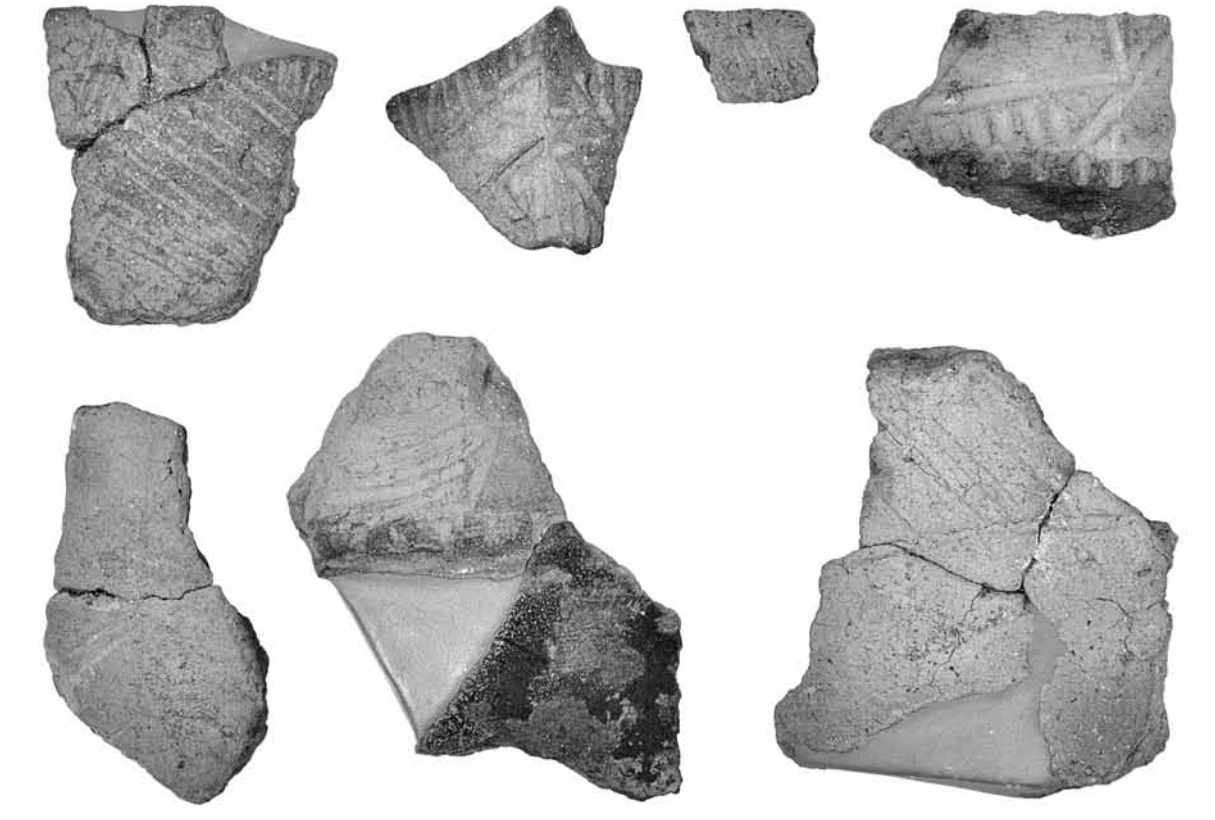
南調査区 縄文時代出土土器（押型文土器）



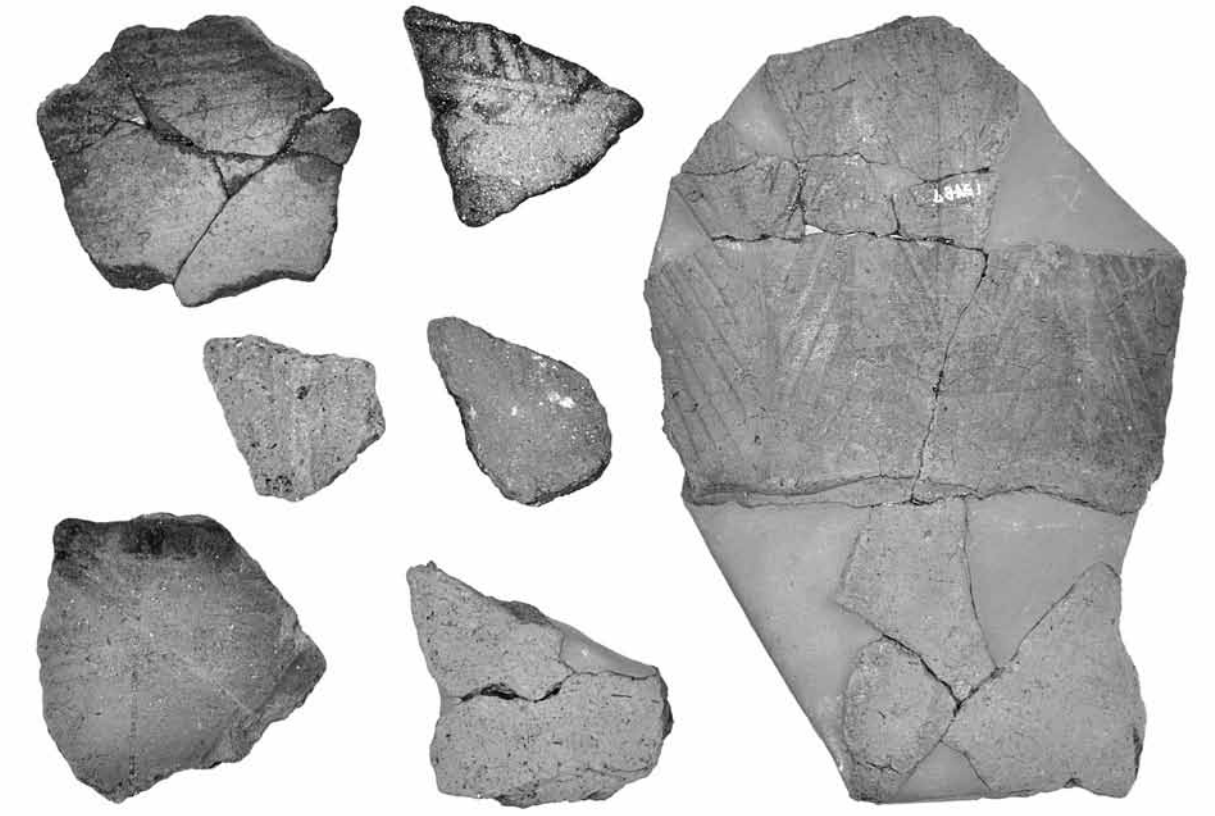
南調査区 縄文時代出土土器（押型文土器）



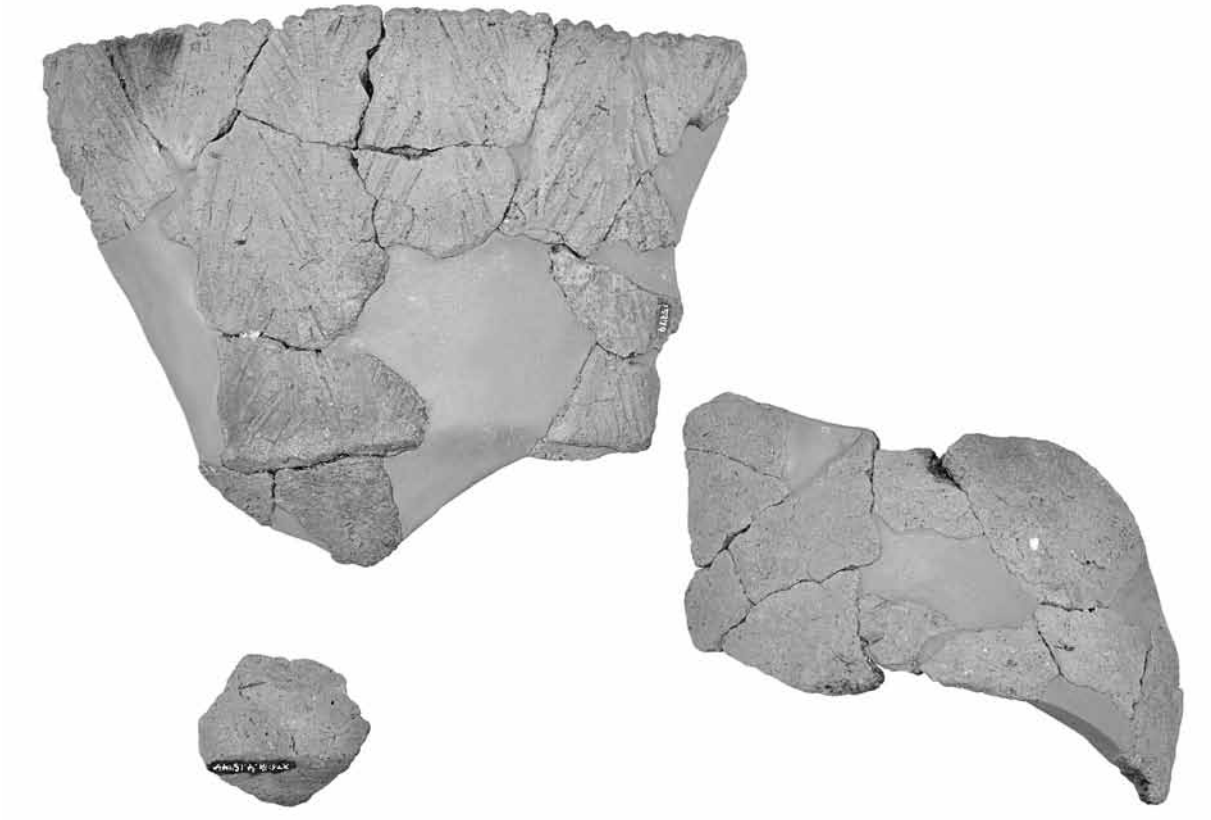
南調査区 縄文時代出土土器（清水柳Ｅ類・子母口式・判ノ木山西式）



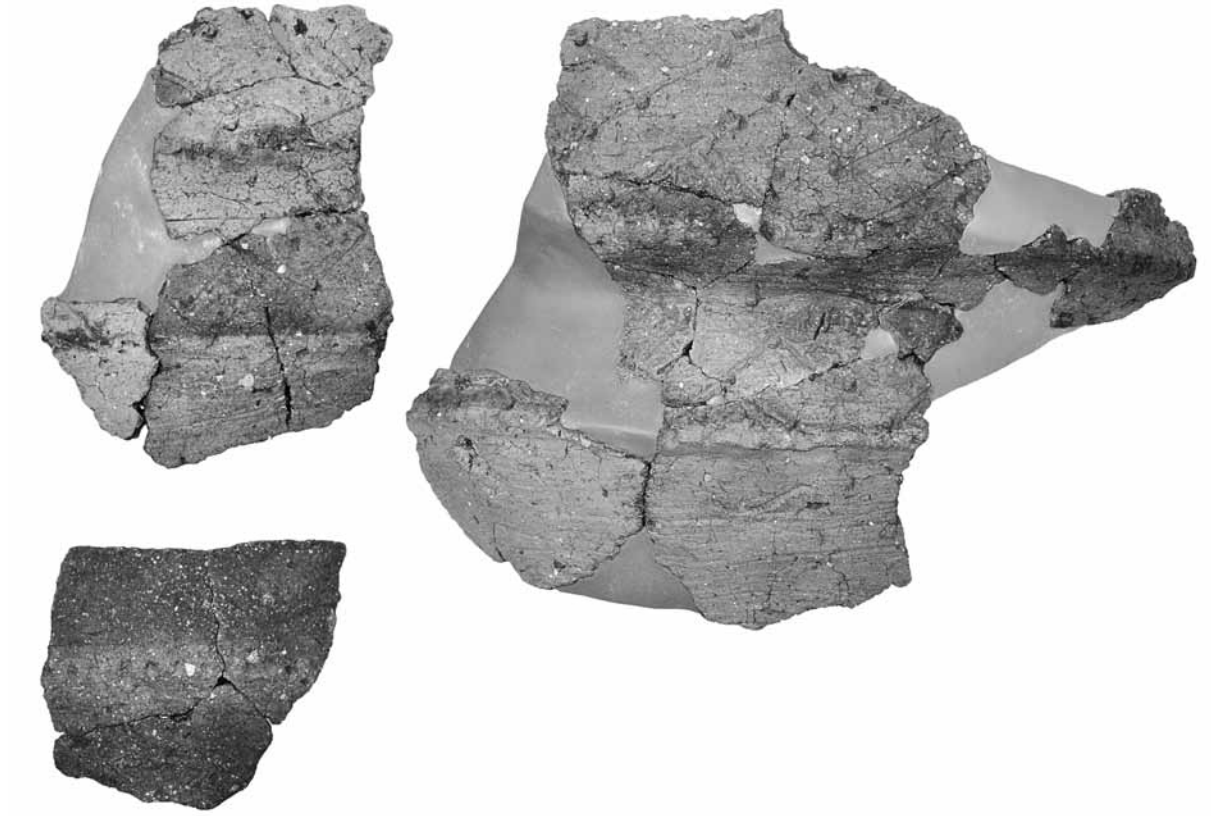
南調査区 縄文時代出土土器（野島式）



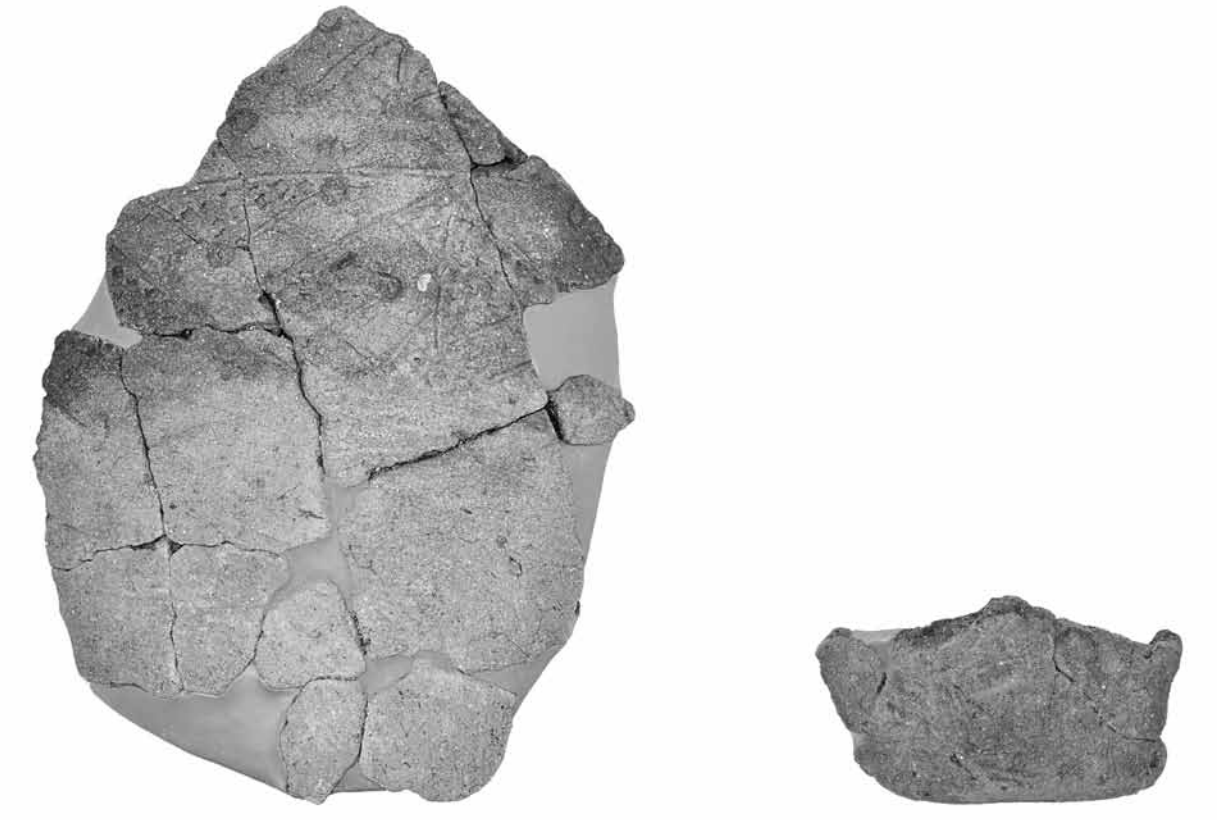
南調査区 縄文時代出土土器（野島式）



南調査区 縄文時代出土土器（野島式）

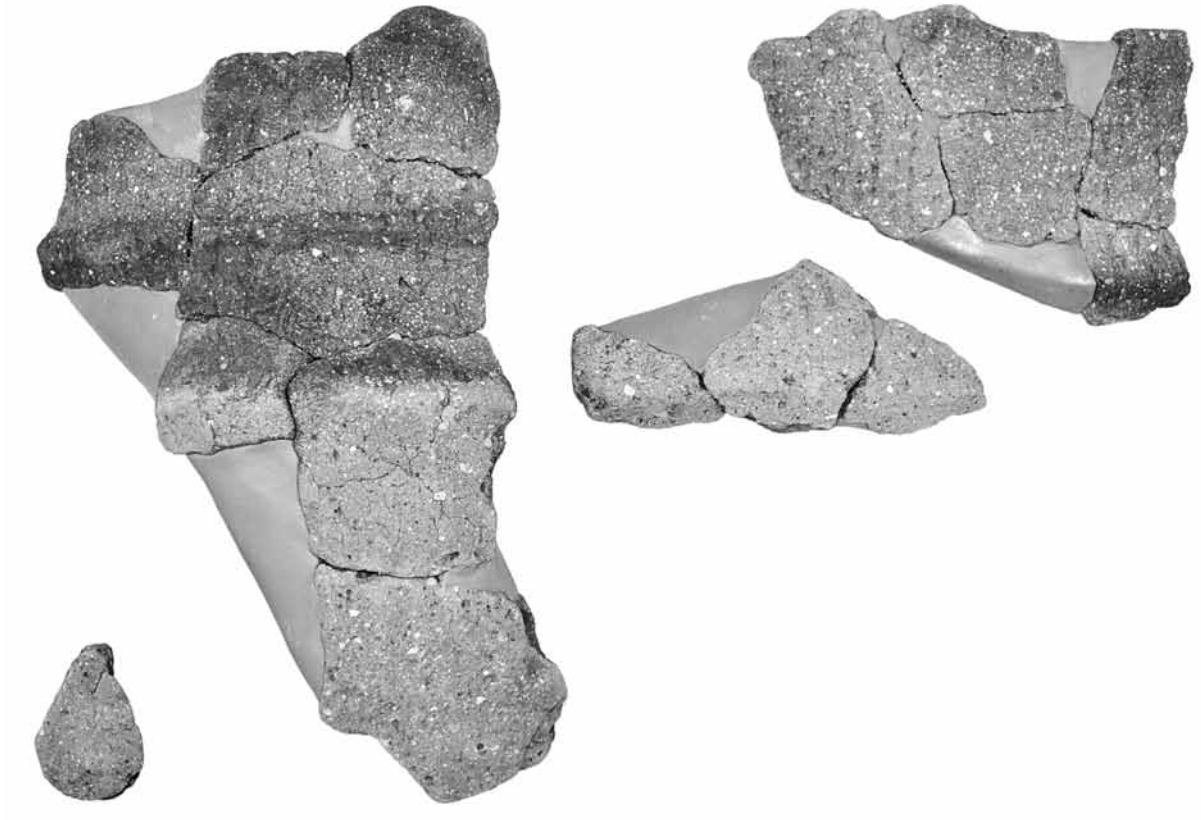


南調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）



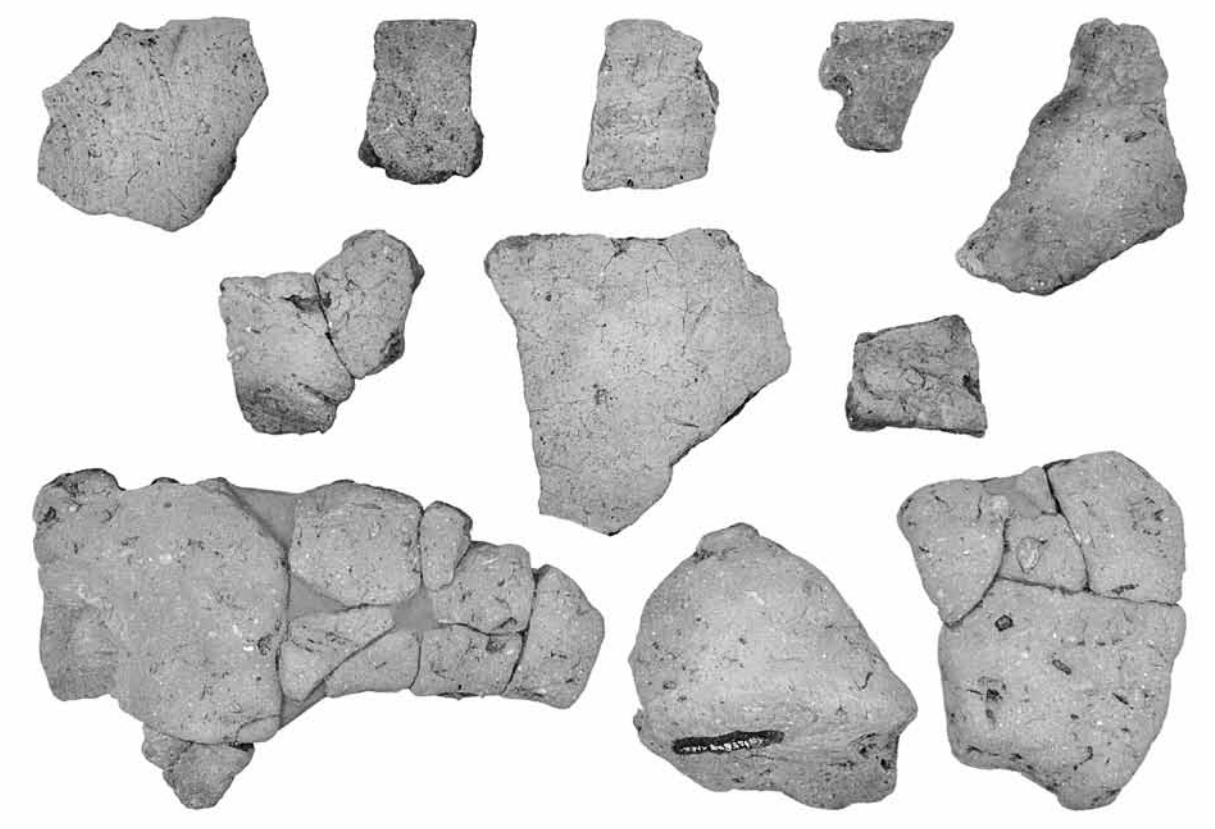
南調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）

南調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）

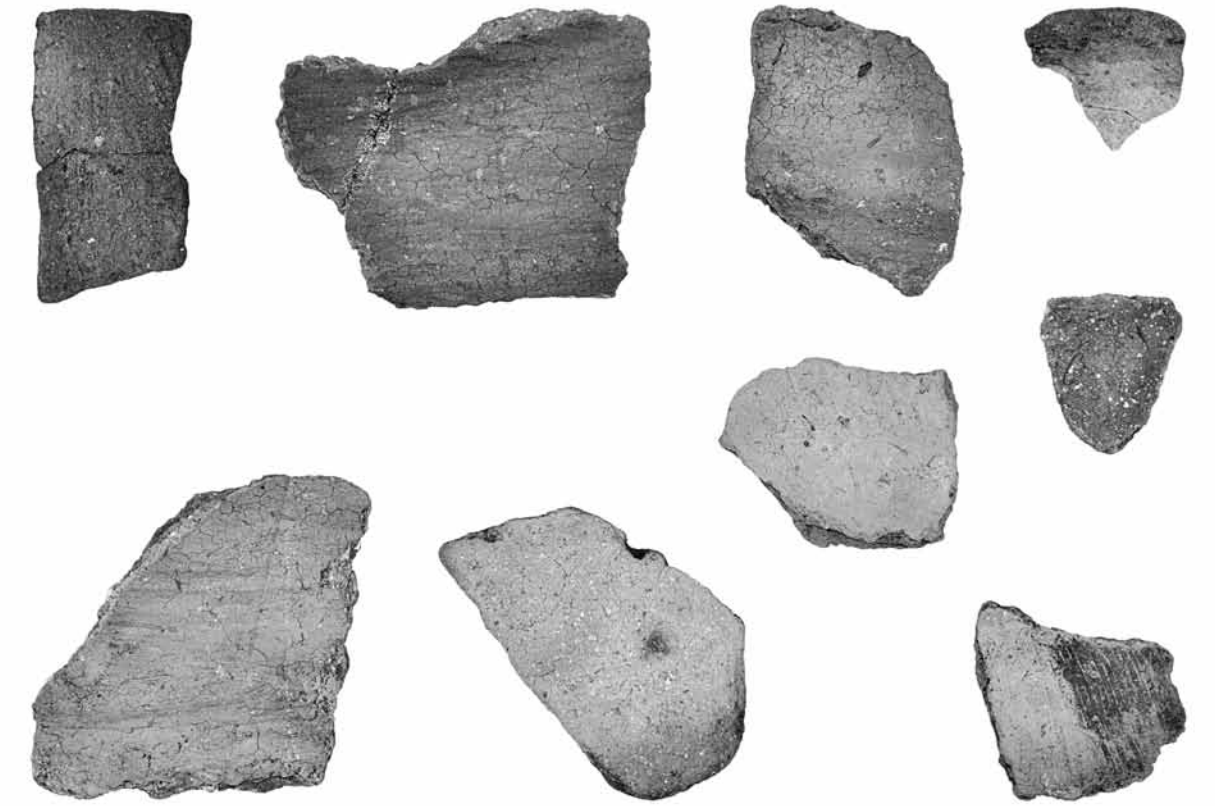


南調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式）

南調査区 縄文時代出土土器（鵜ヶ島台式併行早期後葉条痕文土器）

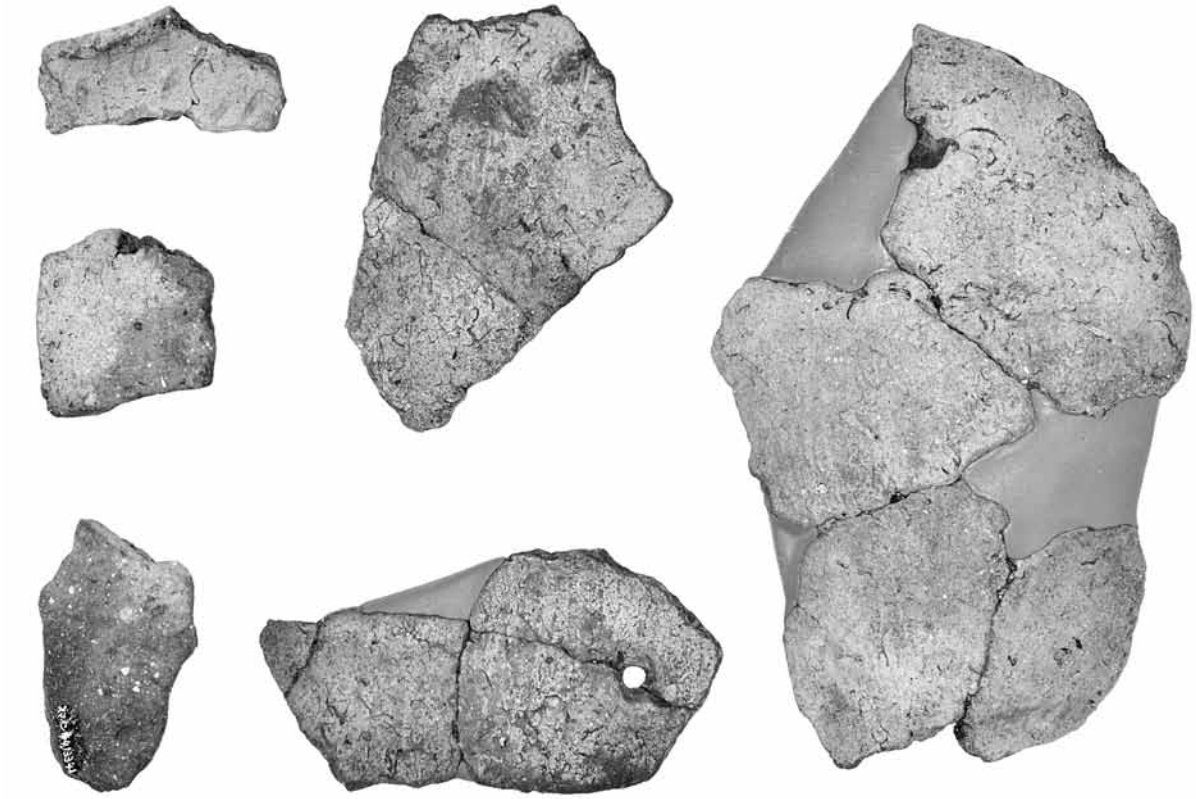


南調査区 縄文時代出土土器（茅山下層式）

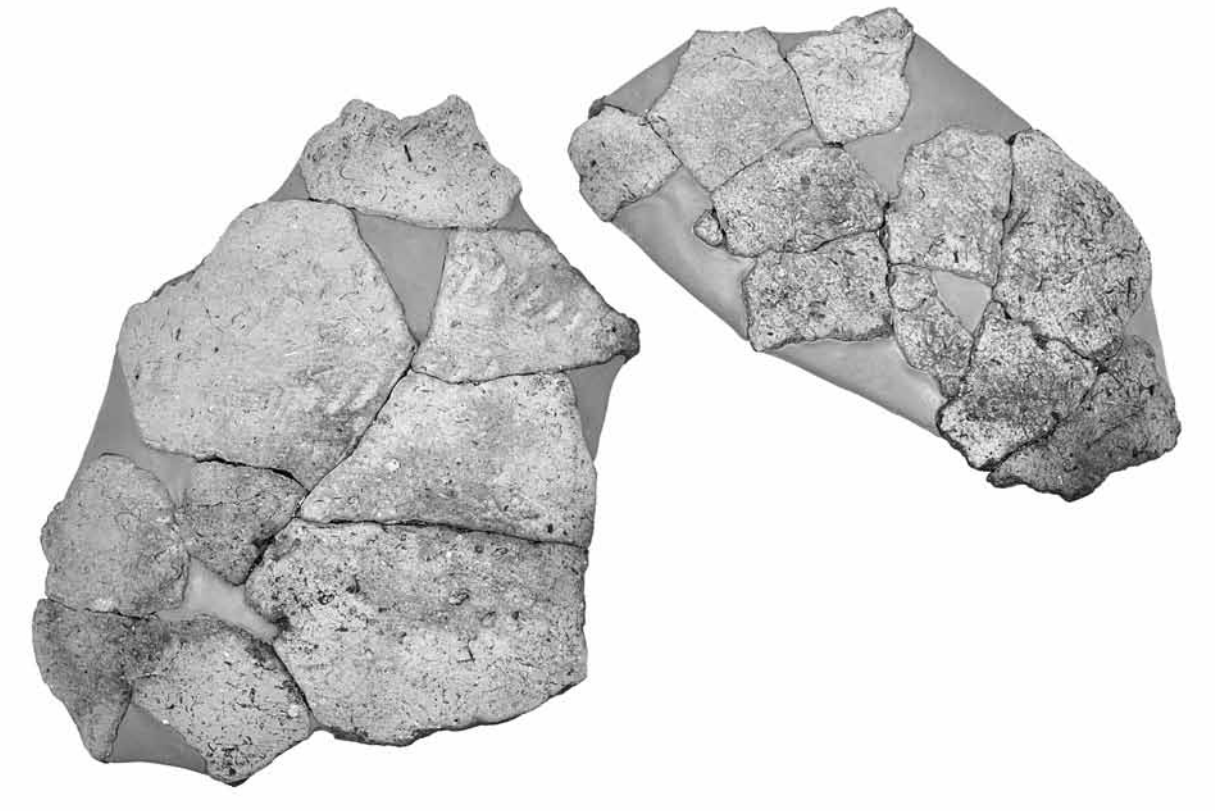


南調査区 縄文時代出土土器（茅山下層式併行早期後葉条痕文土器）

南調査区 縄文時代出土土器（茅山下層式併行早期後葉条痕文土器）

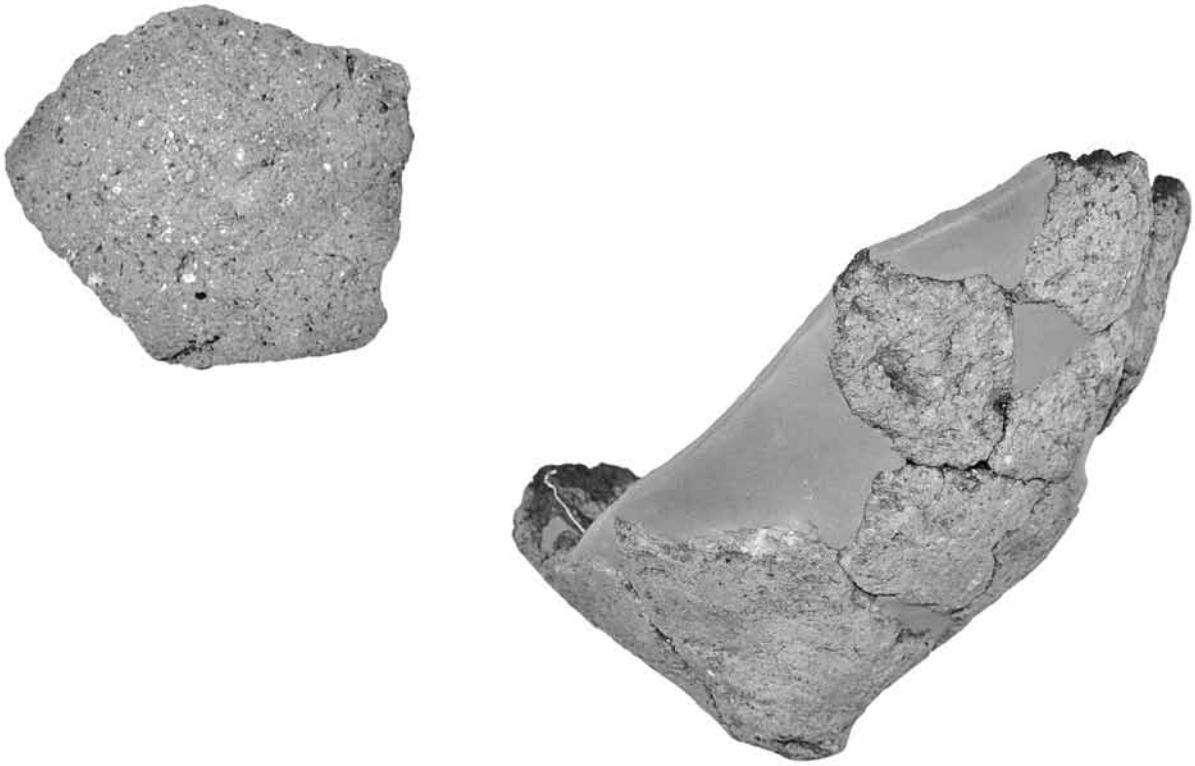


南調査区 縄文時代出土土器（粕畑式）

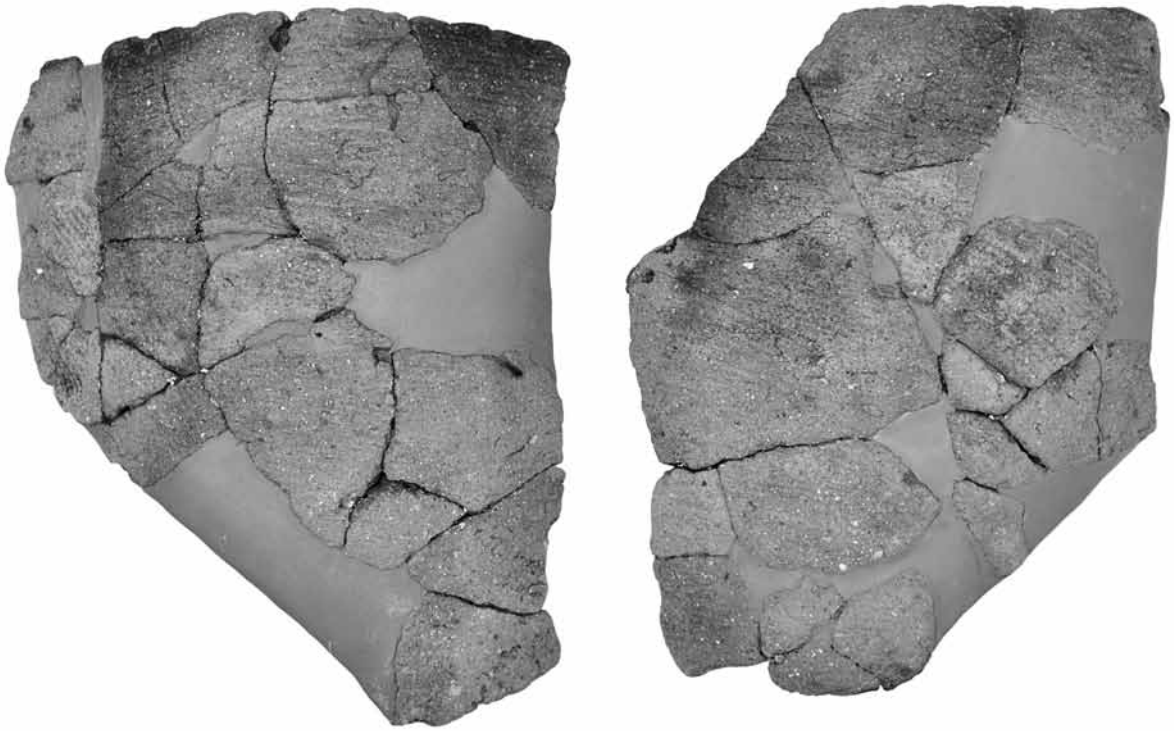


南調査区 縄文時代出土土器（粕畑式）

南調査区 縄文時代出土土器（早期末条痕文土器）



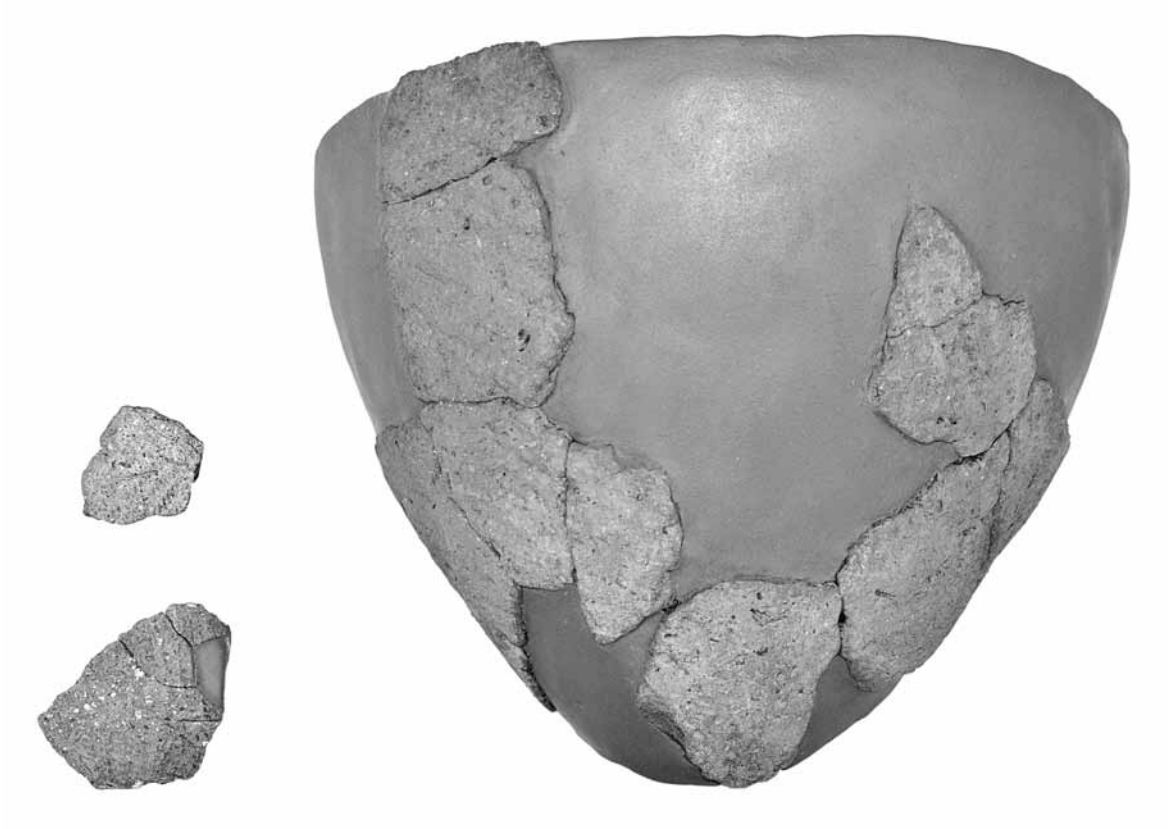
南調査区 縄文時代出土土器（早期末条痕文土器）



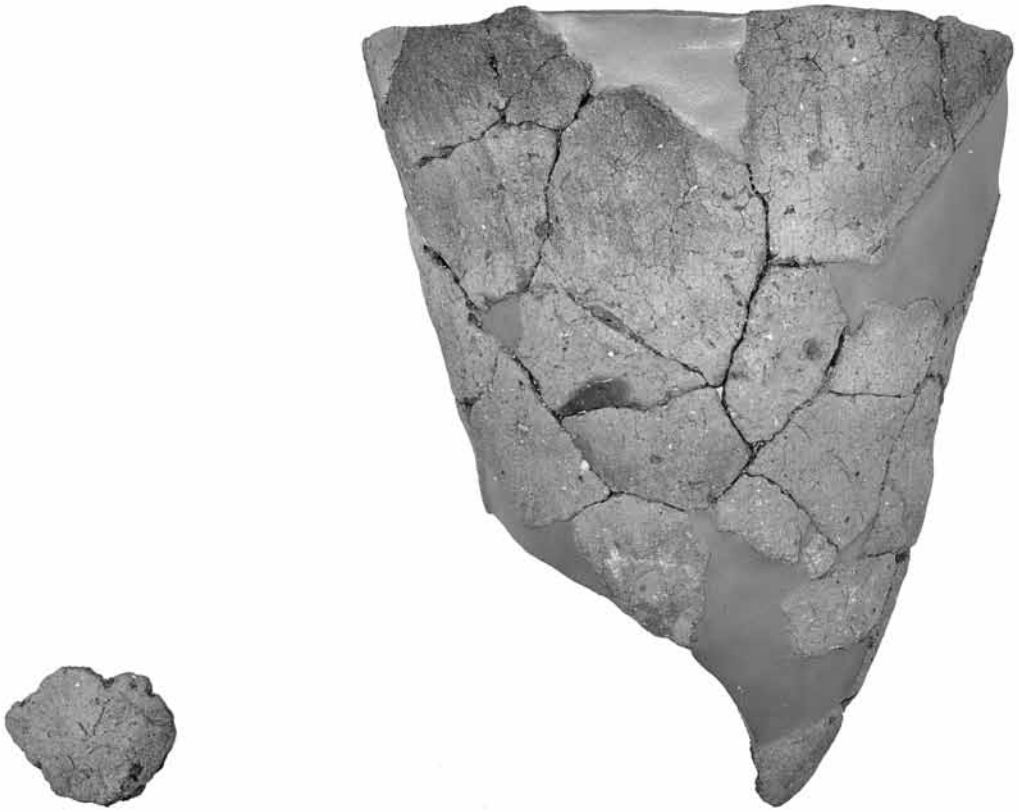
南調査区 縄文時代出土土器（早期末条痕文土器）

南調査区 縄文時代出土土器（早期末条痕文土器）

南調査区 縄文時代出土土器（早期末条痕文土器）

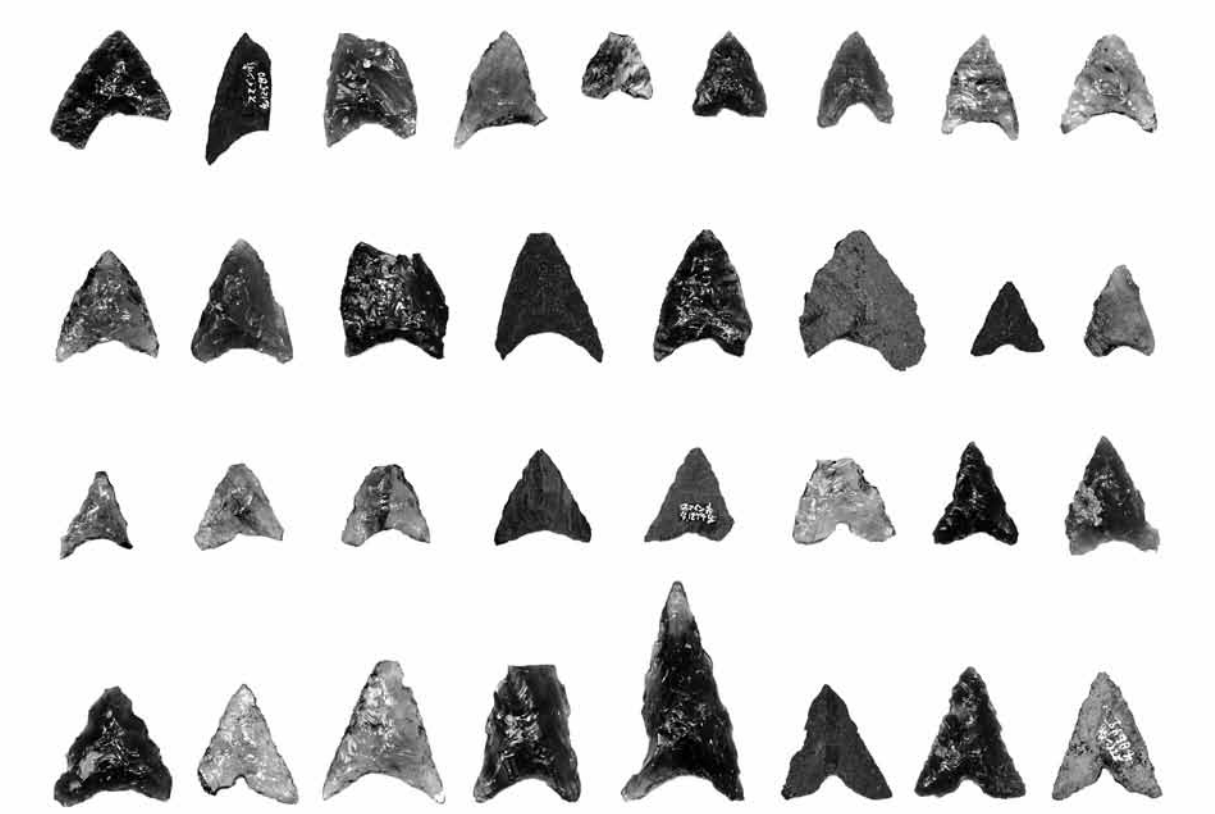


南調査区 縄文時代出土土器（早期末縄文土器）

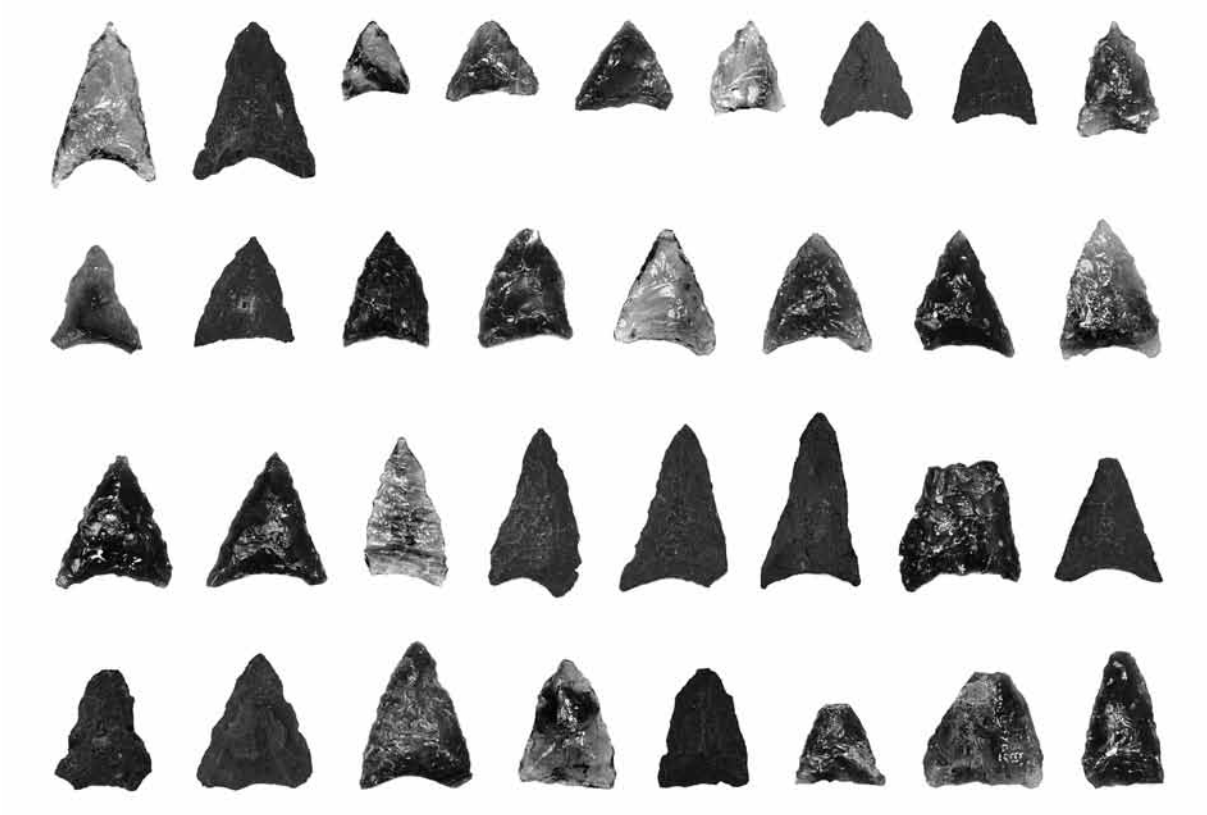


南調査区 縄文時代出土土器（早期型式不明土器）

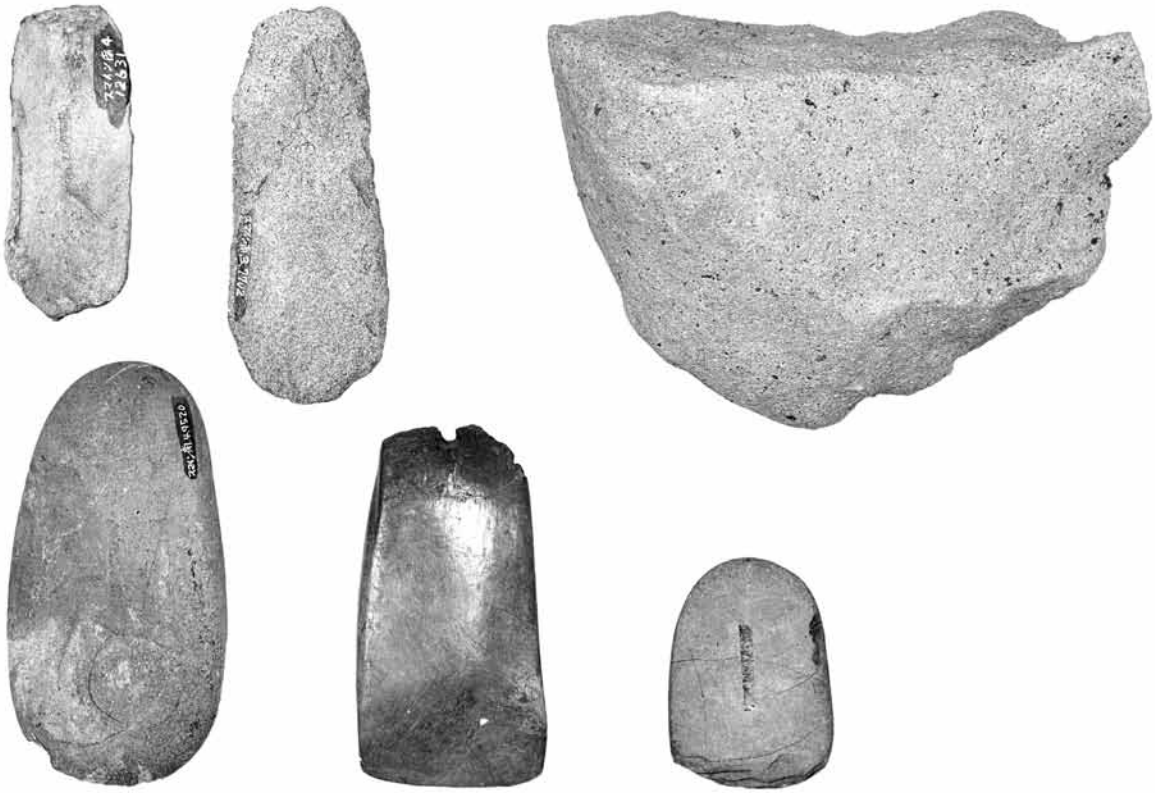
南調査区 縄文時代出土石器（尖頭器・石鏃）



南調査区 縄文時代出土石器（石鏃）

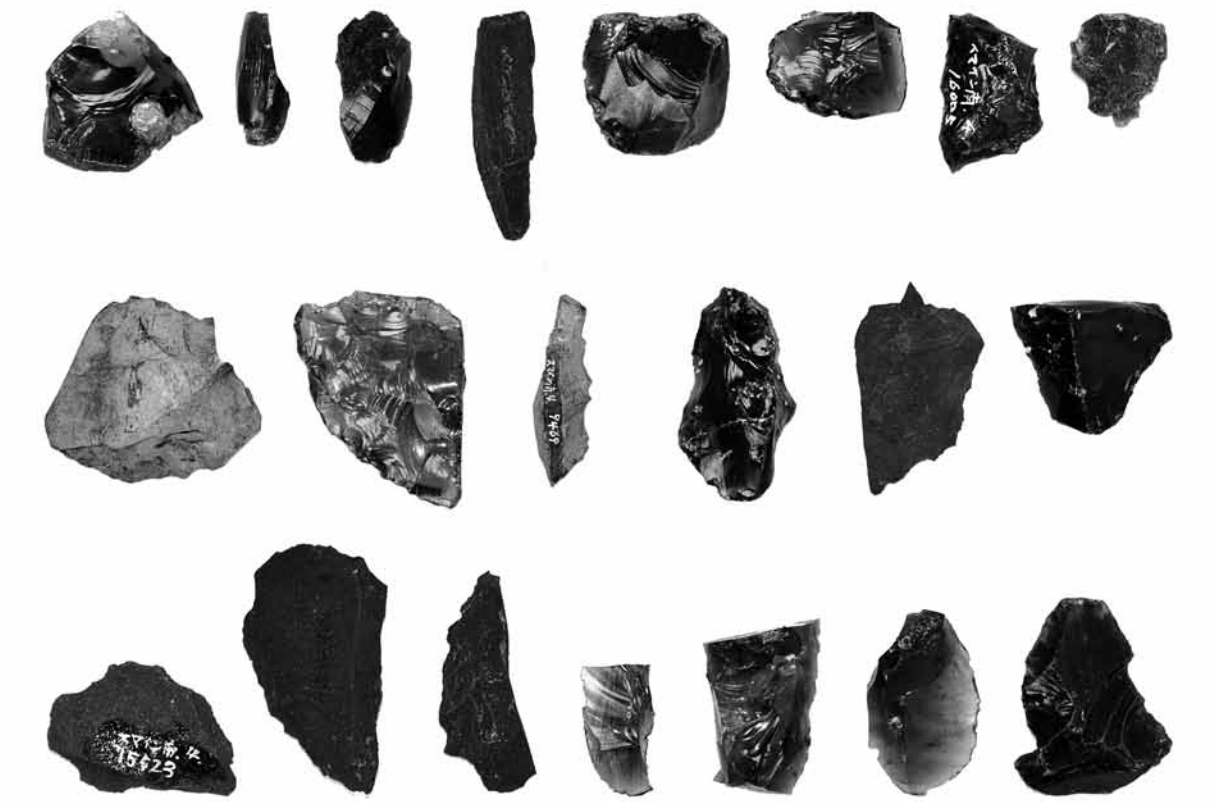


南調査区 縄文時代出土石器（石鏃）

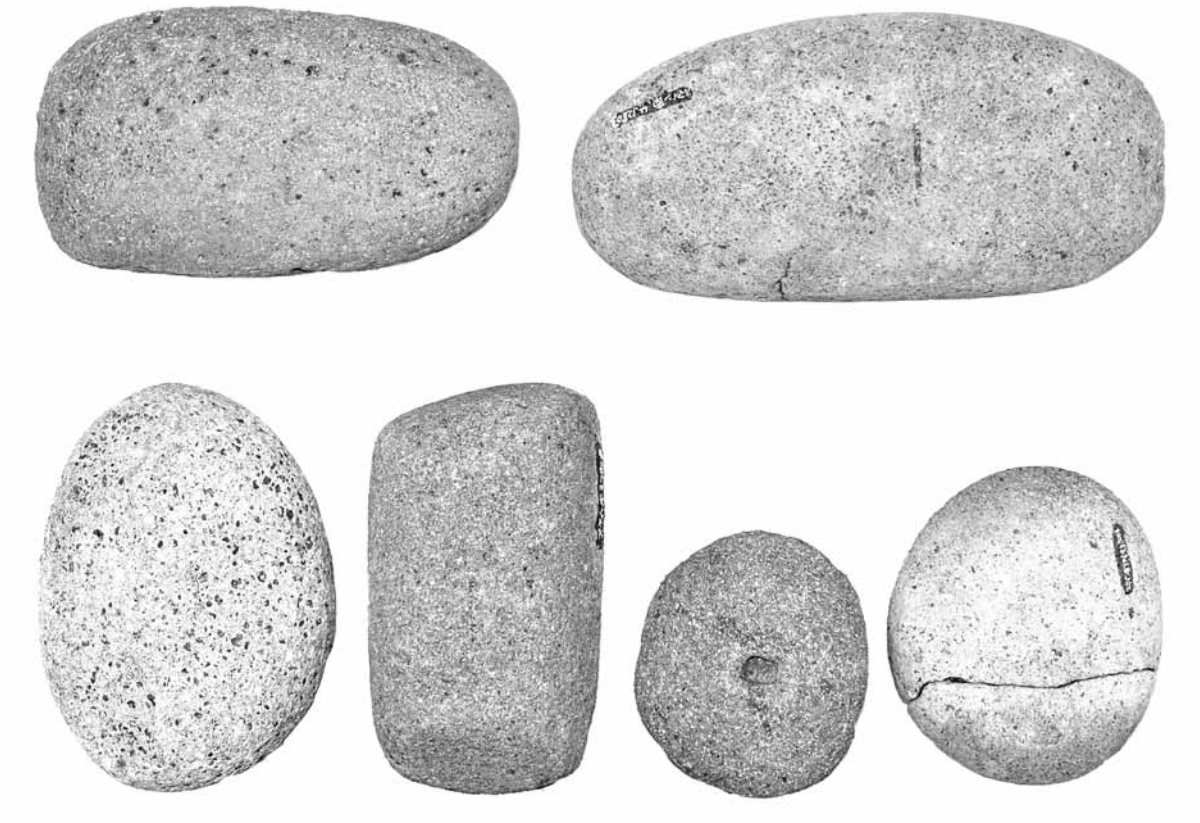


南調査区 縄文時代出土石器（打製石斧・磨製石斧・礫斧）

南調査区 縄文時代出土石器（掻器・石錐・楔形石器）



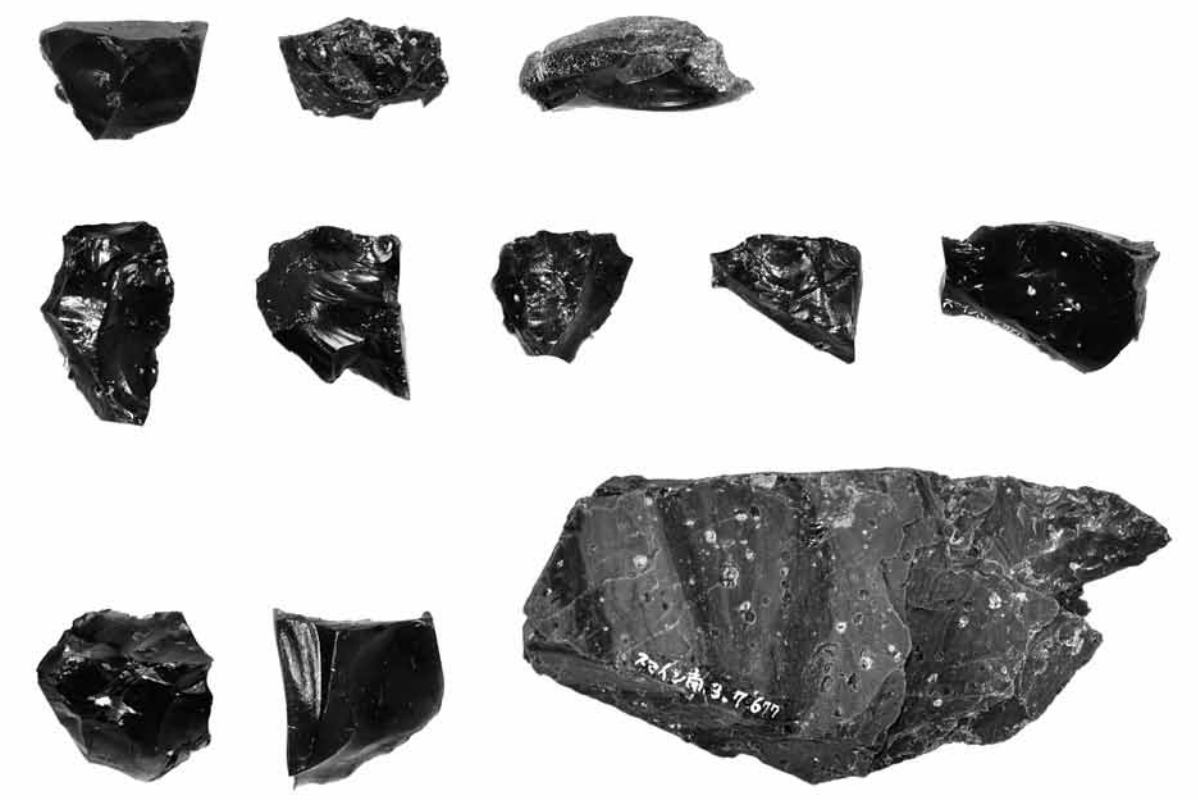
南調査区 縄文時代出土石器（楔形石器・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片）



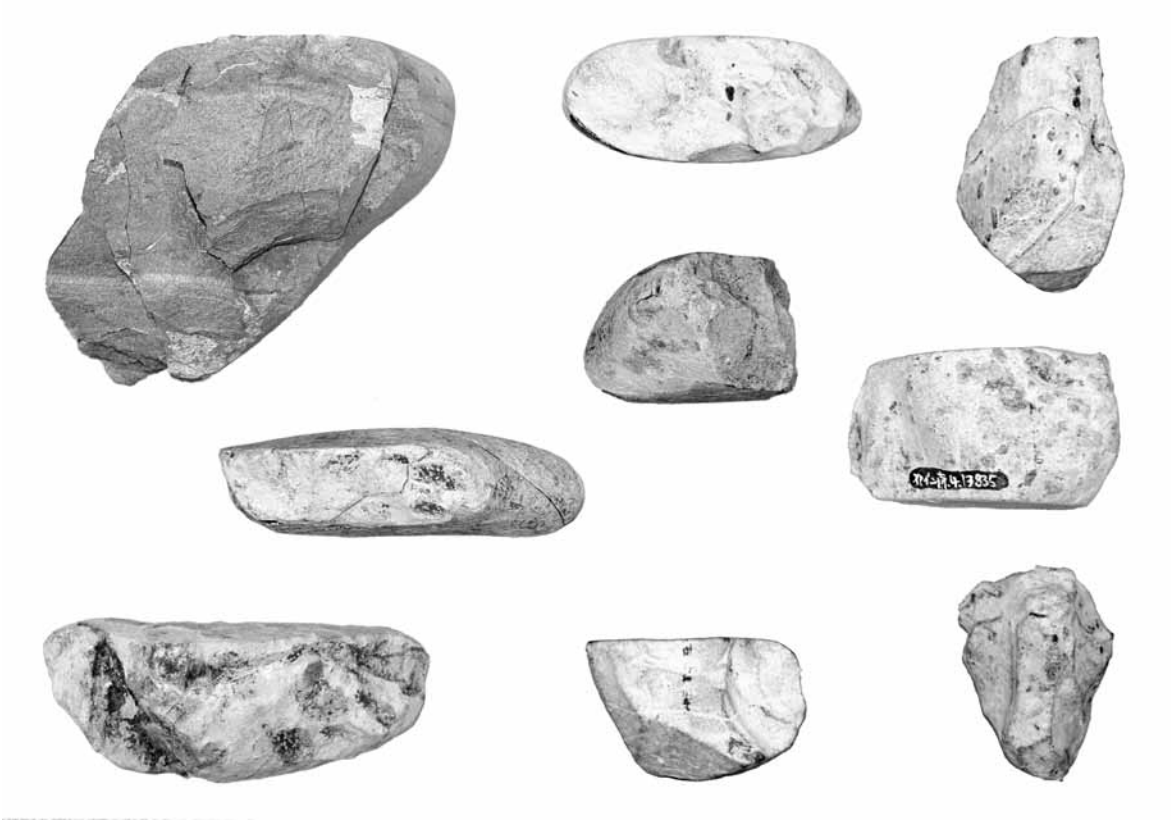
南調査区 縄文時代出土石器（磨石）

南調査区 縄文時代出土石器（ハンマー）

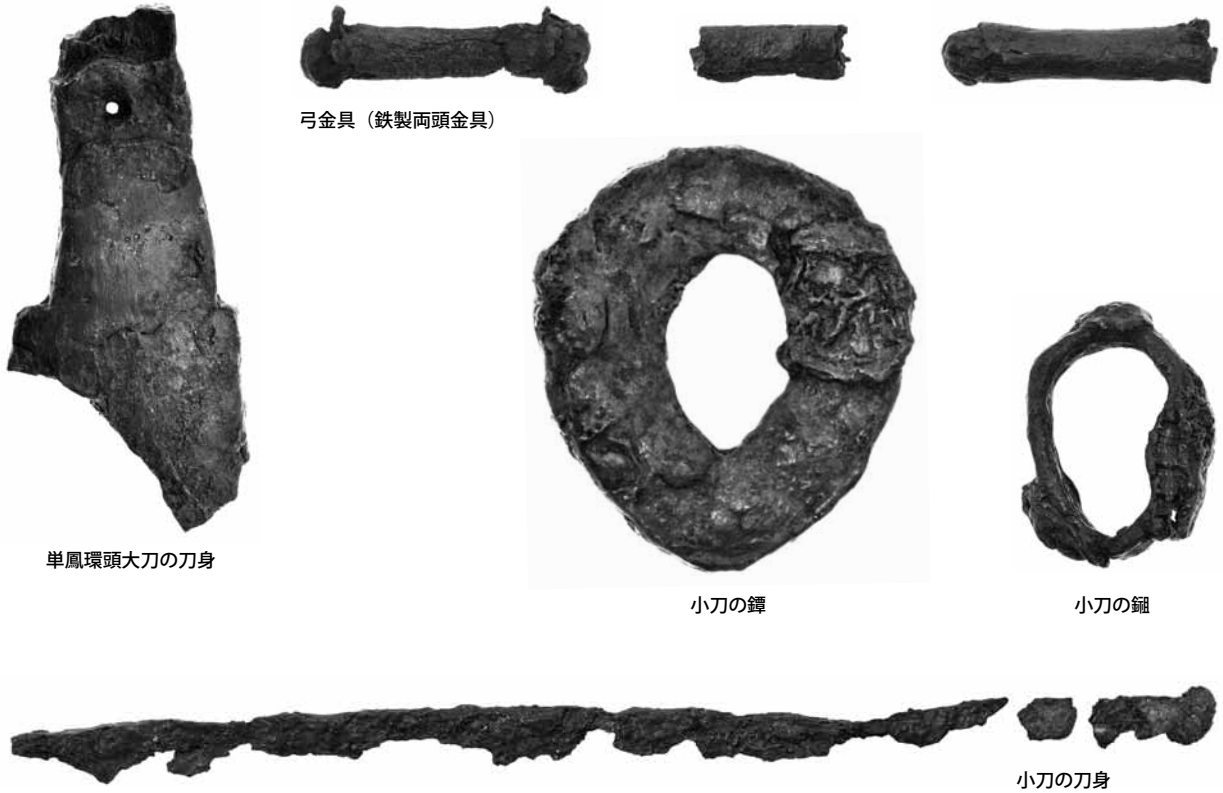
南調査区 縄文時代出土石器（敲石・凹石）



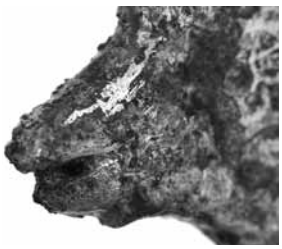
南調査区 縄文時代出土石器（石核・原石）



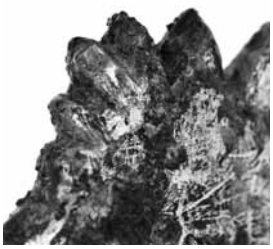
南調査区 縄文時代出土石器（石核）



南調査区 芝荒２号墳出土金属製品



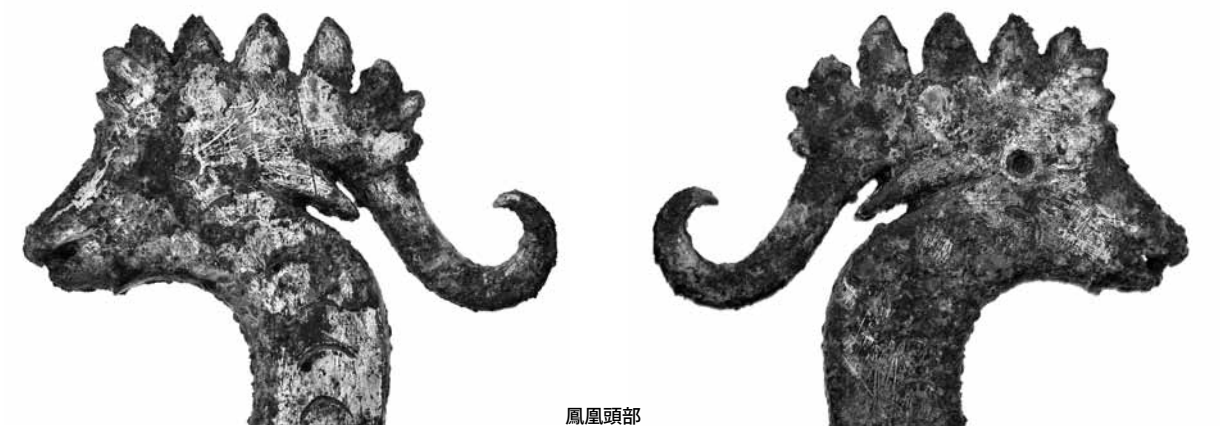
鳳凰口元



鳳凰頭頂部

環部への嵌め込み部分

南調査区 芝荒２号墳出土金属製品（単鳳環頭大刀柄頭）



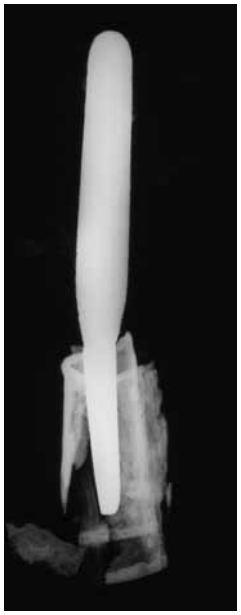
鳳凰頭部

鳳凰頭部の厚み

内部木柄

筒金具

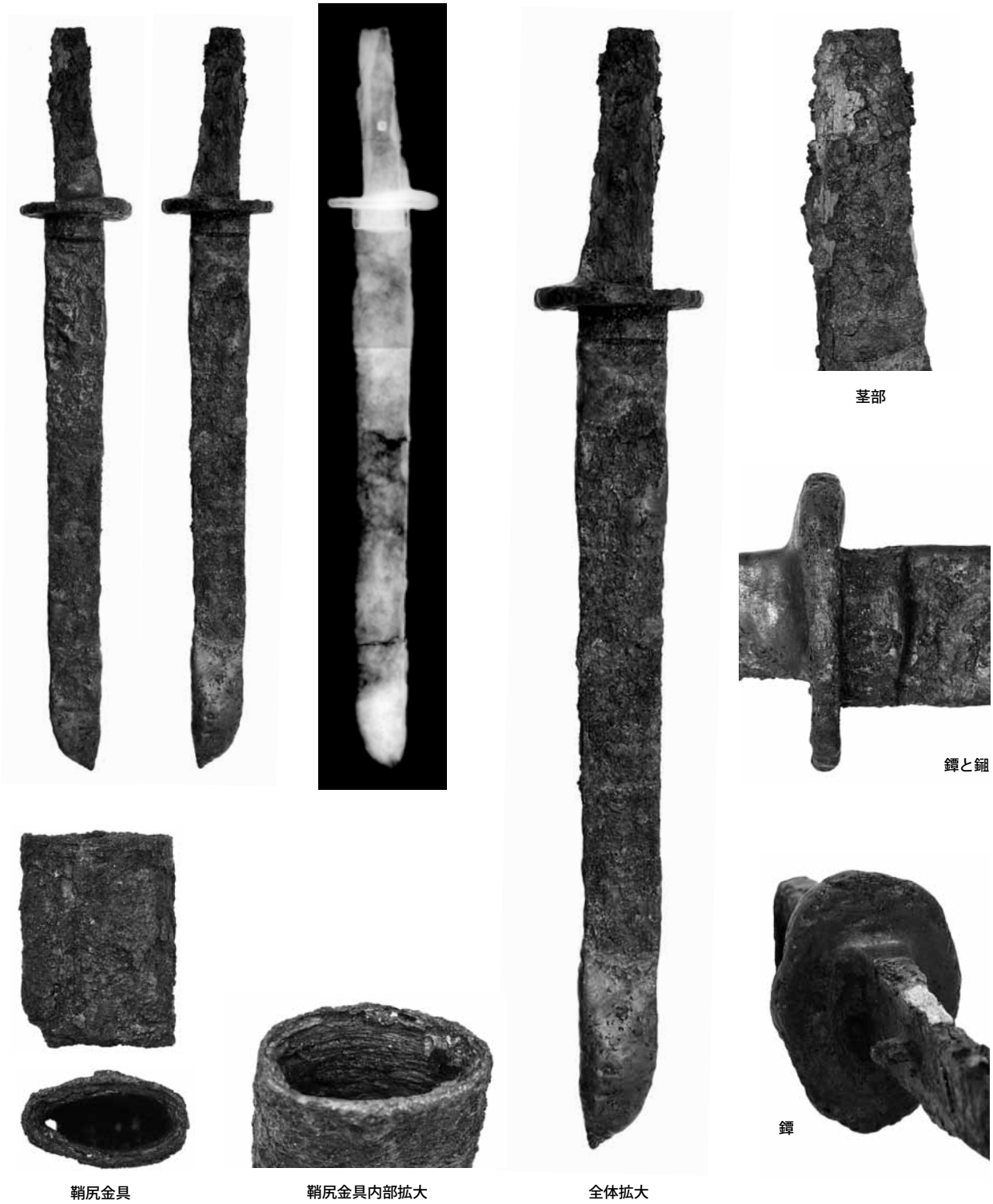
環部文様



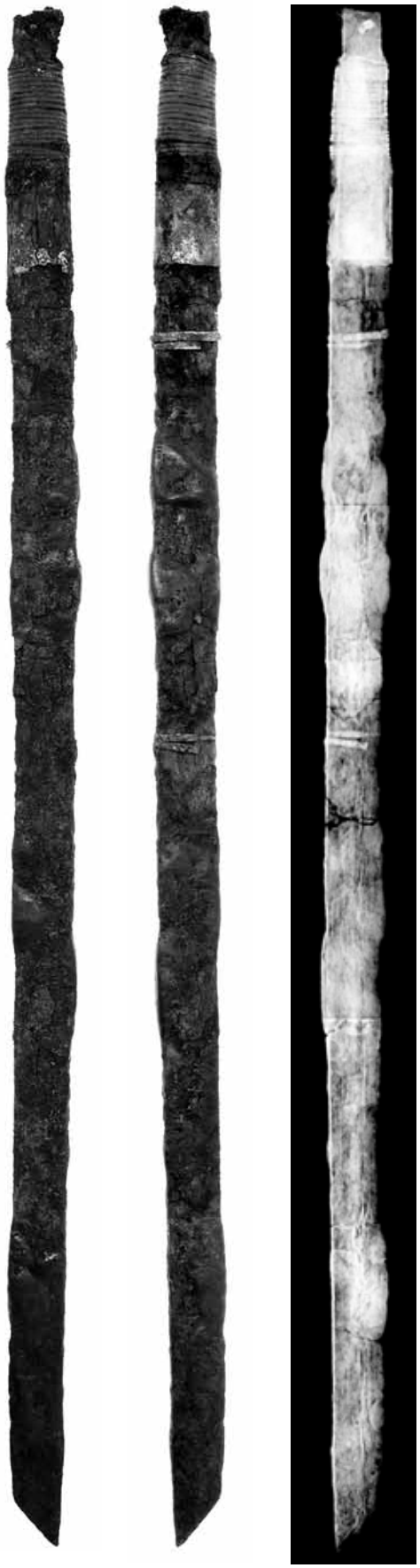
南調査区 芝荒２号墳出土金属製品（単鳳環頭大刀柄頭およびＸ線透過写真）

南調査区 芝荒２号墳出土金属製品（鉄鏃）

南調査区 芝荒２号墳出土金属製品（刀子）



南調査区 芝荒３号墳出土金属製品（小刀）



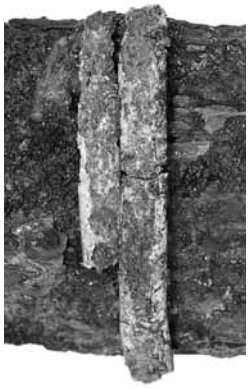
柄全体

柄間銀線巻

銀線巻拡大

金銅製鐺

南調査区 芝荒３号墳出土金属製品（装飾付大刀）



鞘の責金具

南調査区 芝荒３号墳出土金属製品（装飾付大刀）

南調査区 芝荒３号墳出土金属製品（刀子）

南調査区 芝荒６号墳出土遺物（須恵器壺・土師器坏）

報　告　書　抄　録

ふりがな	しばあらいせき・しばあらこふんぐん
書名	芝荒遺跡・芝荒古墳群
副書名	愛鷹スマートインターチェンジ事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	沼津市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 115 集
編著者名	小崎晋　前嶋秀張　北佳奈子
編集機関	沼津市教育委員会
所在地	〒 410-8601　静岡県沼津市御幸町 16 番 1 号　TEL 055-931-2500（代）
発行年月日	西暦 2017 年 1 月 6 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経 世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
しばあらいせき 芝荒遺跡 しばあらこふんぐん 芝荒古墳群	ぬまづしみやもとあざ 沼津市宮本字 もとの 元野 74-8 他	22203	422	35° 08′ 34″ 138° 50′ 12″ 日本測地系 35° 08′ 22″ 138° 50′ 23″	2013.0905 ～ 2014.0328 2014.0407 ～ 2015.0327 2015.06.01 ～ 2015.08.05	9280㎡	愛鷹スマートインターチェンジ建設工事

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芝荒遺跡	集落址	旧石器時代	石器ブロック 15 か所 礫群 45 基 配石 32 基	ナイフ形石器・尖頭器・掻器・抉入石器・彫器・楔形石器・削器・石錐・磨石・敲石・台石・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片・石刃・剥片・砕片・石核・細石刃・細石刃石核	
		縄文時代	土坑４基 集石 10 基 焼土址２基	縄文土器（早期前半～中期）、尖頭器・有茎尖頭器・薄形尖頭器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・礫斧・削器・掻器・石錐・抉入石器・楔形石器・石匙・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片・磨石・凹石・ハンマー・敲石・石皿・台石・石核・原石	
芝荒古墳群	古　墳	古墳時代 後期 （７～８世紀）	円墳６基	須恵器壺・土師器坏・単鳳環頭大刀の柄頭と刀身の一部・小刀（鐔・鎺・鞘尻金具）・弓金具・鉄鏃・刀子・装飾付大刀（金銀装）	単鳳環頭大刀 装飾付大刀

要　約

今回の調査により新規の埋蔵文化財包蔵地として登録された芝荒遺跡は、愛鷹山南麓の標高 105 ～ 120m 付近に広がる、旧石器時代および縄文時代の複合遺跡である。また、芝荒遺跡と重複する地点には古墳時代後期～終末期にかけての古墳群が形成されていることも判明した。

遺構や遺物の分布状況から、旧石器時代は標高の高い北側付近を中心に活動が行われ、縄文時代になると南側に活動拠点を移動していった様子がうかがえる。旧石器時代については、休場層を主体とする石器類が豊富に出土し、多くの礫群も検出された。縄文時代については、早期前半から中期にかけての縄文土器が出土し、特に早期後半から末葉にかけてのものは、器形の復元を可能とする資料が充実している。

古墳群については詳細な構成や分布範囲が不明確であるものの、古墳群の初現期（後期後半）から最終段階（終末期後半）に至る、７～８世紀頃の古墳が検出された。これらはすべて無袖式の横穴式石室で、そのほとんどは石室入口に段構造を有している。後期後半の築造と想定される古墳では、単鳳環頭大刀をはじめとする豊富な金属製品が検出され、終末期後半の小石室を有する古墳でも装飾付大刀が検出された。

沼津市文化財調査報告書　第 115 集

芝荒遺跡・芝荒古墳群

愛鷹スマートインターチェンジ事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 28 年 12 月 28 日　印刷
平成 29 年 1 月 6 日　発行

編　集／沼 津 市 教 育 委 員 会

発　行／沼 津 市 教 育 委 員 会
沼津市御幸町 16 番 1 号
TEL 055-931-2500（代）

印　刷／みどり美術印刷株式会社